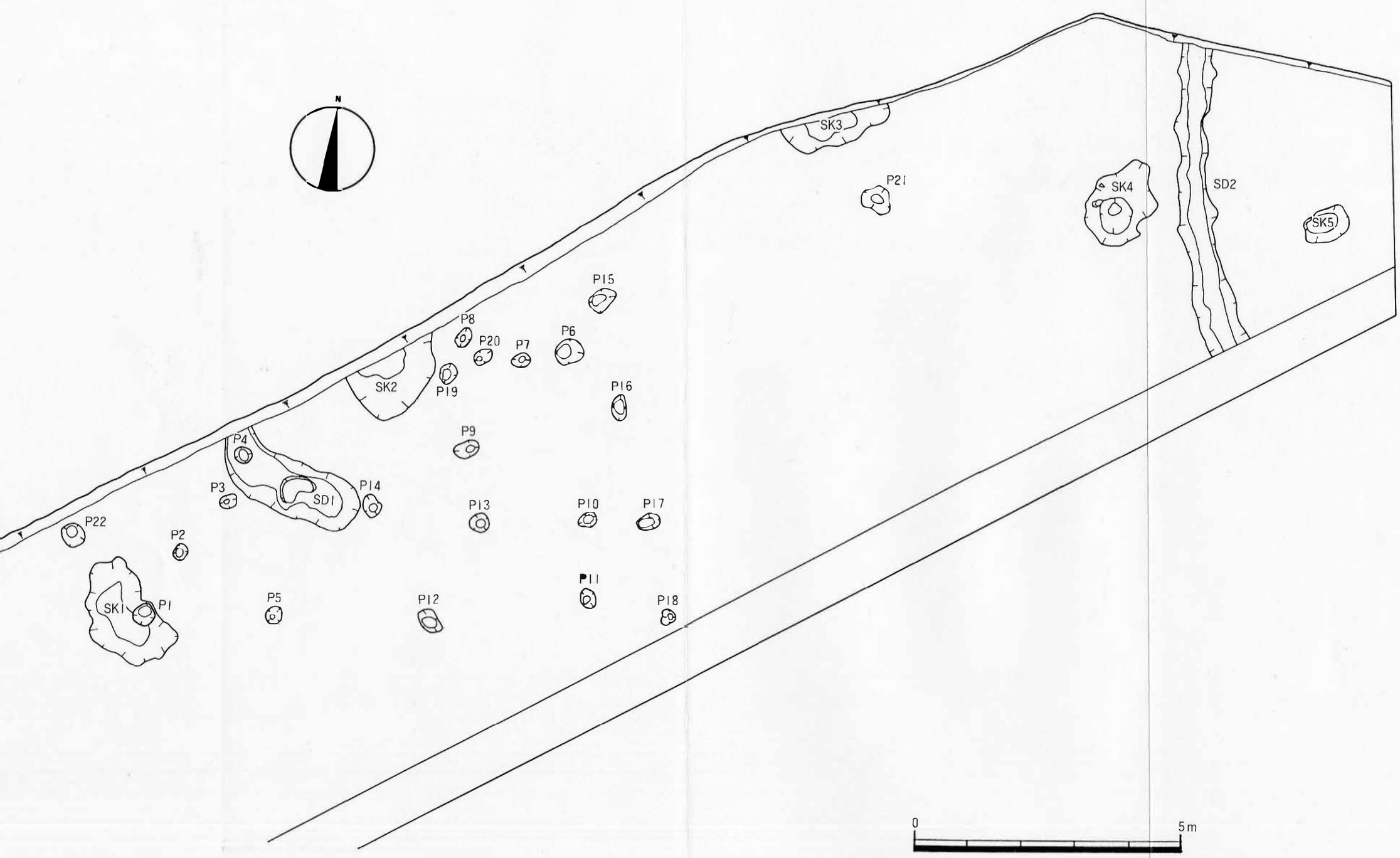
岐阜県文化財保護センター調査報告書　第51集

南高野古墳・二ノ井遺跡
市場遺跡

2000

財団法人　岐阜県文化財保護センター



第80図　市場遺跡遺構配置図（1/80）

巻頭写真１　南高野古墳近景（東より）

巻頭写真２　南高野古墳石室奥壁

巻頭写真３　南高野古墳出土馬具（鞍金具）

巻頭写真４　南高野古墳出土耳環

巻頭写真５　南高野古墳出土須恵器

序

池田町は、県内でも有数の群集墳が点在し「古墳の町」として広く知られています。この地は、古墳だけでなく、先人達が残した足跡が数多く残されています。こうした文化遺産を保護し後世に伝えていくのが我々の責務の一つであると考えられます。

さて、このたび、主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事に伴い、記録保存をはかるため二ノ井遺跡・市場遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県基盤整備部建設管理局（旧土木部）から岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施しました。二ノ井遺跡の発掘調査を進めておりましたところ、地中に埋没していた古墳を発見しました。新たに発見した古墳を「南高野古墳」とし、調査を行いました。

南高野古墳は、調査の結果、６世紀後半に築造された石片袖式の横穴式石室を有する後期古墳であることが明らかになりました。また、この古墳は、石室（玄室のみ）の内壁が赤く塗られている赤彩古墳で、県内では数例しか確認されていない大変珍しい古墳であることも分かりました。石室内部は後世の地震によって崩落しており、その構造を明らかにすることが十分にできませんでしたが、そのことが幸いしたのか当時の埋葬がそのまま残っており、古墳時代の埋葬形態を知る上で貴重な資料となりました。二ノ井遺跡からは中世の墓や溝を中心とする遺構を検出し、多数の遺物が出土しました。市場遺跡は、時期を特定する遺構を確認することができませんでしたが、縄文時代早期の土器や須恵器などが出土し、古くからの人々の営みを確認することができました。

これらの遺跡の調査によって、池田町片山地区の歴史をさらに深めることができました。今回の調査成果が池田町内及び周辺地域における歴史の解明と後期古墳研究の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたって御協力頂いた関係各機関並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　村　木　光　男

例　　言

1．本書は揖斐郡池田町片山字南高野に所在する南高野古墳（遺跡番号 21404-08769）、二ノ井遺跡（遺跡番号21404-01919）、同町片山字市場に所在する市場遺跡（遺跡番号21404-08768）の発掘調査報告書である。

2．本調査は主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部建設管理局（旧土木部）から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は南高野古墳・二ノ井遺跡を平成７年度（担当安田正枝・飯沼暢康）・平成８年度（担当飯沼）に実施し、市場遺跡を平成９年度（担当飯沼）に実施した。

4．本書に記載した遺物の実測（拓本を含む）は、次の者が行った。

稲川　威・藤田　英博・青木健太郎・近藤　大典・安田　正枝・飯沼　暢康・高嶌　桂子
清水　明美・棚瀬　道子・小田富士子・西垣千賀子・西田　富子・石野理恵子・棚橋　朝子
米津　光枝・伊藤　節子・豊田　圭子・広瀬千恵美・白垣　若代

5．実測図等のトレースは次の者が行った。

藤田　英博・高嶌　桂子・棚瀬　道子・小田富士子・西垣千賀子・西田　富子・石野理恵子
加納加代子・佐藤まさみ

6．遺物の写真撮影はフォトスタジオ　サトウに委託して行った。

7．本書は青木健太郎　近藤大典　飯沼暢康が執筆した。

8．南高野古墳出土金属製品の保存処理は、（財）帝京大学山梨文化財研究所に委託して行った。

9．地形測量、水準測量、石室三次元測量、ＣＧ復元図作成、空中写真撮影は、株式会社イビソクに委託して行った。

9．発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々から御助言、御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称・肩書き略、順不同）

八賀　晋・吉田　英敏・渡辺　博人・横幕　大祐・遠藤　淑彦・別所　秀高・古田　靖志

10．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の者が参加した。（敬称略、順不同）

＜発掘作業員＞

（平成７年度　二ノ井遺跡）

池田　満子・今西　猛・今西　一真・岩間　未起・大久保為文・方山　禮吉・勝野千佳子
勝野ゆきゑ・加納加代子・河村　節子・國枝さと子・国枝小夜美・小寺　正輝・小林　孝美
小林　文子・小山　則子・末松ますゑ・杉野　良一・杉野嘉津美・杉山　芳男・杉山　千枝
田中壽躬枝・坪井　和子・成瀬　清・成瀬智恵子・西田　富子・二村久美子・野網貴美子
野網　義一・野網　光子・野原　明・野原三重子・野原　茂・野原　淑・早野よさを
樋口　弘子・福田　芳子・増田　昭治・松岡　あや・松岡　正男・松原　勝

（平成８年度　南高野古墳・二ノ井遺跡）

今西　猛・野原　茂・杉山　千枝・二村久美子・坪井　和子・國枝さと子・西田　富子
小寺　正輝・野網　義一・杉野嘉津美・松岡　あや・早野よさを・勝野千佳子・松原　勝

方山　禮吉・松岡　正男・勝野ゆきゑ・田中寿躬枝・福田　芳子・小林　孝美

（平成９年度　市場遺跡）

松岡　正男・坪井　和子・勝野ゆきゑ・杉山　千枝・松岡　あや・二村久美子

勝野千佳子・小林孝美

＜整理作業員＞

（平成９年度）

高嶌　桂子・西垣千賀子・西田　富子

（平成10年度）

小山　則子・清水　明美・棚瀬　道子・小田富士子・西垣千賀子・西田　富子

石野理恵子・棚橋　朝子

11．調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1．出土遺物の実測図の縮尺は、土器は1/3、石器・石製品は2/3、1/3のいずれかで、金属製品は1/3、1/4のいずれかである。

2．遺物番号は南高野古墳・二ノ井遺跡を合わせて１番から通番を付し、市場遺跡は別に１番から通番を付した。

3．本書に掲載してある遺構実測図は各々にスケールを付した。

4．遺構の略号は下記の通り用いた。

土坑……ＳＫ

溝……ＳＤ

その他……ＳＸ

柱穴・小穴……Ｐ

5．遺構番号は、原則として発掘調査時の番号を用いている。

6．横穴式石室の側壁については、奥壁から入り口に向かって、右側を右側壁、左側を左側壁とする。

7．本報告書で使用した土層の色調は、財団法人日本色彩研究所1995『標準土色帖』を目測にて表記した。

目　　次

序
例言
目次
第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過と方法 …… 2

第２章　遺跡周辺の立地と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　基本層序（二ノ井遺跡・南高野古墳） …… 8
第４章　南高野古墳の調査 …… 9
　第１節　墳丘と外部施設 …… 9
　第２節　内部構造 …… 16
　第３節　遺物の出土状況 …… 27
　第４節　考　察 …… 43

第５章　二ノ井遺跡の調査と遺物 …… 79
　第１節　Ａ地区の遺構と遺物 …… 79
　第２節　Ｂ地区の遺構と遺物 …… 87
　第３節　包含層遺物 …… 105
　第４節　考　察 …… 108

第６章　市場遺跡の調査 …… 143
　第１節　層　序 …… 143
　第２節　遺　構 …… 147
　第３節　遺　物 …… 154
　第４節　まとめ …… 156

第７章　調査関連資料 …… 157
　第１節　南高野古墳石室内赤色顔料の蛍光Ｘ線分析 …… 157
　第２節　南高野古墳の３次元測量と復元ＣＧの作成 …… 164

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺の主な遺跡 …… 7
第３図　基本層序 …… 8
第４図　南高野古墳測量図 …… 11
第５図　墳丘断面図（１） …… 12
第６図　墳丘断面図（２） …… 13
第７図　ＳＤ11（周溝）断面図 …… 15
第８図　石室基底石・墓坑平面図 …… 17
第９図　墓坑掘方断面図 …… 17
第10図　奥壁・両側壁コーナー実測図 …… 18
第11図　石室実測図 …… 19
第12図　天井石平面図・石室断面図 …… 21
第13図　棺台礫実測図 …… 24
第14図　羨道床石・排水溝実測図 …… 26
第15図　石室内遺物出土状況図 …… 27
第16図　出土遺物分布図 …… 28
第17図　玄室内須恵器Ⅰ群出土位置図 …… 29
第18図　玄室内須恵器Ⅱ群出土位置図 …… 31
第19図　玄室内須恵器Ⅲ・Ⅳ群出土位置図 …… 32
第20図　金属製品出土位置図 …… 35
第21図　羨道内須恵器出土位置図 …… 36
第22図　前庭・開口部須恵器出土状況図 …… 37
第23図　遺物実測図（１） …… 47
第24図　遺物実測図（２） …… 48
第25図　遺物実測図（３） …… 49
第26図　遺物実測図（４） …… 50
第27図　遺物実測図（５） …… 51
第28図　遺物実測図（６） …… 52
第29図　遺物実測図（７） …… 53
第30図　遺物実測図（８） …… 54
第31図　遺物実測図（９） …… 55
第32図　遺物実測図（10） …… 56
第33図　遺物実測図（11） …… 57
第34図　遺物実測図（12） …… 58
第35図　遺物実測図（13） …… 59
第36図　遺物実測図(14) …… 60
第37図　遺物実測図(15) …… 61
第38図　遺物実測図（16） …… 62
第39図　遺物実測図（17） …… 63
第40図　二ノ井遺跡地形測量図 …… 80
第41図　二ノ井遺跡Ａ地区遺構配置図 …… 81
第42図　ＳＫ１・７実測図 …… 82
第43図　ＳＸ１実測図 …… 83
第44図　ＳＸ２実測図 …… 84
第45図　ＳＤ10実測図 …… 85
第46図　ＳＤ16実測図 …… 86
第47図　ＳＫ２・３・５実測図 …… 88
第48図　Ｂ地区第１次遺構面遺構配置図 …… 89
第49図　ＳＫ６実測図 …… 92
第50図　ＳＤ１実測図 …… 94
第51図　ＳＤ２実測図 …… 97
第52図　ＳＤ３実測図 …… 98
第53図　ＳＤ５実測図 …… 99
第54図　ＳＸ３実測図 …… 100
第55図　ＳＫ11実測図 …… 101
第56図　Ｂ地区第２次遺構面遺構配置図 …… 102
第57図　ＳＫ12・13実測図 …… 103
第58図　ＳＫ９・ＳＤ17実測図 …… 104
第59図　遺物実測図（18） …… 111
第60図　遺物実測図（19） …… 112
第61図　遺物実測図（20） …… 113
第62図　遺物実測図（21） …… 114
第63図　遺物実測図（22） …… 115
第64図　遺物実測図（23） …… 116
第65図　遺物実測図（24） …… 117
第66図　遺物実測図（25） …… 118
第67図　遺物実測図（26） …… 119
第68図　遺物実測図（27） …… 120
第69図　遺物実測図(28) …… 121
第70図　遺物実測図（29） …… 122

第71図　遺物実測図（30）……123
第72図　遺物実測図（31）……124
第73図　遺物実測図（32）……125
第74図　遺物実測図（33）……126
第75図　遺物実測図（34）……127
第76図　遺物実測図（35）……128
第77図　瓦呼称模式図……139
第78図　トレンチセクション図……143
第79図　市場遺跡地形測量図……144
第80図　市場遺跡遺構配置図……145
第81図　ピット１群実測図……147
第82図　ピット２・３群実測図……148
第83図　ＳＫ１・２実測図……150
第84図　ＳＫ３・４実測図……151
第85図　ＳＫ５実測図……152
第86図　ＳＤ１・２実測図……153
第87図　遺物実測図（36）……155
第88図　分析試料採集位置図……159
第89図　灰白色部の蛍光Ｘ線スペクトル図……160
第90図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……160
第91図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……161
第92図　灰白色部の蛍光Ｘ線スペクトル図……161
第93図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……162
第94図　灰白色部の蛍光Ｘ線スペクトル図……162
第95図　灰白色部の蛍光Ｘ線スペクトル図……163

表　目　次

第１表　地区別須恵器出土点数表……27
第２表　様相別石室内遺物……45
第３表　南高野古墳出土須恵器観察表（１）…64
第４表　南高野古墳出土須恵器観察表（２）…65
第５表　南高野古墳出土須恵器観察表（３）…66
第６表　南高野古墳出土須恵器観察表（４）…67
第７表　南高野古墳出土須恵器観察表（５）…68
第８表　南高野古墳出土須恵器観察表（６）…69
第９表　南高野古墳出土須恵器観察表（７）…70
第10表　南高野古墳出土須恵器観察表（８）…71
第11表　南高野古墳出土須恵器観察表（９）…72
第12表　南高野古墳出土須恵器観察表（10）…73
第13表　南高野古墳出土須恵器観察表（11）…74
第14表　南高野古墳出土須恵器観察表（12）…75
第15表　耳環計測表……76
第16表　鉄鏃計測表……76
第17表　大刀・刀子計測表……77
第18表　鉄製品計測表……77
第19表　鉄釘計測表……77
第20表　二ノ井遺跡出土土器観察表（１）……129
第21表　二ノ井遺跡出土土器観察表（２）……130
第22表　二ノ井遺跡出土土器観察表（３）……131
第23表　二ノ井遺跡出土土器観察表（４）……132
第24表　二ノ井遺跡出土土器観察表（５）……133
第25表　二ノ井遺跡出土土器観察表（６）……134
第26表　二ノ井遺跡出土土器観察表（７）……135
第27表　二ノ井遺跡出土土器観察表（８）……136
第28表　二ノ井遺跡出土土器観察表（９）……137
第29表　二ノ井遺跡出土土器観察表（10）……138
第30表　古銭計測表……138
第31表　石器計測表……138
第32表　瓦観察表……139
第33表　二ノ井遺跡遺構別遺物出土点数表……140
第34表　二ノ井遺跡地区別遺物出土点数表……141
第35表　二ノ井遺跡遺構計測表……142
第36表　蛍光Ｘ線分析した玄室内赤色顔料等…157

写　真　目　次

巻頭写真１　南高野古墳近景
巻頭写真２　南高野古墳石室奥壁
巻頭写真３　南高野古墳出土馬具
巻頭写真４　南高野古墳出土耳環
巻頭写真５　南高野古墳出土須恵器

写真　検出した天井石（北より）
写真　二ノ井遺跡発掘作業風景
写真　市場遺跡発掘作業風景
写真　南高野古墳調査前風景（西より）
写真　黒色マウンド検出状況
写真　墳丘盛土の様子（西より）
写真　奥壁背面裏込め土の様子（南より）
写真　奥壁背面裏込め石の様子（南より）
写真　装飾動物須恵器片出土状況
写真　ＳＤ11（周溝）検出状況（西より）
写真　石室検出の様子（東より）
写真　墓坑検出状況（東より）
写真　墓坑完掘状況（東より）
写真　奥壁・左側壁コーナー（南東より）
写真　前壁の様子（奥壁側より）
写真　玄門立柱石と框石（奥壁側より）
写真　玄門右立柱石裏込め石（南より）
写真　玄室床石検出状況（奥壁側より）
写真　玄室床石検出状況（玄門側より）
写真　玄室床石除去後の様子（玄門側より）
写真　羨道床石検出状況（南より）
写真　羨道排水溝蓋石検出状況（南より）
写真　羨門・前庭の様子（東より）
写真　排水溝（開口部より）
写真　排水溝（玄室より）
写真　右立柱石下遺物出土状況
写真　遺物出土状況（奥壁右隅）
写真　遺物出土状況（奥壁左隅）
写真　遺物出土状況（右側壁）
写真　遺物出土状況（左側壁）
写真　遺物（鉄鏃）出土状況
写真　遺物（太刀）出土状況
写真　遺物出土状況（羨道）
写真　天井石取り外し作業
写真　側壁石材崩落の様子
写真　遠藤氏による石材破砕方向の調査
写真　左側壁石材にみられるＸ型の割れ目
写真　Ａ地区遺構検出状況（北より）
写真　Ｂ地区第１次遺構面検出状況（西より）
写真　Ｂ地区第１次遺構面検出状況（東より）
写真　ＳＫ６遺物出土状況（西より）
写真　Ｂ地区第２次遺構面検出状況（西より）
写真　３次元測量の様子

写真図版目次

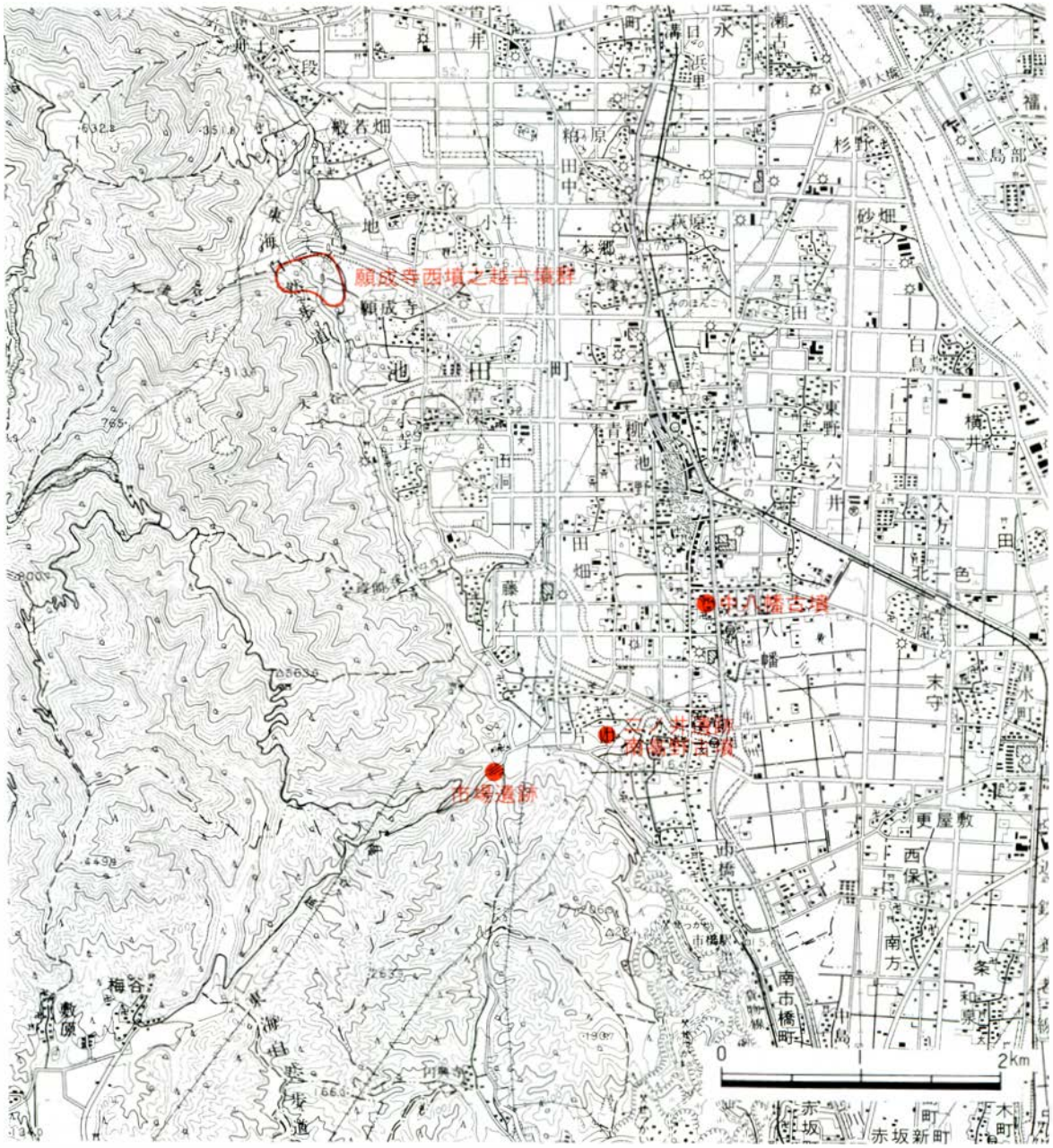
図版１　南高野古墳石室全景
図版２　南高野古墳遺構・遺物
図版３　二ノ井遺跡遺構・遺物
図版４　市場遺跡遺構・遺物
図版５　南高野古墳遺物（１）
図版６　南高野古墳遺物（２）
図版７　南高野古墳遺物（３）
図版８　南高野古墳遺物（４）
図版９　南高野古墳遺物（５）
図版10　南高野古墳遺物（６）
図版11　南高野古墳遺物（７）
図版12　南高野古墳遺物（８）

図版13　南高野古墳遺物（９）
図版14　南高野古墳遺物（10）
図版15　南高野古墳遺物（11）
図版16　南高野古墳遺物（12）
図版17　南高野古墳遺物（13）
図版18　南高野古墳遺物（14）
図版19　南高野古墳遺物（15）
図版20　南高野古墳遺物（16）
図版21　南高野古墳遺物（17）
図版22　南高野古墳遺物（18）
図版23　南高野古墳遺物（19）
図版24　南高野古墳遺物（20）
図版25　南高野古墳遺物（21）
図版26　南高野古墳遺物（22）
図版27　二ノ井遺跡遺物（１）
図版28　二ノ井遺跡遺物（２）
図版29　二ノ井遺跡遺物（３）
図版30　二ノ井遺跡遺物（４）
図版31　二ノ井遺跡遺物（５）
図版32　二ノ井遺跡遺物（６）
図版33　二ノ井遺跡遺物（７）
図版34　二ノ井遺跡遺物（８）
図版35　二ノ井遺跡遺物（９）
図版36　二ノ井遺跡遺物（10）
図版37　二ノ井遺跡遺物（11）
図版38　二ノ井遺跡遺物（12）
図版39　二ノ井遺跡遺物（13）
図版40　二ノ井遺跡遺物（14）
図版41　市場遺跡遺物（１）
図版42　石室石材顕微鏡写真
・鉄鏃茎部拡大写真
図版43　南高野古墳復元ＣＧ

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

池田町には、揖斐郡と周辺の市町村を結ぶ主要幹線である国道417号線をはじめとして県道岐阜関ヶ原線が通っている。県道岐阜関ヶ原線は、岐阜市を起点に不破郡関ヶ原町まで続く延長約27.9kmの道路で、岐阜市の西部放射道路として西濃地域との連絡網の役割を担うほか、地域の生活、経済を支える幹線道路ネットワークを構成する重要な道路の一つとなっている。また、名神高速道路、国道21号の代替機能を持つため、これら主要道路の機能を分担するとともに、災害・事故などによって不通になった場合の迂回路としての性格も持ち合わせている。近年の交通量の増加による道路改良整備の必要性から、主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事が行われることになった。



第１図　遺跡位置図

二ノ井遺跡は揖斐郡池田町片山の溪北地区の集落と金地谷川に挟まれた微高地全体に広がる遺跡である。地元住民によって縄文土器や須恵器などが表採され、遺物散布地として周知の遺跡である。道路改良工事予定区が二ノ井遺跡の範囲内を通るため、2,490㎡が発掘調査の対象面積となり、平成7・8年度に調査を実施した。（平成7年度 1,050㎡、平成8年度 1,440㎡）

南高野古墳は、平成7年度に開始した二ノ井遺跡の発掘調査中に新たに確認された古墳である。本古墳は、地表から完全に埋没していたため、その存在が知られていなかった。古墳の全体規模や石室内部の調査をするため調査区を拡張し、平成8年度に調査を行った。調査面積は510㎡である。

市場遺跡は、付近の圃場整備の際に採集された遺物によって周知の遺跡となっていたが、その範囲は確定されていなかった。そのため、道路改良工事予定区内において遺跡の範囲確認をするため、（財）岐阜県文化財保護センターが岐阜県基盤整備部建設管理局（旧土木部）からの委託を受け、平成7年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、数ヶ所の試掘場所より縄文時代早期～中期の土器・石器が出土した。その中で良好な包含層が残ると思われる500㎡が本調査の対象面積となり、平成9年度に（財）岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行うことになった。

第2節　発掘調査の経過と方法

1．南高野古墳発掘調査日誌

二ノ井遺跡は周知の遺跡であったが、遺物散布地であったため、調査に入る前に試掘調査を実施した。6月13日から8月4日まで試掘調査（試掘坑1～16）を実施した。調査区全体は川の氾濫によると思われる砂礫層が堆積しており、調査の結果、地表から約1～3m下に黒褐色土の広がりを確認した。二ノ井遺跡の本格的な調査は、同時に調査を行っている高畑遺跡発掘調査の進行上、10月中旬から開始した。はじめに、重機による掘削作業（砂礫層除去・黒色土検出）を行った。当初予想された黒褐色土は西から東に向かってゆるやかに下がるのではなく、調査区の中央辺りでマウンド状になっていることが確認された。8mメッシュの杭打ち作業後、11月16日より、調査区の北側と南側にトレンチを設定し、作業員の手掘りによる掘り下げを開始した。その後、順次下位層を精査するも遺構プランは検出されなかった。しかし、遺物（弥生土器・土師器中心）は多く出土した。1月上旬、黒色マウンド中央付近で穴が開いた。中を見ると50×30cmほどの直方体の石が数個組まれている様子を観察することができた。続いて、穴の開いたすぐ隣から巨石が検出され始めた。この時点で穴の中に見られた石組みや検出した巨石が古墳石室の石材である可能性が高くなった。そのため、石室予想主軸ラインを設定し、それに直行するトレンチを数本入れて土層の確認を行った。

写真　検出した天井石（北より）

2月中旬までに、古墳の天井石と思われる巨石を4個検出した。また、石室は調査区の東方向へ続いていることが判明した。そのため、調査区を広げないと発掘調査を進めることできないことか

ら、年度内に調査を全て終了することを断念し、次年度に調査区を広げて改めて調査を始めることになった。

平成８年４月中旬から再び調査を開始した。黒色マウンド（墳丘）の広がりを確認するため、トレンチ１を設定し、掘り下げを行った。マウンドは石室主軸より約11ｍ付近で急激に落ち込み、さらにその先の北東部は後世の川の氾濫によって砂礫層が厚く堆積していた。また、湧水が激しいためそれ以上掘り広げることを断念した。古墳の調査は５月末で一端停止し、他の遺跡の調査に入った。その後、７月から11月までは平成８年度分の二ノ井遺跡の調査を行った。調査の経過と方法については後述する。南高野古墳の調査は、11月中旬から再開した。はじめに、重機による調査区拡張区の土砂除去作業を行った。砂礫層を除去したところ、残っていた約1/3の墳丘を検出した。12月上旬から、石室の開口部と予想される箇所に新しいグリッド（Ｓ１～６）を設定し、格子状に掘り下げを開始した。12月末には、石室開口部の両側の石組みと羨門を検出した。１月に入り、開口部より羨道部の検出作業に入った。左右両側壁の石が羨道部に落ち込んでいるため、掘り進めるのは困難を極めた。石室内の石材の崩落状況が予想以上に悪いため、玄室の調査は天井石を除去してから始めることになった。１月中旬に、奥壁側の天井石を除去したところ、内部は両側の側壁石材が崩れ落ちていた。玄室中央に位置する天井石は約３ｍの巨石で大型クレーン車を使用して除去した。玄室中央付近では、天井石を取り除いたところ、左右両側の側壁石材が接するように向かい合わせになっていた。横揺れの巨大な力によって移動したものであり、本古墳は地震によって内部が崩壊していることが明らかになった。羨道部は玄室に比べて比較的残存状態がよかったため、開口部より鉄パイプのサポートを設置しながら慎重に掘り進めていった。１月下旬、玄門の手前から遺物（須恵器・鉄製品）が出土した。入り口に供えられるように出土したため、今度の玄室内部の調査に期待が膨らんだ。玄室部では、奥壁前の掘り下げで、床面を確認する。２月上旬、元位置を留めているような石材を残して、崩れ落ちていたり、危険と考えられたりする石材をすべて取り除いた。その結果、玄室部の奥壁付近と両側壁最下段の石組みだけが辛うじて残された。玄門立柱石も内側に傾いていた。２月中旬、玄室内から完形に近い遺物が次々と出土し始める。石室石組みに比べて遺物の残存状況は極めて良く、広く一般の方に知らせるため３月１日（土）に現場公開を行った。雨天にもかかわらず約250名の参加であった。３月上旬、玄室内の調査を一端停止し、墳丘の除去と墓坑の検出作業に入った。３月中旬に墓坑の検出作業を終了し、空中写真撮影を行った。その後、床面の床石と羨道部の排水路の礫を除去した。最終的にはすべての石を取り除いて、調査を終了した。（天井石や立柱石など主要な石は池田町が保存のため移設し、現在堀西公園内に並べて展示してある。）

写真　二ノ井遺跡　発掘作業風景

２．二ノ井遺跡発掘調査日誌

南高野古墳の欄で述べたように、当初二ノ井遺跡として調査に入った所は新発見の南高野古墳であった。平成８年度に残りの1,440㎡の調査を行った。調査は横断道路の関係からＡ・Ｂ地区の２地区に分けて行った。

4月中旬、試掘調査から約1.5～3mの厚さで堆積している砂礫層の下に暗褐色～黒褐色土が堆積していることが分かっていたため、重機により砂礫層の除去を行った。7月1日から手掘りによる調査を開始した。はじめに、断面観察のためのトレンチを調査区北側に入れた。断面観察の結果、Ⅲa層とⅣ層に遺物を混入するプランが確認されたため、Ⅲa層の検出作業から開始した。Ⅲa層及びカクラン層からは溝や土坑・ピットなど多数の遺構や遺物を検出した。特にB地区ではSD1・2の2条の溝が調査区を横切るように検出され、遺物も多数含まれていた。9月下旬に第1次遺構面の検出を終了し、空中写真撮影を行った。A地区は第1次遺構面の検出だけで終了した。10月上旬から第2次遺構面の検出を開始した。第2次遺構面からも溝や土坑・ピットなどの遺構と多数の遺物を検出した。

11月下旬に、高所作業車を使用して第2次遺構面の完掘状況の写真撮影を行って、調査を終了した。

3．市場遺跡発掘調査日誌

平成9年5月6日から平成9年8月8日まで発掘調査を行った。

5月7日　調査始め式（略式）を行った。初めに東西トレンチ北壁の壁削り作業から開始した。

5月中旬　東西トレンチ北壁の壁削り作業終了。畑への進入路を境に調査区を西地区と東地区に分けた。調査は西地区より始めた。手掘りによる掘り下げ作業開始し、水田敷土（Ⅱ層）の除去作業を行った。Ⅱ・Ⅲ層からは須恵器片や山茶碗片、中近世陶器片などが出土したが、遺構は確認できなかった。

5月下旬　Ⅶ層までの掘り下げを行ったが、遺構を確認することはできず、調査区西区の調査を終了した。西地区には、Ⅵ・Ⅶ層は見られなかった。水田開田時に削平されたためと思われる。続いて、東地区Ⅴ層の掘り下げを開始した。調査の進行のためⅣ層までは重機で除去した。D3グリッドより馬蹄形に回る暗褐色土の溝状プラン（SX1）を検出した。無文の縄文土器が1点出土した。Ⅵ層では、いくつかのピットを確認した。ピット内からは1点の土器も出土しなかった。6月上旬までにピット群の完掘を終了した。

6月中旬　Ⅶ層の検出作業を開始する。SK1・2・3、SD1等のプランを検出した。

6月下旬　東区東H10グリッド付近のⅤ層中より縄文早期押型文土器片が数点出土した。SD02のプランも検出し、掘り下げを行う。

7月上旬　調査区Ⅵ層の精査作業を終了し、Ⅶa層の掘り下げを開始する。

7月下旬　調査区Ⅶ層の掘り下げを作業終了し、Ⅷ層の精査を開始。Ⅷ層から遺物は1点も出土しなかった。

8月7日　完掘の空中撮影を行う。

8月8日　発掘調査を終了する。

写真　市場遺跡　発掘作業風景

第2章　遺跡周辺の立地と環境

第1節　地理的環境

池田町の西部は、池田山地が伊吹山地と平行して南北に走る山岳地帯で、北北東－南南西方向の谷や稜線は古生層の走向に支配されたもので、池田山地北部を東西に流れる粕川、西部を南北に流れる足打谷、大滝等の大きい谷は断層に支配されて生じたものである。池田山地の東端は北北西～南南東に走る顕著な断層崖で限られ、その下方に扇状地が発達している。池田山地の南部（梅谷山塊）から赤坂の石灰岩山地までは地質の相違により山のひだが多く、谷密度が高い。赤坂山地は石灰岩のため浸食に強く平坦な山容を示し谷密度が最も低い。調査区のある梅谷山塊は、塊状の砂岩と薄い粘板岩との互層よりなる梅谷層で構成され、その下に大石層が整合に重なっている。梅谷層の砂岩は、厚さ数mないし十数mで、中粒又粗粒であり、しばしばその中に黒色粘板岩の角礫を含む。上部には、厚さ1mないし2m以下の青灰色または灰白色のチャートの薄層が発達している。

東部の平野は池田山塊を浸食した谷が山麓扇状地をつくり、その東部に粕川が西部の山地を浸食し、揖斐川が北部の山地を浸食して砂礫を運搬し、山地を出てから何回か流路を移動しつつ扇状地をつくり、現在本町の重要な農耕地となりまた集落はこの上に立地している。[1]

二ノ井遺跡・南高野古墳の位置する片山渓北地区は、金地谷川の形成する扇状地である。本調査区周辺は、川の氾濫によってもたらされた大量の砂礫層によって微高地状の地形を呈しており、周辺の水田区とは様相を異にする。本調査区周辺にかかわる水害の歴史をみると、記録に残るものだけでも大化5年粕川の大洪水から何十回も数えられる。特に慶安3年（1650）の洪水は未曾有の規模で池田山麓の村々が土砂に埋まったと伝えられている。本調査区に厚く堆積する砂礫層もこの頃のものであると思われる。

第2節　歴史的環境

池田町は、「古墳の町」として知られている。県指定史跡「願成寺古墳群」をはじめ約300基の古墳が町内各所に点在している。本遺跡のある片山地区周辺にも60数基の古墳が確認されている。中でも、本遺跡の南東、標高172mの山頂部に位置する遠見塚古墳は、2段築成の円墳であり、池田町最古の古墳である。平成2年度に行われた池田町教育委員会の発掘調査では、葺石、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土しており、その造営年代は5世紀前葉頃とされている。[2] また、本遺跡の北には、標高130mの丘陵尾根突端部に雨乞塚古墳群がある。竪穴式石室を持つ円墳が2基あり、2号墳は、昭和62年度の池田町教育委員会による調査で、その築造年代は5世紀中葉とされている。[3] 後期の横穴式石室を有する古墳としては、寺大門古墳群、金地谷古墳群、城ヶ谷古墳群、柚ノ木古墳、高畑古墳、一ノ井古墳、大畑古墳群、トンビ塚古墳群、深谷古墳群、社宮寺古墳群、崇輪古墳群、遠見塚古墳群などが知られ、本遺跡の東部・北部の山麓を中心に点在している。

町内の古墳時代の遺跡としては、大池東遺跡、東畑田遺跡、中八幡遺跡が知られる。大池東遺跡は古墳時代初頭の遺跡で、住居趾が検出され、S字状口縁台付甕、高坏、器台などが出土している。東畑田遺跡からは弥生～中世の遺物が大量に出土している。中八幡遺跡は弥生～中世の遺跡で同所には全長43mの前方後円墳である中八幡古墳がある。初期の馬具を出土したことで有名なこの古墳は、墳

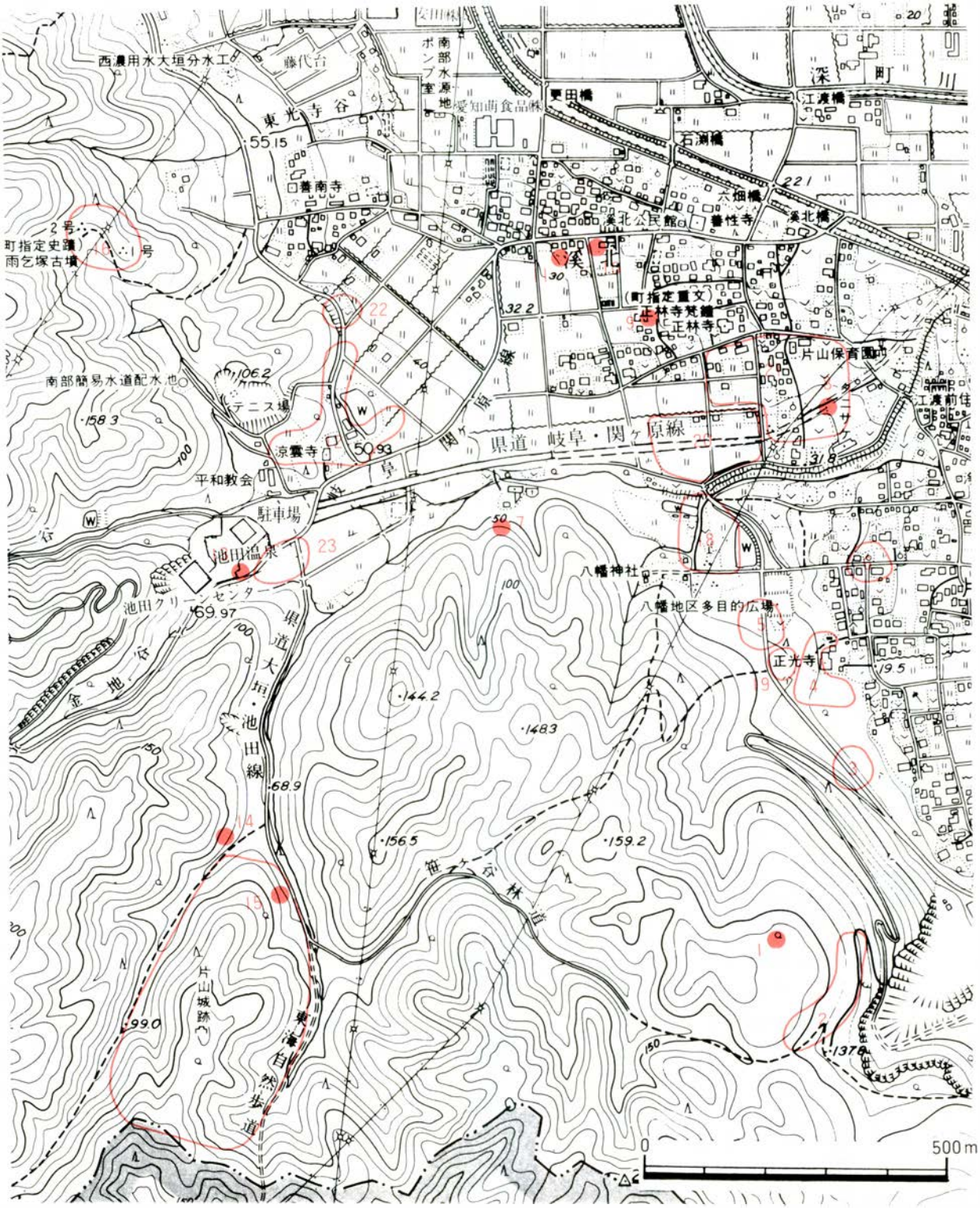
丘盛土に多量の弥生土器を含み、同古墳が先行する弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡を破壊して築造されていることがうかがえる。これらの遺跡は、古粕川が形成した粕川隆起扇状地を中心に点在している。いずれも大量の遺物の出土が認められるものの、その詳しい実態については明らかになっていない。

片山地区周辺は、扇状地の端部であり古粕川をはじめとした河川の氾濫によって形成された湿地帯が北～東に広がり集落形成には適した立地下にある。古墳時代にかかわる集落遺跡については他の町内の遺跡と同様にくわしい実態は明らかになっていないが、古墳を築造することができる集団が定住することができる条件を備えていた。また、東山道も大垣市と境を接する金生山東山麓を北上して片山地区を通っていたとされる。金生山南山麓には昼飯大塚古墳をはじめ一大古墳群があり、美濃国が統括される前に存在したと言われる国造の一人である額田国造は、このあたりが根拠地といわれ、その勢力圏は中八幡古墳にまで及んでいたと想定されている。片山地区はまさにその中間地点にあり、交通の要衝としても重要な地域であったと思われる。壬申の乱（672年）では、大海人皇子の舎人として活躍した人物に和邇部臣君手がいる。乱当時、安八磨郡には大海人皇子の私領である湯沐令が存在しその管理者であった多臣品治とともに片山地区とその周辺は彼らの拠点であったのではないかとする説もある。近年、二ノ井遺跡の西隣にある高畑遺跡から寺院関連遺構と思われる大量の布目瓦を伴った溝状遺構が検出された。（平成7年度、岐阜県文化財保護センター調査）文献資料にもない幻の古代寺院の発掘として話題になったが、古代寺院を建立することができた権力者やその集団が周辺に存在したことは間違いないことである。

このような古墳群の他に、片山地区周辺には縄文時代から中・近世に至るまで各時代を網羅する遺跡が点在している[1]。主な遺跡として、縄文時代の堀西遺跡、弥生時代の深谷遺跡が知られる。堀西遺跡は、縄文時代の土器や石器（有舌尖頭器）、弥生土器などが出土している。深谷遺跡からは弥生土器が出土している。古代～近世の遺跡としては、高畑遺跡や善南寺跡、善南中世墓群、池ノ谷中世墓群、片山城跡などが知られる。近年、中世の遺跡として六之井深池遺跡が発掘調査され、土器集積遺構から大量の土師器皿が出土した。15世紀後半～16世紀前半の一括資料として注目されている。[5]

註

1）池田町　1978「池田町史　通史編」
2）池田町教育委員会　1991「遠見塚古墳発掘調査報告書」
3）池田町教育委員会　1989「雨乞塚2号墳発掘調査報告書」
4）池田町教育委員会　1991「岐阜県揖斐郡池田町遺跡地図　改訂版」
5）池田町教育委員会　1997「六之井深池遺跡発掘調査報告書」



1　遠見塚古墳
2　遠見塚古墳群
3　崇輪古墳群
4　雑窟寺古墳群
5　深谷古墳群
6　トンビ塚古墳群
7　大畑古墳群
8　南高野古墳
9　高畑古墳
10　柳ノ木古墳
11　一ノ井古墳
12　寿大門古墳群
13　金地谷古墳群
14　城ヶ谷古墳群
15　城ヶ谷7号墳
16　雨乞塚古墳群
17　片山城跡
18　堀西遺跡
19　深谷遺跡
20　高畑遺跡
21　二ノ井遺跡
22　池ノ谷中世墓群
23　市場遺跡

第２図　周辺の主な遺跡

第3章　基本層序（二ノ井遺跡・南高野古墳）

Ⅰa 層：にぶい黄褐色砂質土、旧耕作土、¢1～2㎜の砂粒を少し含み、わずかに鉄分の付着有り。

Ⅰb 層：灰黄褐色砂質土、¢5㎜前後の亜円礫と拳大の円礫が大半を占める。

Ⅰc 層：黄褐色砂質土、礫をほとんど含まない

Ⅰd 層：にぶい黄褐色砂質土、¢2～10㎜の砂礫が大半を占め、拳大の円礫が入る。

Ⅰe 層：黄褐色弱砂質土、礫をほとんど含まない。¢1～2㎜の橙色土がブロック状に入る。

Ⅱa 層：にぶい黄褐色弱砂質土、礫をほとんど含まず、鉄分の沈着有り。

Ⅱb 層：灰黄褐色弱粘質土、礫をほとんど含まず、下位に鉄分の沈着有り。

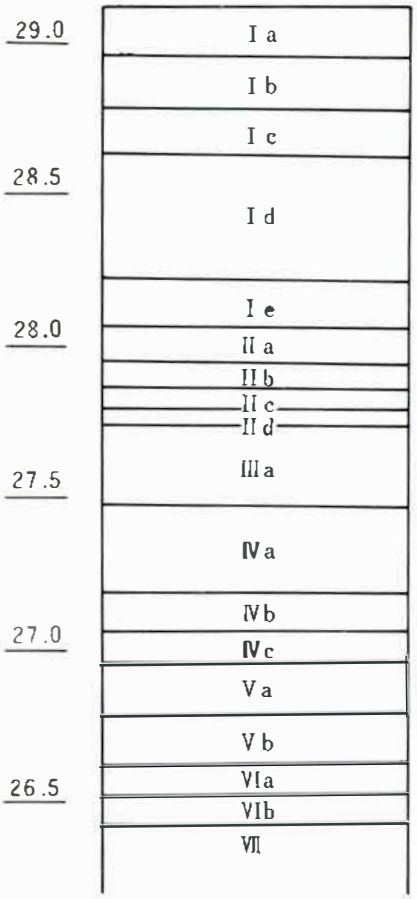
Ⅱc 層：にぶい黄褐色土弱砂質土、礫をほとんど含まず、鉄分の沈着により全体に赤みを帯びる。炭化物をわずかに含む。

Ⅱd 層：暗褐色弱粘質土、礫をほとんど含まない。

Ⅲa 層：黒褐色砂質土、しまりあり、¢1～2㎜の砂粒と¢5～10㎜の砂礫多く含む。炭化物も混じる。

Ⅲb 層：黒褐色弱粘質土

Ⅲc 層：暗褐色砂質土、Ⅲa 層に似るも砂礫の入り少ない。



第3図　基本層序（S＝1/25）

Ⅳa 層：黒褐色弱粘質土、しまりややあり、¢2～5㎜の砂礫を含む。

Ⅳb 層：黒褐色弱砂質土、しまりややゆるい、¢5㎜前後の砂礫を多く含む。

Ⅳc 層：黒褐色弱粘質土、しまりややゆるい、¢5㎜前後の砂礫を多く含む。

Ⅴa 層：暗褐色弱粘質土、しまりあり、¢5～10㎜の均一した砂礫を多量に含む。

Ⅴb 層：褐色粘質土、非常にしまりあり、砂礫をほとんど含まない。南高野古墳墳頂部盛土6層か。

Ⅴc 層：にぶい黄褐色弱粘質土、¢5㎜程の円礫と¢20～50㎜の礫が大半を占める。

Ⅵa 層：黒褐色粘質土、しまりややあり、礫をほとんど含まない。南高野古墳基盤層

Ⅵb 層：暗褐色粘質土、しまりややゆるい、礫をほとんど含まない。

Ⅶ　層：褐色粘質土、しまりややあり、礫を含まない。

第４章　南高野古墳の調査

第１節　墳丘と外部施設

１．墳　丘

発掘調査の経過（第１章）で述べたように、古墳の墳丘は後世（近世初頭と思われる）の大規模な河川氾濫によって堆積した厚い砂礫層の下に完全に埋没していた。そのため、古墳の墳丘はほぼ完全に残っていたと思われる。調査当初は、黒褐色土のマウンドが古墳であるとの認識がなかったため、断面観察のトレンチ位置も墳丘断面を観察するには少しずれた位置（石室主軸に対して直交すべきトレンチが約45°ずれる）になってしまった。

古墳築造当時の旧地表面は西端で25.5ｍ、東端で25.0ｍである。地形は西から東へ緩やかに傾斜し、墳丘の東端部で一段下がる。約１ｍの比高差がある。旧地形の想定を肯定するならば、古墳の立地場所は片山渓北地区の東南端にあたり、扇状地の突端部に張り出すようにこうした段差を利用して古墳が築造されたと思われる。当時、粕川は大水の度にその流路を変えており、古墳の東側は広大な湿地帯になっていたと想像され、突端に築造された古墳は遠方からも容易に確認できたと思われる。

墳丘の規模は径22.0ｍを測る。墳形は、墳丘の断面観察と墳丘面の検出作業から円墳であったと推定される。墳丘の端には約２ｍのテラス状の平坦面がつくられ、その外側に幅２ｍの周溝が巡る。周溝は南西側と北東側の２ヶ所で確認でき、古墳のほぼ全体を巡っていたと思われる。開口部付近については不明である。墳丘の高さは旧地表面から約2.5ｍである。東側については自然地形の傾斜があり3.5ｍの比高差になる。墳丘の周りに葺石や外護列石はみられない。

写真　南高野古墳調査前風景（西より）

写真　黒色マウンド検出状況

墳丘の構築過程は何段階かに分けられる。以下、工程順に記す。

1．旧地表を掘り込み、墓坑を確定する。墓坑の深さは、石室石材に使用する奥壁鏡石の高さに合わせている。

2．石室の奥壁・玄門立柱石・羨門立柱石を設置する。玄室側壁の基底石を設置する。（以下石室石材の構築については後述する。）

3．石室石材の積み上げに従って裏込めを行う。裏込めの土には墓坑掘り込みに伴って排出した土を使用する。

4．地表面まで石室石材が積み上がり、裏込め土の充填が完了した段階で、天井石の架構を行う。

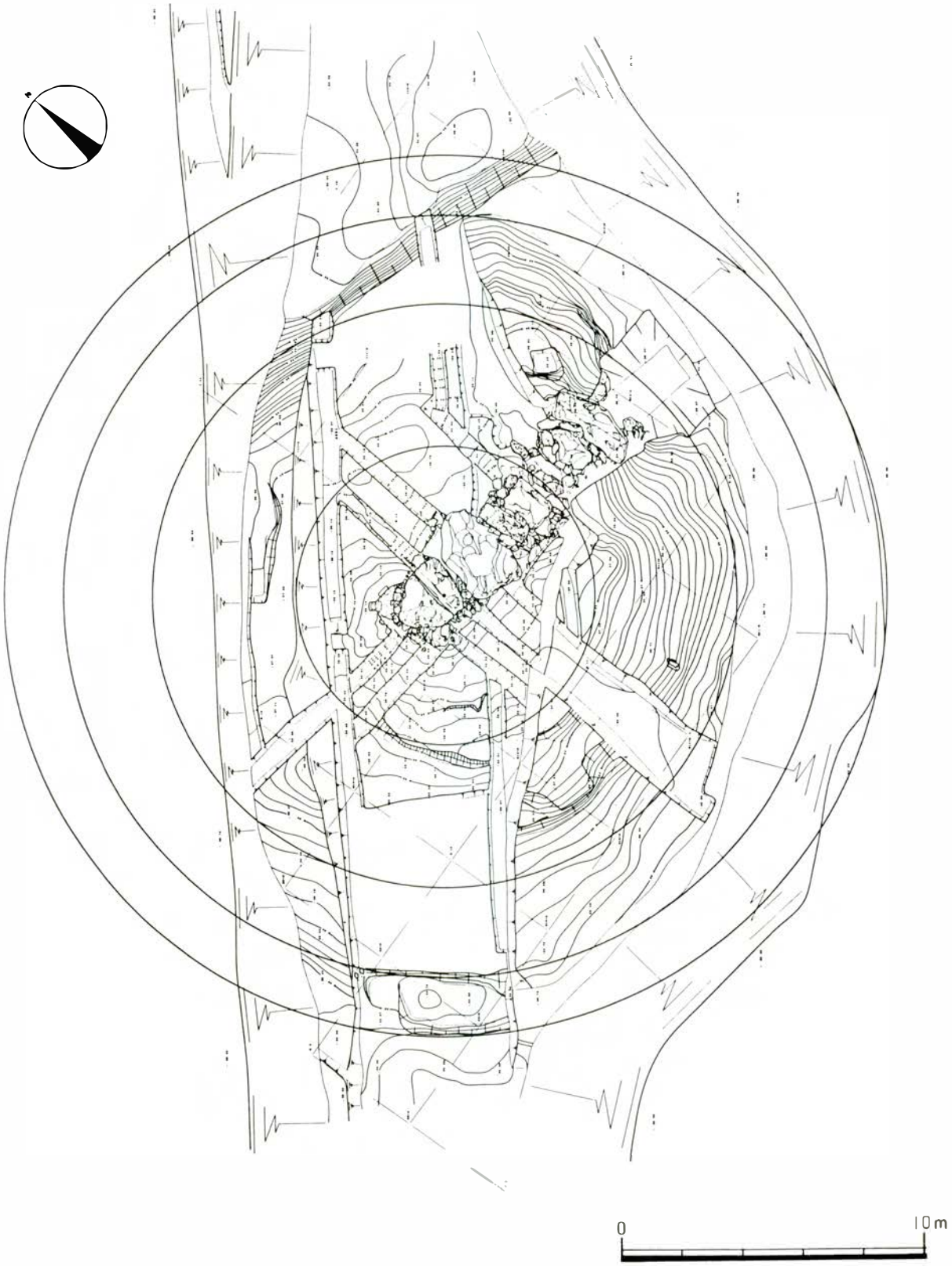
5．天井石の上に盛土を施す。盛土は天井石全体を覆うように性質の違う土を少しずつ貼り付ける。玄室中央部の最も大きな天井石を中心に凸面を成すように盛土を施す。盛土には墓坑形成の際に排出した土（盛土E・F・G）を使用する。

6．約1mの凸面状の盛土が完了すると、盛土の最も高い地点から墳丘裾部までの断面が変形した平行四辺形の形になるように盛土を施す。この際使用するのは、古墳周辺の旧地表面を薄く削り取るようにして集めた黒褐色土（二ノ井遺跡層序では第Ⅴ層、盛土B・C・D）である。周辺の地表土を削り出すことで古墳周囲を水平な平坦地にする意図もみられる。

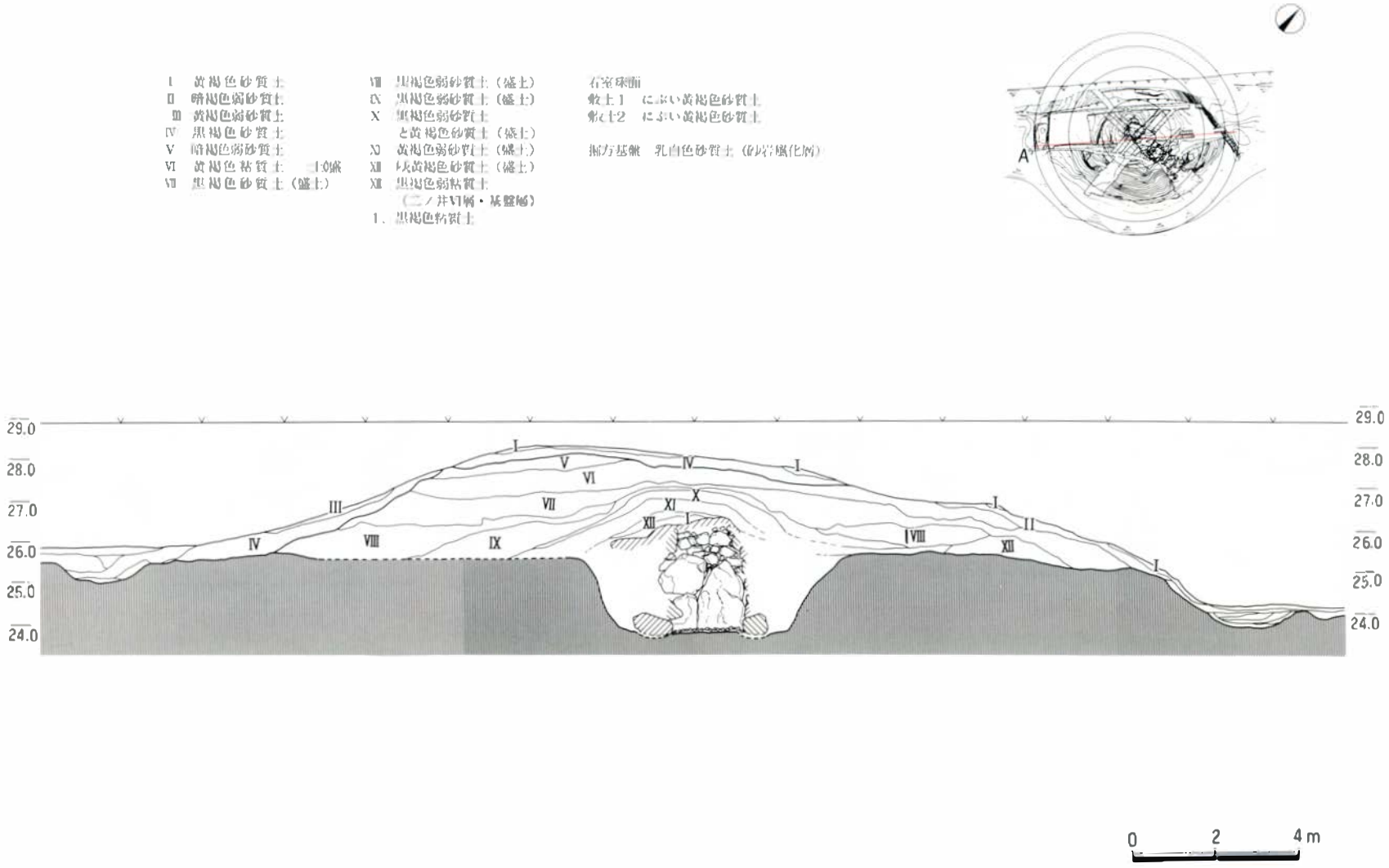
7．墳丘盛土の最終工程として、墳頂部に黄褐色強粘質土（盛土A）を貼り付ける。蓋土的な意図がみられる。この土は、古墳から約30m西の二ノ井遺跡調査区内で検出した溝（SD16）から排出した土を使用したと思われる。

このように、墳丘の構築過程は何段階かに分かれて行われているが、墳丘の構築はそれ自体だけを目的としたのではなく、古墳周辺の外装・外観までも考慮した意図がみられる。古墳から約30m西の山側に掘り込まれた溝（SD16）は外界と古墳との一種の境を成している。さらに、古墳までの地表を2段の平坦面に整地し、周溝をめぐらし、さらにテラス状の平坦面を設けることによって独立した古墳の存在を際立たせようとした意図がうかがえる。

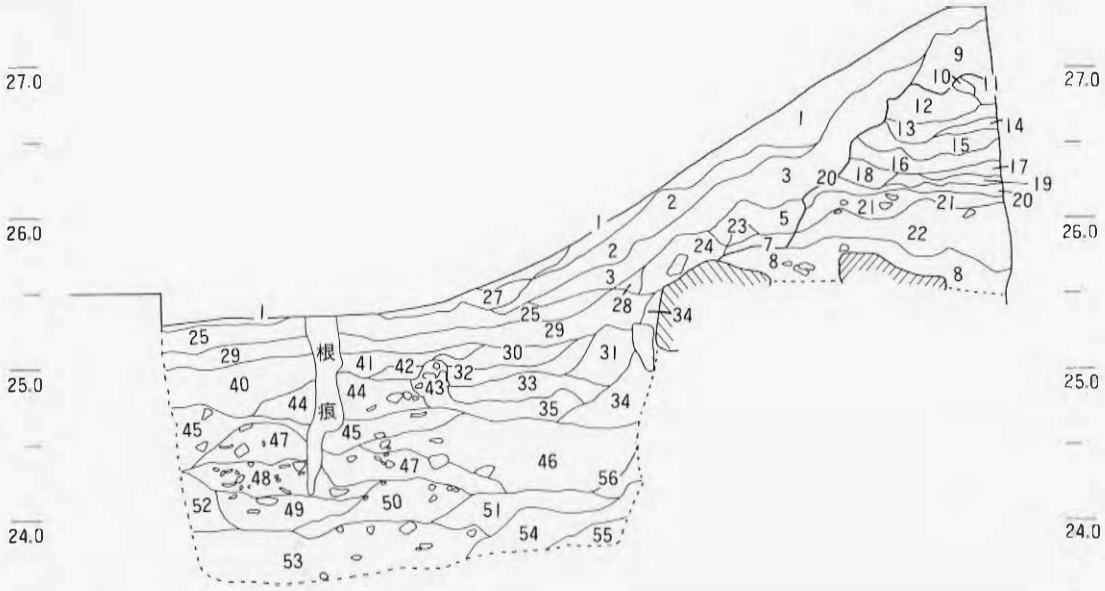
写真　墳丘盛土の様子（西より）



第4図　南高野古墳測量図



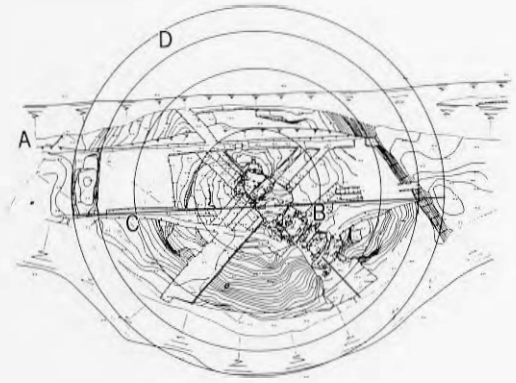
第5図　墳丘（Aトレンチ）断面図（1）

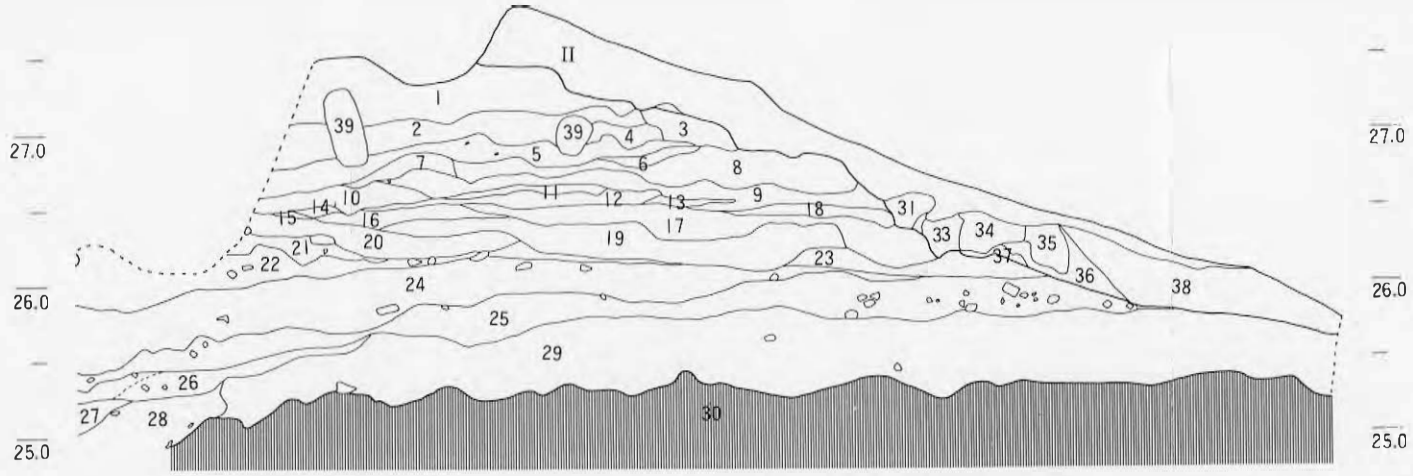


Bトレンチ断面図

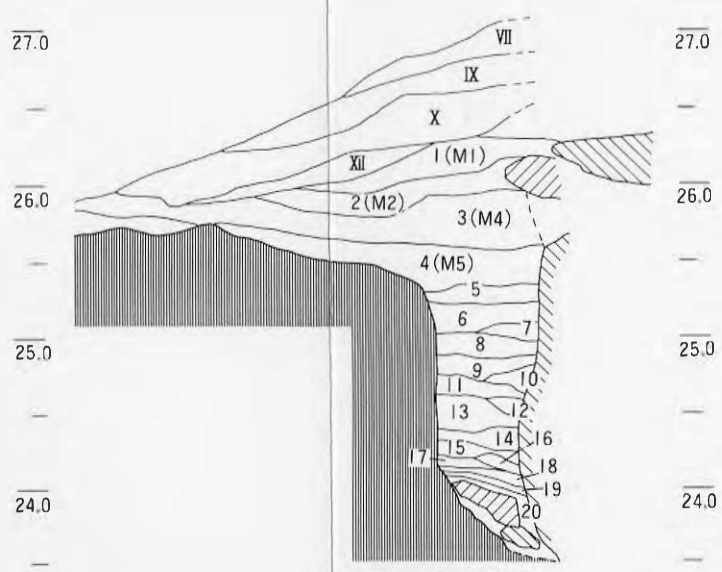
開口部トレンチ断面土色表

1	暗褐色砂質土	21	黒褐色砂質土	41	黒褐色弱粘質土
2	暗褐色砂質土	22	黒褐色弱砂質土	42	黒褐色弱粘質土
3	暗褐色砂質土	23	黒褐色弱砂質土	43	黒褐色弱粘質土
4	暗褐色砂質土	24	暗褐色弱砂質土	44	黒褐色弱粘質土
5	黒褐色砂質土	25	暗褐色弱砂質土	45	黒褐色弱粘質土
6	黒褐色砂質土	26	黒褐色弱砂質土	46	黒褐色弱粘質土
7	黒色弱砂質土	27	にぶい黄褐色弱砂質土	47	黒褐色弱粘質土
8	黒褐色砂質土	28	黒褐色弱粘質土	48	黒褐色弱粘質土
9	暗褐色砂質土	29	黒褐色弱粘質土	49	黒褐色弱粘質土
10	黒褐色砂質土	30	黒褐色弱粘質土	50	黒褐色弱粘質土
11	暗褐色砂質土	31	黒褐色弱粘質土	51	黒褐色弱粘質土
12	灰暗褐色砂質土	32	黒褐色弱粘質土	52	黒褐色弱粘質土
13	暗褐色砂質土	33	黒褐色弱粘質土	53	黒褐色弱粘質土
14	暗褐色砂質土	34	黒褐色弱粘質土	54	暗褐色粘質土
15	暗褐色砂質土	35	黒褐色弱粘質土	55	暗褐色弱粘質土
16	暗褐色砂質土	36	黒褐色弱粘質土	56	暗褐色弱砂質土
17	暗褐色砂質土	37	黒褐色弱粘質土		
18	暗褐色砂質土	38	暗褐色弱粘質土		
19	暗褐色砂質土	39	黒褐色弱粘質土		
20	黒色弱砂質土	40	黒褐色弱粘質土		





Cトレンチ断面図



Dトレンチ断面図

南墳丘断面

II	暗褐色弱砂質土				
I	黄褐色粘質土	11	黒色弱砂質土	21	黒色弱粘質土
2	黒褐色粘質土	12	暗褐色弱砂質土	22	明黄褐色粘質土
3	黒褐色粘質土	13	黒色弱砂質土	23	黒色弱砂質土
4	黒褐色粘質土	14	黒褐色弱粘質土	24	黒色弱砂質土
5	暗褐色弱粘質土	15	黒色弱砂質土	25	暗褐色砂質土
6	暗褐色弱粘質土	16	黒褐色弱粘質土	26	黒色弱粘質土
7	暗褐色弱粘質土	17	黒褐色弱粘質土	27	黒色弱粘質土
8	黒褐色弱砂質土	18	黒褐色弱粘質土	28	黄褐色砂質土
9	暗褐色砂質土	19	黒褐色弱粘質土	29	黒色弱粘質土
10	黒褐色弱粘質土	20	黒褐色弱粘質土	30	暗褐色弱粘質土

31	黒色弱砂質土	39	褐色砂質土
32	暗褐色砂質土		
33	黒褐色砂質土		
34	暗褐色砂質土		
35	暗褐色砂質土		
36	暗褐色砂質土		
37	黒褐色砂質土		
38	暗褐色弱砂質土		

0 2m

南高野奥壁裏断面

VII	黒褐色弱砂質土	1	黒褐色弱砂質土	11	黒褐色弱粘質土
IX	黒褐色弱砂質土	2	黒褐色弱粘質土	12	暗褐色粘質土
X	黒褐色弱砂質土	3	灰黄褐色砂質土	13	黒褐色弱粘質土
	と黄褐色砂質土	4	黒褐色弱粘質土	14	暗褐色弱粘質土
XI	黄褐色弱砂質土	5	暗褐色砂質土	15	黒褐色砂質土
XII	灰黄褐色砂質土	6	黒褐色砂質土	16	暗褐色砂質土
		7	黄褐色土と黒褐色土	17	黄褐色砂質土
		8	黒褐色砂質土	18	黄褐色土と黒褐色土
		9	暗褐色弱粘質土	19	黒褐色弱粘質土
		10	黄褐色弱粘質土	20	にぶい黄褐色砂質土

第6図　墳丘断面図 (2)

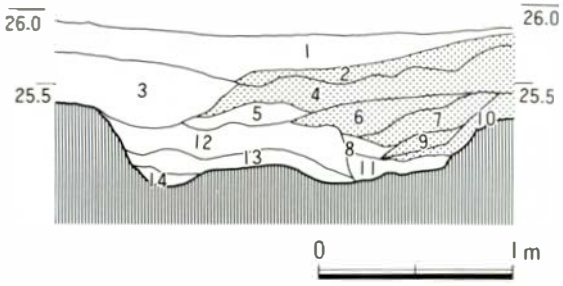
左：写真　奥壁背面裏
　　込め土の様子（南より）

右：写真　奥壁背面裏
　　込め石の様子（南より）

２．周　溝

周溝（ＳＤ11）は、墳丘の南西部で確認した。標高25.3ｍのＶ層で検出した。検出した溝は、長さ4.93ｍ、最大幅2.03ｍ、深さ0.82ｍを測る。方位は、Ｎ－155°－Ｅで、緩やかに弧をえがく。埋土は墳丘からの流入土と二ノ井遺跡（西）からの堆積土に分かれる。周溝内からは、須恵器の装飾器台台部片や脚部片、装飾片（馬？）が出土している。

墳丘北東部のトレンチで確認した溝は、幅2.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。トレンチのみの検出であり、溝の方向は不明であるが、ＳＤ16と墳丘中心からほぼ等距離に位置することから古墳に伴う周溝と判断した。トレンチ内から遺物は出土していない。溝の埋土は墳丘からの流入土と後世の堆積層に分かれる。



1　暗褐色弱砂質土
2　暗褐色弱砂質土
3　黒褐色弱砂質土
4　黒褐色弱砂質土
5　黒褐色弱砂質土
6　黒褐色弱砂質土
7　黒褐色弱砂質土
8　黒褐色弱砂質土
9　黒褐色弱砂質土
10　黒褐色弱砂質土
11　黒褐色弱砂質土
12　黒褐色弱砂質土
13　にぶい黄褐色粘質土
14　暗褐色弱砂質土
※スクリーントーンは、墳丘よりの流入土

第７図　ＳＤ11(周溝)断面図

写真　装飾動物須恵器片出土状況

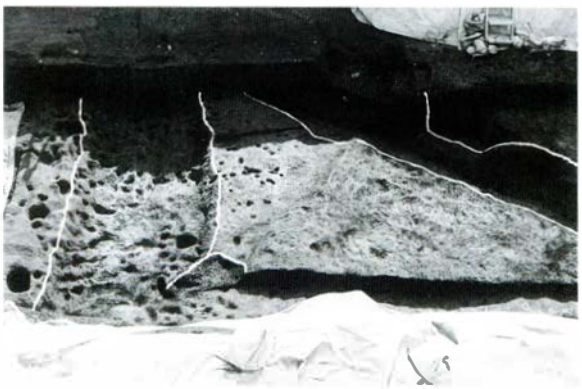


写真　ＳＤ11（周溝）検出状況（西より）

第2節　内部構造

南高野古墳の内部構造は、東方向に開口する横穴式石室である。石室は、玄室・羨道・前庭からなる単室構造で、玄室及び羨道の入り口には立柱状の石材を設置した玄門及び羨門を有する。石室の全長は10.5mを測る。羨道は、奥壁から見て右側[1]が片袖になった右片袖式である。また、前述したように玄室内壁にベンガラを塗布した赤彩古墳である。石室に使用されている石材は、全て砂岩であった。

[1]第2節内部構造で使用する「左・右」は、全て奥壁から見た向きである。

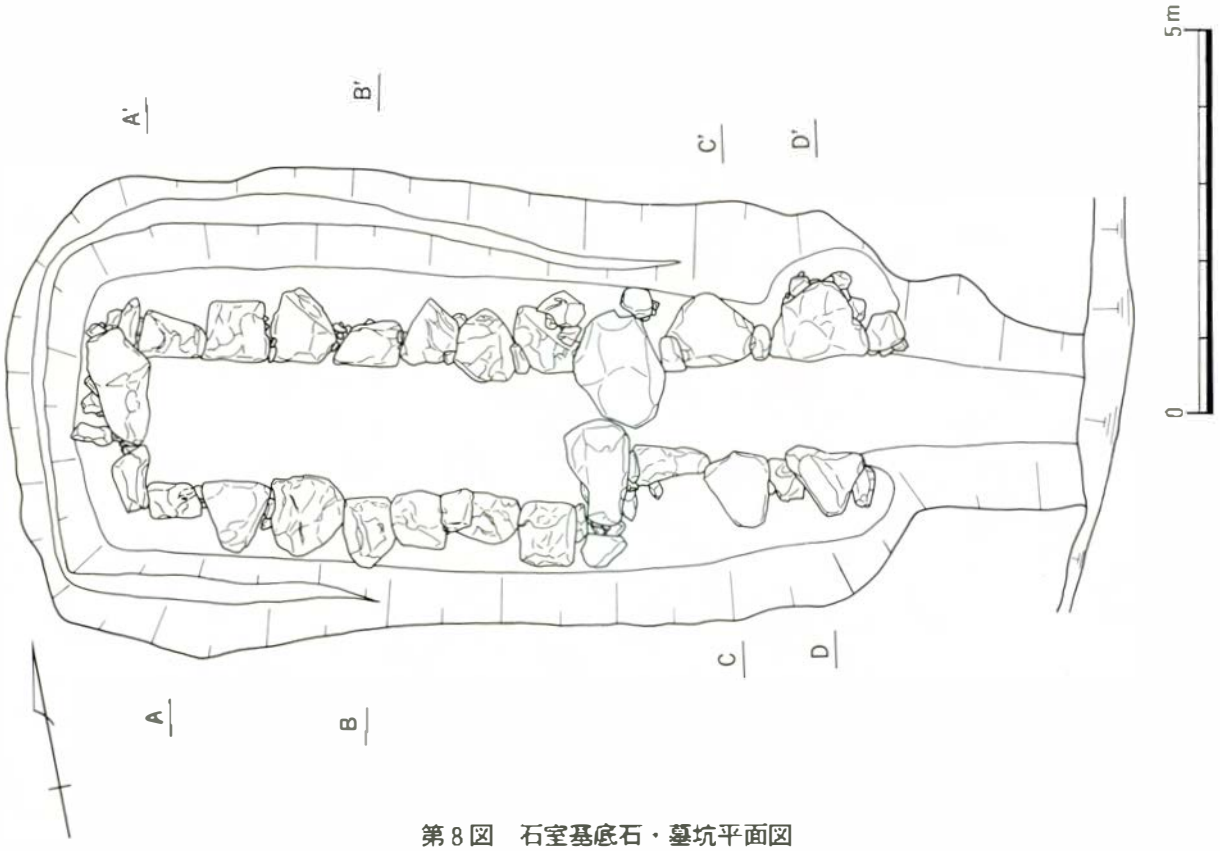
1．墓　坑

南高野古墳の石室は、旧地表面から掘り抜いた墓坑内に構築されている。墓坑は、黒褐色土の地表面から砂礫層・暗褐色土層を掘り抜いて、灰黄褐色の砂岩風化層まで達しており、地盤の安定した底面を作り出している。墓坑は、奥壁背部から前庭までの長さ12.2m、奥壁部幅 6.1m、最大幅6.2m、羨門部幅5.2mを測り、ほぼ長方形の形を呈している。深さは、奥壁部1.85m、羨門部1.65mを測る。玄室背部は、旧地表面をほぼ垂直に掘り下げてあるが、羨道背部ではやや傾斜している。羨門左の立柱石の背部は、石の形に合わせるように掘り抜かれている。前庭部で幅が狭まり、墓道を形成している。奥壁左側の巨石（鏡石）や玄門立柱石、羨門立柱石下には、石材の形状に合わせた掘方が見られる。また、羨道部には、排水溝のための掘方があり、石室床面から約20cm掘り下げられている。奥壁側から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は35cmである。調査の最終段階で石室石材を全て取り外し墓坑の精査を行っていたところ、奥壁右隅より水がしみ出てきた。扇状地伏流水の水道と思われるが、古墳築造当時も湧水はあったであろう。そのためか、墓坑は奥壁から玄門にかけては比較的水平になっているものの、玄門下の排水路から開口部、さらには墓道へと傾斜をつけた掘り込みがされている。

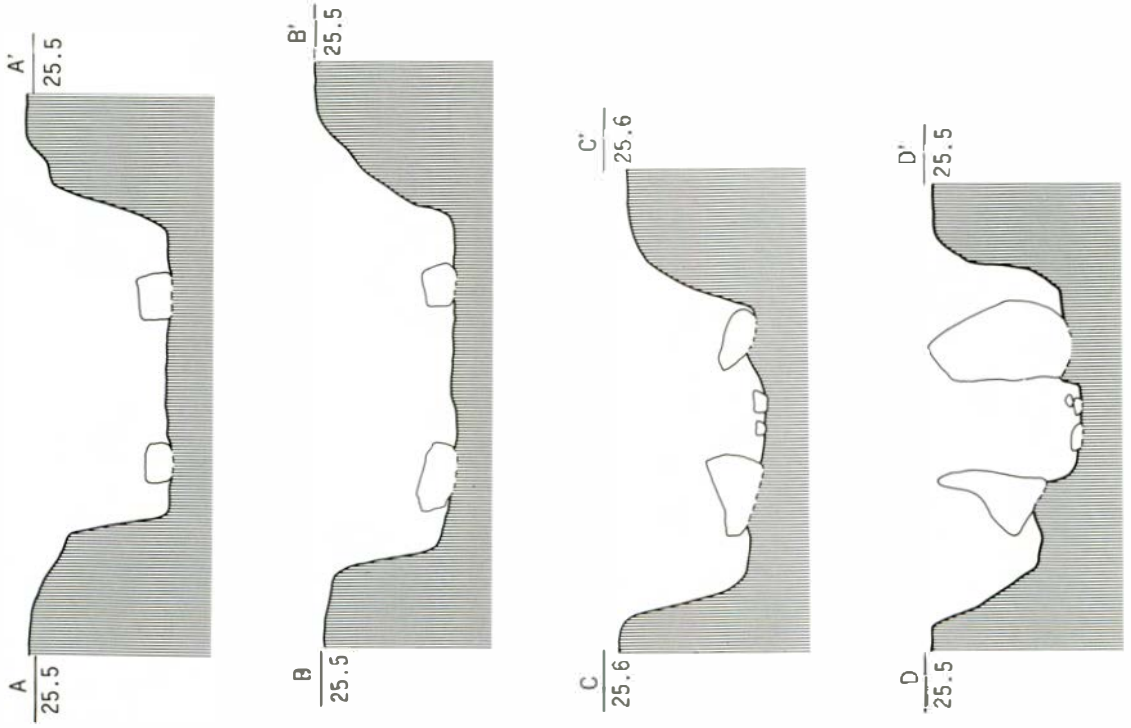
写真　石室検出の様子（東より）

写真　墓坑検出状況（東より）

写真　墓坑完掘状況（東より）



第8図　石室基底石・墓坑平面図



第9図　墓坑掘方断面図

2．石　室

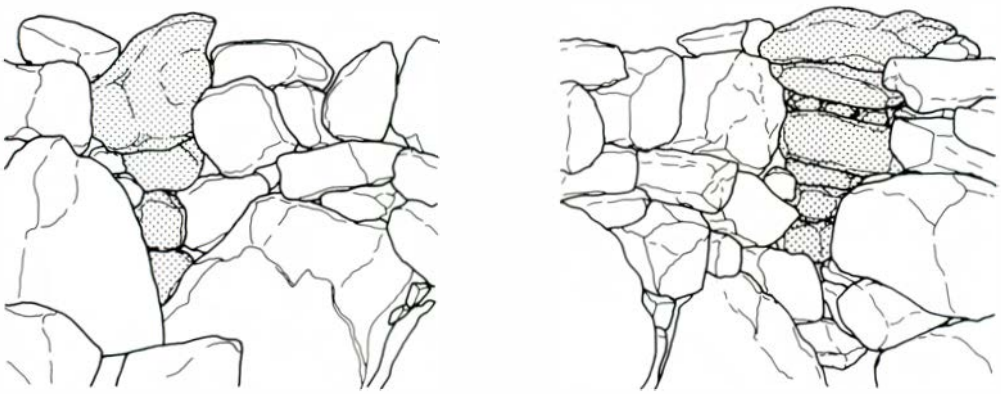
玄　室

玄室の規模は、全長5.8m、奥壁部幅1.7m、最大幅1.9m、玄門部幅1.8mを測る。玄室長5.8mという数値は、石室全長10.5mの半分を越える。玄室の平面形は、ほぼ長方形の形を呈している。

奥壁は、高さ約1.8mの縦長の巨石を左側に配し、右側は2段の比較的大きな石材で高さを揃えている。その上部は、比較的小さい石材が積まれ、アーチ状を呈す。床面から天井石まで高さは約2.6mである。

玄室内の側壁は、大半が崩落または内部に押し出されていたため、全容をつかむことは困難であったが、奥壁と接する両側壁のコーナー部分だけは上部まで崩落を免れていた。

玄室内両側壁の石組みは、比較的目地を揃えて積み上げられている。最下段～3段目までは中型石材が使われ、3段で奥壁や立柱石と同じ高さに揃えるように垂直に積まれている。石材の形によって足りない部分は、小型石材で補充している。基底石は、真四角な中型石材を配置している。4段目からは、やや小ぶりで細長い石材を用い、面積の小さい面を石室内面に向ける「小口積み」になっており、「持ち送り技法」で内傾させながら積み上げている。奥壁と両側壁の左右コーナー上部には、両壁を繋ぐように積む「渡し掛け技法」が取り入れられている。この技法は玄門右側のコーナー上部でも確認された。



第10図　奥壁・両側壁コーナー実測図

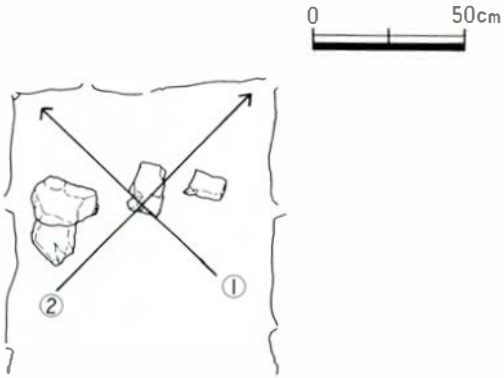
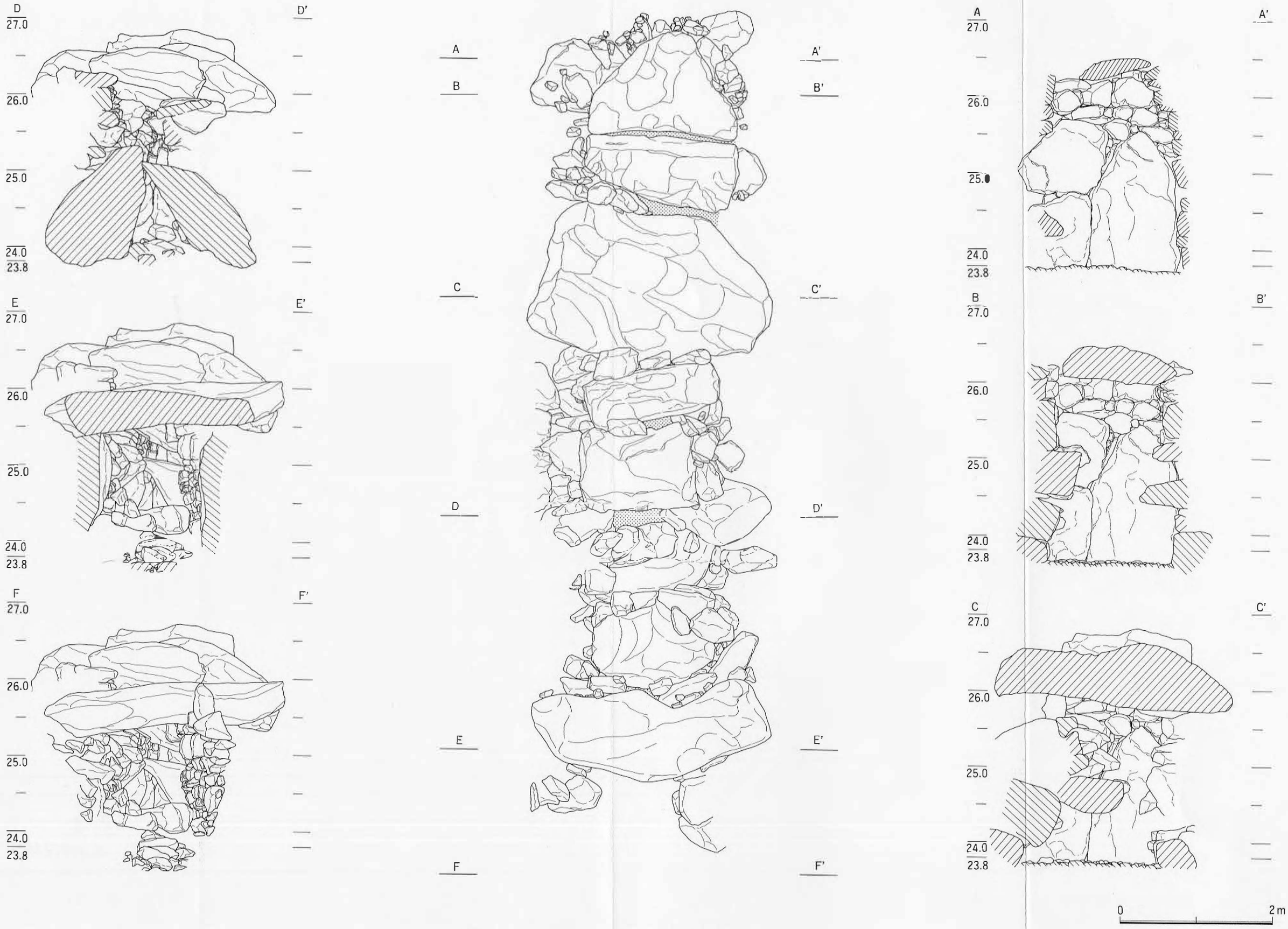


写真　奥壁・左側壁コーナー（南東より）

27.00
25.00
27.00
25.00
24.00
23.80
25.00
26.00
27.00
24.00
23.80
25.00
26.00
27.00
25.00
27.00
25.00
27.00
0
2m

第11図　石室実測図



第12図　天井石平面図・石室断面図

玄門部では、左右の玄門立柱石の上に楣石を配し、さらにその上部に1段ないし2段の石積みを施した「前壁」が形づくられている。立柱石の間には、「框石」が配置されてあった。

玄室を覆うために使用された天井石は、全部で5つあり、中でも中央の石材は8tを越える巨石であった。玄室内の天井石は、側壁石材の崩落のため高さは揃っていないが、築造当時は玄門から奥壁までほぼ高さを揃えてあったと思われる。

玄室内壁は、前述したように赤色顔料（ベンガラ）が全体に塗られていた。一部の石材には、水をかけると鮮やかな赤色が浮かび上がるものもみられたが、全体的には、やや赤っぽい感じがするといった程度の残りであった。特に、奥壁上部の石材や天井石内面、両側壁上部の石材に赤色顔料の残りが良いものが多かった。石室基底石や玄門立柱石は、風化のためか肉眼で確認することはできなかった。（第7章調査関連資料）

玄門立柱石は、両側とも内側に傾いていたが、築造当時の向きに復元すると、框石から楣石までの高さは1.5mであったと思われる。玄門の下には玄室と羨道の境を明確に分け、羨道から一段下がって入るように框石が設置されている。玄門立柱石が傾いたため、浮き上がった状態になっている。框石の下には排水溝の蓋石が設置されている。右玄門立柱石の裏込めは、しっかりした石組みが設置されている。細長い長方形の石材を四角いマス状に設置し、その上に立柱石を架設したようである。

床面は、こぶし大の大きさで楕円形の扁平な石材が多く用いられている。床石の隙間はあまりなく丁寧に敷かれている。側壁と接する部分には、やや細長い石材が用いられ、主軸方向と同じ向きに配置されている。床面は、中央部に比べ両側壁側がやや低くなっており、排水路の役目をしていたと考えられる。また、奥壁前と玄門部付近は他の玄室内の床石に比べやや小振りの石が用いられ

写真　前壁の様子（奥壁側より）

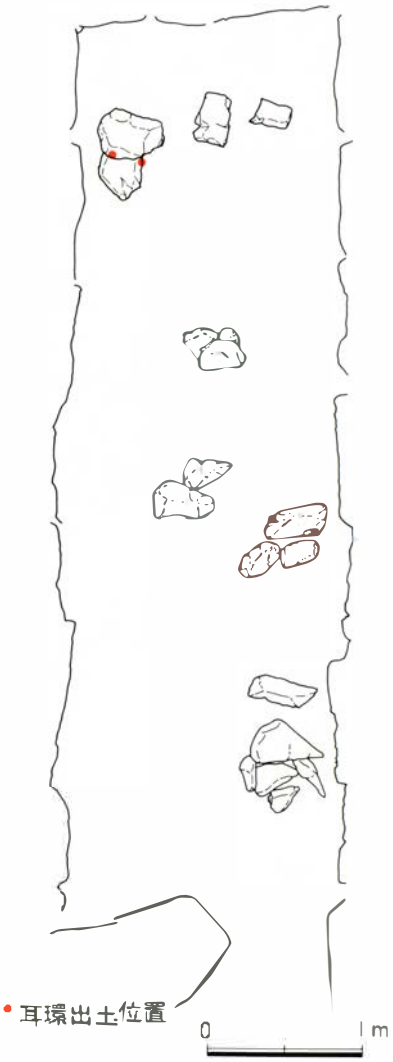
写真　玄門立柱石と框石（奥壁側より）

写真　玄門右立柱石裏込め石（南より）

写真　玄室床石検出状況（奥壁側より）

写真　玄室床石検出状況
（玄門側より）

写真　玄室床石除去後の様子
（玄門側より）



第13図　棺台礫実測図

ているが、その理由は不明である。また、床石の上には人頭大の礫が10数個検出された。2個ないし3個一組になった状態で主軸方向に1.5～2mほどの間隔を空けて配置されているように看取できた。奥壁の手前、右側壁側に並ぶ2個の礫上から耳環が2点出土した。また玄室中央部左側壁側の礫上からも耳環が2点出土したことから、これらの人頭大の礫は、棺台と考えられる。[1] 棺台に使用された礫は床石と比べ亜角礫や亜円礫が多く、主軸方向に対し直角に置かれているものが多い。

床石を除去したところ、地山の上に薄く細かな石を含んだ粘土層が張り付けてあった。その土や床石の裏側には、玄室内部に塗られた顔料と思われる赤色顔料がかなり付着していた。おそらく、石材から剥がれたり流れ落ちたりした赤色顔料が長い年月の間に沈着したものであると思われる。

1）横穴式石室の中で床石が敷かれている石室は、通常棺台を持たないとする考え（森岡秀人「遺葬と棺体配置」『考古学論攷』1982）もあるが、遺物の出土状況や礫の検出状況から棺台と考えた。

羨道

羨道の規模は、長さが3.6m、玄門部幅1.05m、羨門部幅1.3m、最大幅1.35mを測る。平面形は、玄門部側に対し、羨門部側の幅がやや広くなる長方形を呈している。羨道の幅が玄室の幅の約2/3の右片袖式である。羨道の平面形は、玄室の主軸ラインに対して北西―南東方向に約5°ねじれており、このねじれが構築段階からのものなのか、地震などの外部からの圧力によるものなのかは不明である。羨道の側壁や天井石には赤色顔料が塗られていなかった。

羨道の側壁は、比較的残りがよかった。基底石は、玄室内と同様に比較的大きな石材が用いられて

いるが、その上は、大きさが不揃いで、目地も明瞭には通らない。左側壁はほぼ垂直に積まれているが、右側壁は、地震の影響かやや内傾している。

羨門部は、左右に立柱石を配し、羨門天井石は細長い鴨居状の石材を使用して、石室の入り口らしい様相を呈している。左の立柱石に比べ右の立柱石は小ぶりである。羨門の下には閉塞の基底石と思われる比較的大きな石材が横向きに積まれている。

羨道の床面には、玄室の床面石材に比べて一回り小さな石材が全体に敷かれていた。石材の大きさも均一でなく、２重３重とかなり乱雑に積み重なっていることから、閉塞石あるいは２次的な床面とも考えられる。それらの石の下には乳黄白色の粘土が張り付けてある。この粘土層を床面と考えることもできる。

写真　羨道床石検出状況（南より）

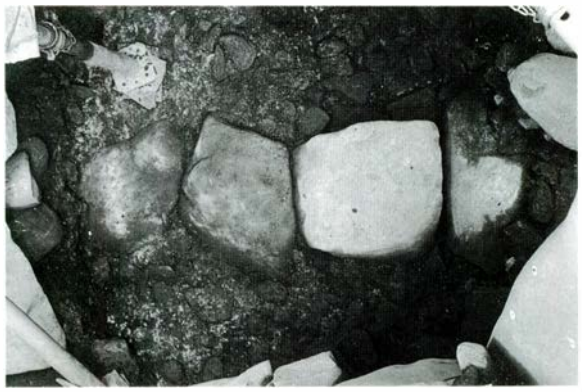


写真　羨道排水溝蓋石検出状況（南より）

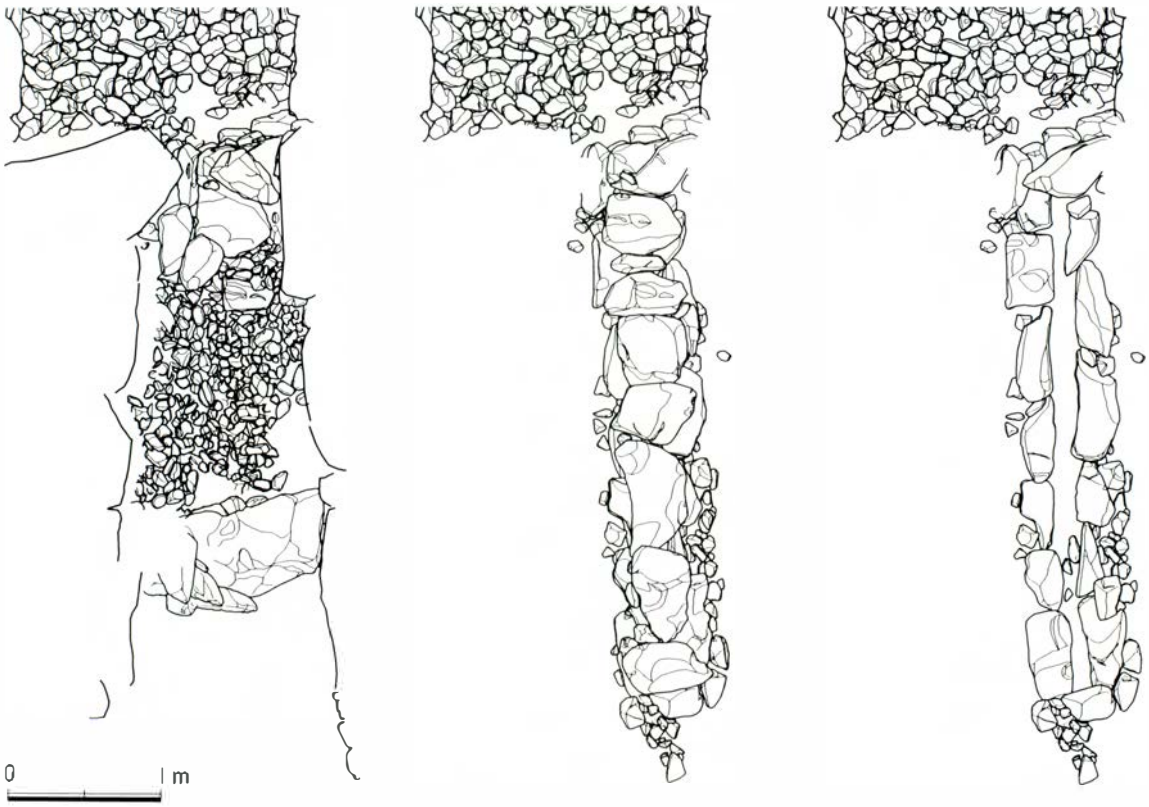
写真　羨門・前庭の様子（東より）

前　庭

前庭は、長さ 1.1m と非常に短い。側壁は比較的小ぶりの石材を用いて積まれている。羨道の石積みに比べ丁寧である。側壁は縦方向に目地を揃え、２列ないし３列の石積みになっている。羨門から１・２列目は羨道の側壁の延長線上に向きを揃えて積まれているのに対し、３列目は外側に大きく開いている。側壁は、上部になるほど幅が広くなっており、掘り方と羨門の隙間を埋めるような逆三角形の形を呈している。前庭の前方には、掘り抜き（上部幅 3.8m、底部幅 1.4m）があり、墓道と思われる。墓道は、緩やかに傾斜しており、さらに調査区外へ続いている。前庭から続く外護列石などの石列は検出されなかったため、前庭の石組みはこれで完結していると思われる。

排水施設

羨道部の粘土層を除去したところ、下から排水溝が検出された。排水溝は、玄門の直下、框石下から始まり、羨門閉塞基底石の下を通り抜けて、羨門直下まで続く。直径40～50cmほどの扁平な四角形の蓋石が9個並ぶ。排水溝の内部は、幅約20cm、深さ約15cmで、溝の両側に細長い石を並べる。底部は地山（乳白色粘質土）になっている。前庭から外へは排水溝の石列はみられず、溝状の掘り抜きも検出されなかったが、開口部は外へ向かってゆるやかに傾斜しており、排水を兼ねた施設であったと考えられる。排水溝の始まりと終わりには溝を隠すように溝幅に合わせた長方形の石が充填されている。排水溝埋土は、非常に微小な砂粒が大半を占める灰暗褐色土が入る。遺物は出土していない。



第14図　羨道床石・排水溝実測図

写真　排水溝（開口部より）

写真　排水溝（玄室より）

第３節　遺物の出土状況

(1)　石室内の遺物出土状況

本古墳の石室内からは多量の須恵器や金属製品が出土した。本古墳は地震などによる石室内部の崩壊が幸いしたのか盗掘をまぬがれており、遺物の残存状況は極めて良い。そのため、最終的な埋葬形態をそのまま残していると思われる。出土遺物は、須恵器（玄室内249点、羨道内９点）金属製品（玄室内105点、羨道内１点）である。

第１表　地区別須恵器出土点数表

器種		Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	羨道	開口部	計
大型器台		1	0	0	0	0	0	1
脚付長頸壺		0	1	0	0	0	0	1
長頸壺		0	1	0	1	●	●	2
脚付短頸壺		●	4	0	0	0	0	4
短頸壺		2	0	0	2	0	0	4
有蓋高坏		0	0	0	0	3	●	3
無蓋高坏		3	12	0	0	1	1	17
提瓶		4	1	1	1	0	0	7
甕		1	6	1	0	0	0	8
平瓶		1	1	0	0	1	0	3
坏身		0	0	0	0	0	3	3
坏蓋		0	1	0	1	0	1	3
蓋	鈕付蓋	1	1	0	●	1	0	3
	子持蓋	0	●	0	1	0	0	7
	鳥形鈕蓋	0	1	1	1	0	0	3
坩		1	0	0	0	0	0	1
計		14	35	3	7	6	5	70

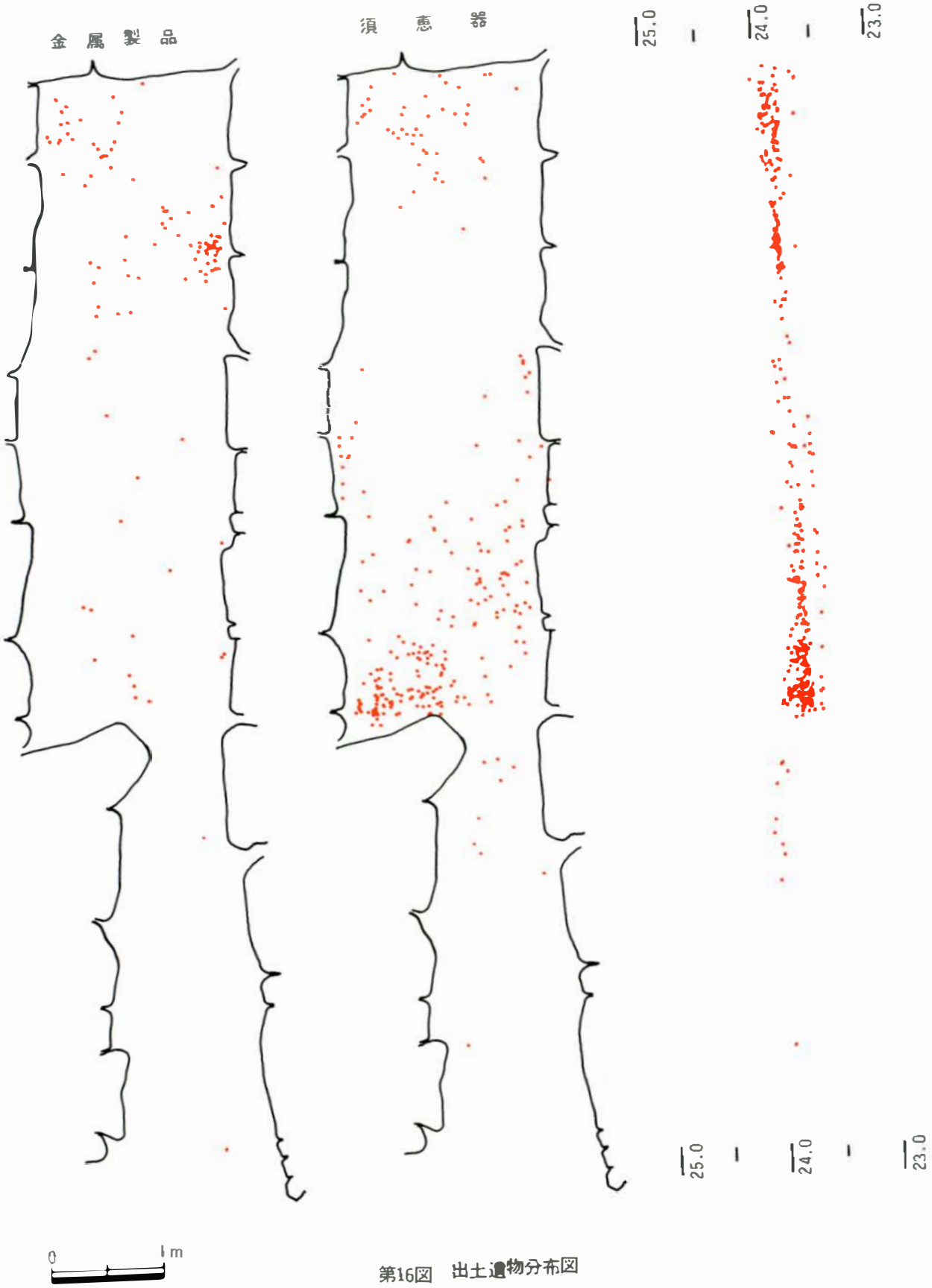
１．玄室内の遺物出土状況

須恵器

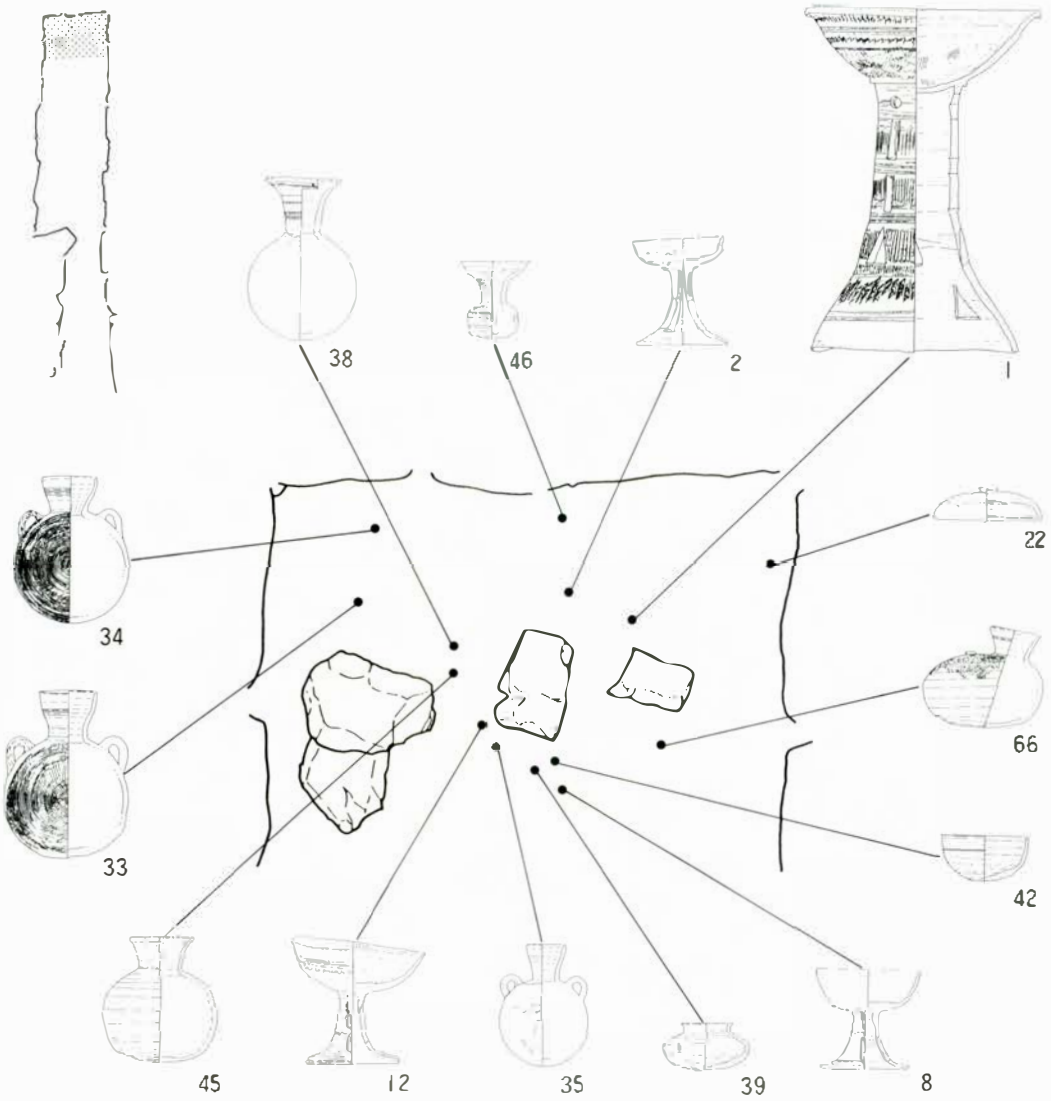
須恵器は玄室内から249点出土した。個体数は59個体である[1]（第１表）須恵器の多くは残存状況が良く、中には完形の状態で出土した土器も数多くある。玄室内全体から出土しているが、その多くは玄室内の奥壁・側壁・前壁に沿うようにして出土している。出土位置から大きく４つの群に分かれる。Ⅰ群は、奥壁手前から出土した須恵器群である。Ⅱ群は、玄門右立柱石前から出土した須恵器群である。Ⅲ群は、右側壁から出土した須恵器群である。Ⅳ群は左側壁から出土した須恵器群である。

各群の須恵器出土状況は以下のようである。

第15図　石室内遺物出土状況図



第16図　出土遺物分布図



第17図　玄室内須恵器１群出土位置図（Ｓ＝1/20・イブツ＝1/10）

①Ｉ群（奥壁手前から出土した須恵器群）

出土した須恵器は14個体である。14個体の出土状況は同じＩ群でも３つに分かれる。Ｉ群Ａは、奥壁左隅から中央部にかけて出土した一群で、中央部に大型器台（第23図１）が奥壁と平行するように左側へ倒れて出土し、大型器台の下からは小型の甕（第30図46）が出土した。奥壁左隅からは鈕付蓋（第25図22）が出土している。Ｉ群Ｂは、奥壁中央から右隅にかけて出土した一群で、把手付の提瓶（第27図33・34）が馬具類（第35図119～121）と一緒に出土している。Ｉ群Ｂの土器と馬具類は、奥壁右隅に「カタヅケ」されたように固まって出土した。Ｉ群Ｃは、奥壁中央から玄室側へおよそ40cm～１m離れた範囲から出土した一群で、棺台に使用されたと思われる礫の周囲から出土している。出土した須恵器は、把手のない扁平な形の提瓶（第29図38）と把手付提瓶（第28図35）、坩（第29図42）、短頸壺（第29図39・45）、無蓋高坏（第23図２、第24図８・12）、平瓶（第31図66）である。

②Ⅱ群（玄門右立柱石前から出土した須恵器群）

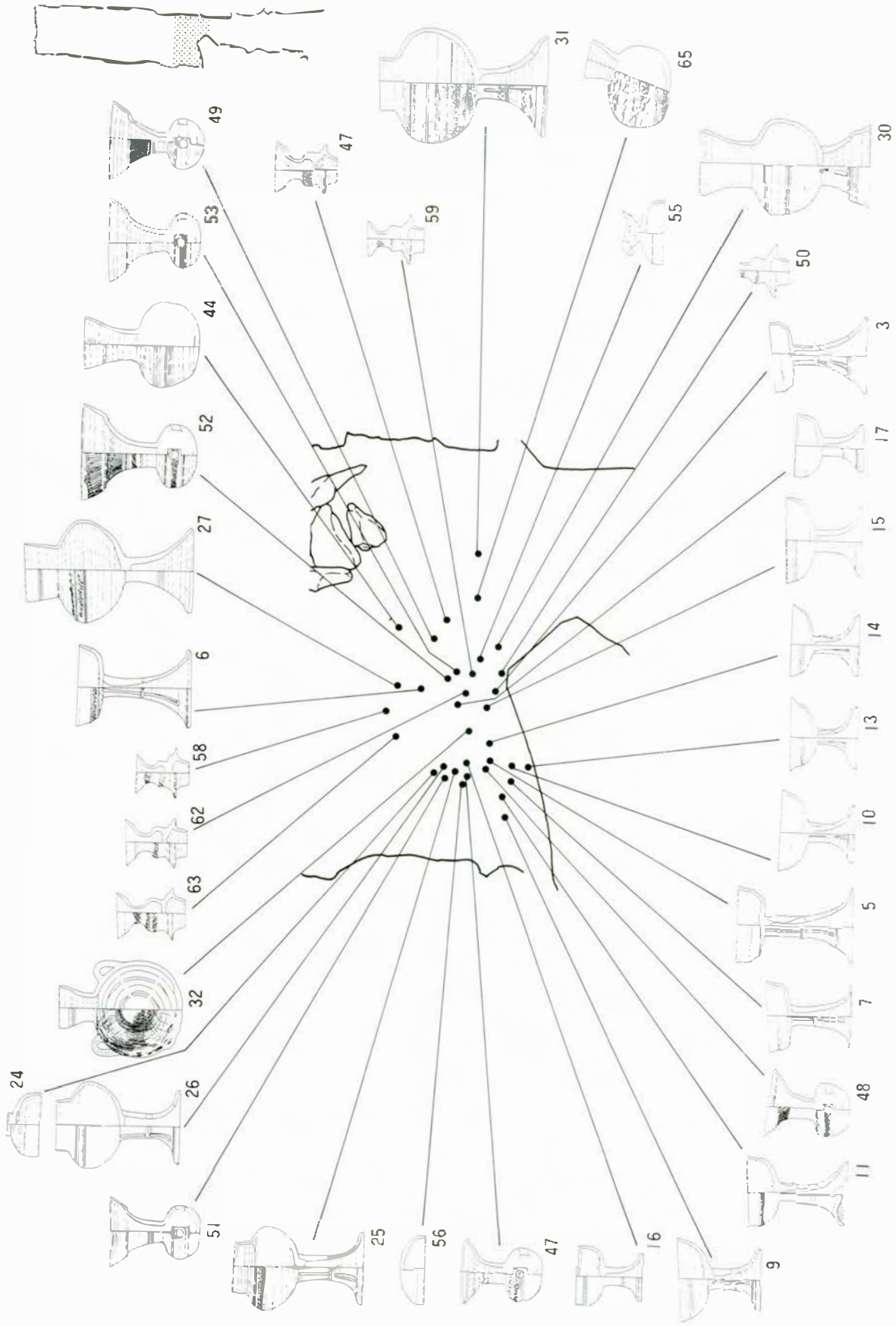
出土した須恵器は、35個体と玄室内出土須恵器の半数以上を占めている。Ⅱ群は出土状況から2つに分けられる。Ⅱ群Aは、玄門右立柱石に持たせかけるように固まって出土した一群で、まさに「カタヅケ」の状況が看取される。Ⅱ群Bは、玄門中央付近や玄門立柱石からやや離れた地点から出土した一群である。

Ⅱ群Aの須恵器は、26個体である。脚付長頸壺（第26図30）、脚付短頸壺（第25図25・26）と鈕付蓋（第25図24、25とセット）、甕（第30図47・48・51～53）、把手付提瓶（第27図32）、無蓋高坏（第23図3・5、第24図7・9～11・13～17）、鳥形鈕付蓋（第31図55）、子持蓋（第31図59・60・62）、坏蓋（第31図56）である。26個体中、高坏が11個体と多い。26は、24の蓋がかぶさった状態で出土した。

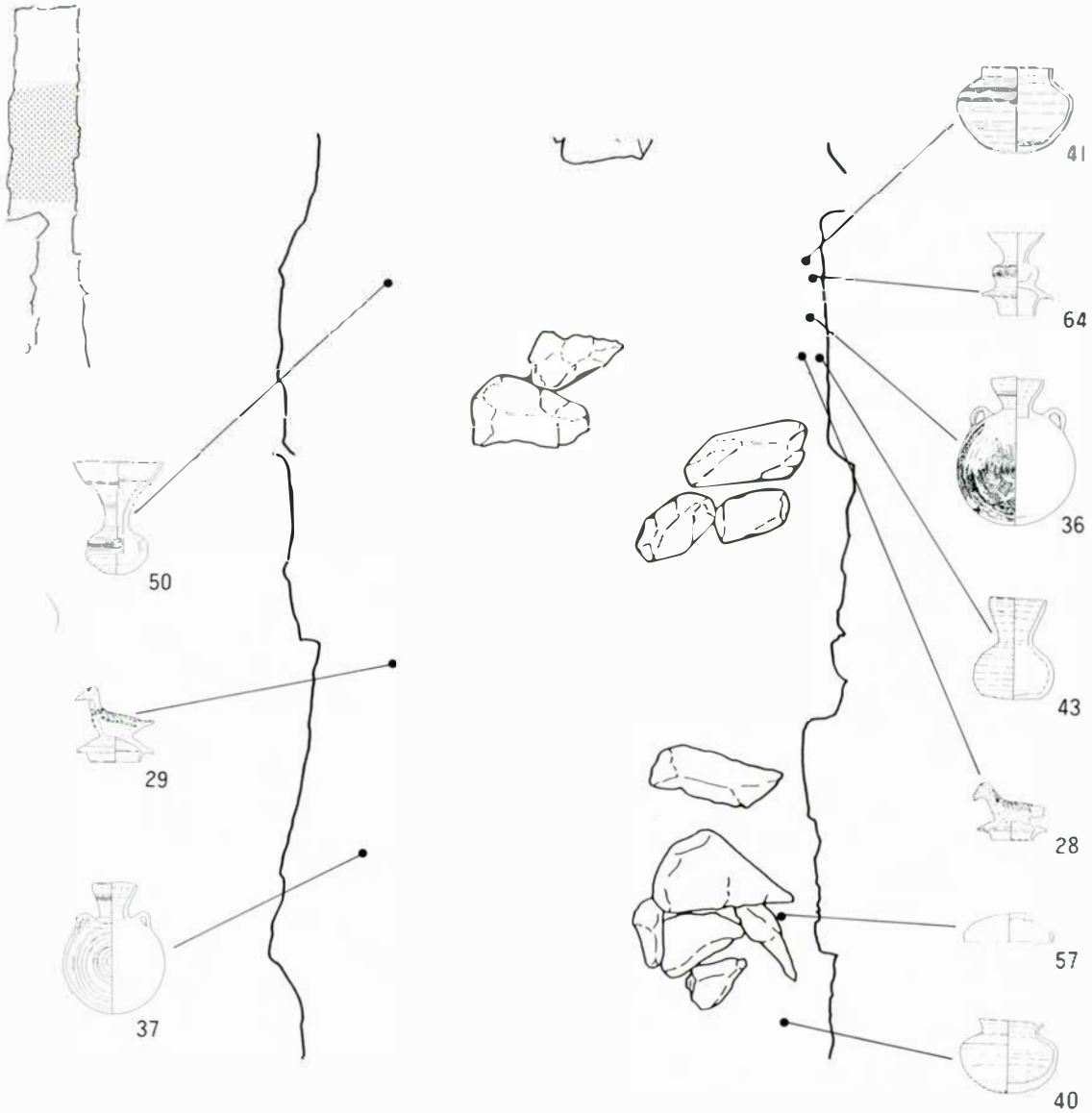
Ⅱ群Bの須恵器は、9個体で、脚付短頸壺（第26図27・31）と長頸壺（第29図44）、平瓶（第31図65）、無蓋高坏（第23図6）、甕（第30図49）子持蓋（第31図58・61・63）である。その他、小片として鳥形装飾片（第32図92・93）が出土している。

Ⅱ群の様相は、Ⅱ群Aの須恵器はBに比べて小品が多いのが目立つ。特に高坏は26個体中11個体を占める。位置的にも立柱石に沿うように小品が並ぶ。大型製品は比較的前方に位置している。また、子持蓋という特殊な蓋がⅡ群だけで6点出土しているが、どのような壺等と組み合わされていたのかは不明であり、蓋の数に比べて対応できそうな壺類が少ない。Ⅱ群の須恵器の中で16は、玄門の手前中央に位置し、原位置を留めているように思われる。羨道部より出土した須恵器との関係も考えられる。詳しくは第4節の考察で述べたい。

写真　右立柱石下遺物出土状況



第18図　玄室内須恵器II群出土位置図（S＝1/20・イブツ＝1/10）



第19図　玄室内須恵器Ⅲ・Ⅳ群出土位置図（S＝1/20・イブツ＝1/10）

③Ⅲ群（右側壁から出土した須恵器群）

Ⅲ群の須恵器は、瓶（第30図50）と鳥形鈕付蓋（第26図29）、把手付提瓶（第28図37）の３個体である。いずれも、側壁基底石に沿うように出土した。

④Ⅳ群（左側壁から出土した須恵器群）

Ⅳ群の須恵器は、短頸壺（第29図40・41）と鳥形鈕付蓋（第26図28）子持蓋（第31図64）、把手付提瓶（第28図36）、長頸壺（第29図43）、坏蓋（第31図57）の７個体である。いずれも、左側壁基底石に沿うように出土した。

1）個体数の計算は、高坏や壺と組み合わさる蓋類もそれぞれ１個体としてカウントした。

写真　遺物出土状況（奥壁右隅）

写真　遺物出土状況（奥壁左隅）

写真　遺物出土状況（右側壁）

金属製品

玄室内からは金属製品が105点出土した。金属製品は須恵器の出土状況と若干様相が異なる。出土状況は、大きく２つに分けられる。１つは、須恵器と同様にカタヅケに伴って動かされたと思われるもの（Ⅰ群とする）で、玄室の隅（奥壁右隅や玄門右隅）から出土している。２つ目は、玄室の中央部から出土したもので、副葬された元位置を比較的留めていると思われるもの（Ⅱ群とする）である。Ⅰ群の金属製品は、馬具類、刀類である。Ⅱ群の金属製品は、太刀・刀子・耳環・鉄鏃・鉄釘である。

①Ⅰ群の金属製品

奥壁の左隅からは、鞍金具の前輪（第35図120）と後輪（第35図119）、轡（第35図121）などの馬具が須恵器（提瓶２個）といっしょにカタヅケされた状態で出土した。前輪や後輪の背部には木質（木装鞍の木部）がわずかに残存していたが、取り上げた段階で大半が剥がれ落ちてしまった。前輪と後輪は、いずれも磯金具と州浜が３つに分かれた状態で出土した。それらを繋ぎ留めていた縁金具が剥離したためと思われる。

玄門中央から0.4m奥壁よりの地点から鍔が１点出土した。（第39図176）、176は二つに割れた状態で出土した。玄門をはさんで羨道部から鏢（第39図179）が出土おり、大きさから同じ太刀の部品と思われる。

玄門右立柱石の手前からは、馬具の鑣轡の兵庫鎖やU字形金具・鉸具（第35図122～134）が出土している。いずれも腐食が進み床石に張り付いた状態であった。これらの馬具の製品は奥壁隅から出土

した鞍金具や轡とセットになるものと思われる。

②Ⅱ群の金属製品

太刀（第39図174）は、奥壁から1.6m、右側壁から0.4mの地点で、切先を羨道側に向け、主軸と平行な状態で出土した。出土したときは腐食のため床石に強固に付着した状態であった。そのため、取り上げは少しずつ床石から剥がすようにして行った。太刀には鍔（第39図175）と鏡（第35図178）がついていたが、鞘や柄頭などはみられなかった。太刀の全長は87.0cm、重量は667gを測る。太刀の左側から鞘の足金物と思われる鉄製品（第35図186）と小刀と思われる鉄製品（第35図183）が出土した。その他、刀子と思われる鉄製品（第35図184・185）が玄室中央付近から2点出土した。奥壁から1.4m、左側壁から0.5mの地点からは太刀の部品である鏡（第35図180）が出土した。鏡の大きさから小型の鍔（第35図177）に対応すると思われる。177は水洗選別で確認された部品であるため、出土位置は不明である。

奥壁より0.9m、右側壁から0.2～0.4m付近の礫（棺台用か）上から、耳環2点（第37図117・118）が出土した。中空鍍金タイプの耳環である。117はほぼ完形で出土し、118は二つに折れて出土した。また、奥壁から3.3m、左側壁から0.15～0.4m付近の礫（棺台用か）上からも耳環2点（第37図114・115）が出土した。銅芯金張タイプの耳環である。114・115ともほぼ完形の状態で出土した。耳環はもう1点（第37図116）出土している。116は、細かく砕けた状態で玄門中央から奥壁方向1.3m、左側壁から0.5mの地点から出土した。出土状況から、元位置を留めていない可能性がある。

114・115の0.75m玄門寄りの地点から刀子（第39図181）が出土している。181は、柄部に木質が残存し、鏡もついていた。

奥壁から羨道方向へ1.5m、左側壁から0.2mの付近から鉄鏃（第37図135～150、第38図151～173）が固まって出土した。復元の結果、39本の個体識別ができた。鉄鏃は、茎部を奥壁側へ身部を羨道側へ向けた方向で扇状に広がるように出土した。茎部の多くが束ねたような状態で出土したことから、鉄鏃は埋葬当初、靫などの筒状あるいは箱状の容器に入れられて、それが羨道方向へ倒れたために広がった状態になったと推定される。

奥壁中央から右側壁方向へ鉄釘が3点（第39図187・189・190）出土した。3点の鉄釘にはいずれも木質が残存していた。木棺の有無は確認できなかったが、鉄鏃に残る木質と木目の方向が違うことから、木棺用の釘と考えた。

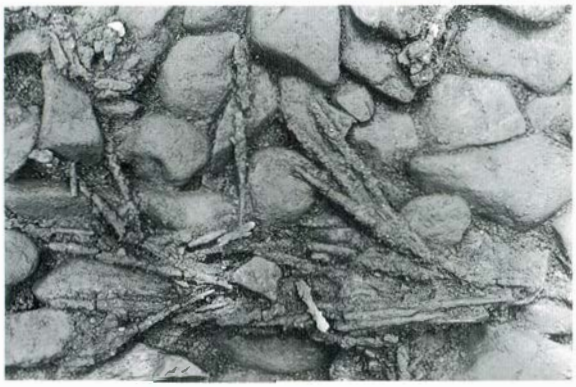
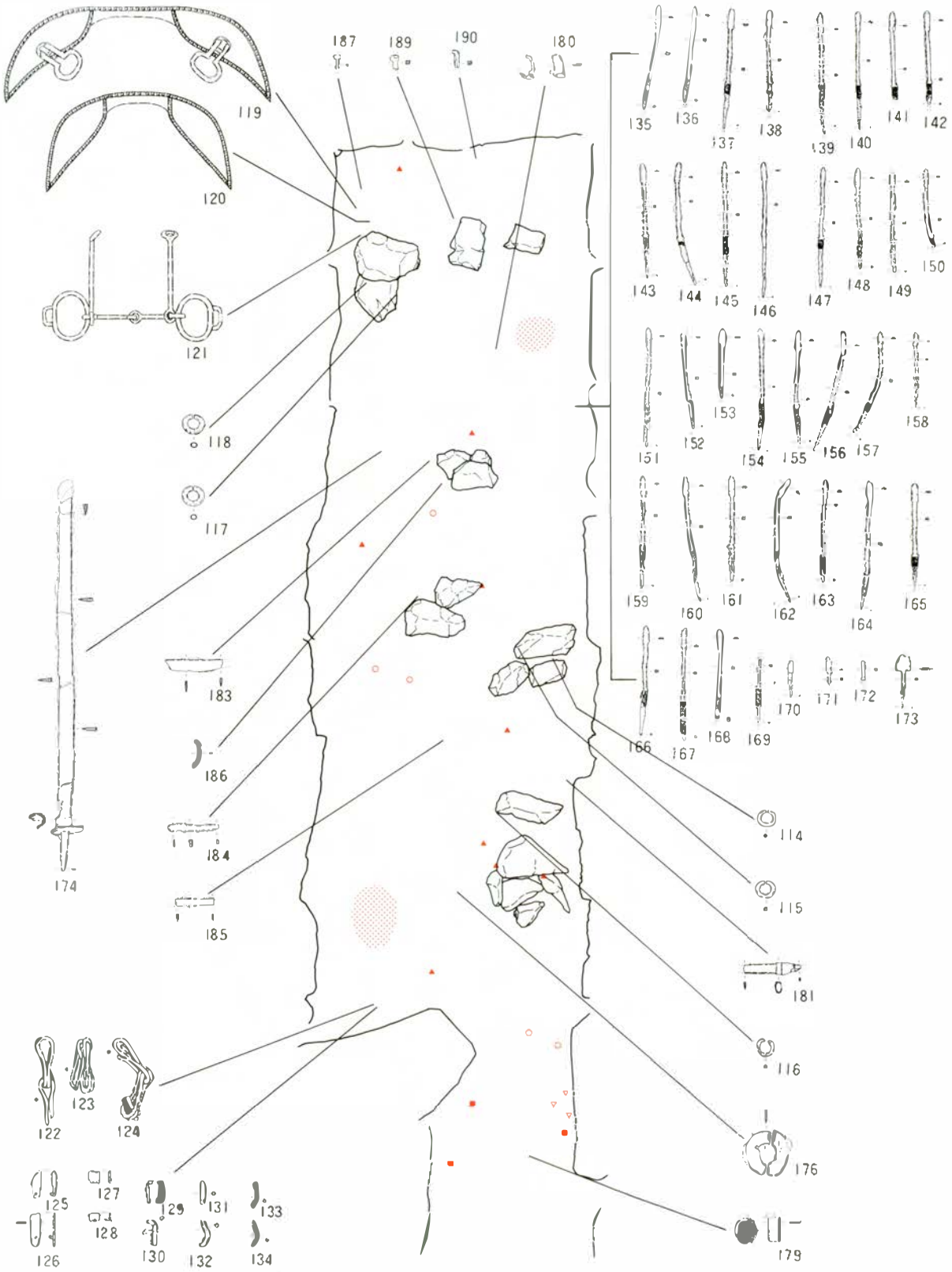


写真　遺物（鉄鏃）出土状況

写真　遺物（太刀）出土状況



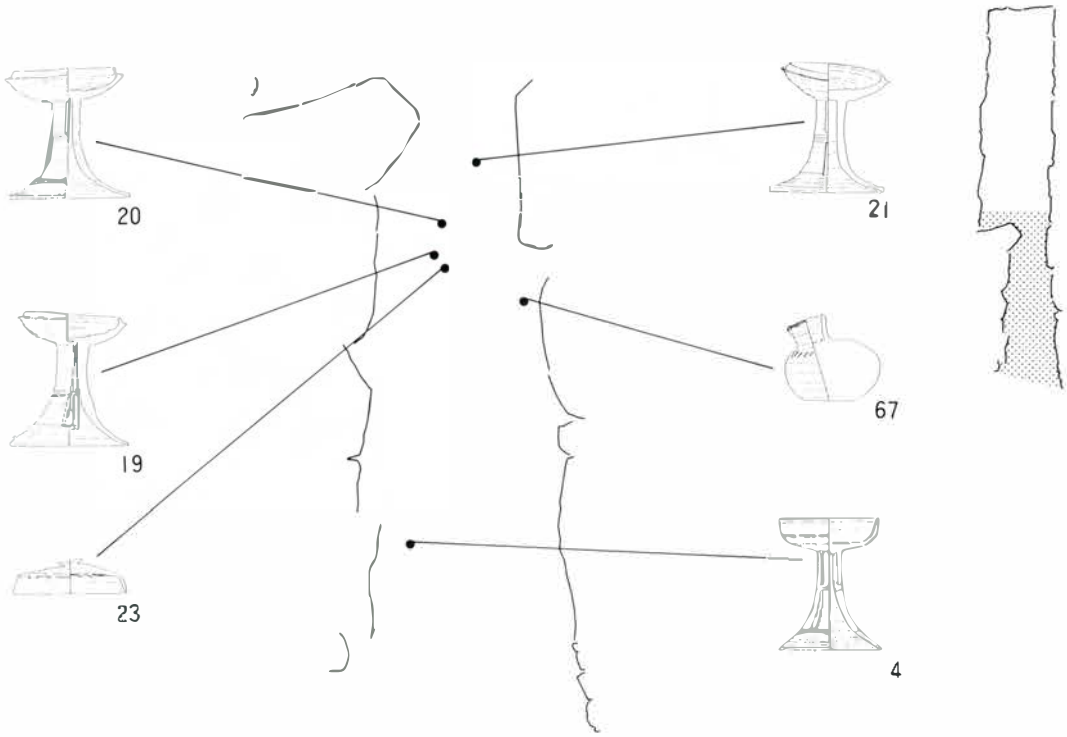
第20図　金属製品出土位置図

2．羨道内の遺物出土状況

羨道内からは7点の遺物が出土した。須恵器が6点、金属製品が1点である。須恵器は大半が完形の状態で出土した。

玄門直下、框石の上から有蓋高坏（第25図21）が出土した。21から羨門方向に有蓋高坏（第25図19・20）と蓋（第25図23）と平瓶（第31図67）、鏃（第39図179）が出土した。33・19・20は、器形の特徴も非常によく似た高坏である。23は、高坏の蓋である。これらの須恵器は、玄門の入り口に供えられたように出土した。179は、玄室内から出土した鍔（176）と同じ太刀の部品であると思われる。67は、羨道左側壁に沿うよう置かれていた。口縁部を人為的に打ち欠いた痕があり、祭祀に関わる行為とも考えられる。

羨門下の閉塞基底石付近からは無蓋高坏（第23図4）が出土した。4は、割れた状態で出土しており、破片の一部が開口部の埋土や墳丘から出土している。



第21図　羨道内須恵器出土位置図

（S＝1/50　イブツ＝1/10）

写真　遺物出土状況（羨道）

(2) 外部施設からの遺物出土状況

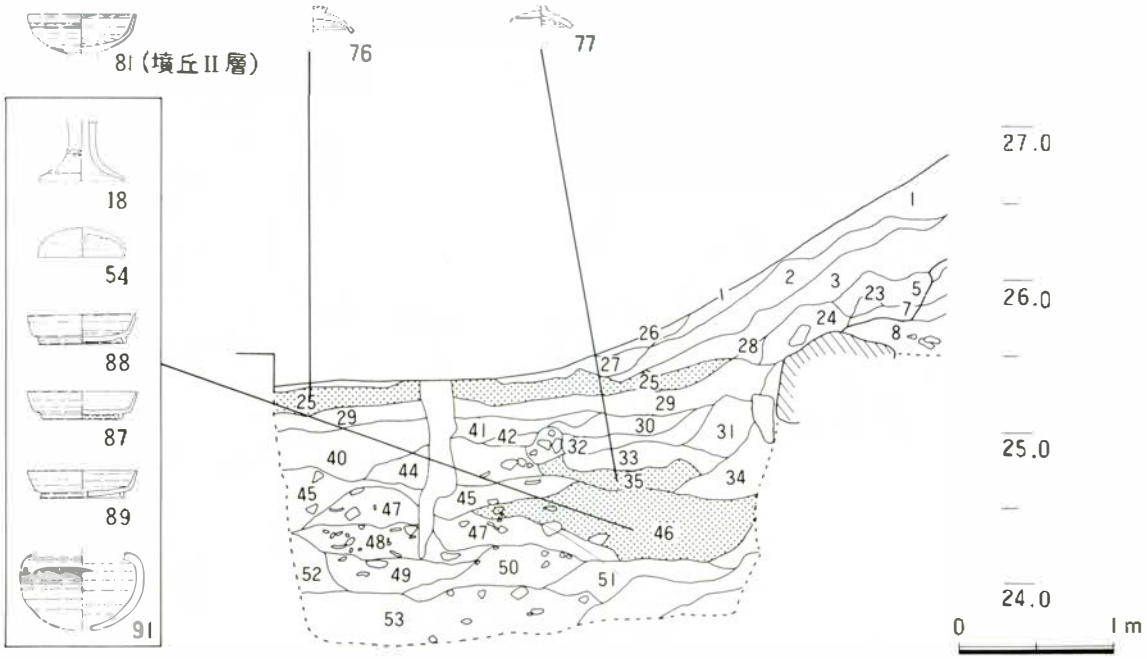
1．前庭部・開口部の遺物出土状況

前庭部及び開口部からは須恵器が60点出土した。その内7点を実測した。（器形の特徴などは観察表に譲る）25層・46層からの出土点数が多い。追葬など石室の再利用との関係も考えられる。内訳は、無高坏（第24図18）、高台付坏身（第32図87・88・89）、脚付壺片（第32図91）、鈕付蓋（第32図76・77）、である。18は、羨門直下の閉塞基底石手前の46層から出土した。18と接合すると思われる坏部（第32図81）は墳丘Ⅱ層から出土している。87・88・89は、高台付きの坏身であり、46層から出土した。器形の特徴から古墳築造期より新しい時期と思われる。91は脚付壺の胴部片で、肩部に強い張りがみられ、櫛状工具による刺突文が巡る。46層より出土した。器形の特徴から石室内から出土した脚付壺類（25～27・31）と同時期もしくはやや新しい時期と思われる。76・77は、鈕付蓋である。76は、25層より出土し、墳丘Ⅱ層から出土した須恵器片と接合する。77は、鈕部が玄室内出土の鳥形鈕付蓋（55）の鈕部と非常に類似することから、同様の蓋と思われる。35層から出土した。

2．墳丘及び周溝の遺物出土状況

墳丘及び周溝内からは185点の須恵器が出土した。墳丘から出土した遺物の多くは、Ⅱ層や墳丘の崩落に伴う土中や周溝と思われるＳＤⅡやその付近から出土している。特徴的な土器としては、装飾付壺片（第33図99～111）がある。破片のため全体の器形を復元することができなかったが、墳丘端部から出土した小壺（第33図95）やＳＤ11埋土から出土した装飾動物片（第33図94）がその壺胴部の凸帯上にのっていたと思われる。器形は脚付壺（装飾付壺）[1] もしくは器台思われる。透かし孔は半円状と長方形がある。

1）山田邦和（「須恵器生産の研究」1998）の編年によれば、装飾付壺Ⅱ－1類に相当する。



第22図　前庭・開口部須恵器出土位置図（S＝1/50，イブツ1/10）

(2)　出土遺物

１．須恵器（第23～34図１～113）

石室と開口部から出土した須恵器は70個体であった。詳しくは観察表にゆずるが、本墳からは大型器台や装飾須恵器（鳥形鈕付蓋）など特色のある須恵器が出土している。ここでは主な器種毎の概要について述べる。

大型器台（第23図１）

１は、大型器台である。奥壁前の中央から出土した。器高は45.8cmを測る。本墳から出土した須恵器の中で最も大型である。色調は黒色を呈し、やや粗い砂粒を含むものの焼成は非常に良好である。脚部には上から○→□→△の透かしを有し、櫛状工具による波状文や直線文が施される。１に類似した器台は滋賀県野洲町宮山１号墳出土の器台である。透かしの位置や形、施文や調整など非常に類似する。宮山１号墳からは器台が３点とセット関係にある広口壺が３点出土しているが、本墳からは１に対応する広口壺は確認できなかった。

無蓋高坏（第23図2～６、第24図７～18）

無蓋高坏は17点出土した。器形の特徴から３つに分けられる。１つは、４～６・８である。５・６は、器高20cmとほぼ同じ長脚２段三方透かしの無蓋高坏である。両者とも胎土・焼成は非常に良好である。６には坏部にヘラ状工具による刺突文が巡る。４は、器高が17.5cmと前者に比べやや小さいが長脚２段三方透かしの無蓋高坏である。坏部の段が前者に比べやや小さい。８は、色調が黒～灰を呈し、胎土・焼成は良好である。脚部の開きが他の高坏に比べ大きく、様相を異にする。２つ目は、２・３・７・９～14である。２・３・７は、前者に似た長脚２段三方透かしの無蓋高坏であるが、器高が全体に低い。また、坏部の段が小さくなったり、簡略化されるものがある。７の脚部には横位のカキ目が全体に施される。９～14は、脚がやや短い２段三方透かしの無蓋高坏である。坏部は碗状を呈す。下位の透かしは、三角形を呈す。13・14は、上位の透かしが直線上の切り込みだけに省略された１段透かしの様相を呈す。３つ目は、15～18である。透かしが無く、坏部は碗状を呈す。脚部中位には２条の沈線が巡るだけである。

有蓋高坏（第25図19～21）

有蓋高坏は、３点出土した。鈕付蓋は２点（第25図22・23）出土しているが、セット関係が明らかなのは高坏19と蓋23である。19～21は、長脚２段二方透かしの高坏で器高は17.1～17.4cmとほぼ同じである。胎土・色調なども非常に類似する。19の脚部裾部は、20・21に比べやや屈曲して下がる。脚部の成形は絞り上げの痕跡が明瞭である。20の透かしは上段と下段の位置が90°ずれる配置になっている。

脚付壺（第25図25・26、第26図27・30・32）

脚付壺は５点出土した。器形の特徴から２つに分けられる。１つは、30である。幅の広い脚部を有する長頸壺である。脚部には明瞭な段を持ち、胴部に沈線が巡る。頸部は直立して伸び、口縁がやや

内弯する。色調は灰～黒を呈し、胎土・焼成は良好である。2つは、25～27・31である。いずれも脚付短頸壺である。25・26はやや小型の長脚2段三方透かしの短頸壺で体部上位に刺突文と沈線が巡る。24（鈕付蓋）と26はセットである。27は、透かしのない長脚短頸壺で、頸部が長い。体部上位には刺突文と沈線が巡る。31は、大型の長脚2段三方透かしの短頸壺である。体部及び脚部全体にカキ目や沈線を施す。他の事例から鳥形鈕蓋（第26図29）とセット関係にあると考えられる。

鳥形鈕付蓋（第26図28・29、第31図55）

鳥形鈕付蓋は、3点出土した。器形の特徴から2つに分けられる。1つは、28・29で返りのある蓋である。いずれも羽を閉じた鳥が表現されているが、嘴の形や背の施文表現の違いから鳥の種類が違う。28は、嘴が尖る。水鳥の一種と思われる。29の嘴は平たく鴨類の一種と思われる。器高は、29の方がやや大きく、脚付短頸壺（31）とのセット関係が考えられる。色調・胎土は両者との似ている。2つ目は、55の蓋である。55は、返りのない蓋で、羽を閉じて頭を下にもたげる様子が表現されている。鳥全体の表現は28・29に比べてやや粗雑である。胎土・色調も明らかに違う。55の鳥に類似する装飾片が石室内から2点（第32図92・93）出土している。92は、壺類の側面に貼り付けてあった接合面が残り、鶏冠のついた鳥を表現している。93は、羽を閉じた鳥を表現している。胎土・色調は55と似ている。また、蓋口縁部片（第32図78）は、55の蓋と胎土・色調が類似している。蓋頂部が欠損しているが、装飾鈕を有する蓋の可能性も指摘できる。鳥形鈕蓋の出土事例は東海地方に多い。[1]

1）鳥形鈕蓋の出土事例は東海地方を中心に19例ある。本墳の蓋と形状が似ている例としては、愛知県岩津1号墳、愛知県炭焼平14号墳出土の須恵器がみられる。

子持蓋（第31図58～64）

子持蓋は7点出土した。いずれも器形が類似する。返りのある蓋で鈕部が小型甕の形を呈す。鈕部の体部及び頸部には刺突文を巡らす。鈕部の器形は、甕の47・48に類似する。子持蓋は山田編年[1] II－1類のIII期にあたる。類例は少なく、近くでは愛知県岩津1号墳出土のものがある。県内での出土事例は陽徳寺裏山1号墳出土のものが知られるだけである。[2]

1）前述

2）陽徳寺裏山1号墳出土の子持蓋は、子持器台に付属するもので、返りのない山田編年1－2類のII前期にあたる。

甕（第36図46～53）

甕は、8点出土した。器形の特徴から3つに分けられる。1つは、52である。器高16.3cmを測る大型の甕で、色調は黒、断面がセピア色の胎土・焼成が非常に良好である。胴部及び頸部から口縁部に櫛状工具による刺突文や直線文を施す。頸部には明瞭な段を有す。2つ目は、49～51・53の甕である。器高は、12.1～14.2cmと、中型である。頸部から口縁の立上がりは52に似ているが、胴部や頸部の施文が簡略化されている。3つ目は、46～48の甕である。底部が扁平で頸部は直立する。頸部と口縁部の境の段は簡略されている。46は、器高8.8cmと小型である。胴部及び頸部に刺突文を施すもの

のやや粗雑である。胎土は灰白～灰で、他の壺と様相を異にする。

提　瓶（第27図32～34、第28図35～37、第29図38）

提瓶は7点出土した。器形の特徴から4つに分けられる。1つは、32・33である。体部背面が扁平で腹部は円弧状に張り出す。腹部全体にカキ目調整が施される。口縁部はやや外反気味に立上がり尖る。器高22cm前後と大型である。2つ目は、34・36である。器高は、前者に比べ小振りである。体部背面がやや丸みを帯び、腹部はヘラ削り調整される。36は、頸部がすぼむ。3つ目は35・37である。前者に比べいっそう小振りになる。腹部の施文はみられず、ヘラ削り調整される。背部と腹部の形状がほぼ同じ扁平な形である。4つ目は、38である。背部・腹部の形状がほぼ同じ扁平な形で、頸部は太く櫛状工具による施文がある。背部と腹部の境には2条の沈線が巡る。口縁部には片口状の押さえが1ヶ所あり、φ1mm程の孔が2つ空けられている。胎土は他の提瓶に比べて赤い赤褐色を呈す。器形の特徴から他に類例がない。比較的似ている資料としては愛知県高蔵寺5号墳出土の提瓶がある。

平　瓶（第31図65～67）

平瓶は3点出土した。器形の特徴から2つに分けられる。1つは、65である。底部はやや平坦で体部は厚みのある半円状を呈す。体部～底部にカキ目を施す。2つ目は、66・67である。66は、底部が平坦で体部はやや扁平である。体部上位にカキ目を施し、2cmほどの粘土粒を貼り付ける。67は、形状が65に似るものの小型である。刺突文が肩部に巡る。

2．鉄製品

馬　具

本墳出土の馬具は、轡（くつわ）（第35図121）、鞍金具（第35図119・120）、鐙靴（みずお）（第34図122～134）などが出土した。

121は鉄製の環状鏡板付轡である。矩形立聞を持つ素環の鏡板付轡である。鏡板の形状は楕円形で長径左8.2（右8.0）cm、短径6.3（6.3）cm。立聞部の右片方は一部欠損するが、幅3.4（3.9）cmで形が隅丸状の長方形である。銜は2連式で長さ17.1cmである。引手は、長さ15.9（15.3）cmで、先端部の環をくの字に屈曲させている。鏡板・銜・引手の連結は、銜先環に鏡板および引手が直接連結している。轡の形態から、6世紀後半と思われる。[1]

鐙靴は、鉄製で、復元の結果、3連の兵庫鎖の一端に鉸具、もう一端にU字形金具が連結される。銹着が激しいが、長さ8.4～9.0cmの鎖を3連連結して兵庫鎖をなしている。鉸具は、長さ8.2cm、幅4.2cmで、刺金8.5cm、太さ0.7cm。U字形金具は欠損しており、残存長は3.5cmである。U字形金具には、木製の壺鐙がつり下げられていたと考えられる。また、鉸具は鞍橋に取り付けられた力革と連結し、吊り下げられたと考えられる。

鞍金具（119・120）は、鉄地金銅装磯金具で前輪（120）と後輪（119）の1セットが出土した。119には鞍が付く。鞍は、鉄製で、鉸具を持たない円環状の鞍である。円環部は長さ左7.0（右7.1）cm、最大幅5.4（5.7）cm。座金具は長径2.7（2.8）cm、短径2.5（2.6）cm。鋲脚部は長さ5.3cmで、鉤の手状に屈曲して円環部と連結する。120の前輪は、左右の磯金具と州浜で構成される。磯金具の周囲

と州浜上部には縁金具が巡る。磯金具や州浜にはそれぞれ3ヶ所突起があり、そこへ縁金具の鋲を打ちこみ、木製の鞍橋を留めたと思われる。119も同様であるが州浜の突起は2ヶ所である。鞍金具の形態から、TK43～TK209の時期と思われる。[2]

1）澤村雄一郎「愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究」南山大学大学院考古学研究報告第5冊　1996
2）宮代栄一「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『'96特別展　黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘　1996

太刀・刀子（第39図174～185）

太刀（第39図174）は全長87.0cm、最大幅3.4cm、重量667gである。刀身には鍔（第39図175）・鋒（第39図178）が付く。174は、片刃で、片関タイプ。茎胴部は中細で、茎尻はやや丸みを帯びる。X線観察の結果、茎胴部に目釘孔らしい孔の痕跡が1ヶ所みられる。175には透かしがみられなかった。175は長径6.83cm、短径5.99cm、厚さ0.4cmを測る。178は、長径3.8cm、短径3.2cm、幅1.9cmを測る。

その他、鍔は2点（第39図176・177）出土した。176は、175に比べ一回り大きく、鋒（第39図179）に対応すると思われる。透かしはみられない。177は一番小振りで、鋒（第39図180）に対応すると思われる。186（第39図）は、楕円形の鉄製品で欠損している。形状から太刀の足金物と思われる。

刀子は、4点出土（第39図181・183～185）した。181は、残存長9.4cmで柄部に鋒と木質が残存する。

鉄　鏃（第37図135～150、第38図151～173）

鉄鏃は、39本の個体を確認した。出土した鉄鏃は、細根鏃（135～172）と広根鏃（173）である。

135～172は、身部形が三角形式あるいは柳葉式で身部関は全て撫関である。茎部関は全て棘状関で茎部には矢柄木質が残るものが見られる。茎部の木質は、その上に樹皮状の細い皮が巻き付けてあり、漆が塗られていた。（図版42鉄鏃茎部拡大写真）173は身部が三角形で身部関は角関、茎部関は無関である。茎部に矢柄木質が残存する。

鉄　釘（第39図187～192）

鉄釘は、6点出土した。187・188・190・192には木質が残存していた。いずれも断面が四角形で形状から木棺に使用された釘と思われる。190は、L字状に屈曲する。

3．装身具

装身具としては、耳環が5点（第37図114～118）出土した。サイズや様相は、大きく3つに分かれる。117・118は、大振りであるが、中空のため重量は比較的軽い。114・115は、中間の大きさで重量は一番重い。116は、サイズも一番小さく、一部欠損しているものの重量も軽い。114は、銅芯金板張で鮮やかな黄金色を留めている。金板は耳環の端部で丁寧に折り込まれている。115は、銅芯であるが腐食が進み金ないし銀板張の耳環と思われる。116は、銅芯銀板張と思われる。117・118は、中空の耳環である。断面を観察すると細く白っぽい線が内径側にみられた。銅板を筒状に巻き、「銀鑞」

技法によって接合されていると思われる。表面は鍍金されたいわゆる「金銅装」である。

耳環の型式編年ははっきりしていないが、出土状態から「細身型→金張太身型→金メッキ中空太身型」という形態的変遷がみられることが指摘されている。[1] この変遷を本古墳に当てはめるならば、116→114・115→117・118となる。この組み合わせと変遷過程から本古墳における埋葬及び追葬過程を探ることができるが、詳しくは第4節で述べる。

1）森岡秀人「追葬と棺体配置」『考古学論攷』1982

写真　天井石取り外し作業

第4節　考　　察

1．埋葬形態について

南高野古墳は、後世の地震[1]などにより石室石材が崩落したために幸いにも盗掘を免れた古墳であり、そのため、埋葬の最終形態を今日に伝える貴重な事例となった。横穴式石室はその構造上から、追葬を前提とした構造になっており、本墳においてもその形態について考えてみたい。

石室内から出土した須恵器は、65個体である。その内約35個体が玄門右立柱石の隅に寄せられたように出土した。この出土状況から、明らかに追葬が行われたことを示す「カタヅケ」の行為がみられ、少なくとも埋葬が2回行われたことは間違いないと思われる。第3節(2)で述べたように、須恵器の器形の特徴からは、器種によって、2タイプや3タイプに分かれることが明らかになった。例えば、無蓋高坏は3タイプ、脚付壺は2タイプ、甕は3タイプ、提瓶は3タイプ、平瓶は2タイプである。これらのタイプの違いは、その様相から古相・中相・新相と分けることができる。（第2表）

また、棺台の上からは2個1セットになった耳環が2ヶ所から出土しており、この状況も2回の埋葬を裏付ける。しかし、耳環はもう1点出土しており、また耳環の特徴も3時期に分かれることから、埋葬は3回行われたと考えることもできる。その他の金属製品では、太刀の鍔と鏡が3点ずつ出土していることも注目される。一人の被葬者に一振の太刀が埋葬されたと考えるならば、3回の埋葬が行われたことを示している。

このように、須恵器や他の出土遺物から3時期の様相がみられることから、埋葬は少なくとも3回（追葬2回）行われたと考えられる。但し、中相と思われる須恵器の中で、羨道部や玄門直下の閉塞石上から出土した有蓋高坏（19～21）や玄門入り口に置かれていた脚付短頸壺（31）は、埋葬に伴う祭祀的な行為が行われたかのように、玄門をはさんでほぼ直線的に置かれていることから、これらの須恵器は原位置を留めていると思われる。このことから、2回目と3回目の埋葬には、それほど時間差がなかったのではないかと考えられる。また、「カタヅケ」の一群の遺物にも新相の須恵器がかなりの数含まれていることは、何を意味するのであろうか。追葬が後になるほど副葬される遺物が簡略化されることから考えると、追葬はさらにもう1回あったとも考えられる。

開口部の埋土を観察すると、石室内からの掻き出しがみられる。（第22図前庭・開口部須恵器出土状況図）掻き出しの層は、第44～53層である。堆積状況から掻き出しは、3回に分かれていると思われる。1回目は第53層であり、53層中からは短頸壺か長頸壺の胴部片と思われる須恵器が出土している。第2回目は、47～51層の堆積で、多くの須恵器片が出土している。第3回目は45・46層で、須恵器の出土は46層が一番多い。無蓋高坏（第24図18）は、墳丘盛土Ⅱ層から出土した坏部（第32図81）と接合関係が考えられる。このような開口部の埋土にみられる3回の掻き出しは、追葬に伴う行為と関連づけることができると思われる。また、石室内（羨道部閉塞基底石付近）から出土した無蓋高坏（4）と接合関係にある須恵器片が墳丘Ⅱ層中から出土しており、追葬時に破棄されたと思われる。

以上のように、石室内出土須恵器の様相や耳環・太刀の出土状況、開口部の埋土などから、本墳で行われた埋葬は最低3回（初葬と追葬2回）であったと考えられる。ただし、開口部の掻き出しやカタヅケの須恵器様相からするともう1回追葬が行われた可能性を指摘しておきたい。第2表は、須恵

器の様相をもとに副葬されたと思われる遺物を表にした。

1）石室石組みの崩落原因については、遠藤淑彦（揖斐川町立北方小学校教諭）にご教示頂いた。池田町周辺で発生した大地震の最も古い記録は745年６月５日に起きたＭ7.9の地震である。震源地は美濃国の国府付近（現在の不破郡垂井町）とされ、多数の橋館や仏寺などが倒壊したとされる。本墳が盗掘を免れていることからこの地震による石室崩壊の可能性が高い。また、遠藤氏から地震による崩壊を示す痕跡として側壁石材のＸ型の割れ目が指摘された。しかし、資料が少ないため石室崩壊＝地震という断定はできない。同氏には石室石材の岩石鑑定もして頂いた。その結果、本墳で使用されている石室石材は全て池田山周辺に分布する「美濃帯」の砂岩であることが分かった。（図版42顕微鏡写真参照）

写真　遠藤氏による石材破砕方向の調査

写真　側壁石材崩落の様子

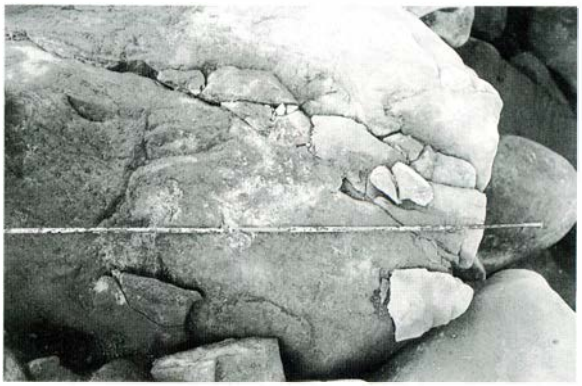


写真　左側壁石材にみられるＸ型の割れ目

第2表　様相別石室内遺物

様　　相	該当する須恵器	共伴すると思われる遺物
古　　相	大型器台（1）、無蓋高坏（4～6、8） 脚付長頸壺（30）、提瓶（32～34）、甕（52） 平瓶（65）	馬具（119～134） 耳環（116）
中　　相	無蓋高坏（2・3・7・9～14） 有蓋高坏（19～21）、脚付短頸壺（25～27・31） 蓋（22～24・28・29・55・58～64） 提瓶（34・36）、甕（49～51・53）、平瓶（66・67）	耳環（114・115） 刀子（181）
新　　相	無蓋高坏（15～18）、提瓶（35・37） 甕（46～48）、坏蓋（56・57）	耳環（117・118）

※時期差が判然としないものは含めなかった。

2．南高野古墳の墳丘及び石室構造について

南高野古墳は、標高25.5m前後の旧地表面を掘り込み、墓坑を形成した後盛土を3段階に分けて積み上げる工程で築造された。葺石や外護列石はみられなかったものの、墳頂部に厚い粘土層を最後に貼り付け封土としている。墳丘の規模は直径22mで、周溝との間に2～3mの平坦なテラスを設けている。周溝の幅は2mあり、周溝を含めた規模は直径25mを超える円墳である。

石室は、右片袖式横穴石室で玄室の内面に赤色顔料が塗られた「赤彩古墳」であった。石室の全長は、10.5mを超える大型石室である。玄室長は5.8m、羨道長は3.6m、前庭長は1.1mを測る。石室の設計には畿内で使用されていた「高麗尺」が用いられたと指摘されている。[1] 石室の構造は、墓坑の深さに相当する大型石材を奥壁や玄門、羨門に配し、その間に大型石材と小・中型石材を垂直に積み上げている。玄室の両側壁の石積みには目地が認められるが、羨道の両側壁は目地が揃わない。墓坑の掘り方（大型石材の頂部）まで達した後は、持ち送り技法による小口積みによってアーチ上に積み上げた後、天井石を架構している。玄門の上には楣石を配し、前壁を形成している。玄門下には「框石」を設置し、玄室へは羨道から一段下がるようにして入る構造になっている。奥壁のコーナー上部には奥壁と両側壁をつなぐように「渡し掛け技法」が取り入れられている。

このように、本墳は、前壁を持つ片袖式の横穴式石室であり、「高麗尺」を用いて設計された畿内の片袖式石室の古い様式の影響を受けた構造になっている。しかし、渡し掛け技法や石材の石積みには在地性の特徴もみられる。

1）成瀬正勝「美濃における後期群集墳形成の一契機―片袖式石室を中心に―」『岐阜史学』第93号　1998

３．まとめ

南高野古墳は、右片袖式横穴石室を有し、後期古墳の中でも古い様相を呈する古墳である。玄室内壁が赤彩されている古墳としては県内２例目の発見となった。[1]

副葬品された遺物をみると、須恵器は、その様相から３つに分かれた。古相のものには比較的畿内の影響を受けたものや持ち込まれたと思われる一群がある。特に大型器台は、滋賀県宮山１号墳出土器台と非常に類似している。宮山１号墳からは大型器台が３点出土し、それぞれに広口壺を伴っている。本墳からは広口壺やその破片は１点も出土していない。そこに、宮山１号墳の被葬者との階級的な差を見いだすことができるものの、大型器台を所有することができた階級として畿内との政治的な結びつきを想像させる。大型器台の所有形態から、本墳の最初の被葬者は大型器台を１個用いることができた階層つまり、地域の小首長や有力家長層であったと思われる。[2] また、大型器台とともに大型甕（52）や長脚２段三方透かし無蓋高坏（５・６）が出土しているが、これらの須恵器は非常に整形が丁寧で、胎土・焼成も良好であり、畿内及びその周辺地域からの搬入品と思われる。

中相の須恵器群には猿投産のものと思われる須恵器が多く含まれており、東海地方（尾張）の影響がみられる。この古相から中相への須恵器群の様相の変化は、被葬者や彼を取り巻く周辺の権力構造の変化とも考えられる。特に、鳥形鈕蓋の出土事例は県内西部（海津郡南濃町に１点見られるが）にはほとんどみられず、尾張との関連を考える上で興味深い資料となった。

金属製品は、馬具をはじめ、大刀や耳環、刀子等が出土した。特に馬具は、鞍金具や轡、鐙鞍などが出土し、鞍金具は鉄地金銅装の非常に豪華な製品であった。轡の形態編年[3] では、本墳出土の轡は６世紀後半とされ、このような馬具を副葬することができた階層は畿内との結びつきの強い地域の首長層と考えられている。[4]

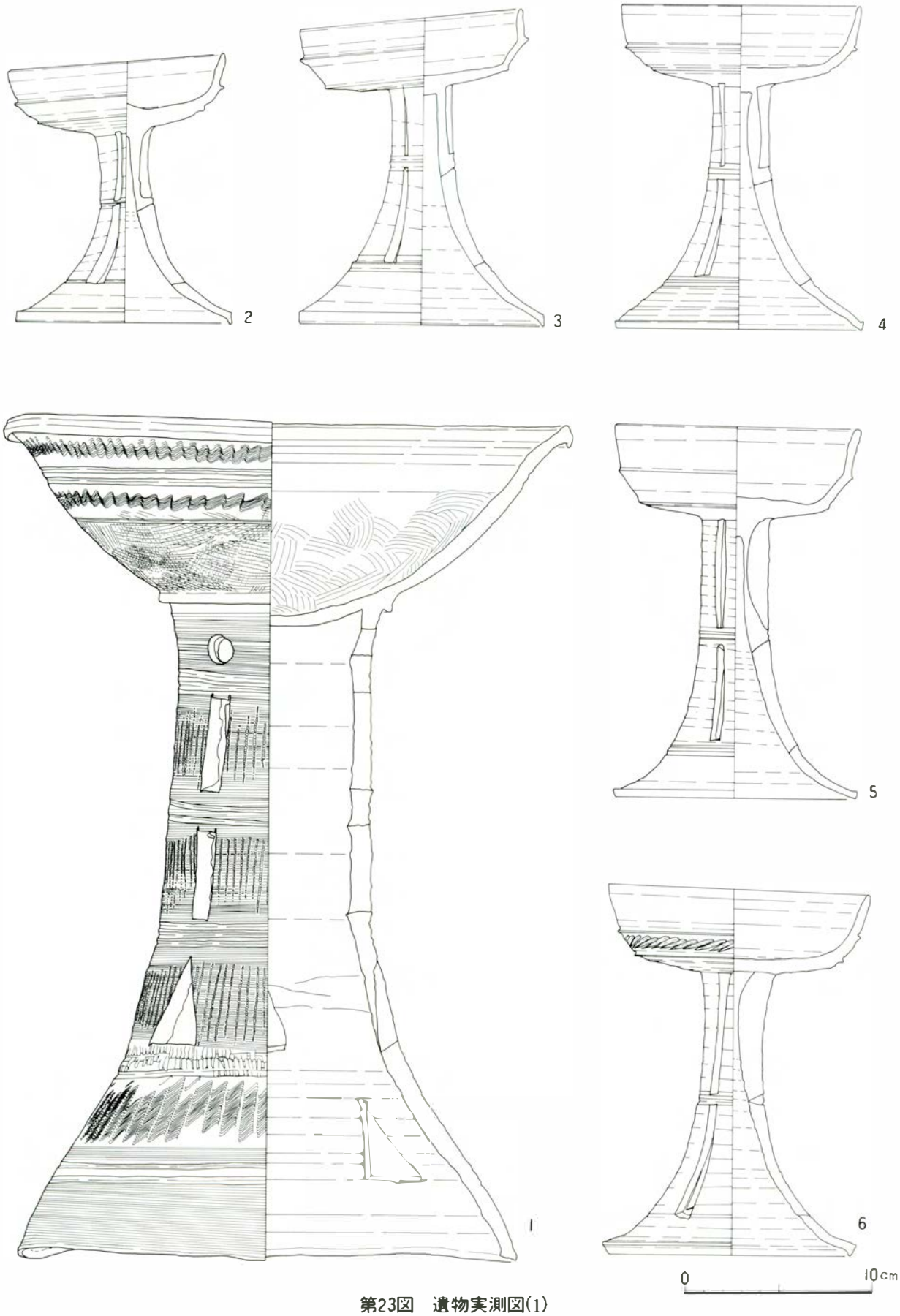
以上のように、石室構造や出土遺物から、本墳の最初の被葬者は、畿内勢力と強く結びついていた人物であり、周辺地域を治める首長層であったと思われる。古墳の築造は６世紀後半と考えられる。その後の追葬における副葬品からは、東海地方、特に尾張との結びつきが想像される。畿内から尾張への様相の変化は、池田町やその周辺地域の政治的変化を示唆していると思われる。、その後２回ないし３回の追葬が行われたと思われる。

1）現在確認された県内の赤彩古墳は５例である。
- 養老郡上石津町　二又１号墳
- 揖斐郡池田町　南高野古墳
- 本巣郡糸貫町　船木山古墳群第19・272・274号墳

2）沢村治郎「須恵器大型器台考」『滋賀史学会誌』第11号　1999

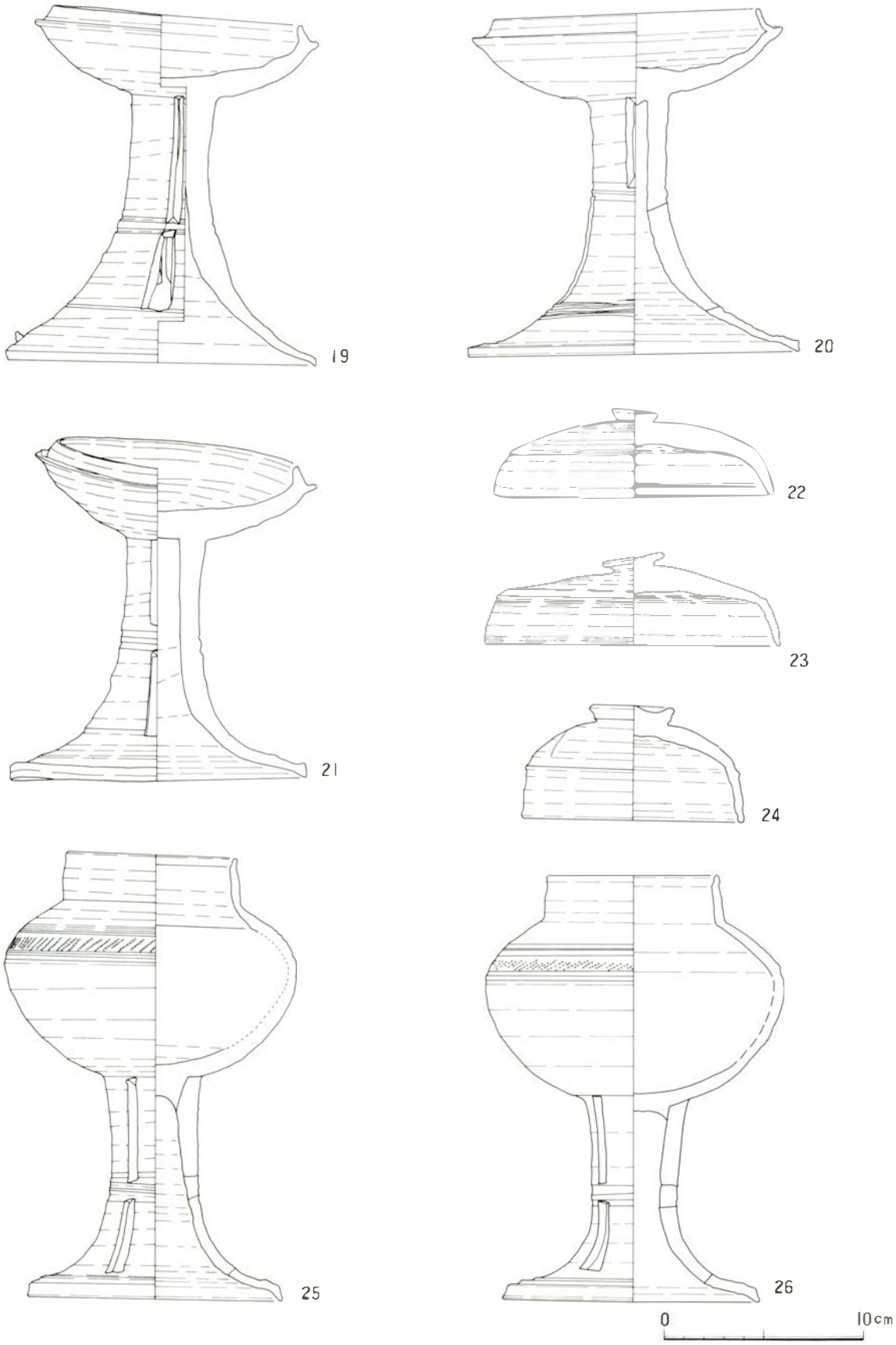
3）澤村雄一郎　前掲書

4）成瀬正勝　前掲書

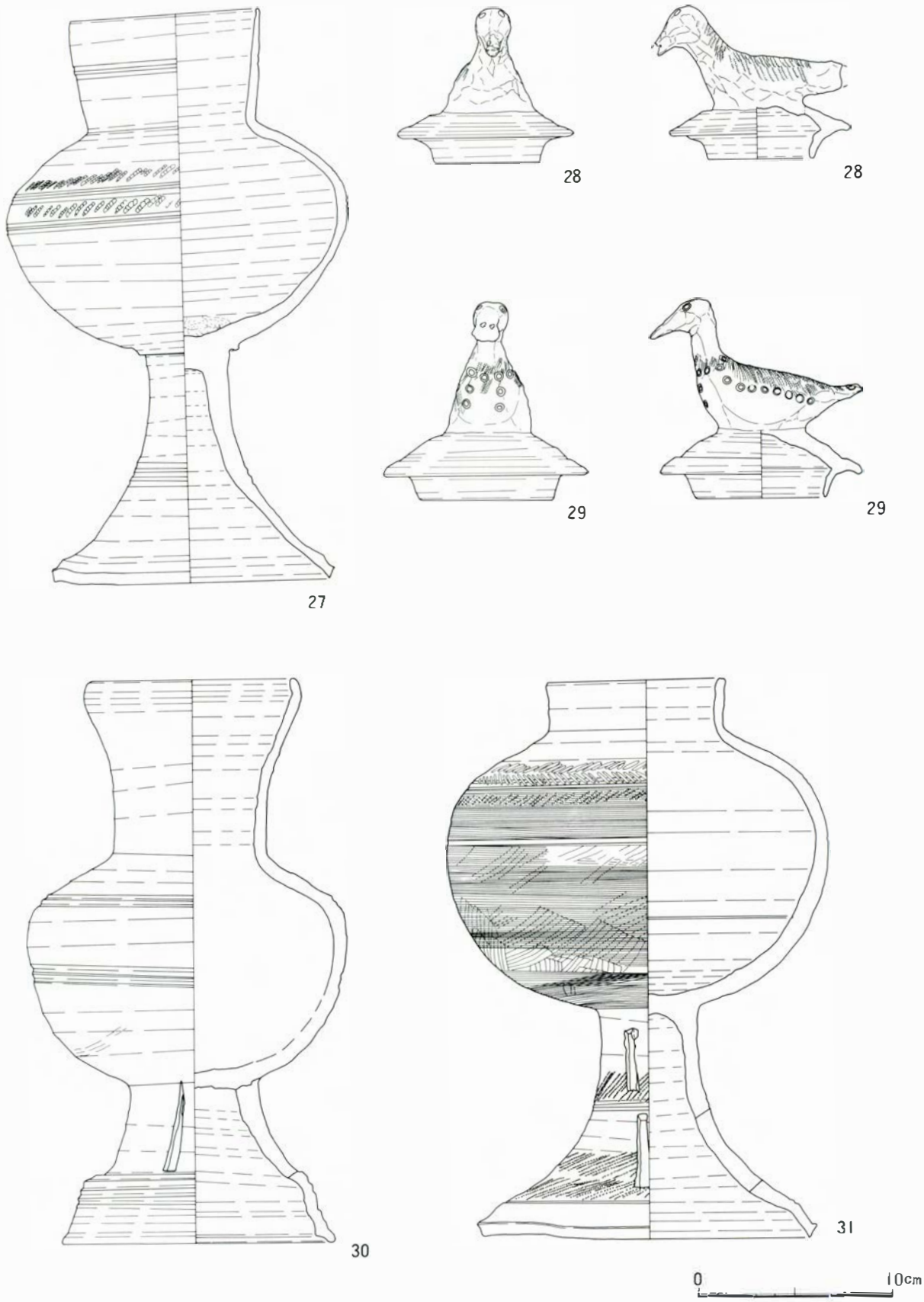


第23図　遺物実測図(1)

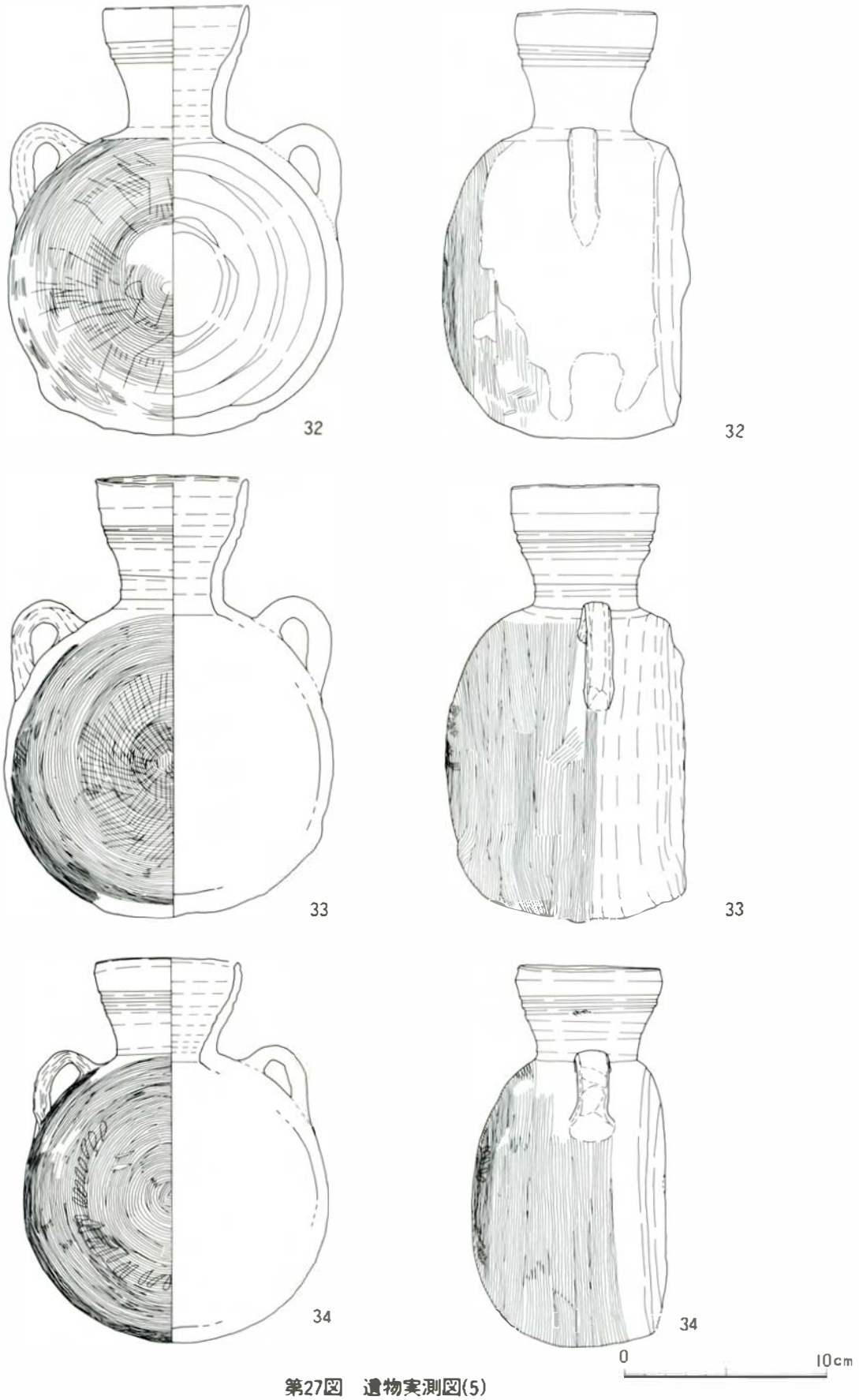
第24図　遺物実測図(2)



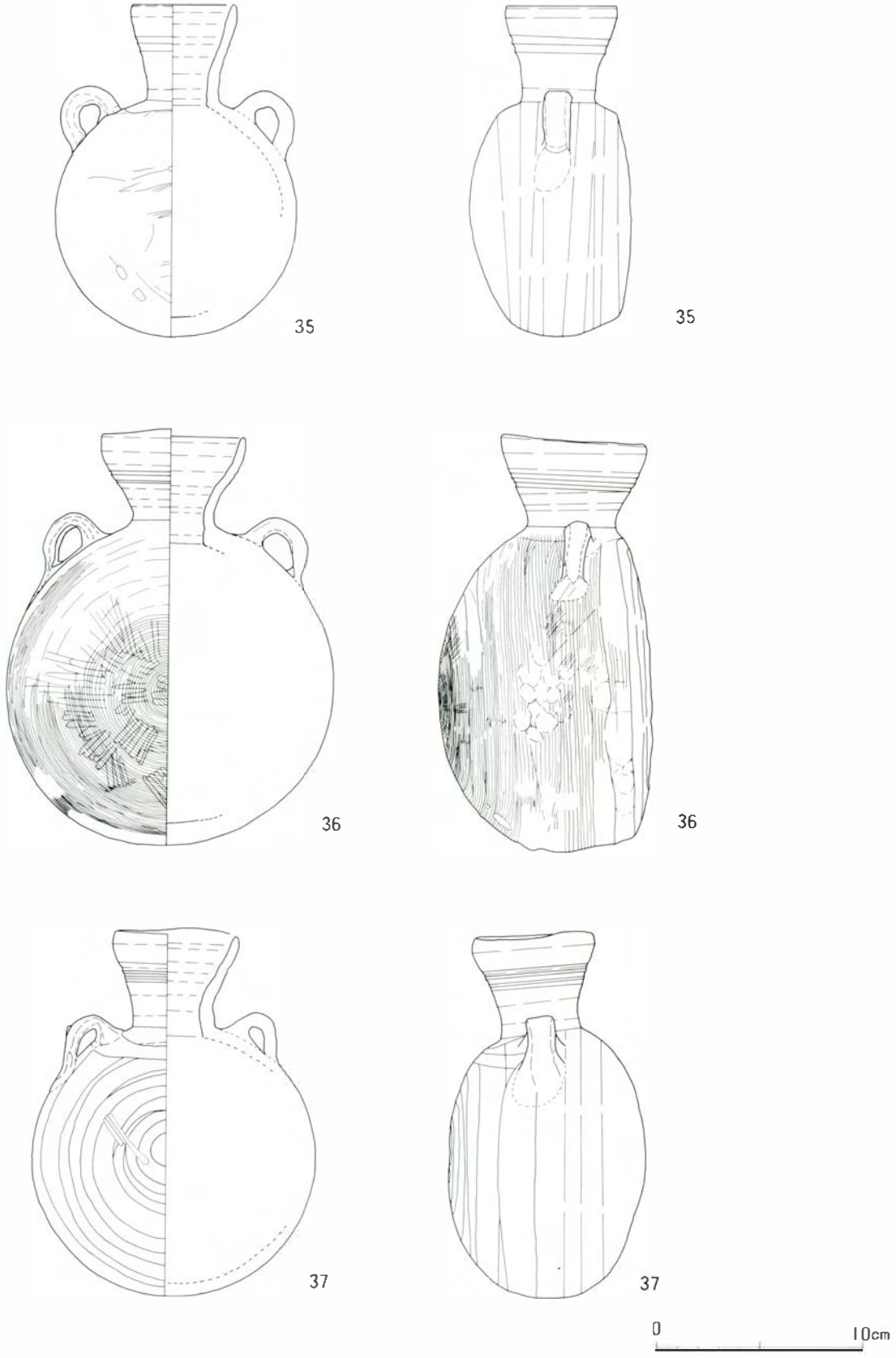
第25図 遺物実測図(3)



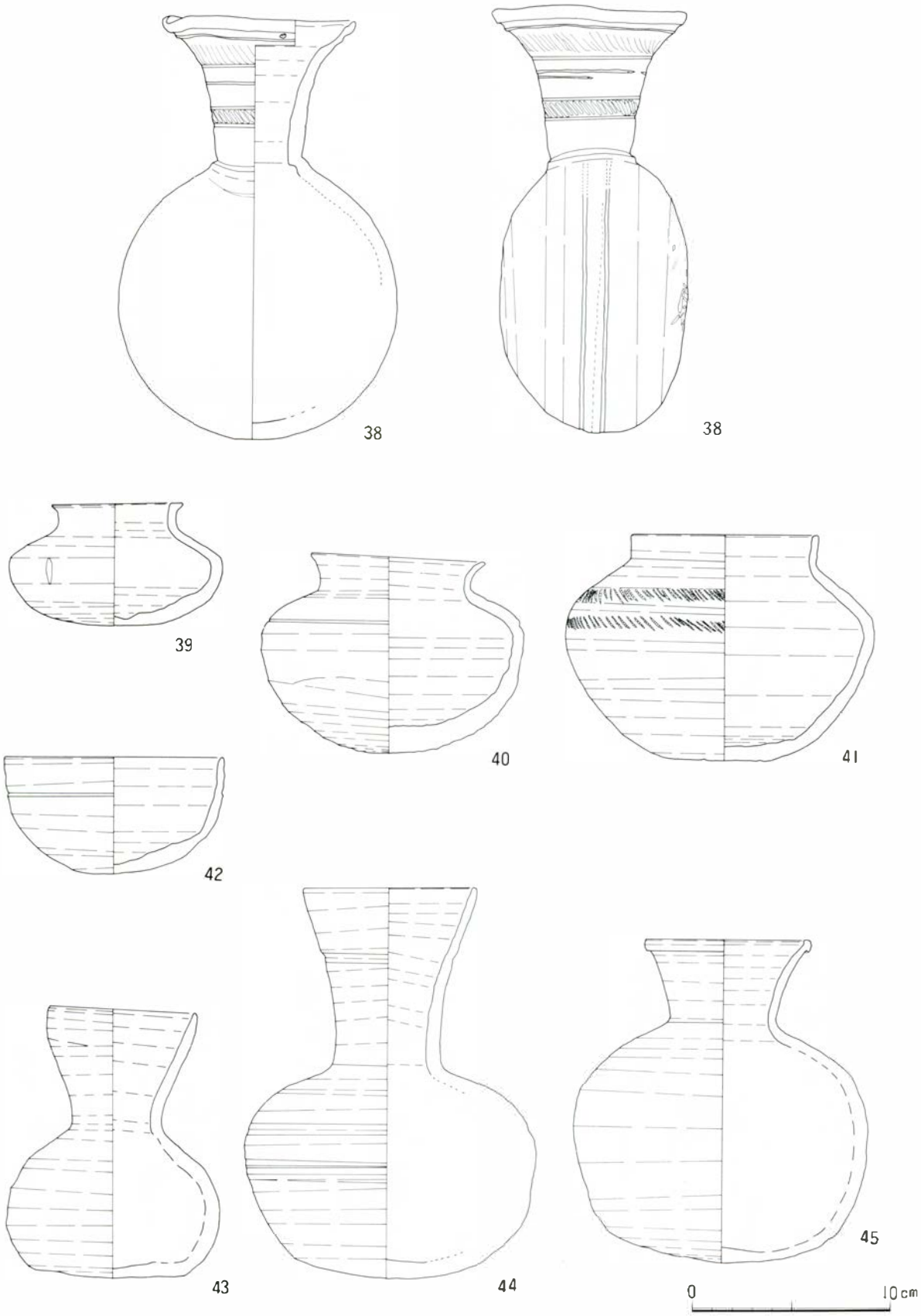
第26図　遺物実測図(4)



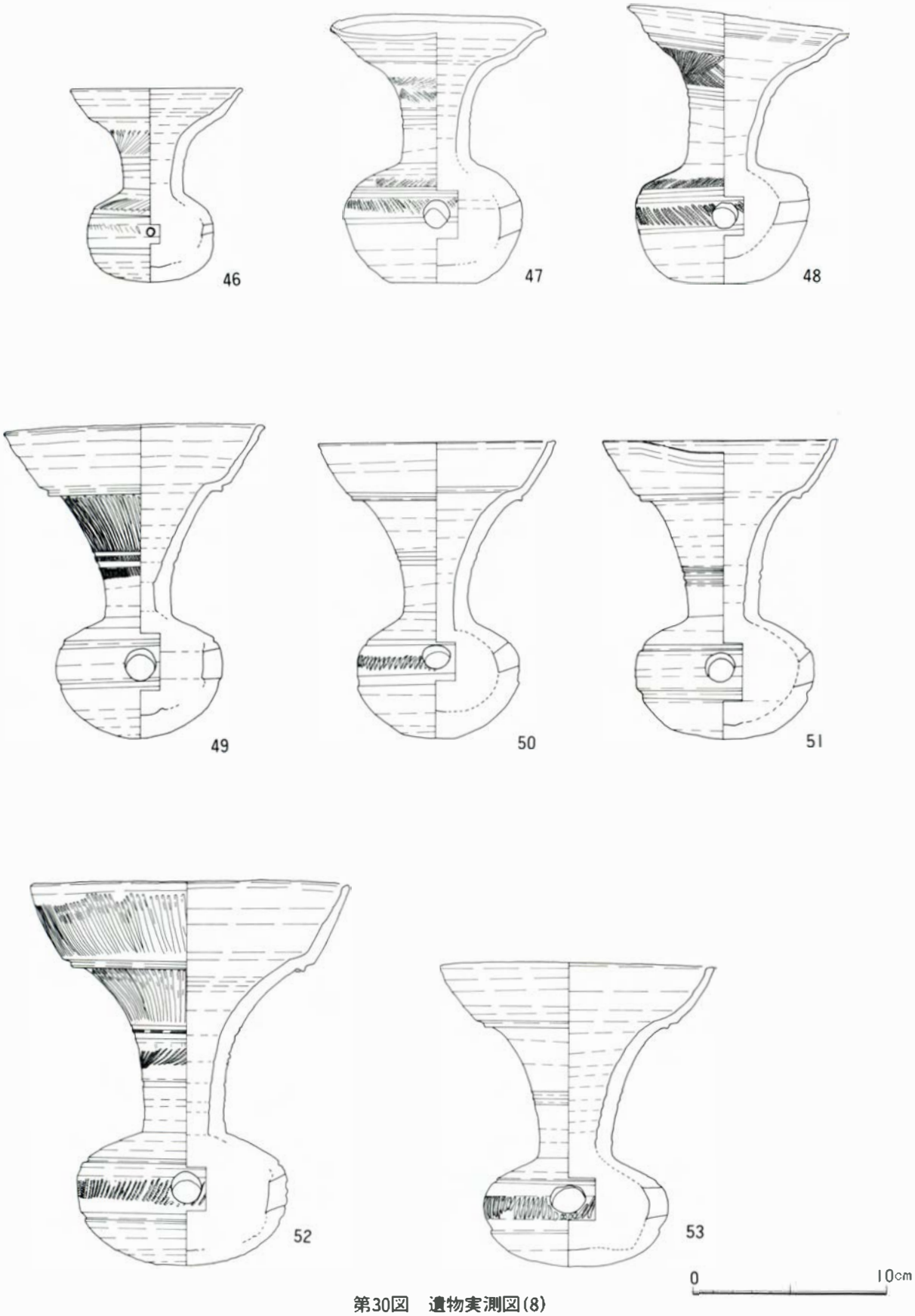
第27図　遺物実測図(5)



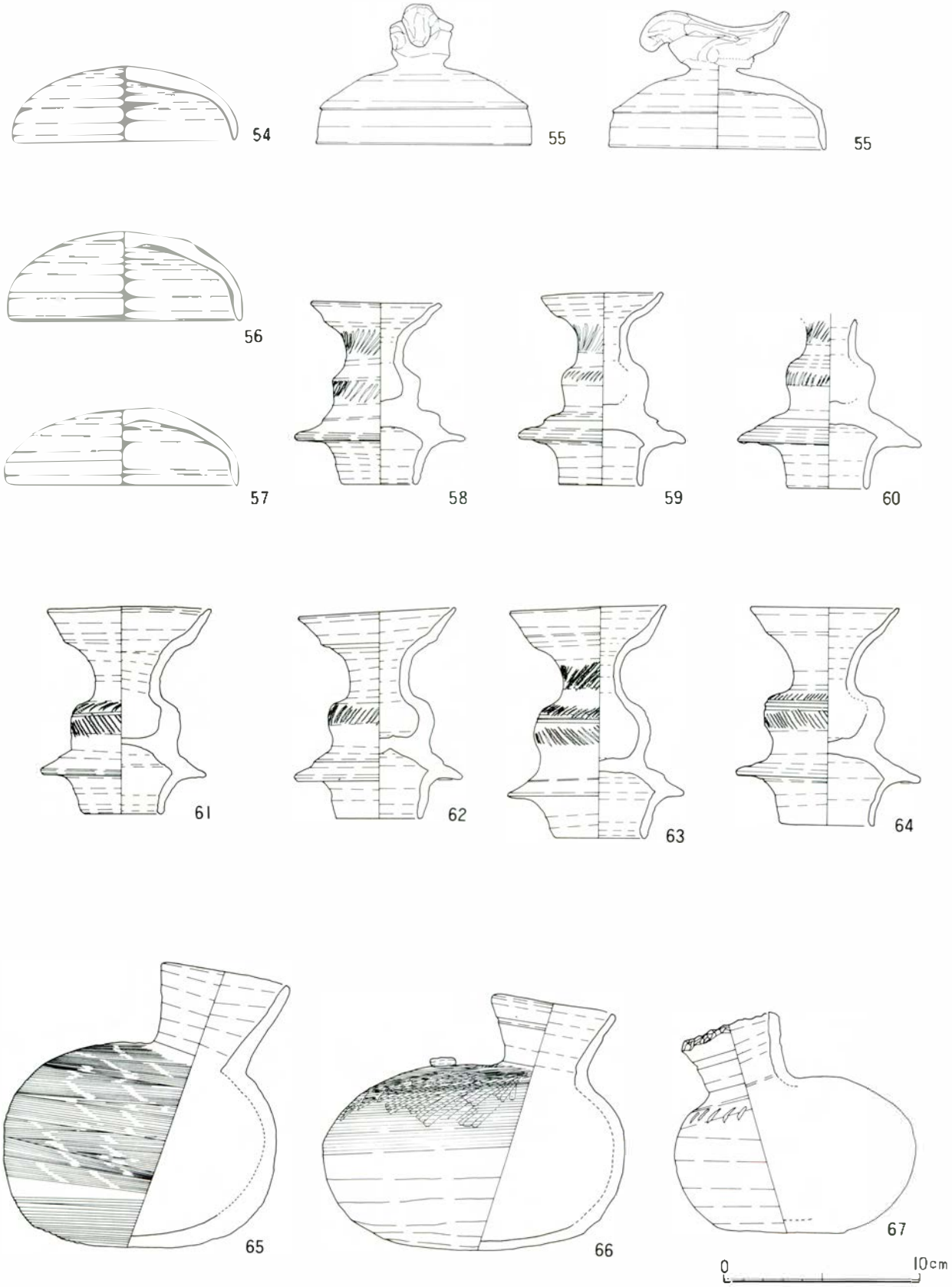
第28図　遺物実測図(6)



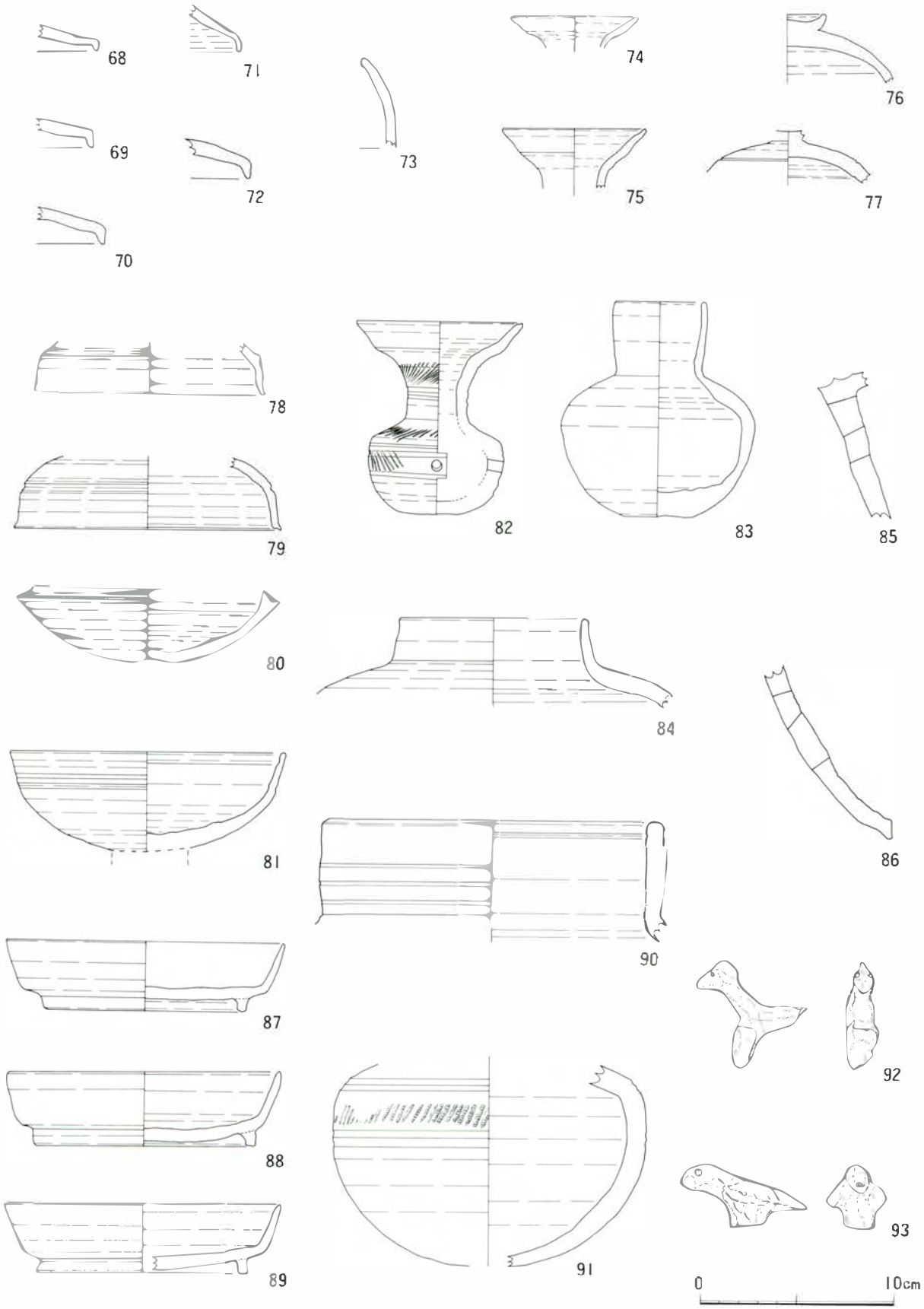
第29図　遺物実測図(7)



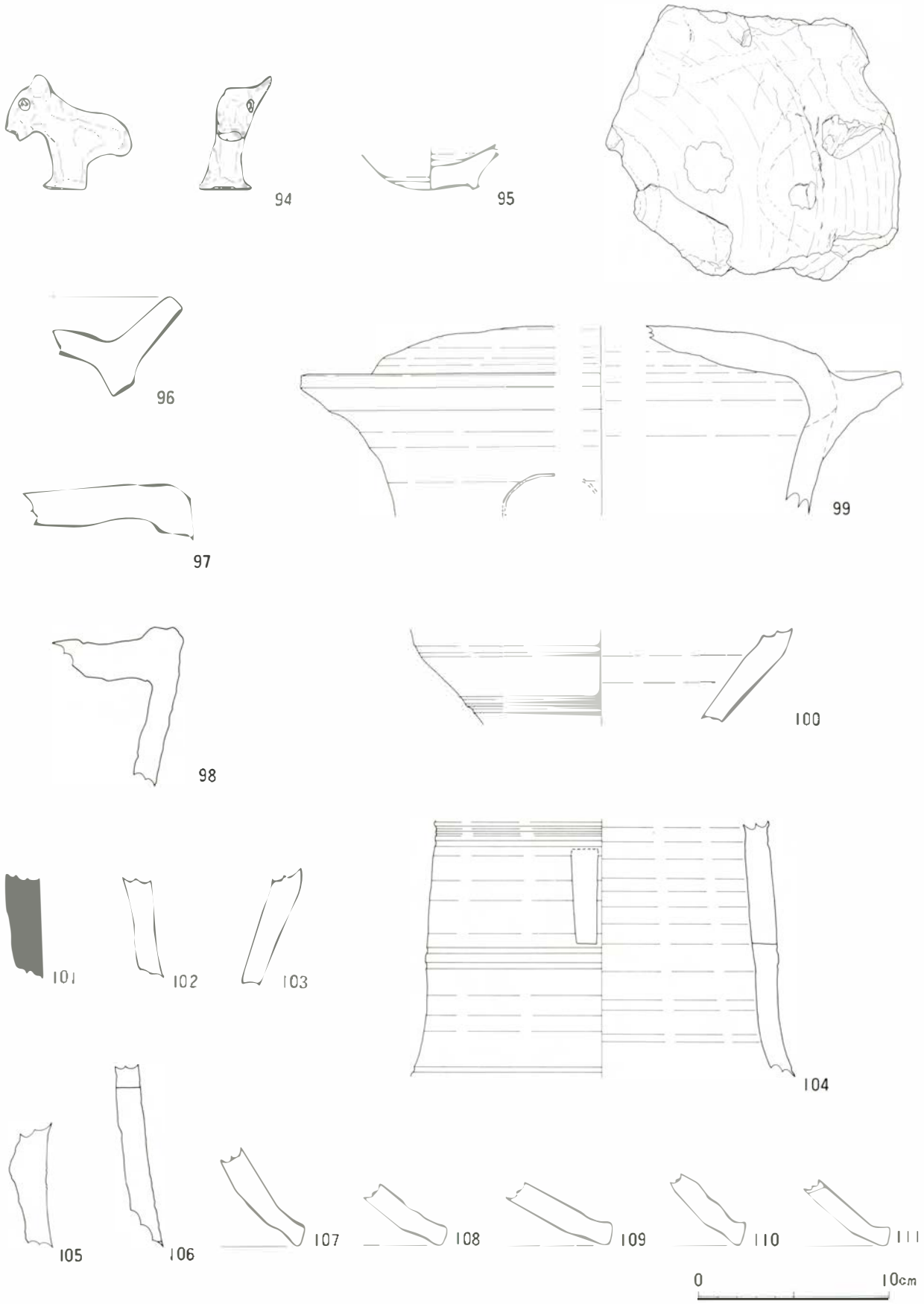
第30図　遺物実測図(8)



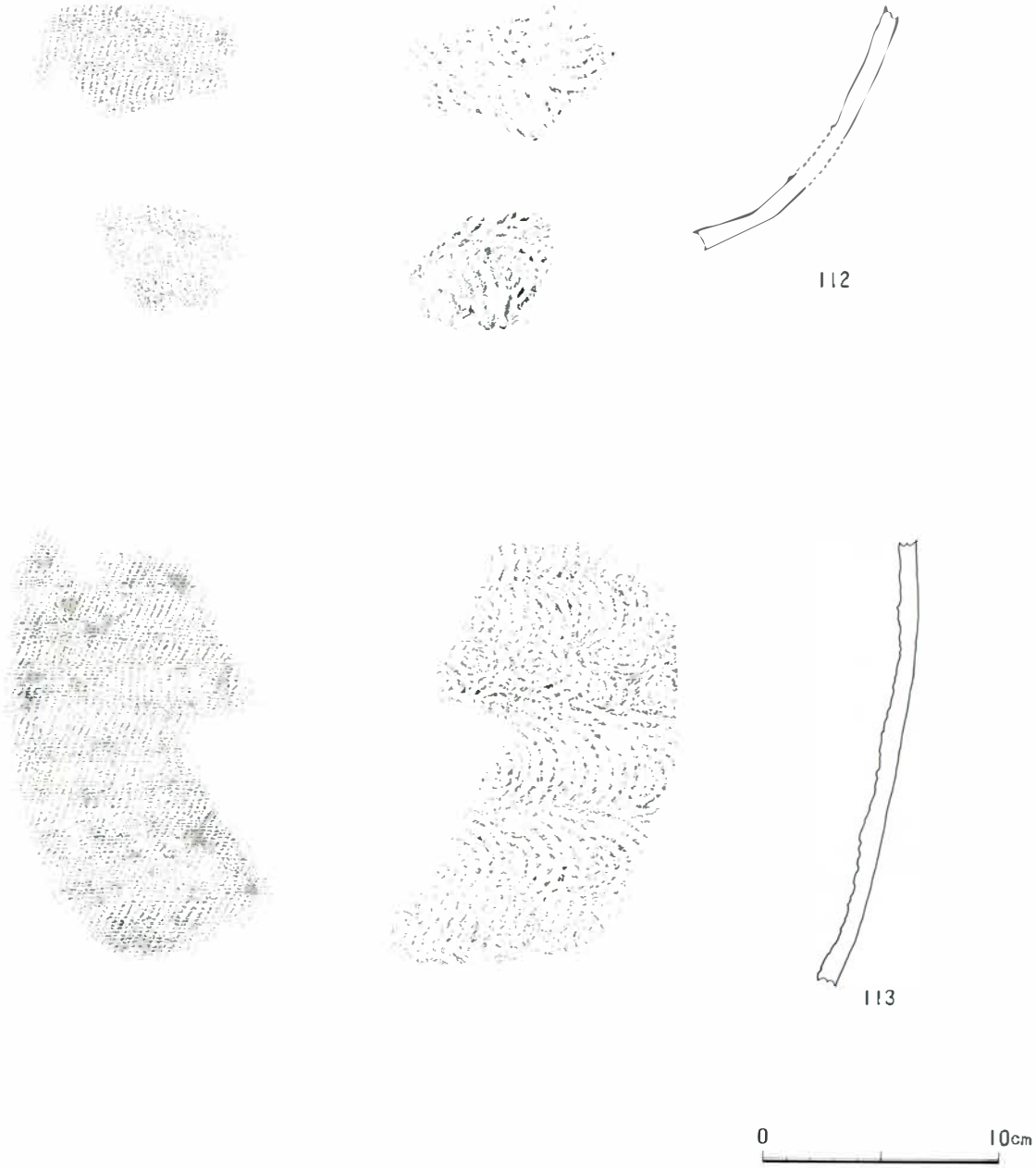
第31図　遺物実測図(9)



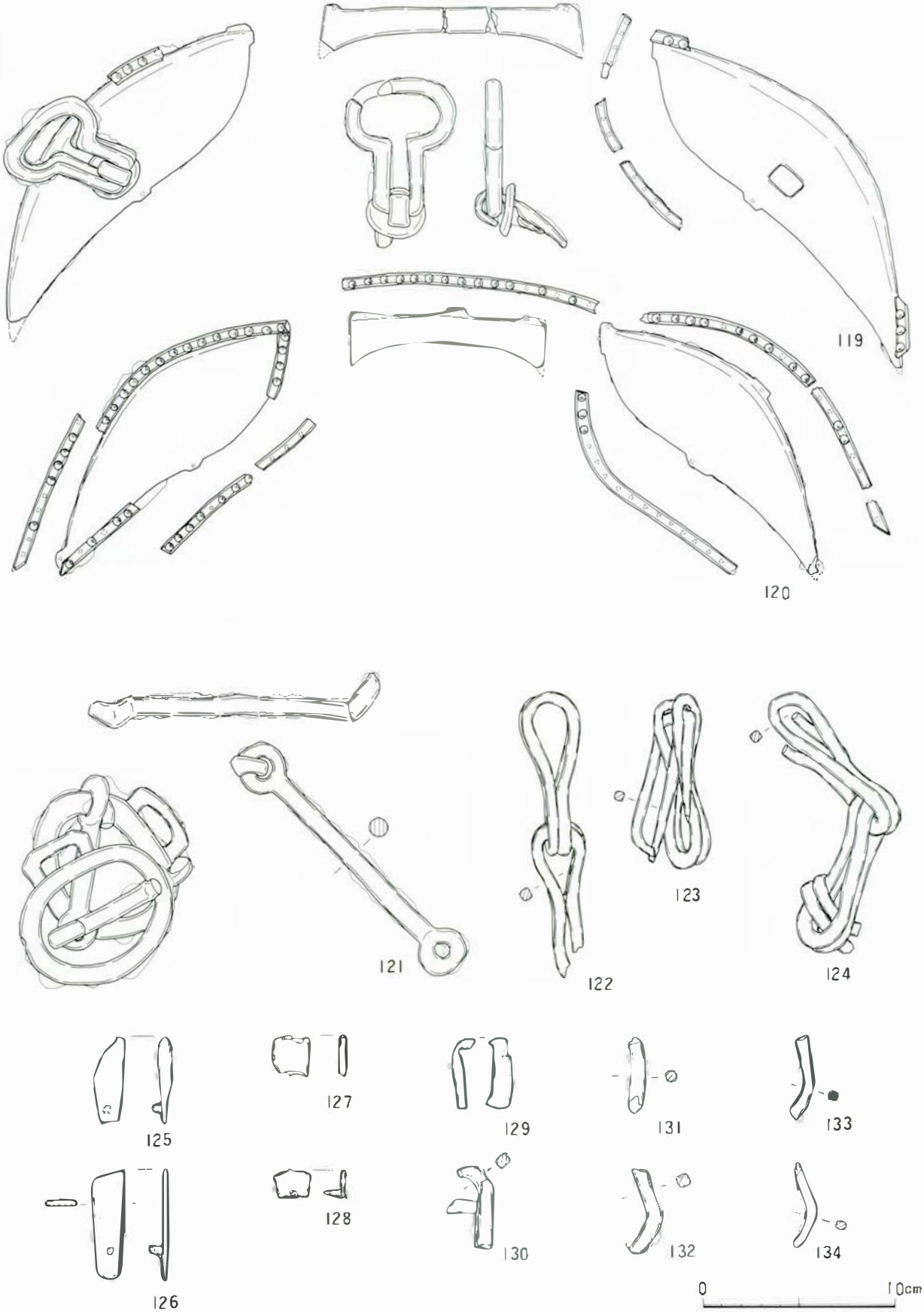
第32図　遺物実測図(10)



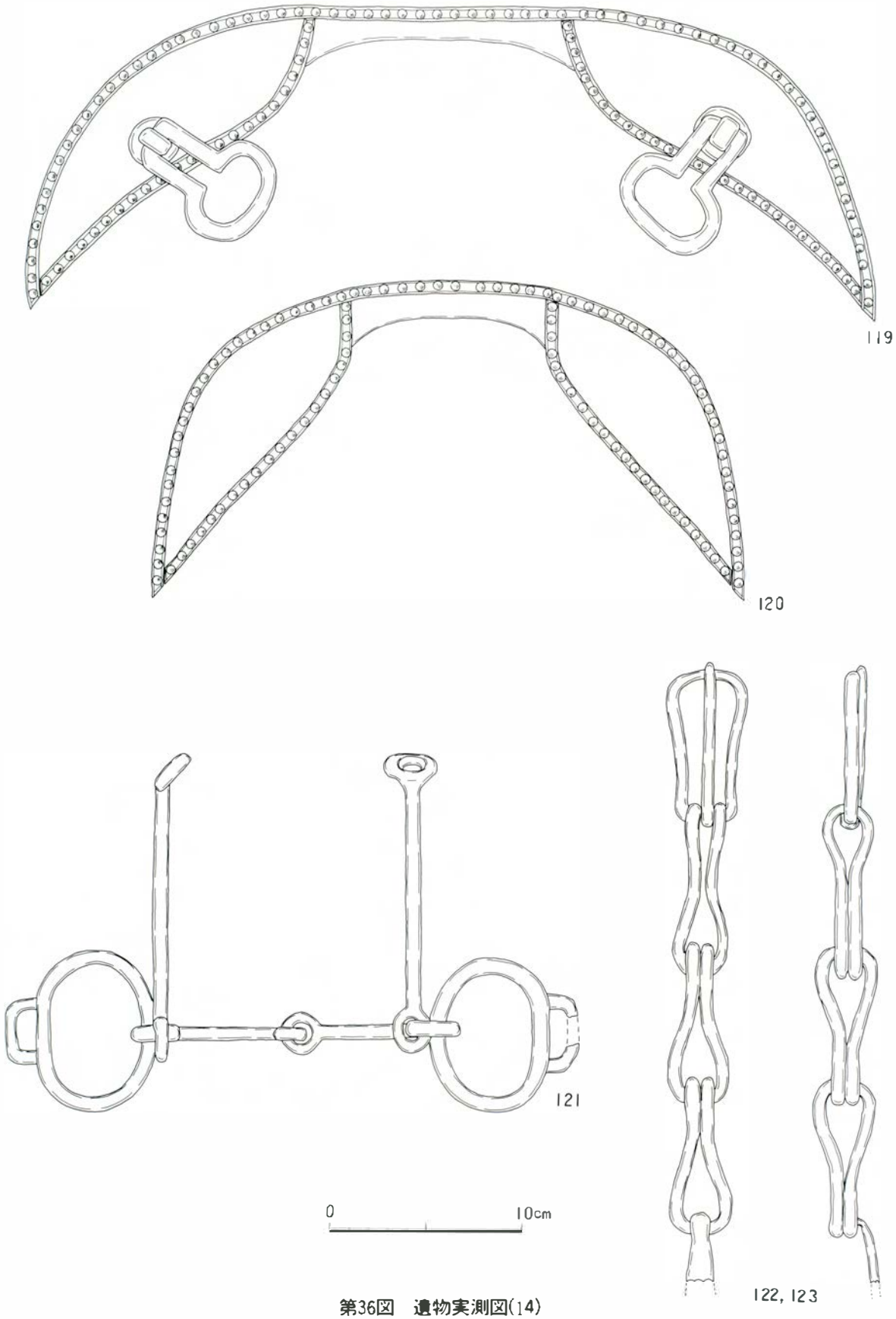
第33図　遺物実測図(11)



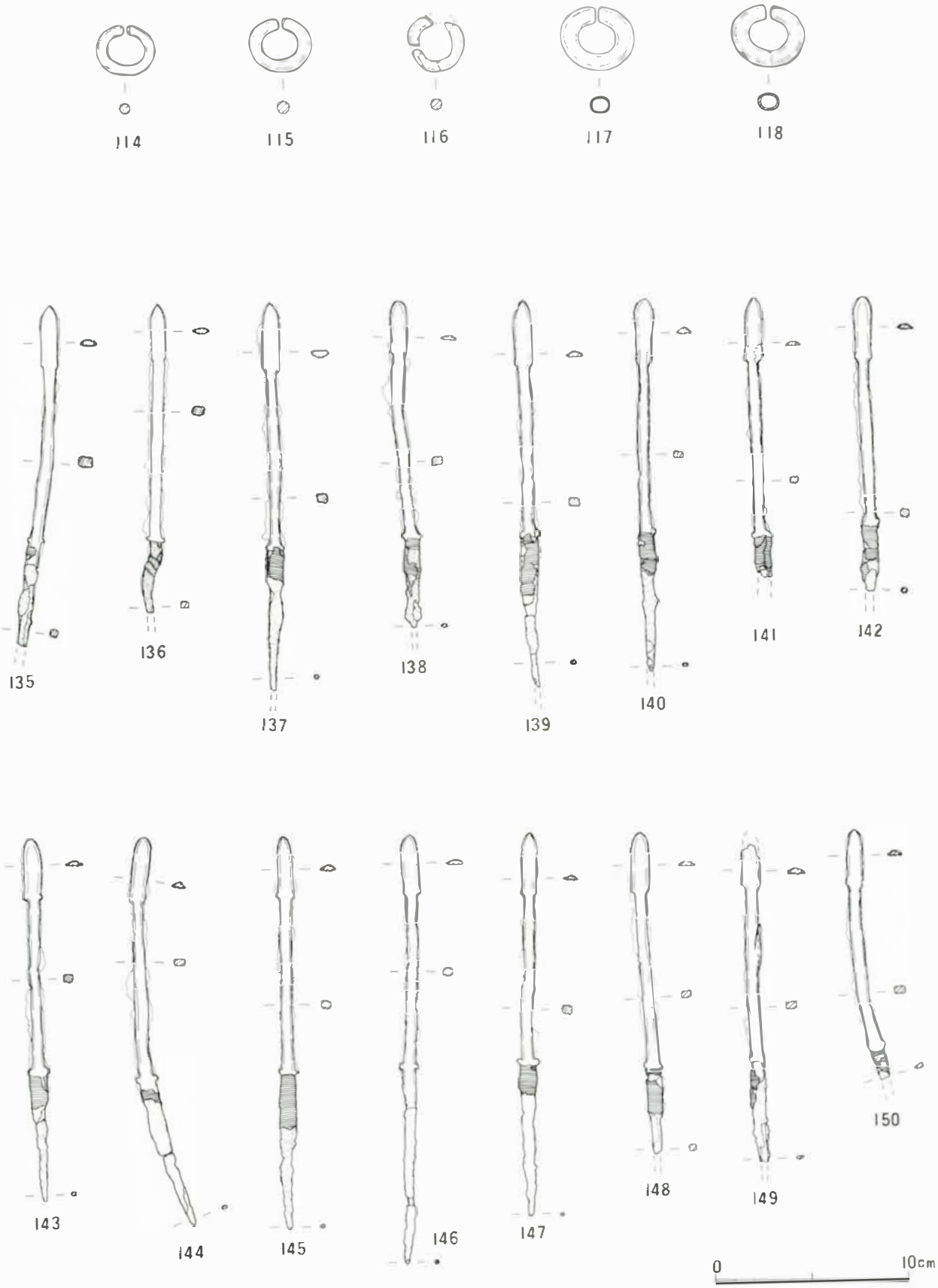
第34図　遺物実測図(12)



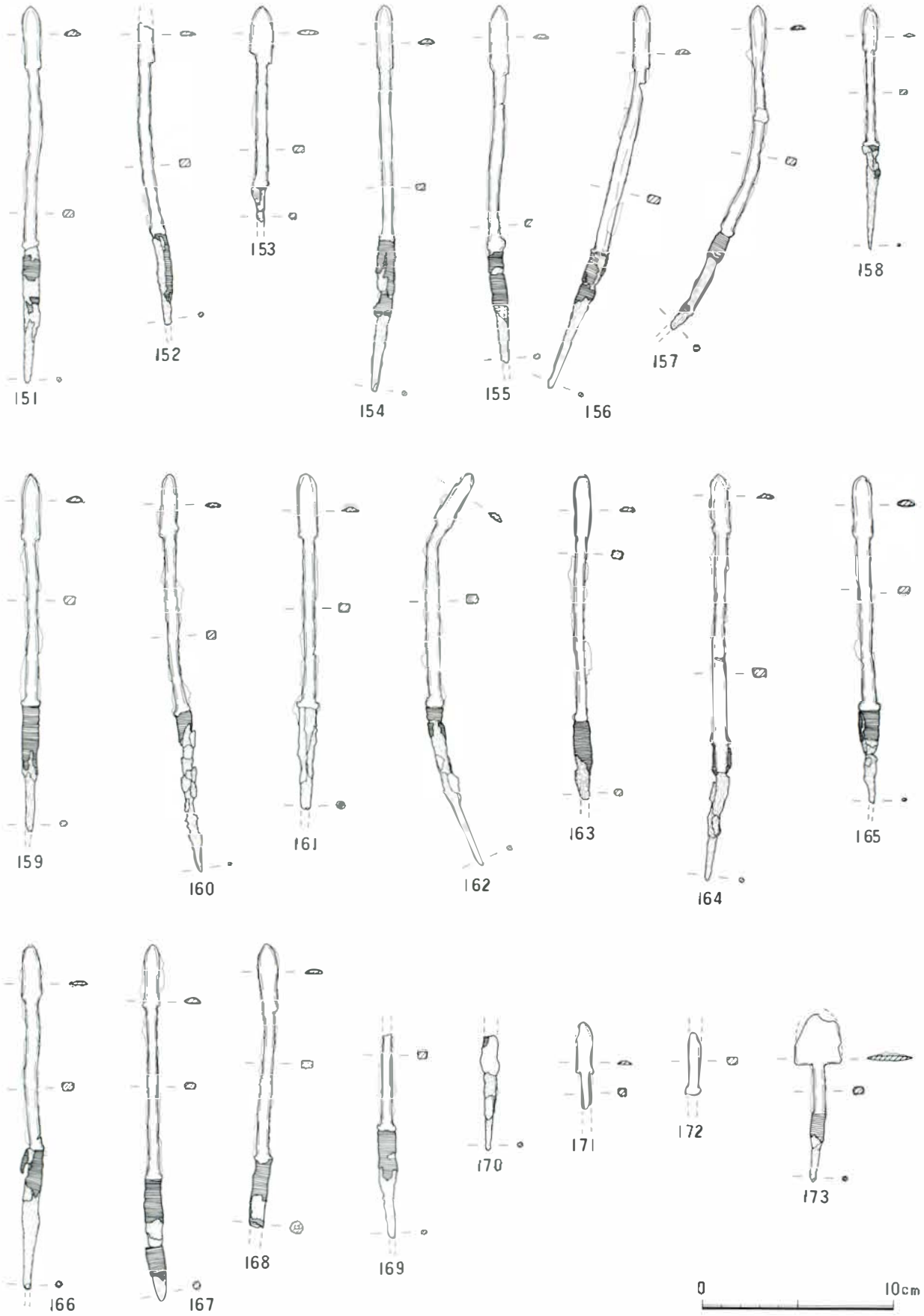
第35図　遺物実測図(13)



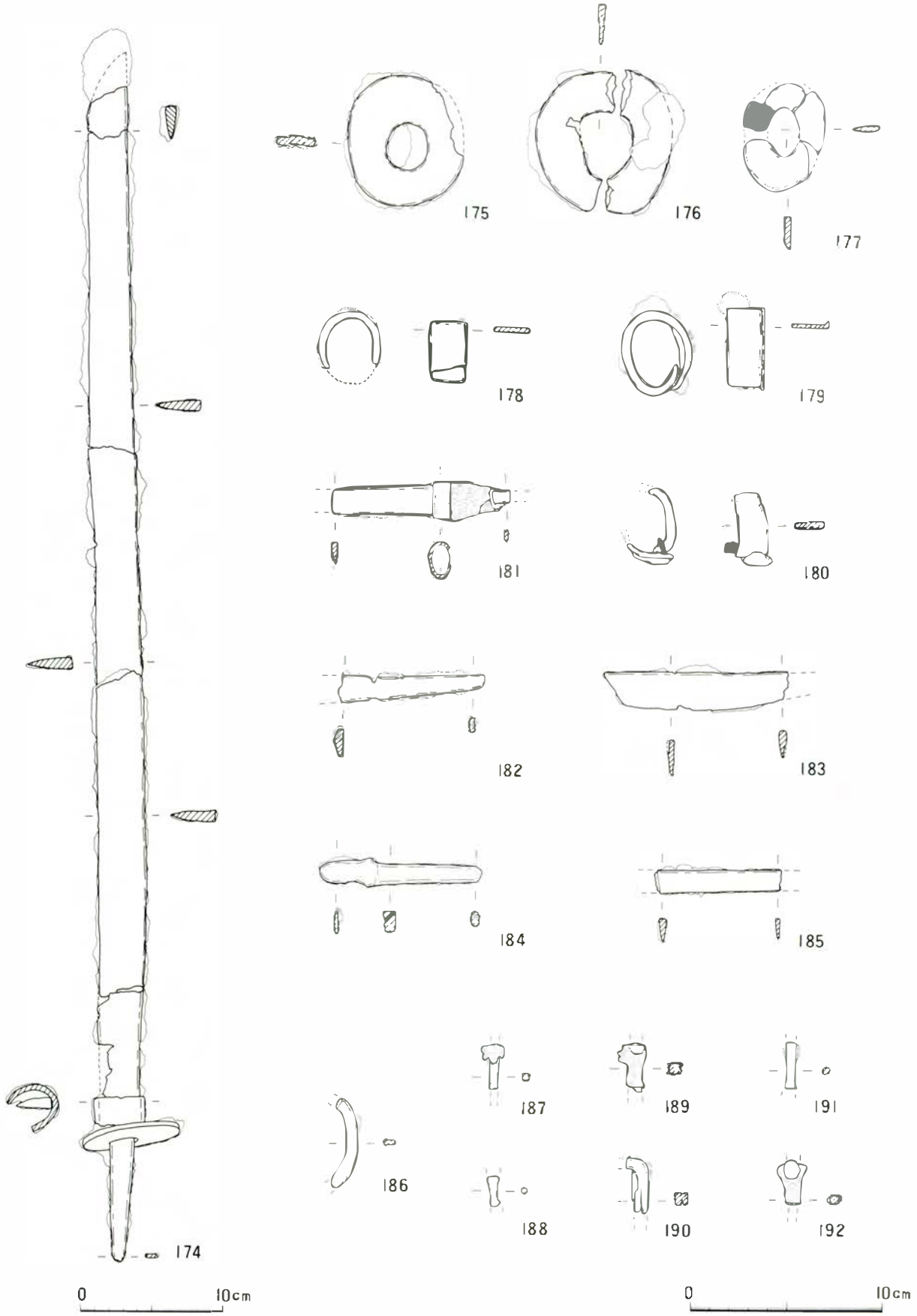
第36図　遺物実測図(14)



第37図　遺物実測図(15)



第38図　遺物実測図(16)



第39図　遺物実測図(17)

第3表　南高野古墳出土須恵器観察表(1)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
1	G1	M1	大型器台	30.0	45.75	26.9	やや粗、径5㎜以下の砂粒、石英粒、長石粒を含む	黒	器台の坏部は大きく外方に開き、口縁端部は上下に引き出される。脚部との境には段を有す。脚部は直立気味にのびた後、内弯気味に外方に開く。脚部端部は尖る。脚部外面には、縦に並んだ丸・長方形・三角形の透かし孔が3列あり、その下に三角形の透かし孔が2個施されている。坏部に沈線と櫛状工具による波状文を施す。脚部外面に櫛状工具による波状文・縦位の直線文、沈線を施す。	坏部内面・外面下方タタキ目、脚部内面横ナデ	
2	G2	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	11.6	14.05	11.55	やや密、径3㎜以下の黒色粒を含む、径1㎜以下の白色粒を少量含む	灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや下方に小さく屈折。透かしの間に2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部下位に2つ段をなす。	坏部底部内面指ナデ、坏部口縁部内外面回転横ナデ。坏部底部外面回転ヘラ削り。脚部内外面回転横ナデ	
3	G3	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	11.9	17.1	13.1	密	灰	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや下方に小さく屈折。透かしの間に2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部下位に2つ段をなす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
4	S2	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	12.6	17.5	13	密	灰	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや内傾する。透かしの間と下段下にそれぞれ2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部下位に2つ段をなしその下に1条の沈線を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
5	G3	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	12.75	20.0	12.75	密、径3㎜以下の砂粒を含む	黒、灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや内傾する。透かしの間と下段下にそれぞれ2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部下位に2つ段をなしその下に1条の沈線を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央叩き目	
6	G3	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	13.8	20.5	12.7	密、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	黒	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや内傾し接地部は丸い。透かしの間に2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部下位に2つ段をなしその間にヘラ状工具による刺突文を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
7	G3	M2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	12.1	14.75	10.5	やや粗、径3㎜以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白～灰	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、大きく開き端部は肥厚する。透かしの間に1条の沈線を巡らし、脚部外面全体にカキ目を施す。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部中位に1つ段をなす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
8	G2	M2	2段三方透かし無蓋高坏	13.2	13.15	11.2	やや粗、径4㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、大きく開き端部は内傾して丸く接する。透かしの間に2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。	坏部底部内面指ナデ、坏部口縁部内外面回転横ナデ。坏部底部外面回転ヘラ削り。脚部内外面回転横ナデ	
9	G2	M2	2段三方透かし無蓋高坏	14.3	14.05	10.55	やや粗、径3㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。透かしの間と裾部にそれぞれ2条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部上位内外面にそれぞれ1つ段をなす。体部中位外面に2条の沈線を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	

第4表　南高野古墳出土須恵器観察表(2)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量（cm）			胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他（釉薬など）
				口径	器高	底径					
10	G 3	M 2	2段三方透かし無蓋高坏	13.8	13.1	9.9	密、径7㎜以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。透かしの間と裾部にそれぞれ1条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、やや外傾する口縁を持つ。体部上位内外面にそれぞれ1つ段をなす。体部中位外面に2条の沈線を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
11	G 3	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高坏	12.2	17.4	10.8	密、径6㎜以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白、黒	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、やや下方に小さく屈折。透かしの間に2条の沈線を巡らす。坏部は、内弯しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面に段を有す。体部中位に2条の沈線とその下に刺突文を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
12	G 2	M 2	2段三方透かし無蓋高坏	17.2	17.0	11.6	やや密、径5㎜以下の白色粒を多く含む、砂粒を含む	灰	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。透かしの間に1条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部中位外面に3条の沈線と刺突文を巡らす。	坏部底部内面指ナデ、坏部口縁部内外面回転横ナデ。坏部底部外面回転ヘラ削り。脚部内外面回転横ナデ	坏部底部内面ヘラ記号
13	G 3	M 2	1段三方透かし無蓋高坏	12.5	11.7	10.6	やや密	灰	脚部は長脚一段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。脚部中位にカキ目を施す。坏部は、ゆるやかに内弯し体部中位から口縁にかけて外弯する。端部は水平に面取りする。体部中位外面に刺突文を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
14	G 3	M 2	1段三方透かし無蓋高坏	12.3	11.85	10.6	やや粗、径3㎜以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白	脚部は長脚一段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。脚部中位にカキ目を施す。坏部は、ゆるやかに内弯し体部中位で屈曲して外に開く。端部は直立する。体部中位外面に刺突文を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
15	G 3	M 2	無蓋高坏	14.7	13.05	11.7	やや粗、径2～3㎜以下の砂粒、白色粒を多量に含む	灰	脚部はラッパ状に開き、裾部は屈折し端部は丸く接地する。脚部中位に2条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、わずかに外反する口縁を持つ。体部中位外面に2条の沈線を巡らす。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
16	G 3	M 2	無蓋高坏	10.0	11.4	8.1	やや密、径4㎜以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰黄、黒	部はラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。脚部中位に2条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部中位外面に2条の沈線を巡らす。	坏部底部内面指ナデ、坏部口縁部内外面回転横ナデ。坏部底部外面回転ヘラ削り。脚部内外面回転横ナデ	
17	G 3	M 2	無蓋高坏	10.75	11.85	8.2	やや密、径1㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰白	脚部はラッパ状に開き、裾部は屈折し端部が尖る。脚部中位に2条の沈線を巡らす。坏部は、ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、やや外反する口縁を持つ。体部中位外面に2条の沈線を巡らす。	坏部～脚部内外面回転横ナデ。坏部底部内面中央指オサエ	
18	S 3	46	無蓋高坏			10.9	やや粗、径1㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰	脚部はラッパ状に開き、中位に2条の沈線を巡らす。裾部上位に明瞭な3つの段を有す。裾部は少し内側に屈折し端部は尖る。	脚部内外面回転横ナデ	脚部片

第5表 南高野古墳出土須恵器観察表(3)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
19	S 2	M 1	長脚2段二方透かし有蓋高坏	12.35	17.4	15.4	やや密、径6㎜以下の砂粒を含む	灰黄	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、直立して尖る。透かしの間に2条、下段下に1条の沈線を巡らす。坏部は、丸みを持つ底部から弱く内弯しながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に短く出る。立上がり部は低く内傾し端部を丸くおさめる。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
20	S 1	M 1	長脚2段二方透かし有蓋高坏	13.05	17.1	16.45	密、径1㎜以下の白色粒を含む	灰白～褐灰	脚部は長脚二段三方透かしで透かしの位置が上段と下段で90°ずれる。ラッパ状に開き、裾部は、直立して尖る。透かしの間に2条の沈線を巡らし、下段下に明瞭な3つの段を有す。坏部は、丸みを持つ底部から弱く内弯しながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に短く出る。立上がり部は低く内傾し屈曲して立つ。端部を丸くおさめる。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
21	S 2	M 1	長脚2段二方透かし有蓋高坏	12.2	17.25	14.9	密	暗オリーブ、灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、直立して尖る。透かしの間に2条、下段下に1条の沈線を巡らす。坏部は、丸みを持つ底部から弱く内弯しながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に短く出る。立上がり部は低く内傾し端部を丸くおさめる。	坏部下方外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。坏部底部中央指ナデ	
22	G 1	M 2	蓋	13.9	4.6		密、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰白	扁平なつまみを持つ。天井部は緩やかに内弯し、口縁部はやや内弯して外方に開く。天井部と口縁部の境に稜を有す。口縁端部はやや尖る。	天井部中位回転ヘラ削り。天井部下位～口縁部内外面回転横ナデ。天井部内面指オサエ・横ナデ	
23	S 2	M 1	蓋	14.6	4.7		やや密	灰白	扁平なつまみを持つ。天井部は直線的に下り、口縁部はやや内弯して外方に開く。天井部と口縁部の境に稜を有す。口縁端部は尖る。	天井部中位回転ヘラ削り。天井部下位～口縁部内外面回転横ナデ。天井部内面指オサエ・横ナデ	19とセット
24	G 3	M 2	蓋	10.9	5.8		密	オリーブ灰、灰白	中央が尖る大きなつまみを持つ。天井部は緩やかに内弯し、口縁部は垂直に下がる。天井部と口縁部の境には明瞭な段を有す。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部～天井部内外面・つまみ回転横ナデ。天井部内面中央指ナデ	26とセット
25	G 3	M 2	長脚2段三方透かし脚付短頸壺	8.4	22.45	12.6	密、径4㎜以下の砂粒を含む	黒、灰白、にぶい橙、灰黄	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、小さく屈折して端部を丸くおさめる。透かしの間に2条の沈線を巡らす。体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で内弯する。肩部中位に2条の沈線を巡らせ、その間に刺突文をめぐらす。口縁部は直立し端部を丸くおさめる。口縁部上位内面に緩やかな段を持つ。	口縁部～脚部内外面回転横ナデ。体部底部内面指ナデ	
26	G 3	M 2	長脚2段三方透かし脚付短頸壺	8.3	21.6	12.75	密	オリーブ灰、灰白	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、小さく屈折して端部を丸くおさめる。透かしの間に2条の沈線を巡らす。体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で内弯する。肩部中位に2条の沈線を巡らせ、その間に刺突文をめぐらす。口縁部は直立し端部を丸くおさめる。口縁部上位内面に緩やかな段を持つ。	口縁部～脚部内外面回転横ナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。体部底部内面指ナデ	
27	G 3	M 2	脚付短頸壺	9.75	29.6	14.25	密	灰、オリーブ灰～暗オリーブ灰	体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で屈曲して口頸部に至る。肩部に2条の刺突文を巡らせ、その間に2条の沈線を巡らす。口頸部はやや外方に立上がり口縁部に至る。口頸部中位に2条の沈線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。	体部下位～体部肩部回転ヘラ削り。体部上部～口縁部外面回転横ナデ。脚部内外面回転横ナデ。口縁部～体部内面回転横ナデ。体部底部内面指ナデ	

第6表　南高野古墳出土須恵器観察表(4)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
28	G 1	M 1	鳥形つまみ付蓋		7.5		密	灰白、灰黄褐、暗黒灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現し、嘴は円錐状の形を呈すが、先端部は欠損している。嘴の上下に隙間を持つ。目と鼻孔は、棒状工具で刺突する。胴体背側に櫛状工具による刺突文を施し、羽の模様を表現している。尾は縦に扁平な形を呈すが先端部が欠損している。蓋体部はやや丸みを帯びて下り、返りは外反気味に内傾して長く下がる。	天井部上位外面回転ヘラ削り。天井部下位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～天井部内面回転横ナデ。天井部内面中央指ナデ	水鳥の一種
29	G 3	M 2	鳥形つまみ付蓋				密	灰白、灰黄褐、暗黒灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現し、嘴は横に扁平な形を呈す。目を竹管状工具で刺突し、鼻孔は、棒状工具で刺突する。胴体にかけて竹管状工具による円形の刺突文と櫛状工具による刺突文を施し、羽の模様を表現している。尾は横に扁平な形を呈す。蓋体部はやや丸みを帯びて下り、返りは内傾して長く下がる。	天井部上位外面回転ヘラ削り。天井部下位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～天井部内面回転横ナデ。天井部内面中央指ナデ	鴨の一種
30	G 3	M 2	脚付長頸壺	10.4	29.3	14.6	密、径6㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰～黒	台部は1段三方透かしで、外反して開き、台部中位で屈曲して下りる。台部下位に3つの段を持つ。裾部はやや外傾し端部を丸くおさめる。体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で屈曲して頸部に至る。体部中位と肩部にそれぞれ2条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり、中位から外反して口縁部に至る。口縁部は内側に屈曲して端部を丸くおさめる。	体部下位～体部中位回転ヘラ削り。体部外面下部叩き目。体部上部～口縁部外面回転横ナデ。脚部内外面回転横ナデ。口縁部～体部内面回転横ナデ。体部底部内面指ナデ	
31	G 3	M 2	長脚2段三方透かし脚付短頸壺	9.1	29.1	17.3	密	オリーブ灰、灰色	脚部は長脚二段三方透かしで、ラッパ状に開き、裾部は、内傾して端部は尖る。透かしの間と下段下にそれぞれ2条の沈線を巡らす。沈線に上位に刺突文を巡らす。体部は半円状に丸みを帯びて立上がり口縁部に至る。体部の中位に1条の沈線を巡らす。肩部に1条の沈線と1条の刺突文、1条の羽状文を巡らす。肩部から底部外面にカキ目を施す。口縁部は直立し端部を水平におさめる。	口縁部～脚部内外面回転横ナデ。体部外面下位叩き目。体部底部内面指ナデ	
32	G 3	M 2	提瓶	7.2	21.4		密	オリーブ黒	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背面回転ヘラ削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口頸部回転横ナデ	
33	G 2	M 2	提瓶	7.45	22.1		密、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	黒	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背面回転ヘラ削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口頸部回転横ナデ	把手付き、大型
34	G 2	M 2	提瓶	7.05	19.3		密、径1㎜以下の砂粒を少量含む、白色粒を極少量含む	黒	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背面回転ヘラ削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口頸部回転横ナデ	
35	G 2	M 2	提瓶	4.6	16.1		密	灰	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背面回転ヘラ削り、中央指オサエ。口頸部回転横ナデ	把手付き、小型

第7表 南高野古墳出土須恵器観察表(5)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
36	G 1	M 2	提瓶	85	20.3		密、径4㎜以下の砂粒を含む	灰～灰白、黒、浅黄、灰黄	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背面回転ヘラ削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口頸部回転横ナデ	
37	G 3	M 2	提瓶	5.8	17.9		密、径5㎜以下の砂粒を含む	灰白、灰、黒	口頸部は外上方に外反して開き、口縁部はやや内弯してのびる。端部は丸くおさめる。口頸部上位に2条1組の沈線を巡らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すが中央部はやや扁平である。肩部に環状耳がつく。	体部背・腹面回転ヘラ削り、中央指オサエ。口頸部回転横ナデ	
38	G 2	M 2	提瓶	9.5	21.5		密	暗赤褐、にぶい赤褐、灰白	口頸部は上方に伸びた後、外反して口縁部に至る。口縁部は内側に屈曲し端部を丸くおさめる。端部直下に稜を巡らす。口縁部に片口状の押さえと棒状工具による2ヶ所の透かし孔を施す。口頸部に上から板状工具による斜位の直線文・3条の沈線・ヘラ状工具による斜位の刺突文を巡らす。体部は楕円形を呈し、口頸部との境に段を有す。体部背面は扁平な円弧状を呈し、腹面は円弧状にやや弱く張り出す。	体部腹面・背面回転ヘラ削り。口頸部回転横ナデ	把手なし、口縁部に2ヶ所孔有り
39	G 2	M 2	短頸壺	6.6	6.2	4.9	密	青灰	やや平坦な底部を持つ。体部下方が強く張り、肩部で屈曲して口頸部に至る。口頸部は直立気味に立上がる。口縁部は強く外反し、端部を水平におさめる。	底部～体部中位外面回転ヘラ削り。肩部～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～体部内面回転横ナデ。底部内面指ナデ	
40	G 4	M 2	短頸壺	8.5	10.2		密、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰白～灰黄褐	楕円状の底部を持ち、丸みを帯びて立ち上がる。体部下位と肩部で屈曲する。肩部に1条の沈線を巡らす。口頸部は外弯気味に開き口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部～体部中位外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。底部内面指ナデ	
41	G 1	M 2	短頸壺	9.25	11.55	5.3	密、径1㎜程度の白色粒、礫を含む	オリーブ灰	平坦な底部から斜め外方に立上がり、肩部で屈曲して口縁部に至る。肩部に2条の刺突文を巡らす。口縁は直立し端部を丸くおさめる。	底部～体部下位外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ。底部内面指ナデ	
42	G 2	M 2	坩	11.15	5.95		密	灰	楕円状の底部を持つ。体部下位で屈曲して直立気味に立上がり口縁部に至る。体部上位に1条の沈線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。	底部～体部下位外面回転ヘラ削り。体部上位～口縁部内外面回転横ナデ。底部内面指オサエ・ナデ	マリか？
43	G 1	M 2	長頸壺	7.4	13.85	7.45	密	暗灰～灰	平坦な底部から丸みを帯びて立上がり肩部で屈曲して頸部に至る。頸部は斜め外方に開く。口縁部はやや内弯し、端部はやや尖る。	底部ヘラ削り。体部下位～中位外面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナデ	
44	G 3	M 2	長頸壺	8.65	20.0		密、径2㎜以下の砂粒を含む	オリーブ黒、灰～灰白	やや丸みを帯びた底部から斜め外方に立上がり肩部で屈曲して頸部に至る。体部中位に2条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり中位からやや外反気味に開き口縁部に至る。頸部中位に1条の沈線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。	底部～体部中位外面回転ヘラ削り。肩部～口縁部外面回転横ナデ。体部～口縁部内面回転横ナデ。底部内面指ナデ	
45	G 2	M 2	短頸壺	8.3	17.5	11.75	やや密	黒	やや丸みを帯びた底部から半円状に立上がり頸部に至る。頸部は外方に開く。口縁部は折り返し気味に肥厚し端部は水平におさめる。	底部～体部下位外面回転ヘラ削り、体部上位～口縁部内外面回転横ナデ	

第8表　南高野古墳出土須恵器観察表(6)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
46	G 1	M 2	壺	8.8	10.2		密	灰	やや扁平な底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。肩部から体部中位にかけて上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり、上位で外反する。口縁部は肩部との境で屈曲し外反気味に開く。頸部上位に櫛状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部中位外面回転ヘラ削り。体部上位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部内面～頸部内面上位回転横ナデ	
47	G 3	M 2	壺	11.15	13.95		密、径6mm以下の白色粒、砂粒を含む	灰白	扁平な底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。肩部から体部中位にかけて上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり、上位で外反する。口縁部は肩部との境で屈曲し外反気味に開く。頸部中位に櫛状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部下位外面ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
48	G 3	M 2	壺	11.4	14		密	灰白	扁平な底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。肩部から体部中位にかけて上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり、上位で外反する。口縁部は肩部との境で屈曲し外反気味に開く。頸部上位に櫛状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部下位外面ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
49	G 3	M 2	壺	13.2	16.4		緻密、径1mm以下の砂粒、白色粒をわずかに含む	黒	丸みのある底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。注口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に上から2条1組の沈線を巡らす。頸部上位から中位に縦位のヘラ状工具による直線文を巡らす。	底部外面ヘラ削り。体部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
50	G 2	M 2	壺	12.3	15.5		密	灰	丸みのある底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。注口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らし、その間をヘラ状工具による刺突文を施す。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に2条1組の沈線を巡らす。	底部～体部下位外面ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
51	G 3	M 2	壺	12.1	15.6		密、径1mm以下の砂粒、白色粒を含む	黒褐～黒	丸みのある底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。注口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に2条1組の沈線を巡らす。	底部～体部下位外面ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
52	G 3	M 2	壺	16.3	20.2		密、径3mm以下の砂粒を多く含む。白色粒を含む	黒	丸みのある底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。注口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らし、その間を櫛状工具による刺突文を施す。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に上から2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部上位と口縁部外面に縦位のヘラ状工具による直線文を巡らす。	口縁部～体部下位内外面回転横ナデ。底部外面回転ヘラ削り	

第9表　南高野古墳出土須恵器観察表(7)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
53	G3	M2	壺	14.2	16.0		密、径2㎜以下の砂粒、黒色粒を含む	黒、灰～灰白	丸みのある底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。注口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らし、その間をヘラ状工具による刺突文を施す。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に2条1組の沈線を巡らす。	底部～体部下位外面ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部～頸部内面回転横ナデ	
54	S2	46	坏蓋	11.4	3.9		緻密、白粒を含む	灰	楕円弧を描く天井部を持ち、口縁部は直立する。口縁端部は、わずかに内弯し尖る。	天井部外面上位ヘラ削り。天井部中位～口縁部内外面回転横ナデ。天井部内面回転横ナデ	
55	G3	M2	鳥形つまみ付蓋	11	7.1		やや粗	灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現している。頭は丸く、目や嘴等の細部の表現はない。鳥とつまみの台部とが別々に作られ接合されている。蓋体部はゆるやかに丸みを帯びて下がり、口縁部から垂直に下がる。体部と口縁部の境には明瞭な稜を施す。口縁部はやや内弯気味に下がり、端部を丸くおさめる。	口縁部～天井部内外面回転横ナデ。天井部内面中央指ナデ	
56	G3	M2	坏蓋	11.8	4.55		やや密、径1㎜以下の白色粒を多量に含む	灰	やや平坦な天井部を持ち、口縁部は垂直に下りる。端部は丸くおさめる。	天井部外面上位ヘラ削り。天井部中位～口縁部内外面回転横ナデ。天井部内面回転横ナデ	
57	G4	M2	坏蓋	11.95	4		密	灰白	平坦な天井部を持ち、口縁部は垂直に下りる。端部内面は内傾し尖る。	天井部外面上位ヘラ削り。天井部中位～口縁部内外面回転横ナデ。天井部内面回転横ナデ	
58	G3	M2	子持蓋	6.7	9.4		やや粗、径3㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は直線的に立上がり、肩部で屈曲する。中位に上から櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部は外反して立上がる。頸部中位に櫛状工具による刺突文を巡らす。頸部と口縁部の境に稜を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に明瞭な段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
59	G3	M2	子持蓋	6.0	9.85		やや粗、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は直線的に立上がり、肩部で屈曲する。中位に上から櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部は外反して立上がる。頸部中位に櫛状工具による刺突文を巡らす。口縁部は内弯気味に外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に明瞭な段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
60	G3	M2	子持蓋				やや粗、径2㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰～灰白	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの口縁部は欠損。つまみの体部は扁平な球胴形を呈し、中位に櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部は直立して立上がる。頸部に櫛状工具による刺突文を巡らす。蓋体部は緩やかな丸みを帯びて下がる。返りはやや外弯気味に長く下がり、端部は丸い。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	

第10表　南高野古墳出土須恵器観察表(8)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
61	G 3	M 2	子持蓋	8.4	10.6		やや粗、径5㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は垂直に立上がり、肩部で屈曲する。中位に上から櫛状工具による刺突文、1条の沈線、櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部はゆるやかに外反気味に立上がる。頸部と口縁部の境に稜を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がる。返りはやや外反気味に内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
62	G 3	M 2	子持蓋	8.1	10.8		やや粗	灰～灰白	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球胴形を呈し、中位に櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部は直立して立上がる。頸部と口縁部の境に稜を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りは垂直に長く下がり、端部は丸い。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
63	G 3	M 2	子持蓋	7.95	12.0		やや粗、径1㎜以下の砂粒、白色粒を多く含む	明褐灰～灰	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球胴形を呈し、中位に上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部はやや外反気味に立上がる。頸部中位に櫛状工具による刺突文を巡らす。頸部と口縁部の境に稜を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
64	G 1	M 2	子持蓋	7.55	11.2		やや粗、径1㎜～2㎜の白砂粒を含む	灰	ハソウ形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球胴形を呈し、中位に上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文を巡らす。つまみ頸部は直立して立上がる。頸部と口縁部の境に稜を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を水平におさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面ヘラ削り	
65	G 3	M 2	平瓶	16.35	14.7		密	灰白	やや平坦な底部から半円状に立上がり口頸部に至る。体部下位から底部にカキ目を施す。口頸部は外方に開き、中位でやや内弯気味になって口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部～体部外面回転ヘラ削り、体部上位～口縁部外面回転横ナデ	
66	G 1	M 1	平瓶	6.05	13.35		密、径5㎜以下の砂粒を含む	灰褐～灰白	比較的平坦な底部を持ち、体部は楕円形を呈す。体部上半分にカキ目を施す。口頸部は斜め外方に開き口縁部に至る。口頸部中位に1条の沈線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。胴部上位に2㎝弱の円形粘土粒を1個貼り付ける。	底部～体部下位外面回転ヘラ削り、体部上位外面カキ目調整。口縁部内外面回転横ナデ	
67	S 1	M 1	平瓶		11.5	5.7	密	灰白	平坦な底部から楕円状に立上がり口頸部に至る。体部の肩部に刺突文を巡らす。口頸部は直立して立上がり、中位からやや外反する。	底部～体部外面回転ヘラ削り、体部上位～口縁部外面回転横ナデ	口縁部を人為的に打ち欠いた痕跡有り。
68	G 9	Ⅳ	蓋口縁部片				密	灰白	天井部は斜め外方に開き、やや屈折したのに口縁部に至る。口縁部は屈折し垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	
69	G 9	Ⅳ	蓋口縁部片				密	灰白	天井部は斜め外方に開き、口縁部は屈曲して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	

第11表　南高野古墳出土須恵器観察表(9)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
70	G 9	Ⅳ	蓋口縁部片				密	灰白	天井部は斜め外方に開き、口縁部は屈曲して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	
71	H 9	Ⅶ	高坏脚部片				密	暗オリーブ灰、灰白	脚部下位はラッパ状に開き、裾部との境に稜を有す。裾部はやや内弯気味に屈曲し、端部は鈍く尖る。	脚部内外面回転横ナデ	
72	G 9	Ⅳ	蓋口縁部片				密	浅黄	天井部は斜め外方に開き、口縁部は屈曲して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	
73	G 9	Ⅳ	碗口縁部片				やや粗	明青灰	体部上位より内弯して立上がり口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	体部内外面回転横ナデ	
74	G 4	M 2	子持蓋口縁部片	6.4			やや粗	灰	頸部以下欠損。口縁部は外方にやや内弯気味に開き、端部を丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ	
75	G 3	M 2	子持蓋口縁部片	7.3			やや粗	灰白	頸部以下欠損。頸部は直立して立上がり、口縁部は外方に開き中位に不明瞭な段を有す。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ	
76	S 6	25	蓋頂部片つまみ付き				やや粗	オリーブ灰	つまみは弧状に凹み、中心部はやや尖る。天井部は丸みを帯びて外下方に開く。口縁部欠損。	内外面回転横ナデ	
77	S 3	35	蓋頂部片つまみ付き				密、径2㎜以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰	天井部はやや丸みを帯びて下がる。口縁部欠損。つまみは装飾つまみの台部で装飾部は欠損。	天井部外面回転横ナデ、内面横ナデ	
78	G 3	M 1	蓋口縁部片	12			やや密	灰	天井部欠損。天井部と口縁部の境に明瞭な稜を有す。口縁部はやや内弯気味に外傾して下がる。端部はわずかに外方へ屈折し丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ	
79	G10	Ⅱ	坏蓋口縁部片	13.5			密	緑灰	天井部上位を欠損。天井部下位は丸みをもって下る。天井部と口縁部の境には沈線状の段を有す。口縁部は外傾して下がり、端部は外方につまみ出して尖る。端部内面に明瞭な段を有す。	天井部左回転ヘラ削り1/2、口縁部内外面・天井部下位回転横ナデ	
80	G 9	Ⅵ	坏身	12	3.8	4.2	密	灰白	やや凹みのある底部からゆるやかに内弯して受部に至る。受部は斜め上方に短く出る。立上がり部は内傾し端部が鋭く尖る。	底部外面回転ヘラ削り、中央は指ナデ。体部～口縁部内外面回転横ナデ。底部内面指ナデ	
81	G11	Ⅱ	高坏坏部片	14.25	5.18		やや粗、径7㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰白	坏部の底部はやや丸みを帯びて立上がり、体部中位で屈曲し直線的に立上がり口縁部に至る。体部中位に2条の沈線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。	坏部下位外面回転ヘラ削り、その他の内外面回転横ナデ	

第12表　南高野古墳出土須恵器観察表(10)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
82	G11	Ⅱ	壺	8.6	10.0		やや粗、径3㎜以下の砂粒、白色粒を含む	灰黄、灰	やや扁平な底部、やや扁平な球胴を持つ。肩部下に穿孔。肩部から体部中位にかけて上から櫛状工具による刺突文、2条1組の沈線、櫛状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立して立上がり、上位で外反する。口縁部は肩部との境で屈曲し外反気味に開く。頸部上位に櫛状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部中位外面回転ヘラ削り。体部上位～口縁部外面回転横ナデ。口縁部内面～頸部内面上位回転横ナデ	
83	G 9	Ⅳ	短頸壺	4.5	11.05	3.4	密	灰	やや扁平な底部から上外方にのび肩部で屈曲して口頸部に至る。口頸部はやや内弯気味に垂直にのび口縁端部を丸くおさめる。	体部～口縁部回転横ナデ、体部下部～底部ヘラ削り後ナデ	
84	H10	Ⅳ	脚付壺口縁部片	9.2			やや密	灰、灰白	頸部はやや丸く上がり、口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。口縁端部はやや外方に屈折して端部を水平におさめる。	内外面回転横ナデ	
85			脚付壺口縁部片				密	灰～黒、灰黄	脚部に長方形の透かし孔を2段持ち、その間に2条の沈線を巡らす。	脚部内面ヘラ削り・横ナデ、外面横ナデ	
86	H10	Ⅳ	脚付壺口縁部片				やや粗	灰白	脚部中位に長方形の透かし孔を有す。その上下に2条1組の沈線を巡らす。脚部は外下方に開き、口縁部は屈折して垂直に下がる。端部は面取りされ水平におさめる。	内外面回転横ナデ	95と同一個体
87	S 5	46	高台付坏身	14.3	3.6	10.1	緻密、白粒を含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縁端部はとがる。高台は断面四角形で垂直に下がり、接地面はやや丸い。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縁部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
88	S 5	46	高台付坏身	14.0	3.9	11.2	密、白粒・黒斑を少し含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縁端部はとがる。高台は断面四角形で外面はやや丸みを帯び、内面は内弯する。端部は外側で接地する。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縁部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
89	S 5	46	高台付坏身	14.2	3.65	10.9	密、白粒・黒斑を少し含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縁端部はとがる。高台は断面四角形でやや外傾して下がる。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縁部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
90	I 11	Ⅵ	鉢口縁部片	17.0			やや粗、径2㎜以下の長石をわずかに含む	灰白	口縁部片で、垂直に立上がり、端部は水平におさめる。内面に1条の沈線を施す。	内外面回転横ナデ	
91	S 5	46	脚付壺体部片				やや粗	灰	底部及び肩部を欠損。底部より半円状に立上がり、肩部で屈曲する。肩部から体部上位に2条2組の沈線が巡り、その間に刺突文が巡る。	底部ヘラ削り後横ナデ、体部外面回転横ナデ、内面指ナデ	
92	G 4	M 2	鳥形装飾片		5.65		密	灰	鳥形装飾片。足部は壺との接合面で剥離しており、大型壺等の胴部に接合されていたと思われる。頭上は鶏冠のように扁平になっていることから、鶏を表現したと思われる。目は棒状工具による刺突で表現されており、鼻孔は非常に細い工具で刺突されている。嘴部は円錐状に丸くおさめる。頸から胴部の膨らみは弱く、胴部下部から尾にかけて膨らむ。尾は横に扁平なつまみ出しで整えている。	手づくねによる成形	

第13表　南高野古墳出土須恵器観察表(11)

図版番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
93	G 3	M 2	鳥形装飾つまみ片		3.35		密	灰	翼を閉じた鳥形装飾片。足の部分はつまみ台部に接合すると思われるが下部を欠損。目と鼻孔は竹管状工具による刺突によって表現されている。羽の模様などの施文はみられない。嘴の部分は欠損。尾は横に扁平におさめる。	手づくねによる成形	
94	G 9	Ⅵ	動物装飾片		5.95		密	灰	動物装飾片。足は1本で剥離面が水平に近いことから、器台など大型土器の扁平な部分に接合されていたと思われる。大きく外反する耳（片方欠損）が付けられ、目は竹管状工具による刺突で表現されている。口はヘラ切りによって横に大きく開けた様子を表現している。頭部にくらべ胴部は細く、尾は粘土を絞り込んで引き出されているが先端部は欠損する。		
95	G 9	Ⅳ	大型器台口縁部片				密、径2.5㎜以下の砂粒、長石、雲母を含む	灰、灰黄褐	天井部はやや丸みを持ち、体部との境に剥離痕有り。天井部に装飾片等の剥離痕がみられる。体部は下方に下がる。	天井部外面・体部外面指ナデ、天井部・体部内面ヘラ削り	
95	H11		器台小壺底部片				やや粗、0.5㎜以下の白粒を多く含む	灰	小壺状の底部、接合用の粘土紐を高台風に底部に貼り付ける。	底部内面回転ナデ、中央は指オサエ	
96	G10	Ⅱ	大型器台口縁部片				密、径3㎜以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰	天井部はやや丸みを持ち、体部との境に鍔状の粘土帯を巡らす。天井部に装飾片等の剥離痕がみられる。体部は下方に下がる。	天井部外面・体部外面指ナデ、天井部・体部内面ヘラ削り	
98	G 9	Ⅳ	大型器台口縁部片				密、径3㎜以下の砂粒を含む、長石、石英、雲母を含む	青灰、褐灰	天井部扁平、体部との境に斜め外方に粘土を引き出す。装飾片などの剥離痕有り。体部はやや内傾して下がる。	天井部外面・体部外面指ナデ、天井部・体部内面ヘラ削り	
99			大型器台口縁部片				粗	暗緑灰～緑灰	天井部はやや丸みを持ち、体部との境に鍔状の粘土帯を巡らす。天井部に装飾片等の剥離痕がみられる。体部は下方に下がる。楕円形の透かし孔を有す。	内面ヘラ削り、外面横位ナデ	
100	I12	Ⅱ	大型器台胴部片				密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石を多く含む	灰オリーブ	体部片でやや内弯気味に内傾して下がる。2条1組の沈線と楕円形の透かし孔を有す。	体部内面ヘラ削り。外面横ナデ	
101	G 9	Ⅷ	大型器台胴部片				密、径7㎜以下の砂粒を多量に含む、長石を含む	青灰、灰黄褐	体部片で、垂直に下がる。1条の沈線を巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
102	H11	Ⅳ	大型器台胴部片				密、径2㎜以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰黄褐	体部片で、外下方に広がる。2条沈線を巡らせ、楕円形の透かし孔有り。	体部外面縦位のヘラ削り。内面横ナデ	
103	I11		大型器台胴部片				密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石を多く含む	青灰、灰	体部片でやや内弯気味に内傾して下がる。2条1組の沈線と楕円形の透かし孔を有す。	体部内面ヘラ削り。外面横ナデ	

第14表　南高野古墳出土須恵器観察表(12)

挿図番号	地区遺構	層位	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他(釉薬など)
104	H11	Ⅵ	大型器台胴部片				密、長石を多く含む	灰白	体部片で、外下方にやや開く。2条1組の沈線を2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
104	I11	Ⅵ	大型器台胴部片				密、長石を多く含む	灰白	体部片て、外下方にやや開く。2条1組の沈線を2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
105	G11	Ⅱ	大型器台胴部片				密、径5㎜以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰黄褐	体部片で、外下方に広がる。2条沈線を巡らせ、楕円形の透かし孔有り。	体部外面縦位のヘラ削り。内面横ナデ	
106	G9	Ⅳ	大型器台胴部片				密、径5㎜以下の砂粒、長石、雲母を含む	灰、暗青灰	体部片で、垂直に下がる。2条1組の沈線が2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
107	H11	Ⅴ	大型器台脚部片				密、径3㎜以下の砂粒を含む、長石を少量含む	灰白、灰黄褐、灰黄	脚部の裾部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
108	H12	Ⅱ	大型器台脚部片				密、径6㎜以下の砂粒、長石を含む	暗青灰、灰、灰黄褐	脚部の裾部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
109	I12	Ⅱ	大型器台脚部片				密、径4㎜以下の砂粒、長石、石英を含む	青灰、灰黄褐	脚部の裾部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
110	I11	Ⅶ	大型器台脚部片				密、径2㎜以下の砂粒を含む	青灰、灰黄褐	脚部の裾部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は尖る。	内外面横ナデ	
111	H11		大型器台脚部片				密、径2㎜以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰	脚部の裾部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
112	H11	Ⅱ	甕胴部片				密	オリーブ灰	胴部片、丸みを帯びて立ち上がる。	体部内面渦巻き文当て具痕、体部外面擬格子タタキ目文後カキ目調整	
113	H11	Ⅱ	甕胴部片				密	暗灰～黒	胴部片、やや丸みを帯びて立ち上がる。	体部内面渦巻き文当て具痕、体部外面擬格子タタキ目文後カキ目調整	

第15表　耳環計測表

挿図番号	地区	層位	長　径	短　径	断面径	重　量	備　　考
114	G 4	M 1	3.06	1.97	0.55	13.7	銅芯金板張り、内側に加工痕
115	G 4	M 2	3.22	1.80	0.71	16.5	銅芯銀板張り、内側に研磨痕
116	G 4	M 2	2.89	1.75	0.57	6.9	銅芯銀板張り、内側に加工痕、一部欠損
117	G 2	M 2	3.82	1.89	0.96	9.7	中空銅板巻、鍍金、銅板接合部有り
118	G 2	M 2	3.75	1.94	0.91	10.6	中空銅板巻、鍍金、銅板接合部有り

第16表　鉄鏃計測表

単位cm　（　）は残存値

挿図番号	種別	地区	層位	全長	鏃身部		頸部（茎被部）		茎　部		形　状			備　　考
					長さ	最大幅	長さ	最大幅	長さ	重量(g)	身部形	身部関	茎部関	
135	細根鏃	G 1	M 2	(17.8)	3.2	0.9	9.1	0.7	(5.5)	17.9	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
136	細根鏃	G 1	M 2	(16.2)	2.9	0.8	9.5	0.6	(3.8)	15.4	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
137	細根鏃	G 1	M 2	20.4	3.6	0.9	9.4	0.6	7.4	18.9	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
138	細根鏃	G 1	M 2	(17.2)	2.7	0.8	9.8	0.6	(4.7)	18.5	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
139	細根鏃	G 1	M 2	20.4	3.4	0.9	9.0	0.6	8.0	17.4	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
140	細根鏃	G 1	M 2	19.6	3.4	1.00	9.0	0.6	7.3	17.2	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
141	細根鏃	G 1	M 2	(14.8)	3.3	0.9	9.3	0.6	(2.3)	14.3	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
142	細根鏃	G 1	M 2	(15.5)	3.3	0.9	8.6	0.6	(3.6)	16.3	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
143	細根鏃	G 1	M 2	(19.1)	(3.2)	0.9	9.2	0.6	6.8	19.6	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
144	細根鏃	G 1	M 2	20.8	3.4	0.9	9.4	0.7	8.0	18.4	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
145	細根鏃	G 1	M 2	20.8	3.3	0.8	9.2	0.6	8.4	19.2	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
146	細根鏃	G 1	M 2	22.7	3.2	0.8	9.2	0.6	10.31	18.0	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
147	細根鏃	G 1	M 2	20.2	3.3	0.8	8.9	0.6	8.0	17.6	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
148	細根鏃	G 1	M 2	(16.9)	3.1	0.9	9.3	0.5	(4.2)	16.2	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
149	細根鏃	G 1	M 2	(16.7)	(2.3)	0.9	9.1	0.6	(5.3)	17.5	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
150	細根鏃	G 1	M 2	(13.1)	3.1	0.8	8.5	0.6	(1.6)	11.3	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
151	細根鏃	G 1	M 2	19.9	3.4	0.9	9.3	0.7	7.2	16.3	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
152	細根鏃	G 1	M 2	(15.9)	(2.1)	0.8	9.1	0.7	(4.8)	13.9	—	無関	棘状関	身先端欠損、矢柄木質残存、樹皮一部残存
153	細根鏃	G 1	M 2	(11.4)	3.0	1.2	6.5	0.7	(1.9)	8.0	—	—	—	矢柄木質残存、樹皮一部残存
154	細根鏃	G 1	M 2	20.3	3.3	0.8	9.1	0.5	7.9	19.4	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
155	細根鏃	G 1	M 2	(18.8)	3.6	0.9	9.1	0.6	(6.1)	16.7	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
156	細根鏃	G 1	M 2	20.7	3.4	0.9	9.8	0.6	7.6	20.6	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
157	細根鏃	G 1	M 2	(18.0)	3.4	0.8	9.0	0.6	(5.7)	15.5	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
158	細根鏃	G 2	M 2	(12.7)	(2.3)	0.7	5.0	0.4	5.4	6.6	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
159	細根鏃	G 1	M 2	(18.3)	2.9	0.9	8.3	0.6	(7.1)	19.0	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
160	細根鏃	G 1	M 2	20.9	3.2	0.9	9.3	0.6	8.5	17.8	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
161	細根鏃	G 1	M 2	(17.6)	3.4	1.0	8.9	0.6	(5.3)	19.6	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
162	細根鏃	G 1	M 2	21.6	3.1	0.9	9.7	0.7	8.8	19.1	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
163	細根鏃	G 1	M 2	(17.0)	3.2	0.9	9.6	0.5	(4.1)	17.8	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
164	細根鏃	G 1	M 2	21.4	3.2	0.9	11.0	0.7	7.2	20.1	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
165	細根鏃	G 1	M 2	(17.2)	3.3	1.0	9.0	0.6	(4.9)	15.7	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
166	細根鏃	G 1	M 2	(18.1)	(2.8)	1.0	7.9	0.7	(7.4)	20.0	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
167	細根鏃	G 1	M 2	(18.9)	3.3	0.8	9.1	0.6	(6.5)	18.9	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
168	細根鏃	G 1	M 2	(15.0)	3.5	0.9	7.8	0.6	(3.7)	14.8	柳葉形	無関	棘状関	矢柄木質残存、樹皮一部残存
169	細根鏃	G 1	M 2	(10.9)	—	—	(4.8)	0.5	(6.1)	8.7	—	—	—	身部欠損、矢柄木質残存、樹皮一部残存
170	細根鏃	G 1	M 2	(6.0)	—	—	—	—	(6.0)	4.2	—	—	—	茎部・矢柄木質残存、樹皮一部残存
171	細根鏃	—	—	(4.7)	2.8	(0.8)	(1.9)	(0.4)	—	2.7	柳葉形	無関	棘状関	身部・頸部一部残存
172	細根鏃	G 1	M 2	(3.3)			(3.3)	(0.6)	—	2.0	—	—	棘状関	頸部一部残存
173	広根鏃	—	—	(8.9)	(2.7)	2.5	2.6	0.6	3.7	7.5	三角形	無関	無関	身先端欠損、矢柄木質残存、樹皮一部残存

第17表　太刀・刀子計測表

挿図番号	種別	地区	層位	全長(cm)	刃部		茎部		重量(g)	備考
					長さ(cm)	最大幅(cm)	長さ(cm)	最大幅(cm)		
174	太刀	—	—	87.0					667	
181	刀子	G 4	M 2	(9.40)	(5.35)	1.59	(4.05)	2.08	23.9	
182	太刀	—	—	(7.70)	——	——	(7.70)	1.44	14.1	太刀の柄部
183	刀子	G 2	M 2	(9.55)	(9.55)	1.97	——	——	19.9	
184	刀子	G 3	M 1	(8.47)	(2.92)	1.20	(5.55)	1.10	17.9	
185	刀子	G 3	M 2	(6.59)	(6.59)	1.22	——	——	8.5	

第18表　鉄製品計測表

挿図番号	種別	地区	層位	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
175	鍔	G 2	M 2	6.83	5.99	0.4	45.9	
176	鍔	—	—	7.30	3.54	0.37	59.5	
177	鍔	—	—	(5.73)	(4.27)	0.3	10.2	
178	鏃	G 2	M 2	(3.8)	3.2	1.9	33.3	
179	鏃	S 2	—	4.45	3.56	1.96	20.4	
180	鏃	G 1	M 2	3.96	——	1.56	9.8	
186	太刀	G 2	M 2	——	——	0.65	2.9	太刀の足金物か

第19表　鉄釘計測表

挿図番号	種別	地区	層位	残存長（cm）	幅（cm）	残存重量（g）	備考
187	鉄釘	G 1	M 2	(2.4)	0.4	2.2	木棺の鉄釘か、木質残存
188	鉄釘			(1.65)	0.4	0.8	
189	鉄釘	G 1	M 2	(2.6)	0.65	2.8	木棺の鉄釘か、木質残存
190	鉄釘	G 2	M 2	(2.98)	0.64	5.6	木棺の鉄釘か、木質残存
191	鉄釘			(2.95)	0.45	1.7	
192	鉄釘			(2.21)	0.75	2.3	木棺の鉄釘か、木質残存

二　ノ　井　遺　跡

第5章　二ノ井遺跡の調査

第1節　A地区の遺構と遺物

A地区の概観

断面観察と検出した遺構からA地区（E5～G9区）の概観を述べる。A地区の現地表面は標高29m前後で、耕作土の下に厚さ約2mの砂礫層が堆積している。重機により砂礫層を除去したところ、暗褐色土が検出され、数本の溝状プランが検出された。これらのプランはB地区にも同様にみられ、当該調査区全体を覆う砂礫層の下にみられる近世の旧耕作面ととらえ今回の調査では調査対象から外した。以下、旧耕作面より下から検出した遺構の概要を述べる。

A地区の東端からは、溝状遺構（SD11）を検出した。SD11は、二ノ井遺跡の東に位置する南高野古墳の周溝であることが確認できた。周溝は調査区本層序の第VI層より掘り込まれていた。周溝より西7m地点で、調査区全体で確認されているV層が突然無くなっており、おそらく古墳築造のために盛土として削られたと考えられる。そのため、古墳築造当時の地表面は基本層序の第V層（標高26m前後）であったと思われる。V層の上にIV層が堆積し、その上にしまりのゆるい土（以下、堆積層と呼ぶ）が不安定な状態で堆積している。F5区で検出したSD16Bを挟むようにE4～G7区にかけては、下からIVb→IVa→IVa→IVbと層位が逆転する場所を確認することができた。その層は標高26.5m前後でほぼ水平になっている。このことから、この層位の逆転はSD16Bの掘削によるものと思われ、SD16B掘削時に同時にSD16B周辺の整地が行われたと考えられる。その目的が開田のためなのか、屋敷等の整地のためなのかは不明である。またSD16Bの下位にはSD16が存在する。SD16については後述するが、SD11と同様に第V層より掘り込まれており、その掘削時期が古墳築造時期に当たり、盛土用の土採取と周辺との区画の両方を意識した溝の可能性も指摘できる。

A地区からは、土坑3基（SK1・7・8）、溝2条（SD10・16）、土坑状遺構2基（SX1・2）、ピット（P）9基（P7・8、P18～22、P30・31）を検出した。以下、主な遺構と出土遺物の説明をする。

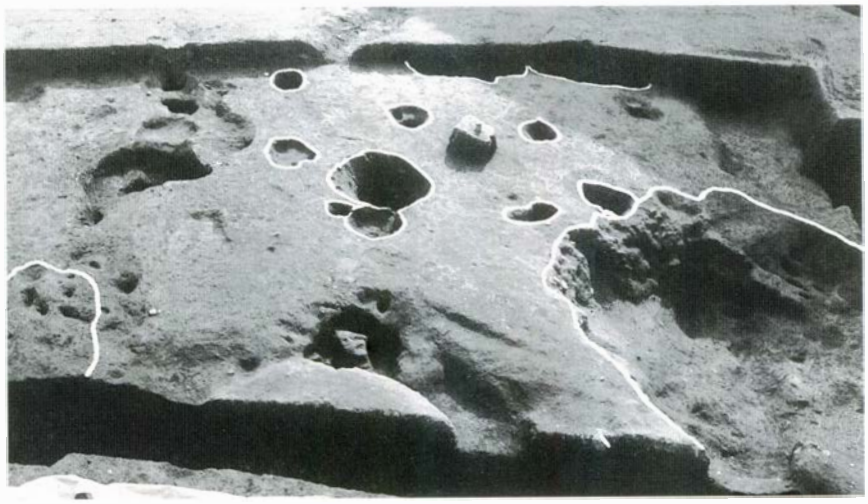
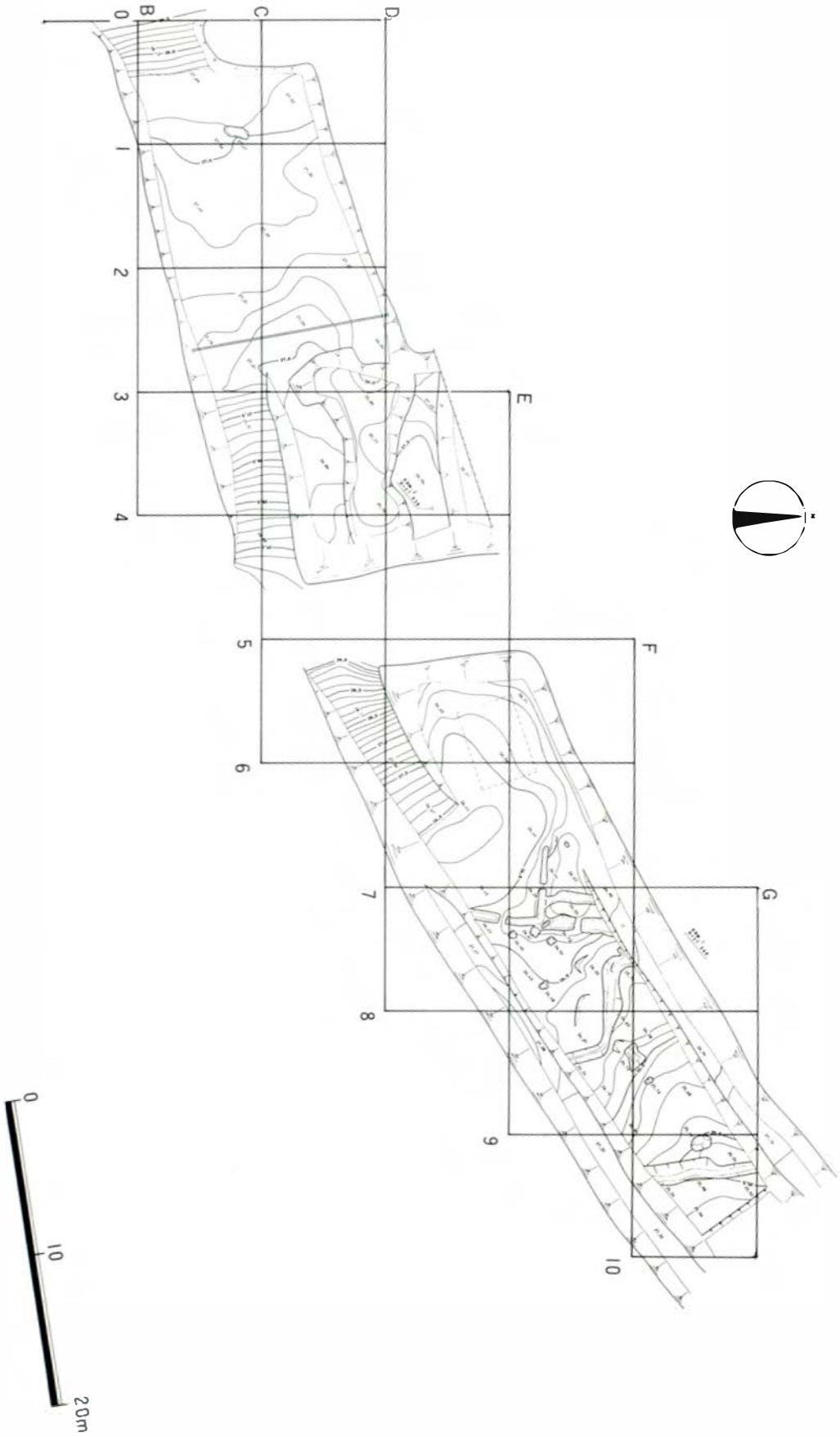
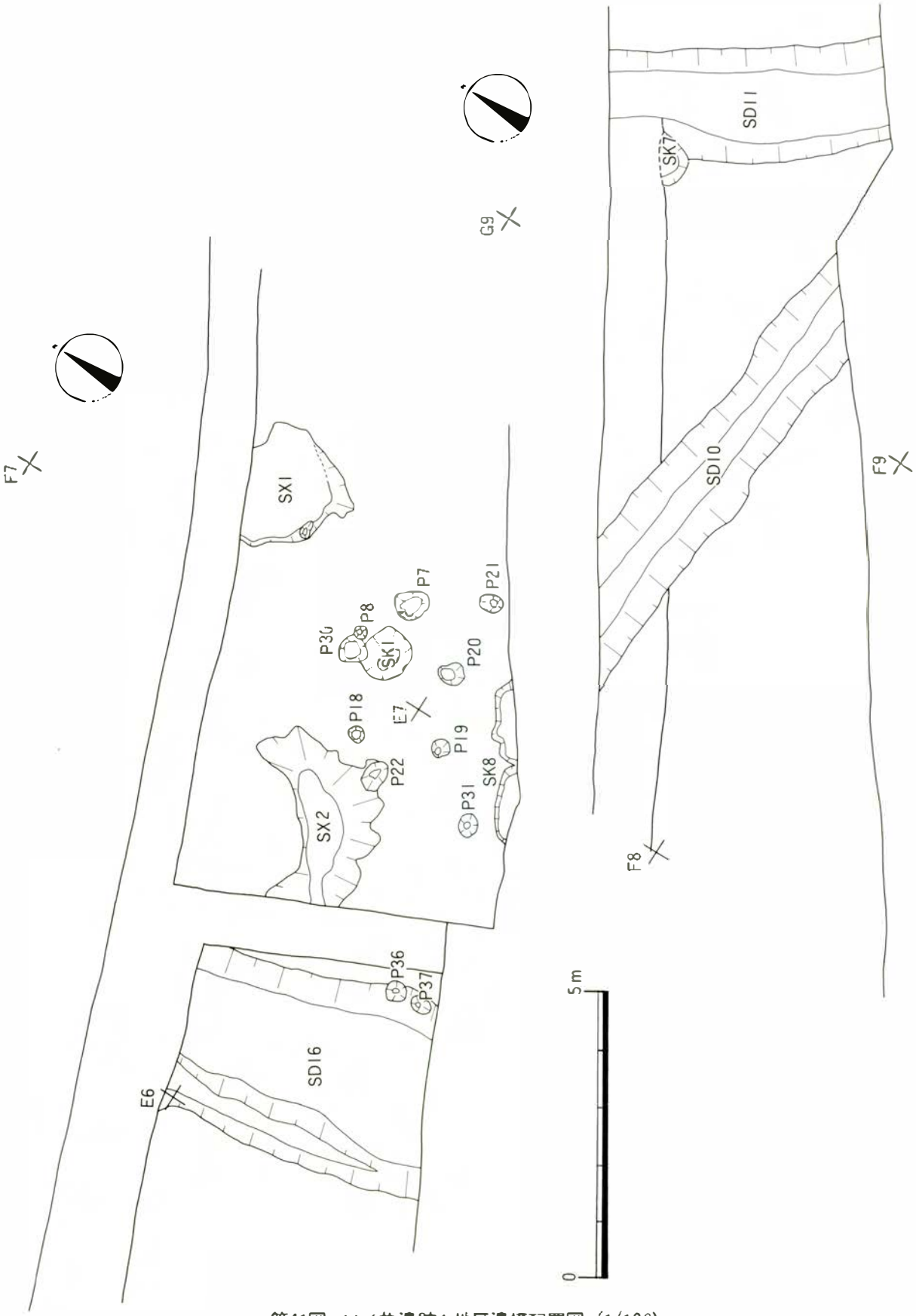


写真　A地区遺構検出状況（北より）



第40図　二ノ井遺跡地形測量図・グリッド設定図（1/400）



第41図　二ノ井遺跡A地区遺構配置図（1/100）

ＳＫ１

ＳＫ１は、Ｆ６・７区に位置する。プランは標高26.45mの整地層で確認した。長軸0.93m、短軸0.83m、深さ0.4mを測り、平面形は、楕円形を呈す。開田等に伴う整地層より掘り込まれている。埋土には拳大前後の礫を数点含む。

出土遺物は、土師器２点、山茶碗１点、土師器皿12点が出土した。その内土師器皿２点と土師器甕を実測した。

土師器皿（第73図506・514）[1]

506・514は、土師器皿Ｂ類に属し、底部から体部外面に指圧痕がみられ、体部内面は横ナデ調整がされている。506は、底部と体部外面の境に横ナデが１条施される。

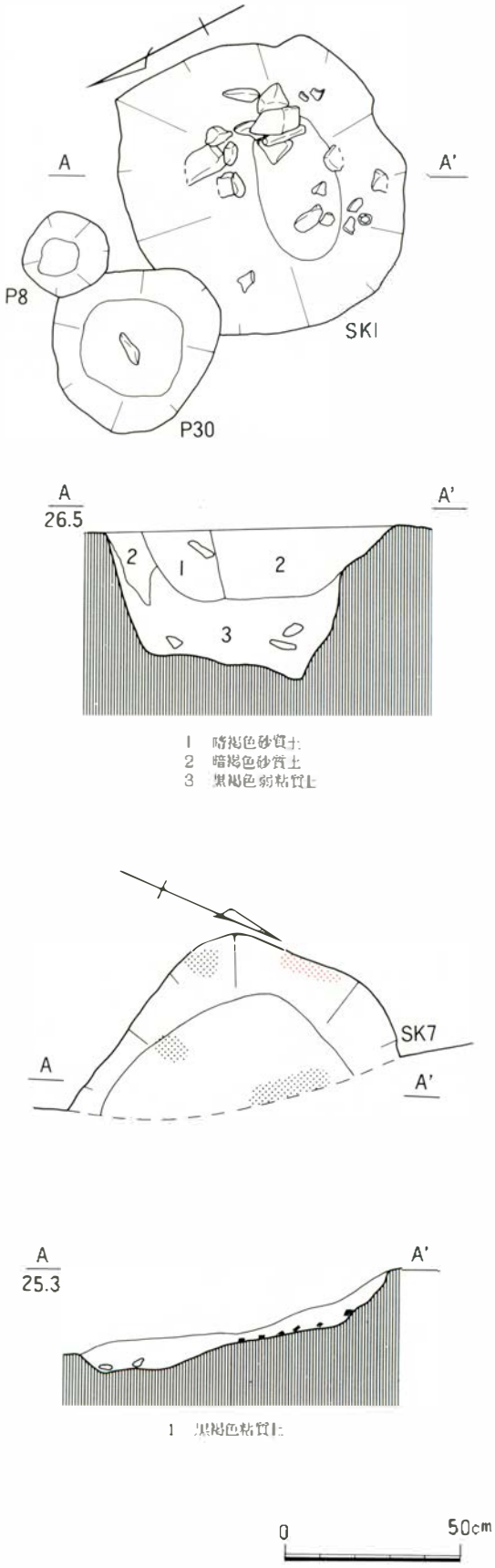
土師器（第67図378）

378は、土師器の甕の口縁部片で、口縁部から体部内外面にハケメ調整が施され、頸部外面には指圧痕が認められる。口縁端部はつまみ上げるような形状を呈し、外面に煤が付着する。器形の特徴から奈良期の丸底甕と思われる。出土遺物より、中世墓の可能性も考えられる。ＳＫ１の周辺からは数基のピット群を検出したが、それらとの関連は不明である。

1）土師器皿の分類は、池田町教育委員会　1997「六之井深池遺跡発掘調査報告書」を参考にした。

ＳＫ７

ＳＫ７はＧ９区に位置する。プランは標高25.3mのⅥ層直上で確認した。ＳＤ11を切るように出土したが、断面観察用のトレンチにより約半分しか確認できなかった。残存する遺構は、長軸0.95m、短軸0.51m、深さ0.10mを測る。平面形は楕円形を呈していたと考えられる。底部からは焼土と炭化物を確認した。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については不明である。



第42図　SK1・7実測図(1/20)

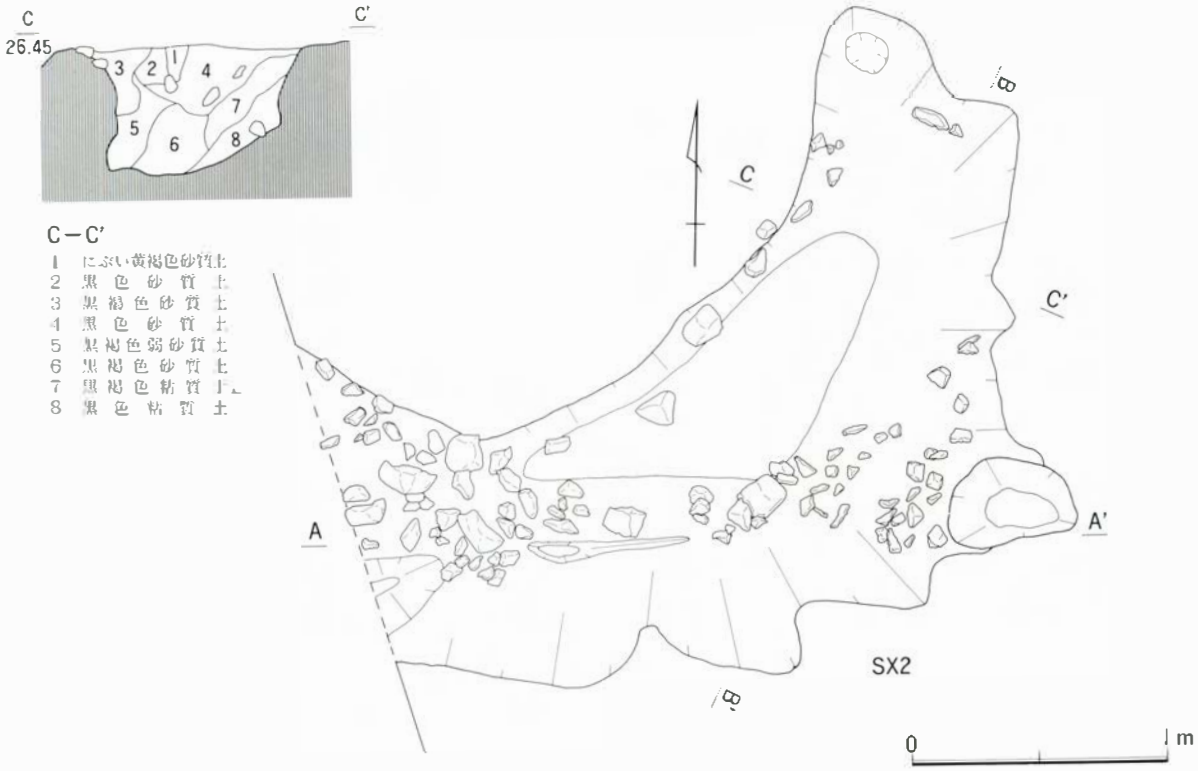
第43図　S×1実測図(1/20)

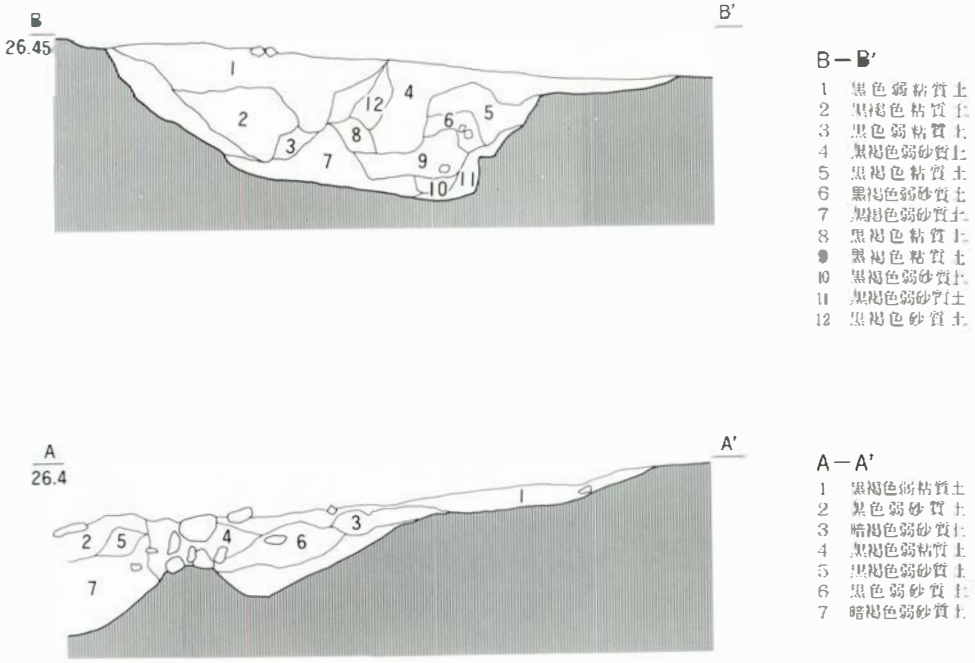
SX1

SX1は、F7区に位置する。プランは標高26.3～26.5mの整地層で確認した。断面観察用トレンチにより約4分の1が削られているが、残存する遺構は、長軸2.22m、短軸1.71m、深さ0.07mを測り、平面形は四角形を呈していたと考えられる。底部にはわずかに焼土らしき土を確認した。一見竪穴状遺構に思われるが、建物の存在を示す柱穴痕等を確認することはできなかった。出土遺物は、弥生土器・土師器13点、山茶碗1点が出土した。

SX2

SX2は、E6～F6区に位置する。プランは標高26.2～26.4mの整地層で確認した。長軸3.28m、短軸1.47m、深さ0.54mを測る。平面形は三日月形を呈す。短軸方向の断面はV字状を呈し、拳大前後の礫が多く入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については不明である。





第44図　ＳＸ２実測図（1/30）

ＳＤ10

ＳＤ10は、Ｇ８～Ｇ９区に位置する。プランは標高26.2ｍの堆積層で確認した。調査区を横切るように西から東へ伸びる。方位は、N—101°—Eである。検出した溝の長さは7.22ｍ、最大幅1.54ｍ、深さ0.78ｍを測る。断面形状は逆台形を呈す。埋土は砂礫層と砂層が交互に堆積し、用水などの流路と思われる。出土遺物は、縄文土器１点、弥生土器・土師器17点、須恵器８点、瓦２点、山茶碗５点、土師器皿１点が出土した。その内須恵器１点と瓦１点（第69図388）を実測した。

須恵器（第70図402）

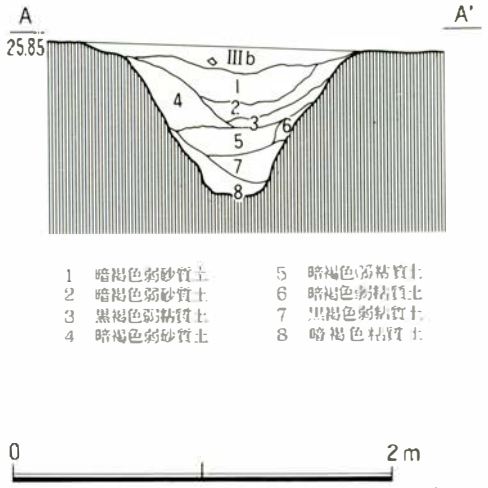
402は、須恵器の坏身Ｂ類の底部片である。底部内面は平滑である。高台は端部がやや押しつぶれ、底部外面中央が接地する。

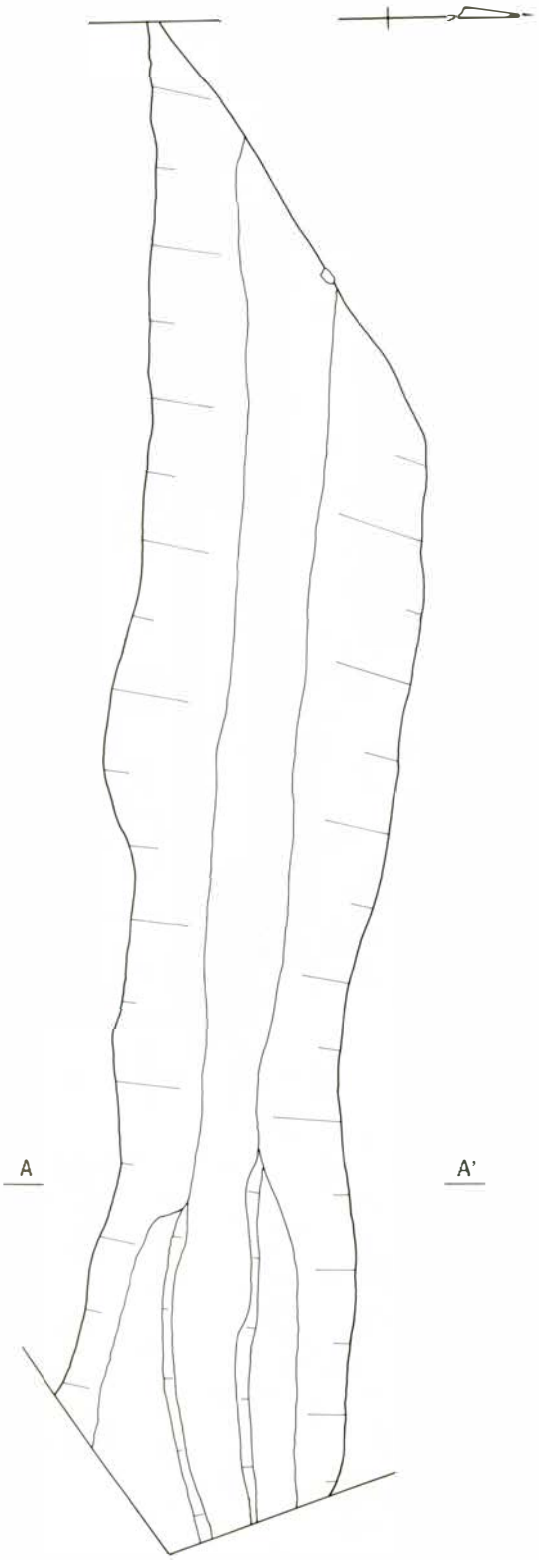
瓦（第69図388）

388は、平瓦の端部片である。凸面は格子目叩き調整が施される。焼成は硬質である。

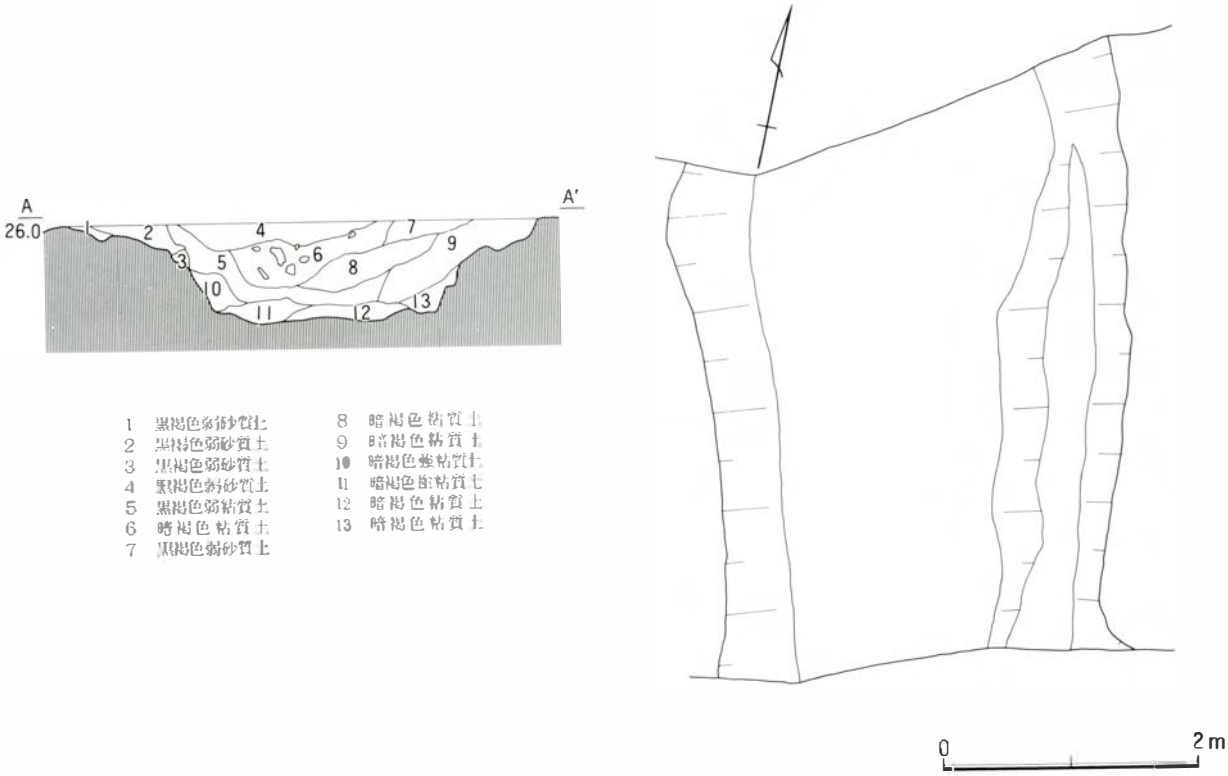
ＳＤ11

ＳＤ11は、Ｇ９区に位置する。南高野古墳の周溝であることから、詳細は南高野古墳の章に譲る。





第45図　ＳＤ10実測図(1/40)



第46図　ＳＤ16実測図（1/60）

ＳＤ16

ＳＤ16は、Ｆ５～Ｅ６区に位置する。プランは標高25.7～25.9ｍのＶb層で確認した。調査区を北西から南東に横切るように伸びる。方位は、Ｎ―14°―Ｗである。検出した溝の長さは4.85ｍ、最幅3.64ｍ、深さ0.81ｍを測る。断面の形状は逆台形を呈す。埋土の上位は弱砂質性の黒褐色土で、下位は粘性の強い暗褐色土が堆積している。堆積状況から絶えず水が流れた状態を想像することは困難で、むしろ水路ではない空堀のような状況が伺える。この埋土の堆積状況からもＳＤ16が利水を目的とした溝ではなく、何らかの区画を意図して作出されたものであると思われる。

出土遺物は、須恵器１点がＭ２（黒褐色弱砂質土）より出土し、それを実測した。

須恵器（第70図407）

407は、須恵器の甕片である。頸部までの残存高が6.1㎝と小型の甕である。体部中位に１条の沈線を施し、底部外面は回転ヘラ削り調整されている。器形の特徴から陶邑編年Ⅱ―６～Ⅲ―１段階（ＴＫ209～217）に併行すると思われる。

1）ＳＤ16Ｂは、ＳＤ16の上位に位置し、断面観察によって遺構の存在を確認したが平面では掘削作業の進行上確認することができなかった。断面での最大幅は6.5ｍ、深さ1.3ｍである。ＳＤ16Ｂのさらに上位にＳＤ16Ｃがあるが、この溝は整地層より掘り込まれていることから、中世後半以降の溝と思われる。遺物は出土していない。

第２節　Ｂ地区の遺構と遺物

(1)　Ｂ地区の概観

Ｂ地区はＣ０～Ｅ４区までの範囲を指す。Ｂ地区は、標高28.5～29.0ｍの地表面から下に厚さ約１ｍの砂礫層が堆積している。その下に近世初頭と思われる水田面（Ⅱ層）があり、その下のⅢ層・Ⅳ層中より遺構・遺物を検出した。遺構面は、標高27.2～27.4ｍ前後の面と標高26.8～27.0ｍ前後の面の２面を検出した。上位の遺構面を第１次遺構面、下位の遺構面を第２次遺構面とする。

第１次遺構面はⅢ層を切るように検出した。但し、Ｂ地区の層序が不安定な部分も多く、全ての遺構がⅢ層を切る状況を呈しているとは限らない。検出した遺構は、溝状遺構（ＳＤ１～７・９・13～15）11条、土坑（ＳＫ２～６）５基、ピット群（Ｐ１～５、９～16、23～29、38）21基である。

第２次遺構面は、Ⅳ層及びⅤ層を切るように検出した。検出した遺構は、溝状遺構（ＳＤ17）１条、土坑（ＳＫ９・11～13）４基、ピット群（Ｐ39～73）34基である。

以下、主な遺構について述べる。

(2)　第１次遺構面の主な遺構と遺物

ＳＫ２

ＳＫ２は、Ｃ１区に位置する。プランは標高27.3ｍのⅢａ層で確認した。長軸0.64ｍ、短軸0.63ｍ、深さ0.27ｍを測る。平面形は楕円形を呈す。埋土は、１層でしまりのゆるい暗褐色砂質土が入り、φ１㎜前後の炭化物も多く含む。上位にはφ20～50㎜前後の砂礫も含む。土師器皿片が多量に入ることから中世墓の可能性も指摘できる。

写真　Ｂ地区第１次遺構面検出状況（西より）

写真　Ｂ地区第１次遺構面検出状況（東より）

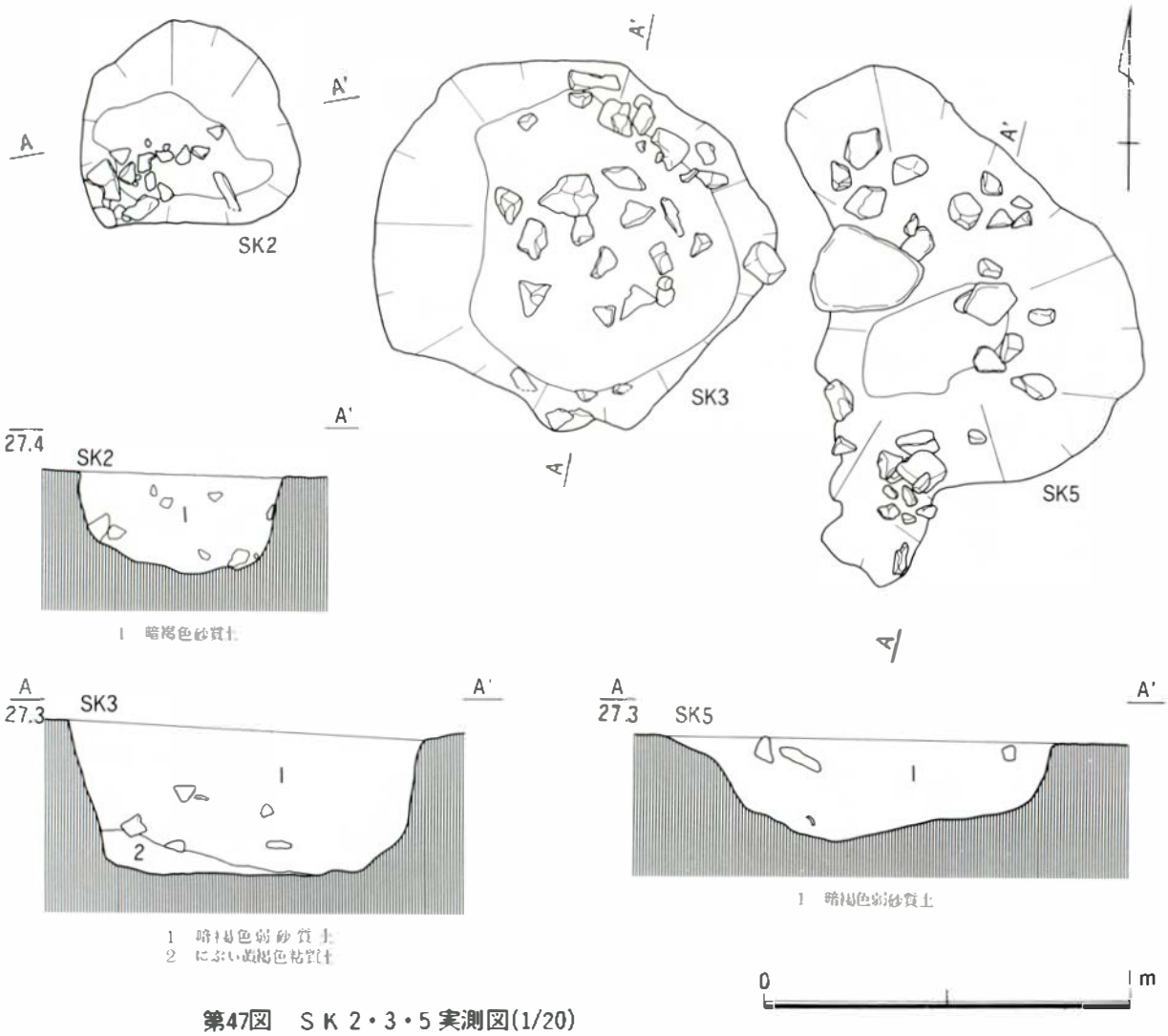
本遺構からは、弥生土器・土師器７点、須恵器３点、灰釉陶器11点、山茶碗44点、土師器皿85点、中近世陶器１点の計151点が出土した。その内７点（灰釉陶器１点、山茶碗３点、土師器皿３点）を実測した。

灰釉陶器（第71図420）

420は、段皿である。体部内面にやや不明瞭な段を有す。口縁端部内外面がわずかに施釉されている。体部は外上方にのび、口縁端部は尖り気味である。

山茶碗（第72図485・495・498）

485は、碗の底部片である。高台の形状は台形で、外面はやや丸みを帯びて直立し、内面は外傾する。端部に糊柄痕がみられる。495・498は、碗の口縁部片である。495は、口縁端部に面取りがされ



第47図　ＳＫ２・３・５実測図(1/20)

ている。498は、口縁がやや外反する。

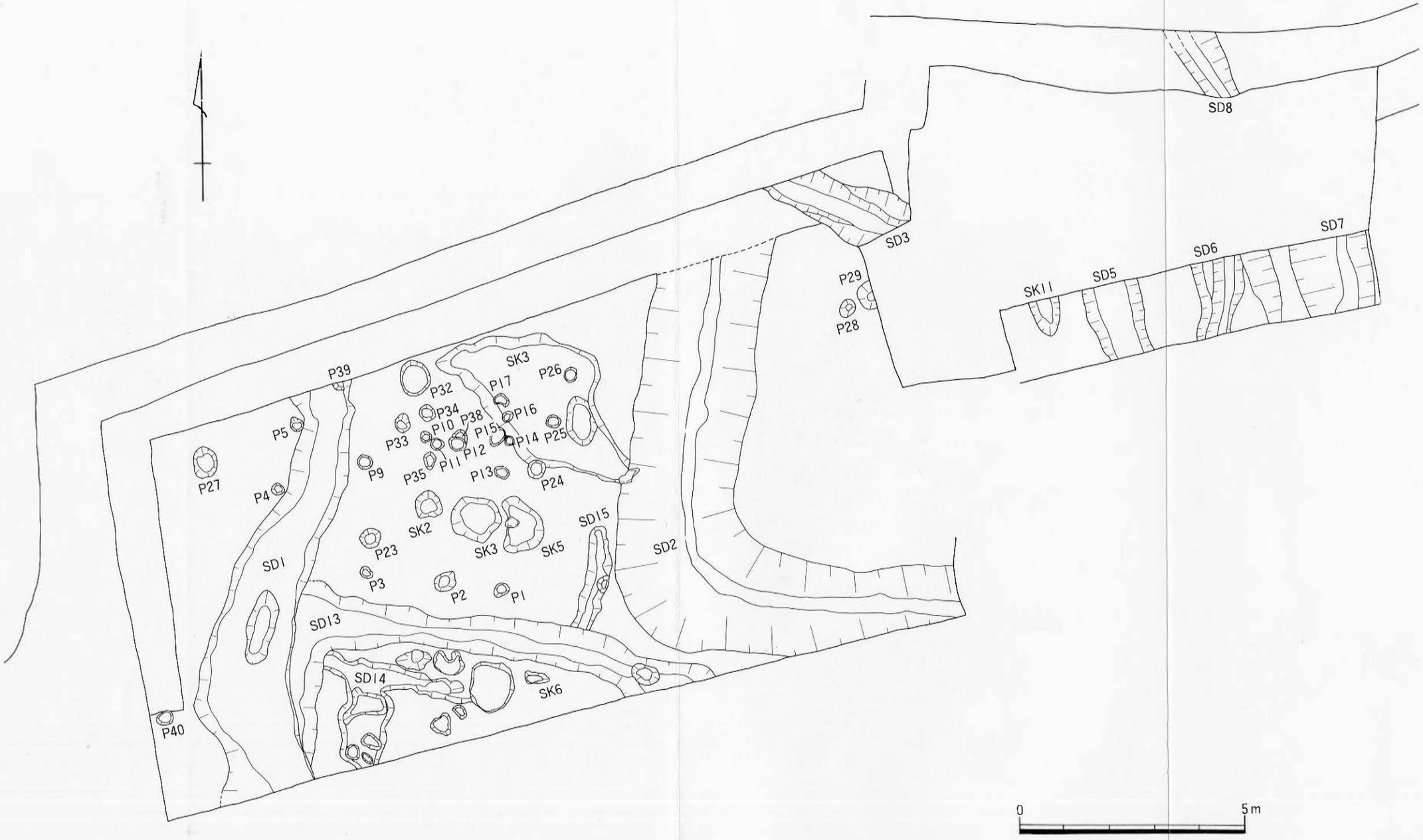
土師器皿（第73図504・508・509）

504は、土師器皿Ａ類に属し、体部に段を有す。底部外面に指圧痕がみられる。508・509は、Ｂ類に属し、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部には明瞭な段を有す。口縁付近に煤が付着している。508は、体部から口縁内面に横ナデ調整がされている。509は、底部器厚が非常に薄く、口縁端部は肥厚する。

ＳＫ３

ＳＫ３は、Ｃ１区に位置する。プランは標高27.2ｍ前後のⅢａ層で確認した。長軸1.10ｍ、短軸1.08ｍ、深さ0.1ｍを測る。平面形は円形を呈す。埋土は、２層に分層でき、しまりのゆるい暗褐色弱砂質土とその下ににぶい黄褐色弱砂質土が入る。暗褐色土中にはＳＫ２と同様に¢１mm前後の炭化物と¢20～50mmの砂礫を多く含む。また、土師器皿片が多量に入ることから中世墓の可能性も指摘できる。

本遺構からは、弥生土器・土師器44点、須恵器１点、瓦１点、灰釉陶器７点、山茶碗24点、土師器



第48図　B地区第1次遺構面配置図(1/100)

皿123点、陶器２点の計202点が出土した。その内、３点（弥生土器・土師器２点、土師器皿１点）を実測した。

弥生土器・土師器（第64図320・第67図377）

320は、土師器の高坏である。口縁部内面に14条の沈線が施されている。口縁部内外面はていねいなミガキ調整になっている。377は、土師器の甕である。口縁部から体部内外面にハケメ調整がなされており、時期は奈良時代と思われる。

土師器皿（第73図505）

505は、土師器皿Ａ類に属し、体部に明瞭な段を有す。外面に指圧痕がみられ、口縁部内外面には煤が付着する。

ＳＫ５

ＳＫ５は、Ｃ１区に位置する。プランは標高27.2ｍ前後のⅢａ層で確認した。長軸1.44ｍ、短軸0.89ｍ、深さ0.56ｍを測る。平面形は円形を呈す。埋土は、１層でしまりのややゆるい暗褐色弱砂質土が入る。暗褐色土中にはＳＫ２と同様に¢１㎜前後の炭化物と¢20～50㎜の砂礫を多く含む。本遺構の性格は、ＳＫ３とすぐ隣に位置することから中世墓の可能性も考えられるが、出土遺物の残存状況が良くないため不明である。本遺構の上位には扁平な四角形の礫があるが、本遺構との関連については不明である。本遺構からは、縄文土器８点、弥生土器・土師器44点、山茶碗２点、土師器皿１点、の計55点が出土した。

ＳＫ６

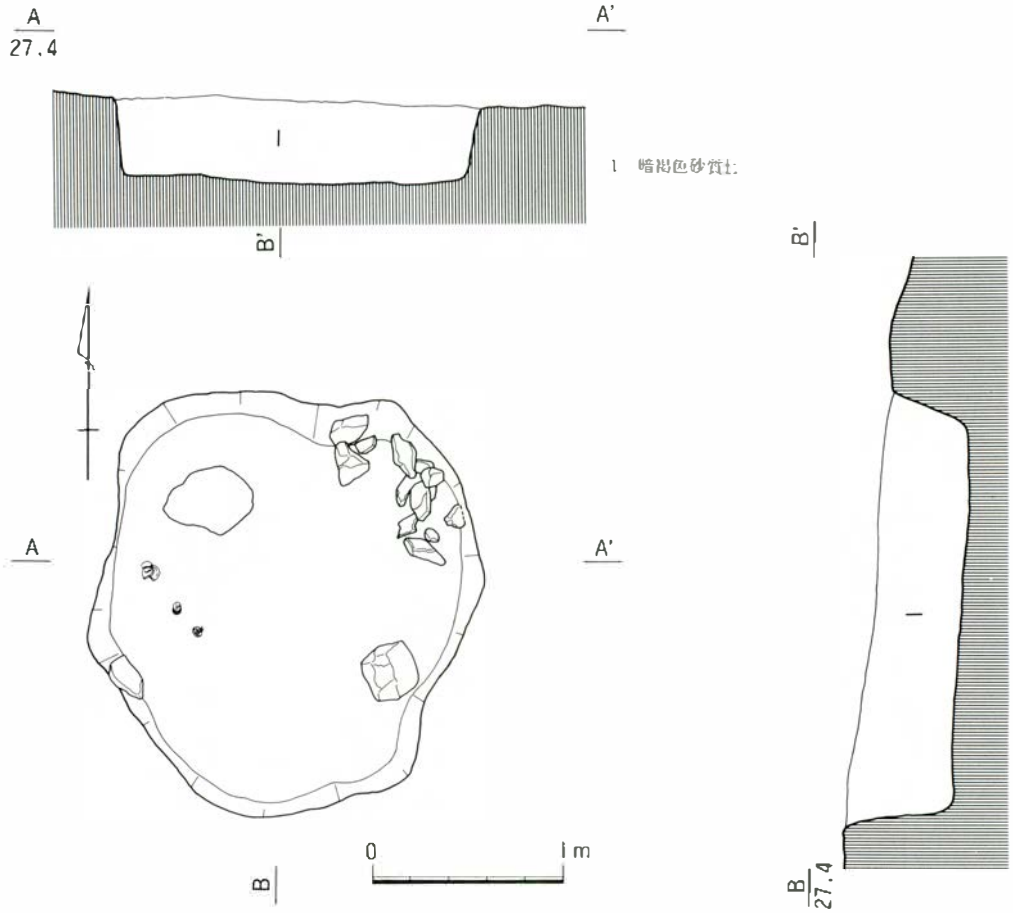
ＳＫ６は、Ｃ１区に位置する。プランは標高27.2～27.3ｍで確認した。周辺の土層ははっきりしない。規模は、長軸2.34ｍ、短軸2.10ｍ、深さ0.28ｍを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は四角形である。埋土はしまりのかなりゆるい暗褐色砂質土が入る。底部に拳大の礫を検出し、精査を行ったところ最下部から古銭11枚と土師器皿が出土した。古銭は５枚と６枚の二つに分かれており、一方には古銭を通す繊維がわずかに付着していた。５枚の古銭と６枚の古銭が元来同一になっていたかは不明である。また、土師器皿が出土した付近から白い粘土状の土が検出されたが、骨の風化したものであるかは分からない。

本遺跡からは、弥生・土師器２点、山茶碗５点、土師器皿９点、磁器１点、古銭11点の計28点が出土した。その内12点（土師器皿１点、古銭11点）を実測した。

土師器皿（第73図501）

501は、土師器皿Ａ類に属し、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部から口縁内部には縦ナデ調整がされている。器形の特徴から15世紀後半の時期と思われる。

写真　ＳＫ６　遺物出土状況（西より）



第49図　ＳＫ６実測図　(1/40)

古銭（第74図 539～549）

古銭の内訳は次のようである。539～543 は、開元通寶である。開元通寶の鋳造は数回行われているため明確な鋳造時期を特定することはできないが、最終の時期は南唐の 960 年である。外径は2.45 cmでほぼ等しいが、542 はわずかに小さい。内径は 0.6～0.65でほぼ等しい。544 は、祥符元寶である。北宋、1009年の鋳造である。545 は、元祐通寶である。北宋、1086年の鋳造である。546 は、聖宋元寶である。北宋、1101年の鋳造である。547・548 は、永楽通寶である。明、1408年の鋳造である。549 は、宣德通寶である。明、1433年の鋳造である。

古銭の鋳造年代にはかなりの時期差がみられるが、最終の 549（宣德通寶）の時期から考えて、ＳＫ６は、15世紀後半以降の中世墓と考えられる。

ＳＤ１

ＳＤ１は、Ｄ１～Ｃ０区に位置し、調査区を南北に横切る。方位は、Ｎ－16°－Ｅである。プランは標高27.2～27.5ｍのⅢａ層で検出した。検出した溝の長さは8.85ｍ、最大幅2.15ｍ、深さ0.35ｍを測る。溝は北から4.5ｍ付近でくの字状に東に曲がる。南から２ｍ付近の溝の中央には非常に固い黄褐色土があり、溝が二股に分かれる可能性も考えられたが、明確なプランを確認することはできなかったため、１条の溝と判断した。溝には大量の人頭大以上の礫と遺物が出土した。礫の検出状況からは人為的な配置を確認することはできなかった。くの字状に折れ曲がる部分の溝の底部には、四角く囲ったような石が数個検出されたが、遺物は含まれておらず、溝との関連は不明である。

本遺跡からは、縄文土器58点、弥生・土師器230点、須恵器21点、緑釉陶器１点、瓦１点、灰釉陶器11点、山茶碗70点、土師器皿105点、磁器３点、陶器15点の合計515点が出土した。その内14点（弥生・土師器７点、須恵器２点、緑釉陶器１点、山茶碗１点、土師器皿１点、磁器１点、陶器１点）を実測した。

弥生・土師器（第64図324・327、第65図339・340、第66図348・349、第67図370）

324は、器台片である。脚部に円形の透かし孔を有す。体部から脚部の外面はハケメ調整後ミガキ調整がされている。体部内面はミガキ調整で、脚部内面は板ナデ調整されている。器形の特徴から廻間期と思われる。327は、高坏脚部片で、脚部に円形の４つの透かし孔を有す。脚部外面はミガキ、内面はハケメ調整がされている。器形の特徴から廻間期と思われる。339は、パレス壺の口縁部片で、口縁部外面と頸部内面が赤彩されている。口縁部内面には羽状刺突文が施され、外面には５条の沈線が巡る。器形の特徴から廻間期と思われる。340は、小型丸底壺片で、口縁部外面中位に稜を有し、端部は尖る。体部外面はミガキ、内面は板ナデ調整されている。口縁部内外面は横ナデ調整されている。器形の特徴から廻間期と思われる。348は、壺の口縁部片で、口縁部外面に２条の沈線を巡らせ、口縁内面に段を有す。小片のため器形の大きさははっきりしないが、時期は山中～廻間期と思われる。349は、パレス壺の口縁部片で、口縁部内面に羽状刺突文が施され、外面には２条の沈線を巡らす。器形の特徴から、山中～廻間期と思われる。370は、Ｓ字甕の口縁部片で、頸部に１条の沈線を巡らす。体部から頸部の内外面はハケメ調整されている。器形の特徴から、松河戸期と思われる。

須恵器（第70図389・403）

389は、蓋Ｂ類である。口縁部内面上方にわずかな返りを有す。器形の特徴から美濃須衛Ⅲ期と思われる。小片のため大きさははっきりしない。403は、坏身Ｂ類である。高台の断面形は四角形を呈し、端部が外方にやや伸び、端部内面は凹面をなす。底部外面は回転ヘラ削り調整され、内面は平滑である。器形の特徴から美濃須衛Ⅳ期と思われる。

緑釉陶器（第70図418）

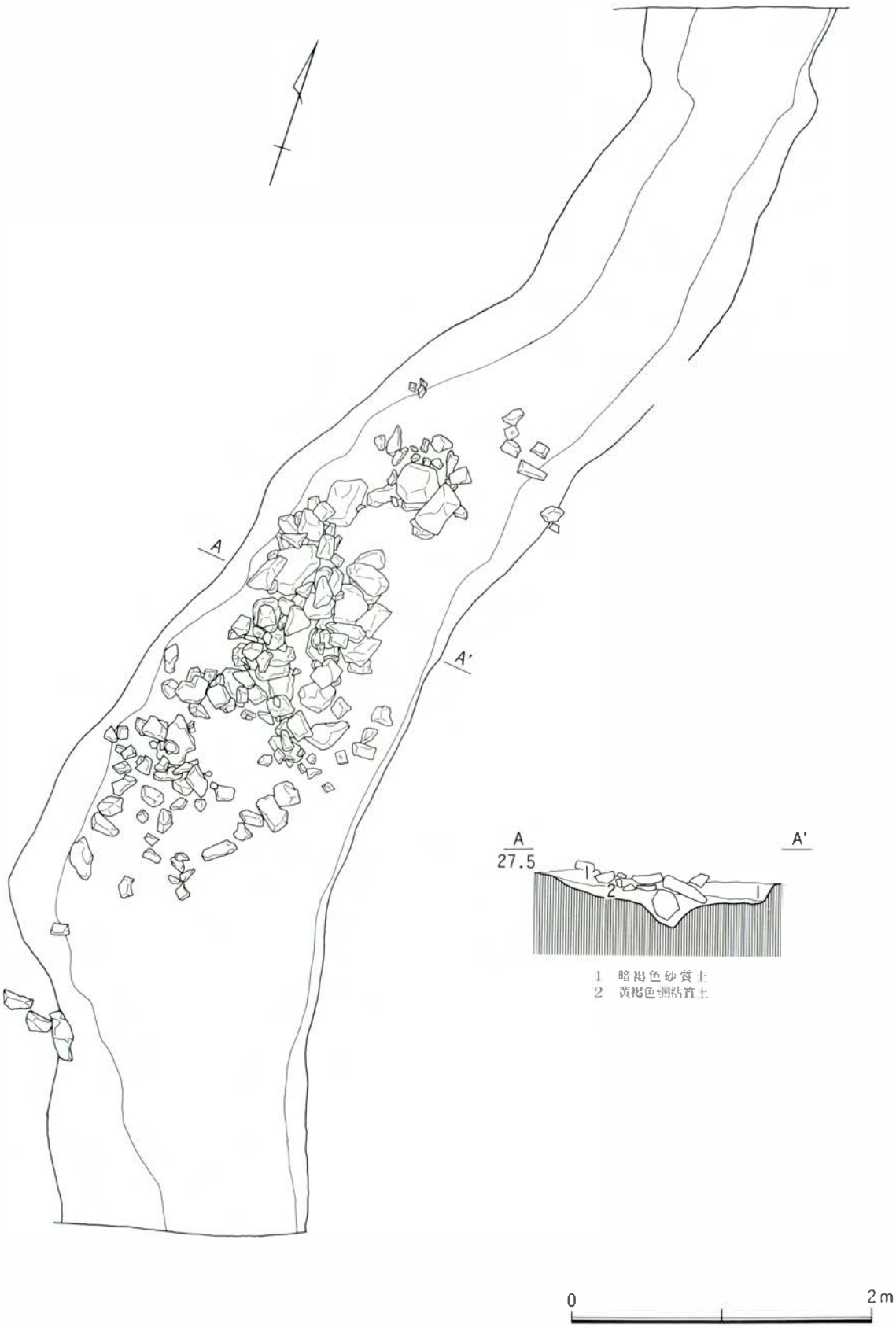
418は、緑釉陶器片である。外面に緑釉が施されている。小片のため器形や時期は不明である。

山茶碗（第72図479）

479は、椀の口縁部片である。器厚は薄手で、体部から口縁部にかけて八の字上に開く。口縁端部は、面取りされている。器形の特徴から北部系大洞東１号期と思われる。

土師器皿（第73図516）

516は、土師器皿Ｂ類に属し、底部と体部外面の境に１条の横ナデが施されている。体部内面の横ナ



第50図　ＳＤ１実測図(1/40)

デ調整ははっきりとしないが、爪痕が数カ所みられる。口縁端部は肥厚する。器形の特徴から15世紀後半以降と思われる。

磁器（第74図527）

527は、青磁碗片で、底部内外面が施釉され、高台端部が露胎する。小片のため器形や時期は不明である。

陶器（第74図534）

534は、天目茶碗片で、鉄錆釉が施され、体部下方が露胎する。小片のため器形や時期は不明である。

ＳＤ２

ＳＤ２は、Ｄ３～Ｃ２区に位置し、調査区を横切るように南北に伸び、Ｃ２グリッド杭付近でほぼ直角に向きを変え、東西に伸びる。方位は、Ｎ－５°－ＥとＮ－96°－Ｅである。プランは標高26.8～27.2mのＶ層及びカクラン層で検出した。検出した溝の長さは12.95m、最大幅3.10m、深さ0.78mを測る。断面形は擂り鉢状あるいはＶ字型を呈し、西側掘り肩に対して東側掘り肩の傾斜が急である。溝の中位から多量の礫が入り、大きさは拳大～人頭大と不均一である。中には掘立柱建物の基礎石と思われる扁平な石も数個混じる。礫に混じって多くの遺物も出土している。溝の底部からは、φ20～50mm程の比較的均一な礫が敷き詰められた状態で検出した。本遺構は、意図的な屈曲がみられ、小礫を底部に配することなどから屋敷等を区画するための溝と考えられる。

本遺構からは、縄文土器76点、弥生・土師器396点、須恵器60点、緑釉陶器１点、瓦38点、灰釉陶器59点、山茶碗322点、土師器Ⅲ350点、磁器４点、陶器19点の合計1324点出土した。その内28点（縄文土器２点、緑釉陶器１点、瓦６点、灰釉陶器７点、山茶碗６点、土師器Ⅲ１点、中世土師器１点、磁器１点、陶器２点、石鍋１点）を実測した。

縄文土器（第61図253、第62図271）

253は、深鉢ⅡＡｃ類に属す。体部外面は斜位の条痕調整、内面はナデ調整されている。口縁端部は折り返して肥厚する。271は、深鉢ⅠＢｃ類に属す。口縁部外面は横ナデ調整されている。口縁部下の外面には、ヘラ状工具の押し引きによるＤ字状の刻目凸帯が１条巡る。

緑釉陶器（第70図411）

411は、緑釉陶器片で、内外面に緑釉が施されている。内外面とも回転横ナデ調整である。小片のため、器形や時期は不明である。

瓦（第68図381～384、第69図385・386）

381は、軒丸瓦で、先端部片である。瓦当部分は確認できないが、通常の丸瓦凸面に粘土がもう一枚塗りつけた痕があることや先端部に剥離痕跡が確認できないことから瓦当の外れた軒丸瓦の破片であると判断した。焼成は軟質である。382は、行基式の丸瓦広端部片である。凸面は丁寧にナデ調整されているが、部分的に縄叩きの痕跡が認められる。焼成は軟質である。383は、行基式の丸瓦側辺部片である。凸面は丁寧にナデ調整が施されるが、部分的に縄叩きの痕跡が認められる。焼成は硬質である。384は、軒平瓦片で、瓦当部分左端のみの残存である。四重弧文である。平面凸面に粘土を張り鍔部をつくる。凹面に模骨痕が残るが、瓦当先端にまで及んでいる。焼成は軟質である。385は、平瓦側縁部片である。焼成は軟質で、凸面は風化して調整は明確に観察できない。他の平瓦に比べて

厚い。386は、平瓦広端部片で、凸面はナデ調整が施されるが、部分的に縄叩きの痕跡が認められる。

灰釉陶器（第71図421・422・429・443・449・451・453）

421は、段皿である。体部内面に段を有す。体部は外反気味に開き、口縁端部を丸くおさめる。口縁部付近が漬け掛けされている。器形の特徴から猿投窯V期のものと思われる。422は、皿の底部片である。高台断面形は低い台形を呈す。底部外面に回転糸切り痕が残る。体部下方まで漬け掛けされている。429は、碗である。体部は丸みを持って立上がり口縁部下でわずかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁部付近が漬け掛けされている。443・449・451は、碗の底部片である。高台断面形が台形である。443の高台外面はやや内傾し、端部は内側で接地する。内面は内弯気味に外傾する。449は、高台外面が外傾し、中位に稜を有して下がる。端部は内側で接地する。高台は底部と体部との境に付けられている。453は、広口瓶の底部片である。高台の断面径は台形を呈し、端部下位に稜を有す。輪積み成形後にナデ調整されている。底部内面には降灰がみられ、体部はハケ塗りが施されている。

山茶碗（第72図458・477・478・484・487・493）

458は、皿片で、底部外面は糸切り底で、体部は底部より斜め外方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。器形の特徴から第5型式（浅間窯下1号期）と思われる。477は、碗の底部片である。高台断面形は低い台形を呈し、端部に籾殻痕が残る。底部外面には回転糸切り痕がみられる。底径は7.3cmである。478は、碗の底部片である。高台断面形は三角形を呈し、高台外面は弱い稜を持って外方に開く。端部は内側で接地する。底径は7.9cmである。484は、碗の底部片である。高台断面形は小さな台形状を呈す。高台は体部との境から少し内側に貼り付けられ、体部は斜め外方に伸びる。高台外面はやや外弯する。底径は9.4cmである。487は、碗の底部片である。高台断面形は低い四角形を呈し、端部に籾殻痕が残る。底部外面には回転糸切り痕がみられる。体部はやや丸みを持って外方に伸びる。493は、碗である。高台断面形は低くつぶれたような三角形を呈し粗雑である。高台は体部との境からやや内側に張り付く。底部内面中央が丸くくぼむ。体部はやや丸みを持って斜め外方に伸びる。口縁はやや外反し、端部は外傾する。器形から在地性の強い第5型式（窯洞1号期）のものと思われる。

土師器皿（第73図502）

502は、土師器皿A類に属し、体部外面と内面全体に横ナデ調整がみられる。底部外面には指圧痕がみられる。

中世土師器（第73図523）

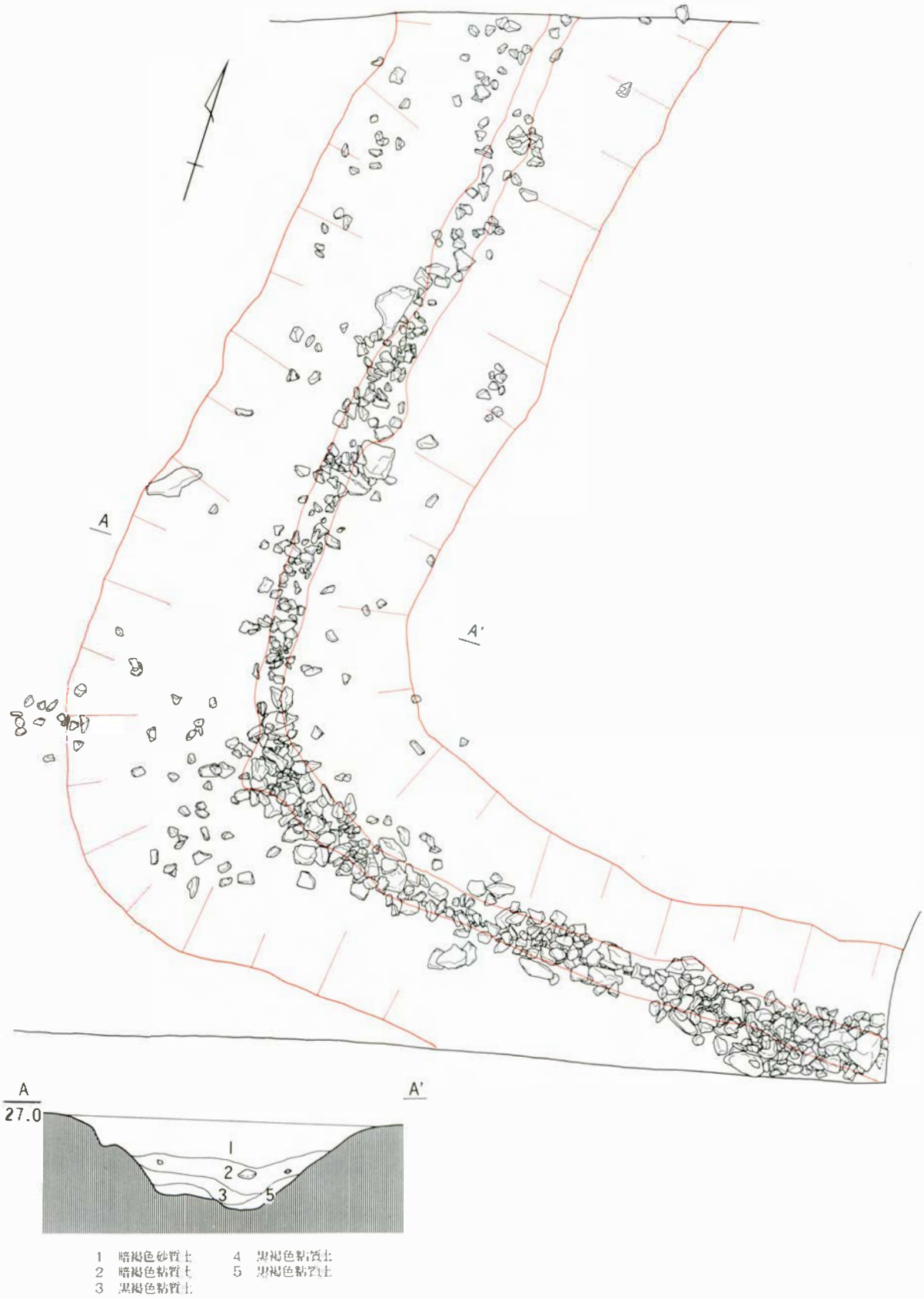
523は、羽釜の口縁部片でA3類に属す。体部外面は横ハケ調整で、内面はナデ調整されている。口縁部は面取りされ、鍔部断面は四角形を呈す。器形の特徴から14世紀後半と思われる。

磁器（第74図532・533）

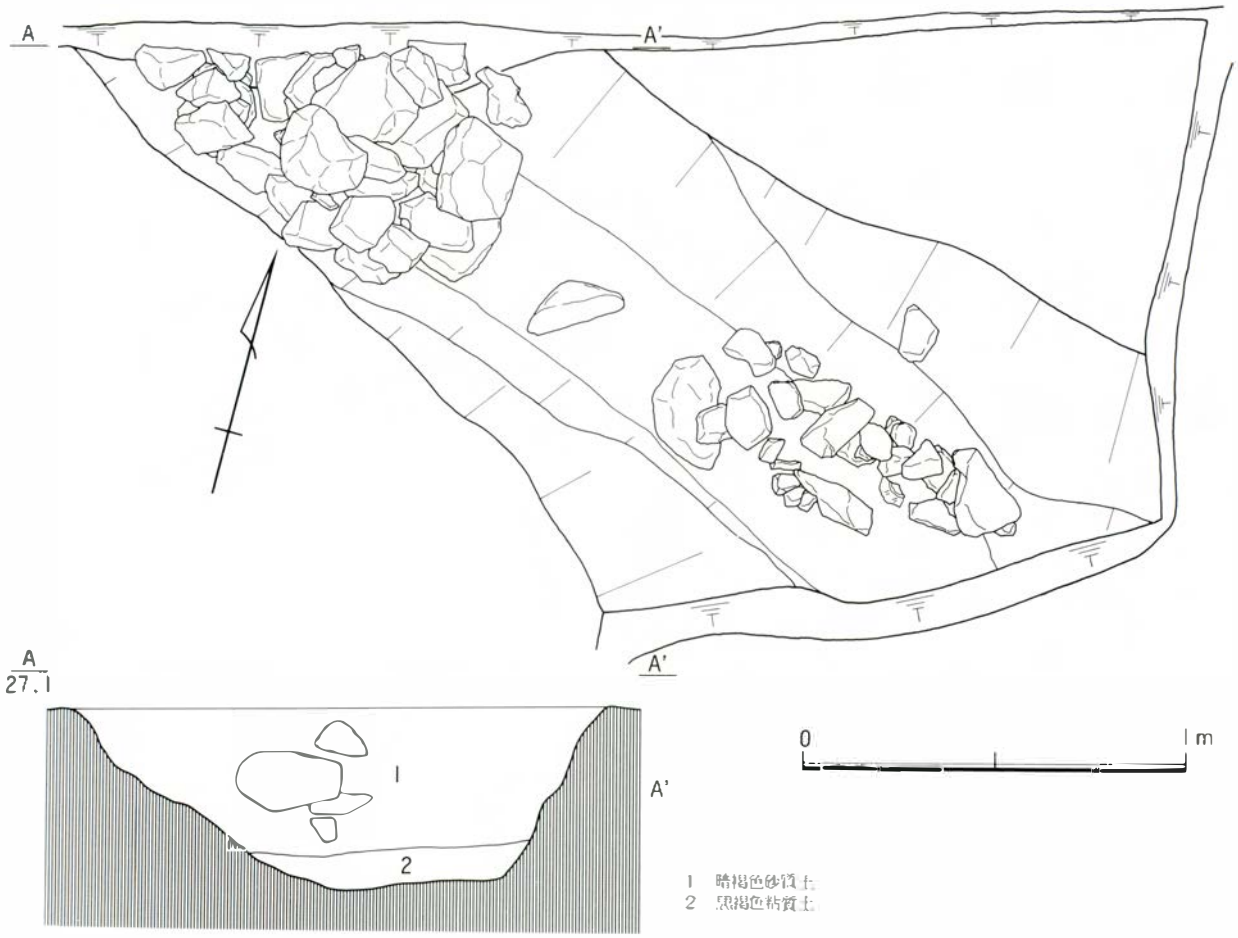
532は、青磁碗の底部片である。胎土は緻密でオリーブ灰色である。底部内面には劃花文が施されている。器形の特徴から13世紀後半以降の龍泉窯系の中国磁器と思われる。533は、天目茶碗片である。体部内外面は鉄釉が施され、下位から底部は露胎する。高台は削りだし高台で外面が凹面をなす。器形の特徴から中国磁器と思われる。時期は不明である。

陶器（第74図526）

526は、擂鉢である。口縁端部が外傾して凹面をなす。体部外面はヘラ削り調整されている。内面は平滑である。器形から窖窯III期のものと思われる。



第51図　ＳＤ２実測図(1/50)



第52図　ＳＤ３実測図（1/20）

石鍋（第73図 521）

521は、石鍋片である。口縁直下に削り出された鍔が巡る。鍔の断面形は不等辺台形を呈し、やや垂れ下がる。体部はやや内弯して斜め上方に立ち上げる。器形の特徴から13世紀～14世紀と思われる。

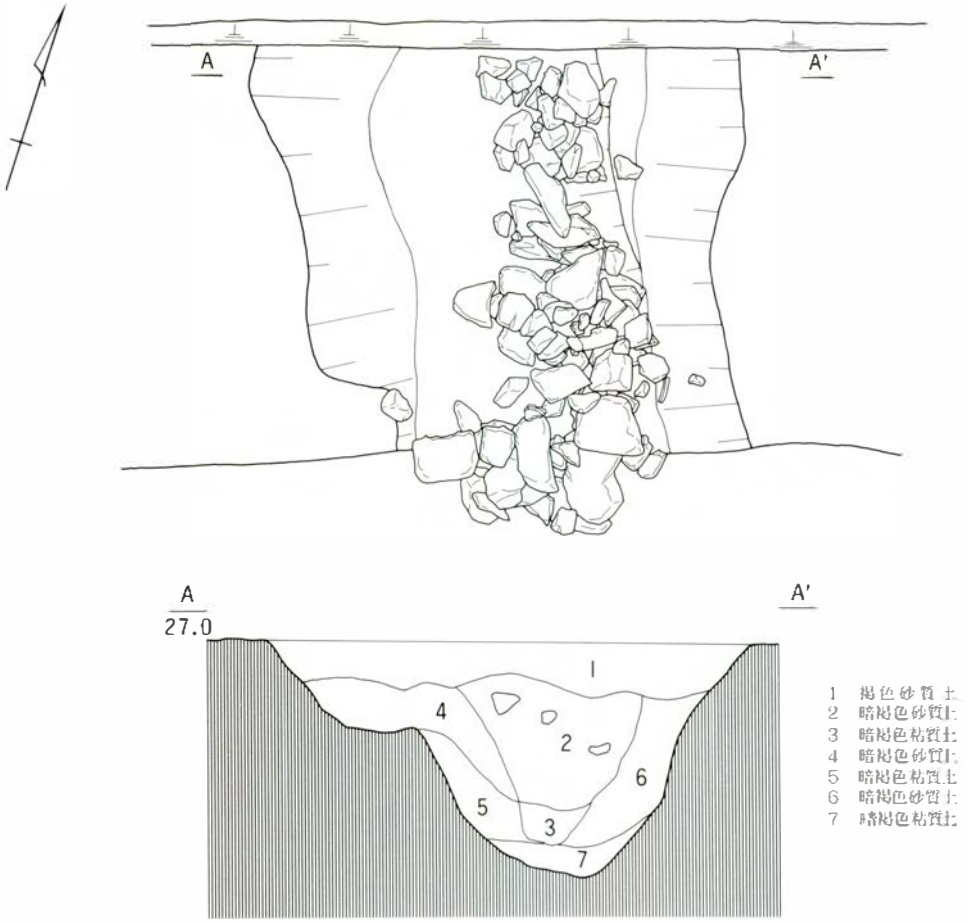
ＳＤ３

ＳＤ３は、Ｄ２区に位置する。北西から南東に伸びるが、後世（現代）のカクランにより無くなっている。プランは標高26.9～27.1ｍのⅢa層より検出した。方位はＮ－114°－Ｅである。検出した溝は、長さ1.96ｍ、最大幅1.36ｍ、深さ0.48ｍを測る。溝の断面形はすり鉢状を呈す。溝内には人頭大以上の礫が大量に入る。

本遺構から出土した遺物は、弥生・土師器９点、須恵器１点、灰釉陶器２点、山茶碗10点、陶器３点の合計25点である。その内１点（陶器）を実測した。

陶器（第74図 537）

537は、甕の口縁部片である。断面がＮ字状の口縁で折り返し部分の裏側には２条の沈線が施されている。器形の特徴から常滑窯８～９期（14世紀後半～15世紀前半）と思われる。



第53図　ＳＤ５実測図(1/20)

0　50cm

ＳＤ５

ＳＤ５は、Ｄ３区に位置する。北から南に伸びる溝であるが、後世（現代）のカクランにより大半の遺構は無くなっている。プランは標高26.8ｍのⅢａ層より検出した。方位はＮ—166°—Ｅである。検出した溝は、長さ1.13ｍ、最大幅1.29ｍ、深さ0.61ｍを測る。溝の断面形はすり鉢状を呈す。溝内には人頭大程の礫が大量に入る。

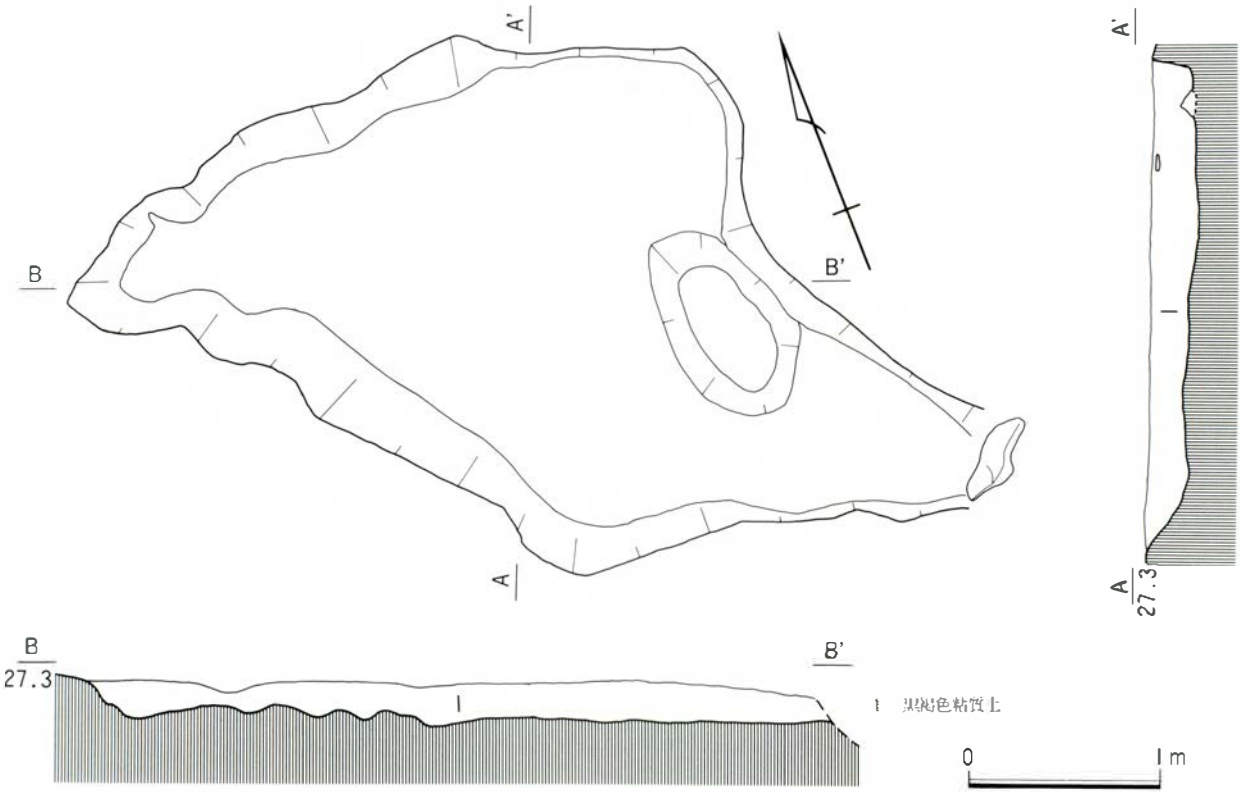
本遺構から出土した遺物は、縄文土器１点、弥生・土師器34点、須恵器１点、灰釉陶器１点、山茶碗10点、中世土師器５点、磁器１点、陶器１点の合計54点である。その内２点（山茶碗１点、磁器１点）を実測した。

山茶碗（第72図 490）

490は、碗の底部片である。高台断面形は三角形で、高台外面は外反気味に下がり、内面は外傾する。端部は丸くおさめる。底部外面には回転糸切り痕が残り、一部ナデ消しされている。器形の特徴から３～４型式と思われる。

磁器（第74図 530）

530は、白磁碗である。胎土は緻密で明オリーブ灰色である。口縁部内面に１条の沈線が巡る。口縁部外面は折り返し状に肥厚し、端部は尖る。器形の特徴から12世紀前半の中国磁器と思われる。



第54図　ＳＸ３実測図(1/40)

ＳＸ３

ＳＸ３は、Ｄ１区に位置する。プランは標高27.1～27.25ｍのⅢａ層で検出した。長軸4.82ｍ、短軸2.78ｍ、深さ0.20ｍを測る。平面形はひし形状を呈す。プラン検出当初は、竪穴住居跡を想定して精査を行ったが、明確な遺構を確認することができなかった。そのため土坑状遺構（ＳＸ）とした。

本遺構からは、縄文土器62点、弥生・土師器336点、須恵器４点、灰釉陶器５点、山茶碗15点、中世土師器４点、磁器１点の合計427点出土した。出土点数ではＳＤ２・１に次いで多い。その内７点（縄文土器１点、弥生・土師器４点、緑釉陶器１点、山茶碗１点）を実測した。

縄文土器（第59図206）

206は、深鉢ＩＢａ類に属す。口縁端部にヘラ状工具の押し引きによるＤ字状の刻目が施され、口縁部外面にヘラ状工具の押し引きによるＤ字状の刻目凸帯が１条巡る。

弥生・土師器（第63図289・298・301、第64図335）

289は、土師器小型鉢である。底部は平底で体部は直立して伸び、口縁端部は尖る。体部外面は板ナデ調整で内面には強い指ナデが施される。298は、台付き甕片である。底部は台状をなし体部との接合部はかなり厚い。台部外面はハケメ、内面は指オサエが施され、体部内外面は板ナデが施される。器形の特徴から朝日期と思われる。301は、台付甕の台部片である。台部内外面は指オサエ、体部内外面はハケメ調整されている。335は、高坏である。脚部は外方に開き、端部を丸くおさめる。坏部はやや丸みを帯びて外方に開き口縁部に至る。口縁端部は面取り気味に丸くおさめる。坏部内外面はミガキ調整され、脚部内面は板ナデが施される。坏部に比べて脚部が小型の特殊な器形であり、

時期は不明である。

緑釉陶器（第70図415）

415は、緑釉陶器片である。内外面に緑釉が施される。器形や時期は不明である。

山茶碗（第72図496）

496は、碗の口縁部片である。体部から外方に伸びた後、口縁部下で外反し、端部は引き出し気味に丸くおさめる。器形の特徴から３型式と思われる。

(3) 第２次遺構面の主な遺構と遺物

ＳＫ９

ＳＫ９は、Ｃ０区に位置する。プランは、標高26.9～27.0mのＶ層で確認した。長軸2.27m、短軸2.16m、深さ0.31mを測る。平面形は楕円形を呈し、ＳＤ17を切るように検出した。本遺構からは、弥生・土師器13点が出土している。本遺構の性格や時期は不明である。

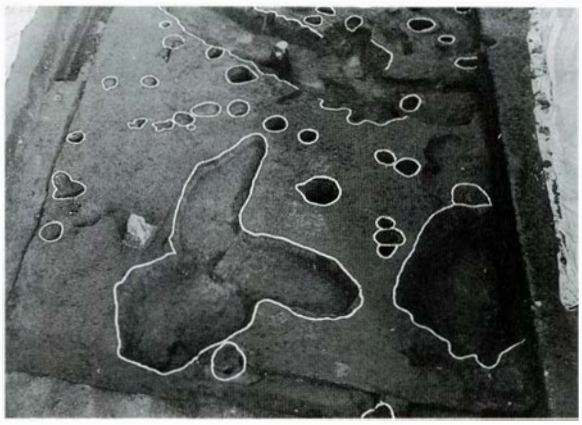
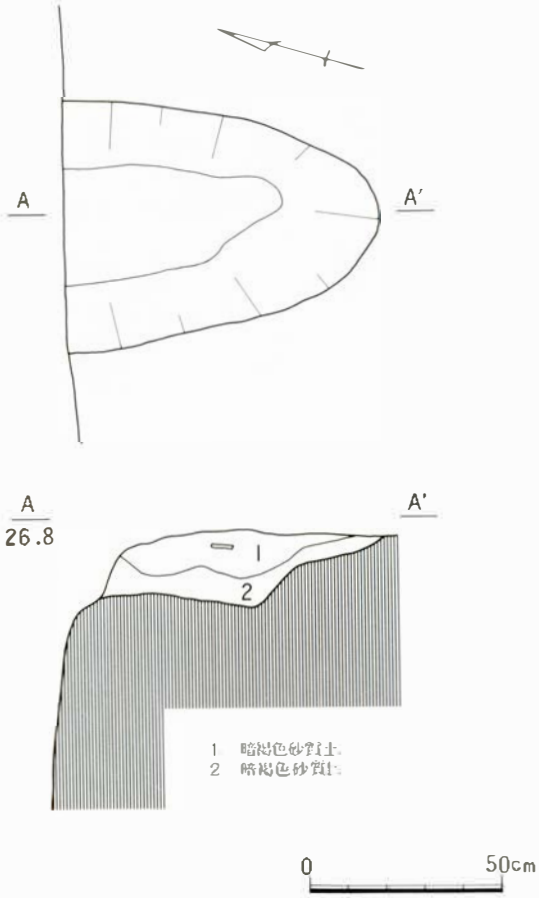


写真　B地区第２次遺構面検出状況（西より）

ＳＫ11

ＳＫ11は、Ｄ３区に位置する。プランは、標高26.7mのⅢa層で確認した。本遺構は後世(現代)のカクランのため一部分しか確認できなかった。長軸0.82m、短軸0.69m、深さ0.21mを測る。平面径は楕円形を呈す。埋土の上層には赤褐色の焼土が混じり、遺物も入る。

本遺構からは、弥生・土師器９点、土師器皿１点の合計10点が出土した。本遺構の性格や時期は不明である。

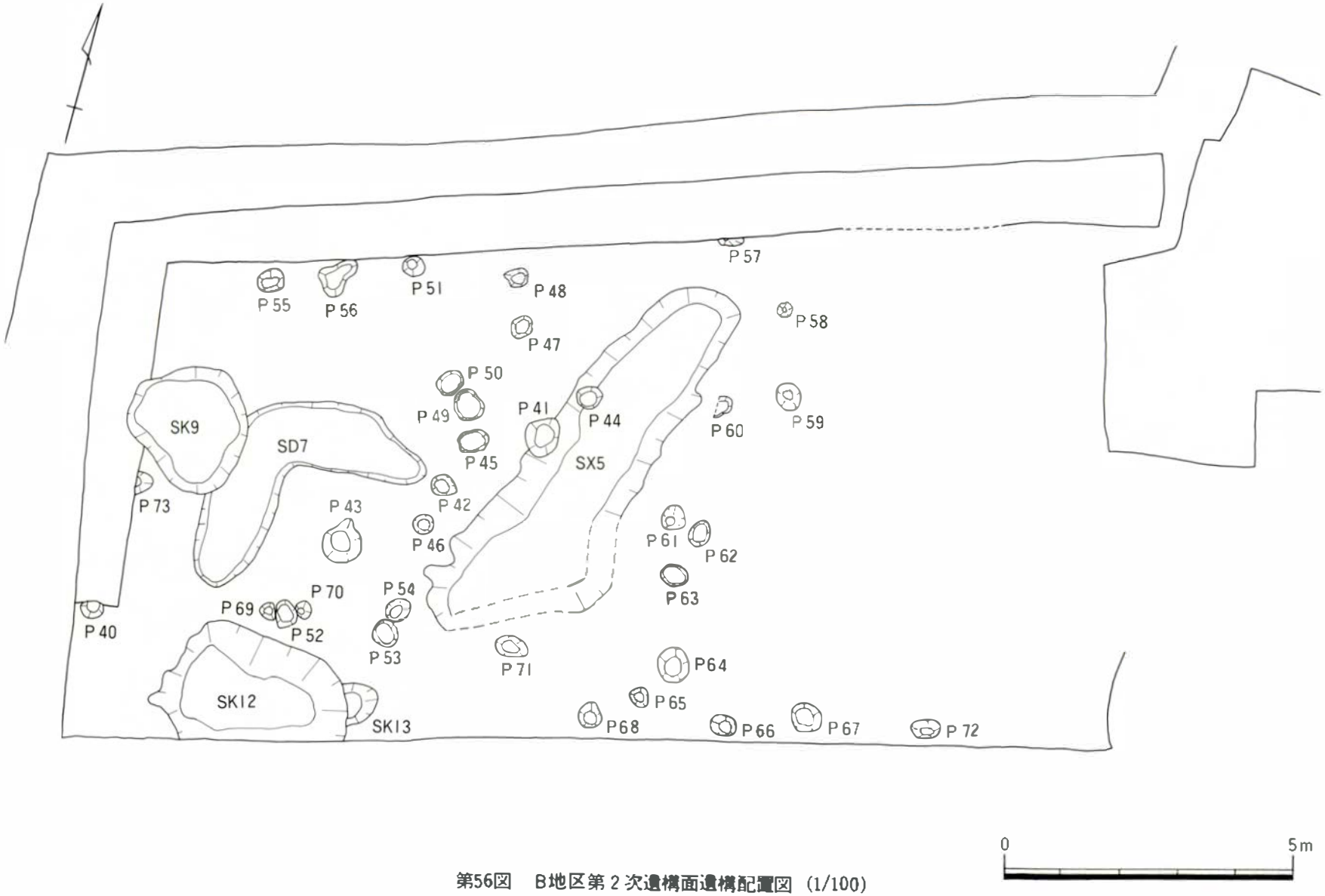


第55図　ＳＫ11実測図(1/20)

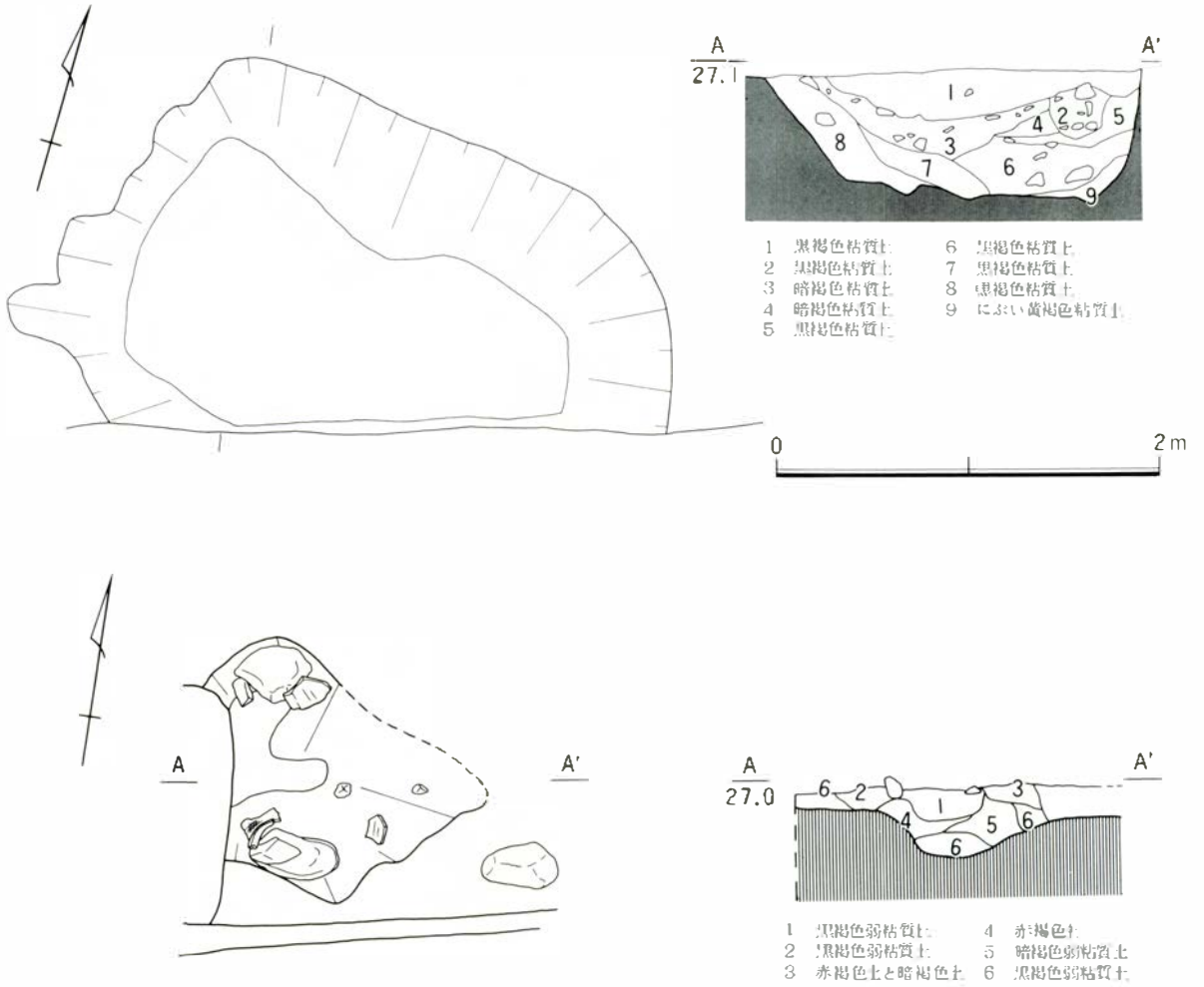
ＳＫ12

ＳＫ12は、Ｃ１区に位置する。プランは、標高26.8～27.0mのＶ層で確認した。長軸3.54m、短軸1.98m、深さ0.68mを測る。本遺構は調査区外へも広がっており、全体を確認するには至っていない。埋土はしまりのゆるい黒褐色粘質土が入る。

本遺構からは、縄文土器18点、弥生・土師器62点、須恵器１点、灰釉陶器１点、山茶碗１点、土師器皿１点の合計84点が出土した。その内１点（弥生・土師器）を実測した。



第56図　B地区第２次遺構面遺構配置図（1/100）



第57図　ＳＫ12･13実測図（ＳＫ12:1/40，ＳＫ13:1/20）

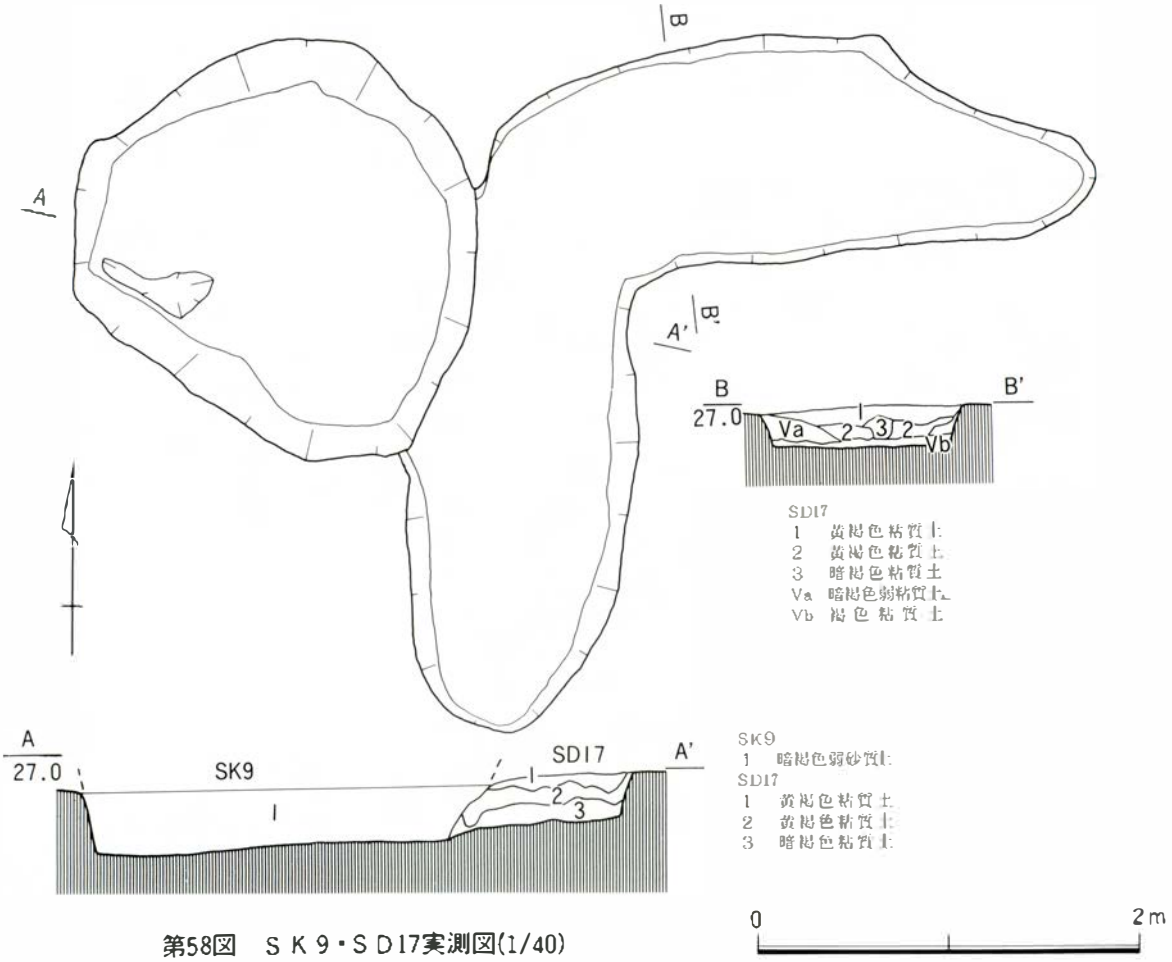
弥生・土師器（第67図379）

379は、土師器甕片で、頸部が強く外反する。口縁端部は尖り気味である。内外面はハケメ調整されており、頸部外面には指オサエがみられる。器形の特徴から奈良期と思われる。

ＳＫ13

ＳＫ13は、Ｃ１区に位置する。プランは標高26.8～26.9ｍのＶ層で確認した。遺構はＳＫ12に切られているが、長軸0.80ｍ、短軸0.58ｍ、深さ0.18ｍを測る。埋土上層には赤褐色の焼土がまじり、人頭大の扁平な礫も検出した。掘り肩がはっきりせず、遺構は東へ広がると考えられたが、曖昧な検出になってしまった。焼土が混じる土層中の礫は、炉や竈を意図する配置にはなっていない。赤褐色土の下や周辺には床面のような硬化した土は検出しなかった。

本遺構からは、縄文土器１点、弥生・土師器８点の合計９点が出土した。小片のため実測はしなかったが、土師器の中にはＳ字甕の口縁部片もみられる。器形の特徴から古墳時代と思われる。



第58図　ＳＫ９・ＳＤ17実測図(1/40)

ＳＤ17

ＳＤ17は、Ｃ０～Ｃ１区に位置する。プランは標高26.9～27.0ｍのＶ層で確認した。遺構はＬ字型の溝で、両端は途切れて土坑状になっている。溝の長さは5.68m、最大幅1.2m、深さ0.22mを測る。断面形は扁平な長方形を呈す。埋土は、しまりのある黄褐色粘質土が入る。プランを見る限りでは、周溝墓の周溝のようにも見えるが、遺構内から遺物は出土しておらず、周辺の遺構との関連もはっきりしないため、本遺構の性格や時期は不明である。なお、ＳＤ17を切るように検出したＳＫ９のプランの上場は完掘段階より上であった。掘り下げの途中では、はっきりと確認できなかった。

第3節　包含層遺物

包含層から出土した遺物は、縄文土器379点、弥生土器・土師器4369点、須恵器360点、瓦22点、灰釉陶器377点、山茶碗1551点、土師器皿1478点、中世陶器100点、磁器38点、石器28点の合計8702点である。遺構面に関わりのある主な遺物について説明する。

灰釉陶器（第71図）

灰釉陶器は、377点出土した。その内19点を実測した。

435・436は、高台の断面が三日月形を呈す碗である。435は、腰部に稜を有し体部は直線的に立ち上がる。口縁はわずかに外反し、端部は面取りされ外傾する。口縁部から体部上方にかけて施釉されている。高台の外面は稜を有し、内傾して接する。442・445・446は、高台の断面が三角形を呈す碗である。431～434・441・448は、高台の断面が台形を呈す碗である。443は、体部がゆるやかな丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反しない。底部の器厚は厚く、体部は薄い。底部外面には糸切り痕がみられる。口縁部内外面に施釉されている。434は、口縁部から体部上方に漬け掛けの施釉がみられ、腰部の張りは弱い。口縁部はやや外反する。底部外面に糸切り痕がわずかに残る。431は、口径12.7cmと小振りな碗である。口縁部から体部にかけて漬け掛けの施釉がみられる。腰部に明瞭な張りがあり、口縁部は少し外反する。底部の器厚は厚く、体部の器厚は薄い。高台は外に開き気味で、端部は内傾して内側で接する。432は、体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反しない。口縁端部は尖る。底部外面に糸切り痕がみられる。441・448は、底部外面に糸切り痕が残り、高台端部を丸くおさめる。426～428・430は、碗の口縁部片である。426・428・430は、口縁が外反する。427は、外反しない。

423は、皿である。口縁付近に漬け掛けの施釉がみられ、高台は低い台形を呈す。底部外面に糸切り痕がみられる。419は、折縁皿の口縁部片である。421・424は、段皿である。424は、体部内面に幅広の段を有し、外面に段はみられない。口縁から胴部にかけて厚い施釉がみられる。高台の外面は外に開き内面は外傾する。端部は丸みを帯びる。421は、内面に段を有し、外面の段は不明瞭である。口縁部に漬け掛けの施釉がみられる。

山茶碗（第72図）

山茶碗は、1551点出土した。その内34点を実測した。

492・500は、椀である。492は、全体の器厚は薄手で、底部より八の字状に立ち上がる。口縁端部がわずかに外反する。高台は三角形を呈し、糸切り痕が残る。籾殻痕はみられない。500は、高台が低い四角形を呈す。体部下方に強い張りがある。491は、口径12.6cmの小椀である。器厚が全体に薄手で、体部下方に張りがある。口縁端部はわずかに外反し鈍く尖る。高台は小さい三角形を呈す。（494・497・499）は、椀の口縁部片である。467～476・480～483・486・488～489は、椀の底部片である。467・468・482は、高台が三角形を呈す。469・475・480・481・483・486・489は、高台が台形を呈す。470・471・473・474・476・488は、高台が低い台形を呈す。

455～457・459～466は、皿である。その内461～464・466は、高台を有す。456は、底部が糸切り底で、口縁端部が面取りされている。457は、底部外面が糸切り底で、口縁端部が尖る。455は、台形の高台を有し、器高が高いため、小椀の雰囲気である。

土師器皿（第73図）

土師器皿（カワラケ）は、1478点出土した。その内8点を実測した。

503は、土師器皿A類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部内面は横ナデ調整されている。

507・510～513・515は、B類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部内面は横ナデ調整されている。510・511・512は、体部に明瞭な段を有す。

517は、C類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。

清郷型鍋（第73図522）

522は、清郷型鍋の口縁部片である。断面三角形の鍔状口縁で、口縁端部がくの字状に屈折して水平に引き出される。器形の特徴から10世紀後半～11世紀前半と思われる。[1]

1）1996　永井宏幸「清郷型鍋について」考古学フォーラム定例会資料
　1996　第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」

伊勢型鍋（第73図519）

519は、伊勢型鍋の口縁部片である。口縁端部が折り返されている。胎土は、φ1㎜以下の砂粒を多く含む。器形の特徴から、14世紀後半～15世紀前半と思われる。

石器（第75・76図550～561）

石器は28点出土した。その内13点を実測した。

550・551は石鏃である。550の表裏面は任意。両面とも、二次調整が丁寧に施されている。正面→裏面の順に調整を施し仕上げている。正面の調整剥離痕の打点は、その大部分が失われている。抉りの深さは、2㎜。形態は、凹基無肩式である。551は、茎部の先端と基端部の片方を折損している。腹面に主要剥離面を広く残しており、二次調整は縁辺部にのみ施されている。茎部の残存長は、4㎜。形態は、有茎無肩式である。

552は、石錐である。不定形の剥片を素材として、錐部を作出している。機能部は1ヶ所で、使用のためかかなり摩耗している。錐部の断面は、菱形を呈する。腹面には、主要剥離面の打点が残るが、周辺にはわずかに潰れ痕が認められる。素材となった剥片の縁辺部2ヶ所に、連続する微細な剥離痕が観察される。

553～556は、石斧である。553は、乳棒状を呈する形態の磨製石斧の折損品で、基部のみが残存している。基端部を中心に調整のための敲打痕が観察される。断面は楕円形を呈する。554は、太型蛤刃石斧とするには、サイズ的に小さいため、両刃磨製石斧とする。側縁はほぼ平行し、断面は扁平な長方形を呈する。調整は、全体を研磨しておらず、基部には敲打痕が認められる。研磨は刃部のみに認められるが、丁寧に研磨されており、再生を繰り返した印象を受ける。基端の剥離痕は、折損によるものか調整剥離なのかは、検討を要する。555は、柱状片刃石斧である。折損品であり、残存している部分がどの部位にあたるのかを決めるのに検討を要したが、仕上げの研磨の観察から「刃部」とした。ただし刃部には、敲打痕が認められる。石斧としての使用痕と捉えるより、折損後に敲石として再利用した際の痕跡と考えられる。周辺には側縁部や刃面に沿って剥離痕も認められる。正面折損部位の一部に、研磨された調整痕が認められるが、「抉入」かどうかは判別が困難である。抉りにしては浅く、どちらかというと「切目」のようである。断面はほぼ方形を呈する。556は、扁平両刃石斧である。全体が非常に丁寧に研磨され成形されている。正面の刃面が裏面に比して広く取られてお

り、弱凸強平片刃に近い？これは刃部の再生のための研磨が繰り返された結果とも考えられる。断面は長方形を呈する。弥生時代の四国、愛知、北陸にみられる。

557は、磨・敲石である。手に持つのに手ごろな大きさの円礫を利用している。機能部は、①正面の中央にに浅い凹み状の敲打痕、②正面の敲打痕の周辺ほぼ全体に磨面、③裏面の中央に磨面の３ヶ所が認められる。

558は、石錘である。手ごろな大きさの扁平な卵形の円礫を利用。中央に全周する１条の幅広い浅い溝を敲打によって作出しており、いわゆる「瀬戸内型」と呼ばれる形態を呈する。

朝日遺跡に類例がある。1982年報告書には５例。俵を編むときの錘かもしれない。1993年の朝日遺跡の報告書では、13点が敲打によって溝を作られた石錘として実測されている。

本遺物には、２ヶ所に敲打痕が認められる。正面下端部と中央部である。素材となっている円礫自体が、手に持って敲打するのに手ごろな大きさであることからも、敲石として使用されていたと思われる。特に中央の溝に重なっている敲打痕は、石錘として成形される以前のものと思われる。

559は、浮子である。縄文前期後半から後期中葉に出土例が多い。漁網錘用の浮子として使用された可能性が高い。形状、大きさはあまり一定していない。正面左部に、紐掛けのための加工痕が認められる。

560は、砥石である。ほぼ全体が機能面として利用されている。特に裏面は、反りが生じるくらいまで使用されている（安定のよい置き方をしたためこの面が裏面となった）。

561は、石棒（石刀）である。頭部の半面のみが残存する折損品。頭部に型式差が認められ、縄文晩期と想定される。

第4節　考　　察

(1)　A地区遺構面について

A地区の遺構は、標高25.3～26.5mの堆積層・整地層・V層から検出した。各遺構からは様々な時期の遺物が出土しているが、大きく2時期に分けられることが明らかになった。

1時期は古墳時代から奈良・平安時代にかけての面である。SD16からは7世紀前半の須恵器(407)が出土した。また、SD16近くからは、礫が多数検出され、灰釉陶器が数点出土している。明確なプランを確定することはできなかったが、検出したレベルはSD16とほぼ同じであった。

もう1時期は中世後半の面である。SK1からは15世紀後半の土師器皿（506・514）が出土した。

遺構名	層位	遺　物　器　種	推　定　年　代
SK1	M2	土師器皿（506・514）	15世紀後半
SK7			不明（遺物なし）
SD10		瓦（388）	8世紀前半※
SD16		須恵器（407）	7世紀前半

SK1や周辺のピット群は、Ⅳ層の逆転した層位が確認されているいわゆる整地層から掘り込まれていた。この層は、一見基壇状に安定した層を成していた。調査区範囲が限られていることからこの整地層全体の様相をとらえることはできなかったが、耕作を目的としたのか、あるは建物やその区画を目的としたのかは不明である。

SD10の最下層からは瓦が出土しているが、本遺構は前述した整地層より上位のいわゆる堆積層から掘り込まれており、年代を8世紀に求めるのは難しい。

(2)　B地区遺構面について

第1次遺構面ととらえた遺構は、標高27.2～27.4m前後のⅢa層及びカクラン層から検出した。SK2・3・6は、出土した遺物（土師器皿）や遺構の様相から15世紀後半の中世墓と思われる。SD1は、非常に浅い溝状遺構で、耕作に伴う水路というよりは邸宅内の水路的な様相を示す。SD1はSK2・3・6よりもやや上位の層から検出されていることから、墓域として機能していたこの地域に住居が建てられた可能性も考えられる。SD1周辺から検出した多数のピット群は、掘立柱建物としての明確な位置付けをすることはできなかったが、その関連は十分に考えられる。

遺構名	層位	遺　物　器　種	推　定　年　代
SK2	M1	土師器皿（504・508・509）	15世紀後半
SK3	M1	土師器皿（505）	15世紀後半
SK6	M1	古銭（549） 土師器皿（501）	15世紀前半 15世紀後半
SD1	M1	土師器皿（516）	15世紀後半
SD2	M2	土師器皿 ※瓦（384）	15世紀後半 8世紀前半
SD3	M1	甕（537）	14世紀後半～15世紀前半
SD5	M1	磁器（530）、山茶碗（490）	12世紀前半
SX3	M1	山茶碗（496）	12世紀前半

ＳＤ２は、最下層のＭ２から土師器皿が出土しており中世後半とも考えられるが、瓦（四重弧文軒平瓦）が溝の底部に張り付くように出土していることから瓦の時期である８世紀前半という可能性もある。ＳＤ３は、ＳＤ２の上位から検出されており、出土遺物の検討からみても中世後半と考えられる。ＳＤ５とＳＸ３については、中世前半と思われる。

遺構名	層位	遺　物　器　種	推　定　年　代
ＳＫ９	Ｍ１	弥生・土師器	不　明（小片のため）
ＳＫ11	Ｍ１	土師器皿	不　明（　〃　）
ＳＫ12	Ｍ１	弥生・土師器（379）	８世紀～９世紀
ＳＫ13	Ｍ１	弥生・土師器（Ｓ字甕片）	古墳時代
ＳＤ17		遺物無し	不　明（遺物なし）

第２次遺構面の年代については、出土遺物が小片や少量であるため確定できる遺構が少ない。ＳＫ12は、奈良期の土師器甕片が出土しており、８～９世紀と想定される。ＳＫ13は、Ｓ字甕片が焼土や礫の周辺から出土しており、古墳時代前期と想定される。ＳＫ12は、ＳＫ13を切っており、前後関係にも整合性がみられる。但し、同じ第２次遺構面の他の遺構からは中世の土師器皿片なども出土しており、第２次遺構面全体を古墳時代あるいは８～９世紀と断定することはできない。

(3)　まとめ

Ａ・Ｂ両地区の遺構の検出状況をまとめると、次のように言える。

期	主となる層位	時　　期	主となる遺構
第１期	Ⅴ層	古墳時代後期～奈良・平安時代	ＳＤ16　ＳＫ13　ＳＤ２ ＳＫ12
第２期	Ⅲa 層下	中世前半～中世後半	ＳＤ３・５　ＳＸ３ ＳＫ１・３・６　ＳＤ１
第３期	Ⅱ層・堆積層	近世初頭の遺構面	ＳＤ10

当初、二ノ井遺跡については鎌倉～室町時代にかけて２時期の遺構面が存在すると想定して調査を進めたが、検討の結果、同じ２時期に分かれるもののその時代は古墳時代後期まで遡ることが明らかになった。

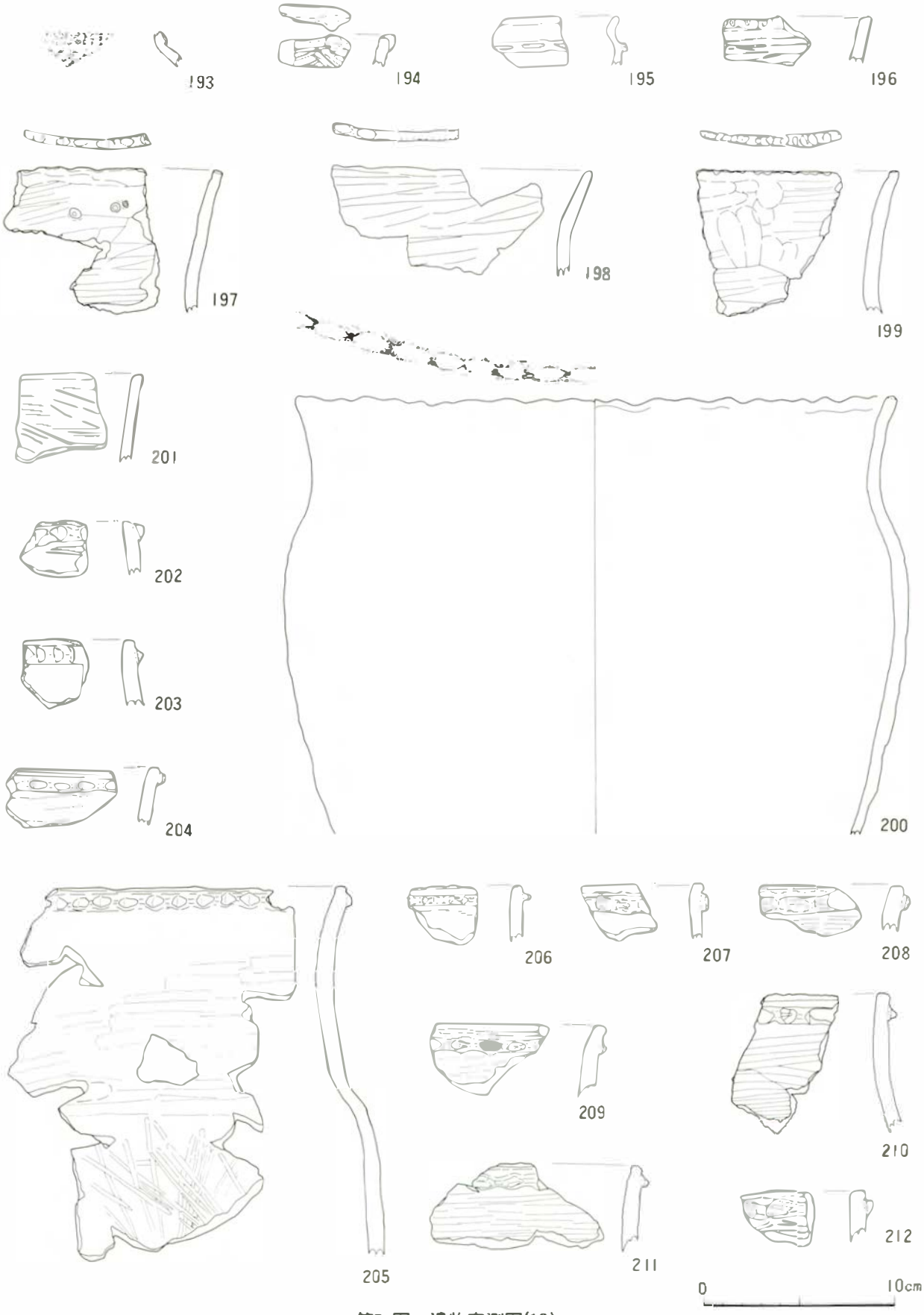
第１期は、二ノ井遺跡調査区内から発見された南高野古墳築造期と同じ時期に当たり、ＳＤ16はその規模からも古墳築造との関連が考えられる。ＳＫ13は、明確なプランを検出することができなかったが、焼土や礫が検出されたことから住居に関連する遺構と考えられる。また、二ノ井遺跡のすぐ西隣には高畑遺跡があり、平成７年度の当センターの発掘調査によって奈良時代初頭の寺院関連遺構が検出されている。ＳＤ２は、区画を意図した溝であり、出土した四重弧文軒平瓦は高畑遺跡からも出土していることから、ＳＤ２と高畑遺跡との関連については今後十分に検討する必要があろう。

第２期は、中世の遺構面である。検出した遺構としては中世墓や溝などであった。この時期の遺物（灰釉陶器・山茶碗・土師器・磁器・石鍋等）は、数が非常に多く、型式も多型式にわたる。本遺跡からは多数のピットを検出したが、掘立柱建物を確認することはできなかったが、連綿とした生活の営みを想像することができる。

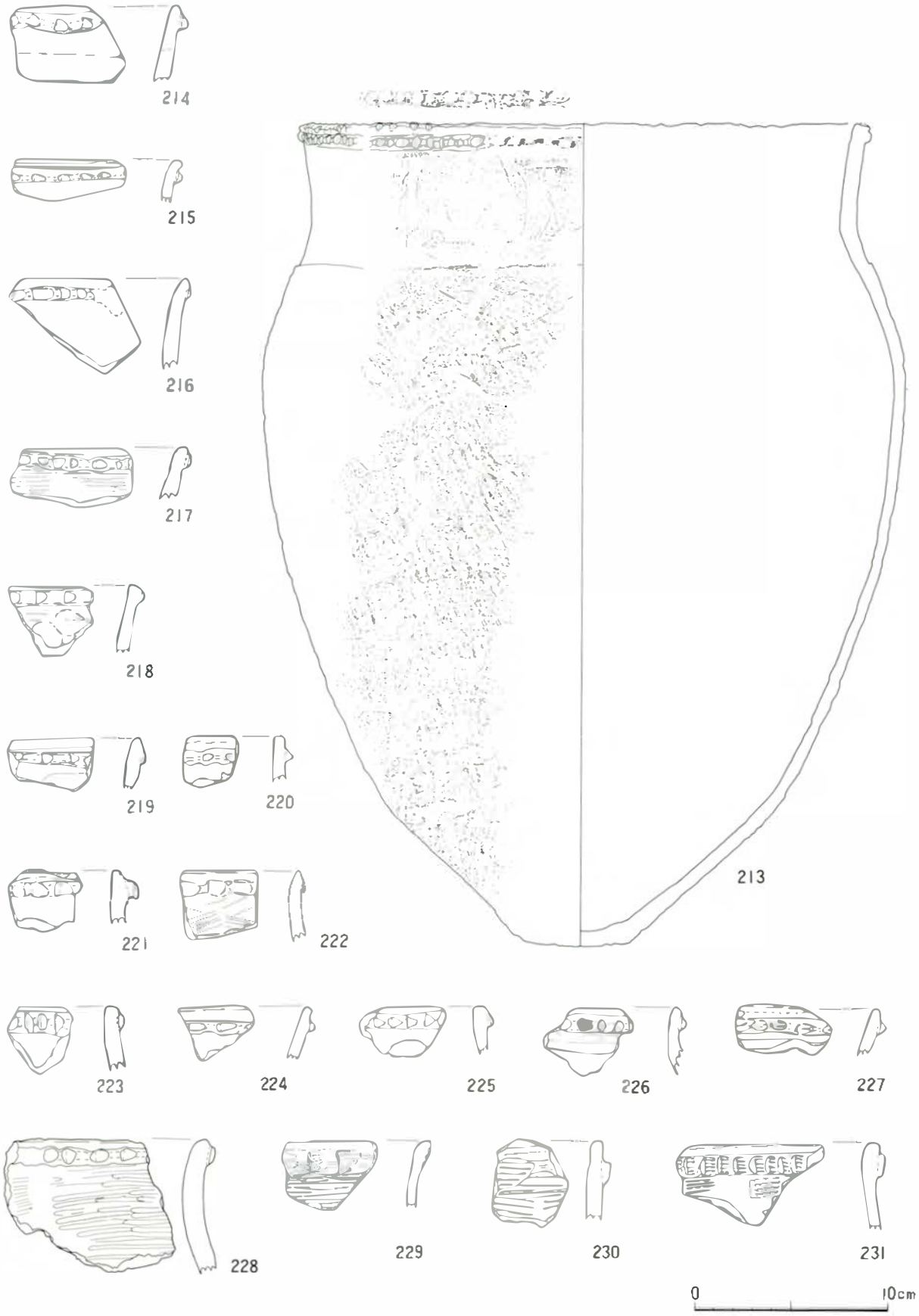
第3期は、近世初頭の遺構面である。調査の進行上、この時期の遺構検出を行わなかったが、断面観察から、水田耕作の様子が観察された。その直後に大量の砂礫によって当該調査区周辺は厚い砂礫層に埋もれたまま荒れ地となり、現在に至ったと思われる。

なお、調査区全体から遺構面としてとらえた時期よりもさらに古い時期の遺物（縄文土器・弥生土器・石器）が出土している。地形形成から考えて大半は流れ込んだ土に含まれたものであると考えられるが、縄文土器には、縄文時代晩期のいわゆる凸帯文土器[1]が多数みられる。二ノ井遺跡の北西に位置する一ノ井遺跡からは縄文時代晩期の遺構が確認されており、二ノ井遺跡やその周辺に同様な遺構が存在する可能性も考えられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。

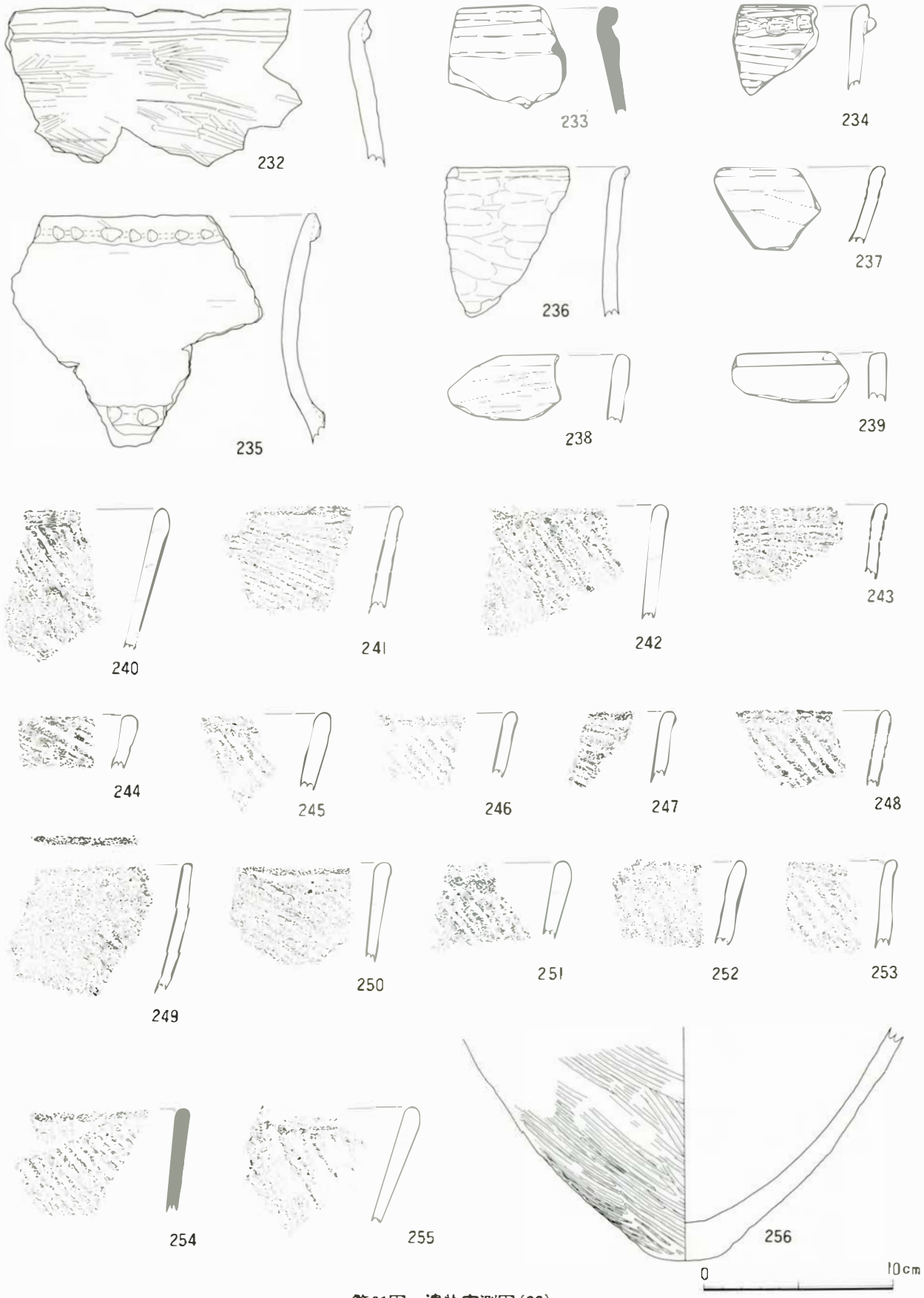
1）縄文時代晩期深鉢の分類は、豊川市教育委員会　1993「麻生田大橋遺跡発掘調査報告書」の分類に従った。



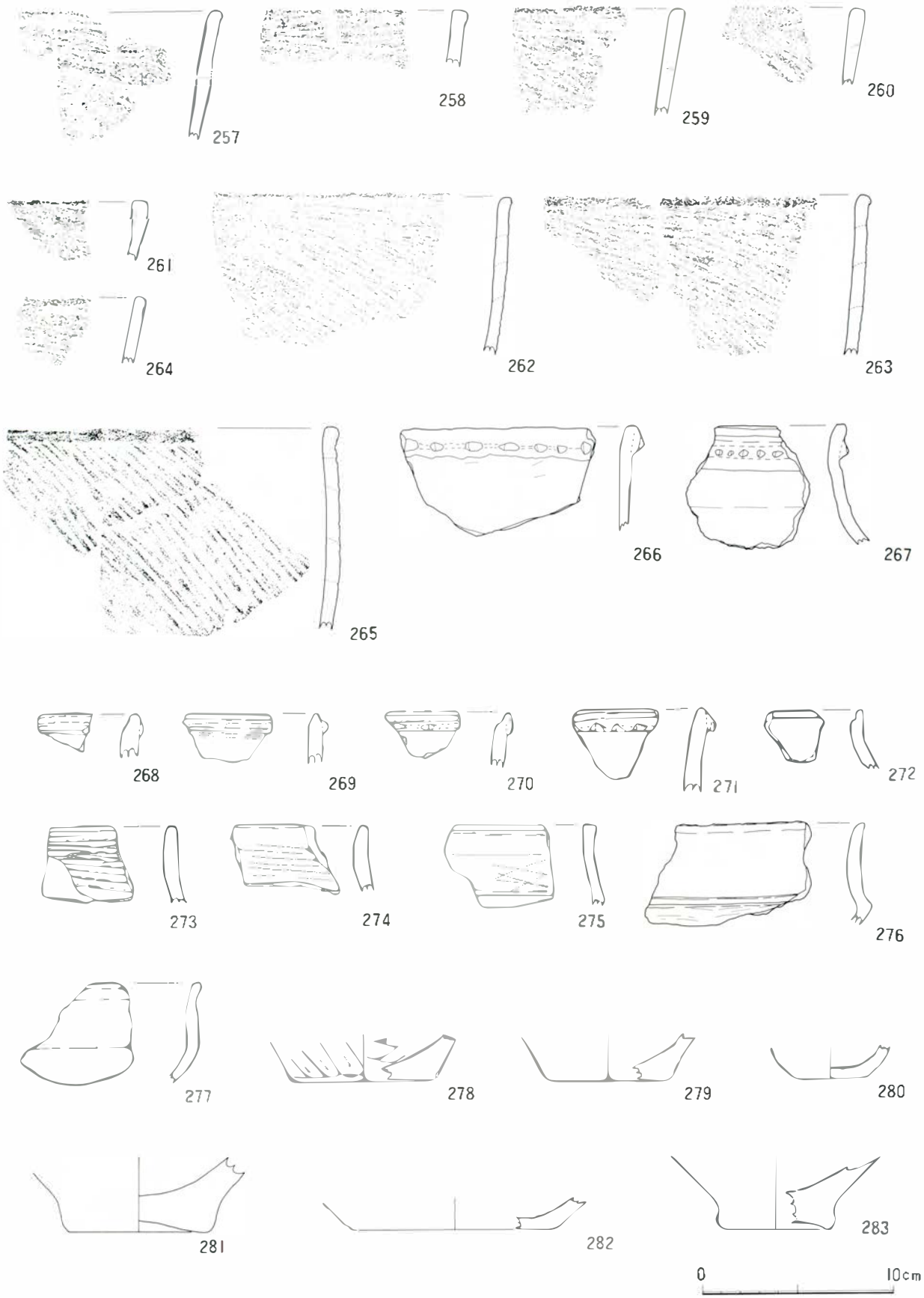
第59図　遺物実測図(18)



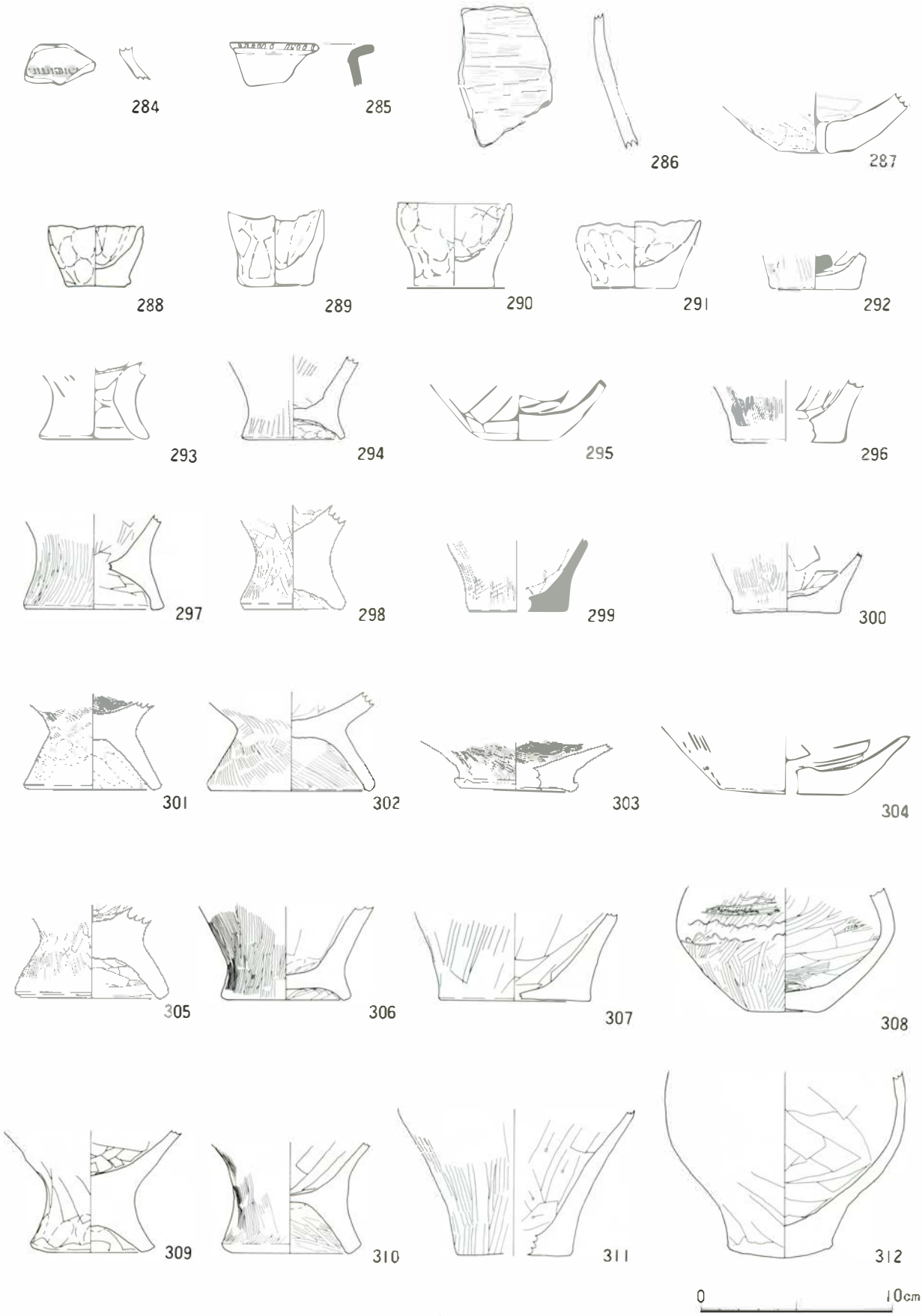
第60図　遺物実測図(19)



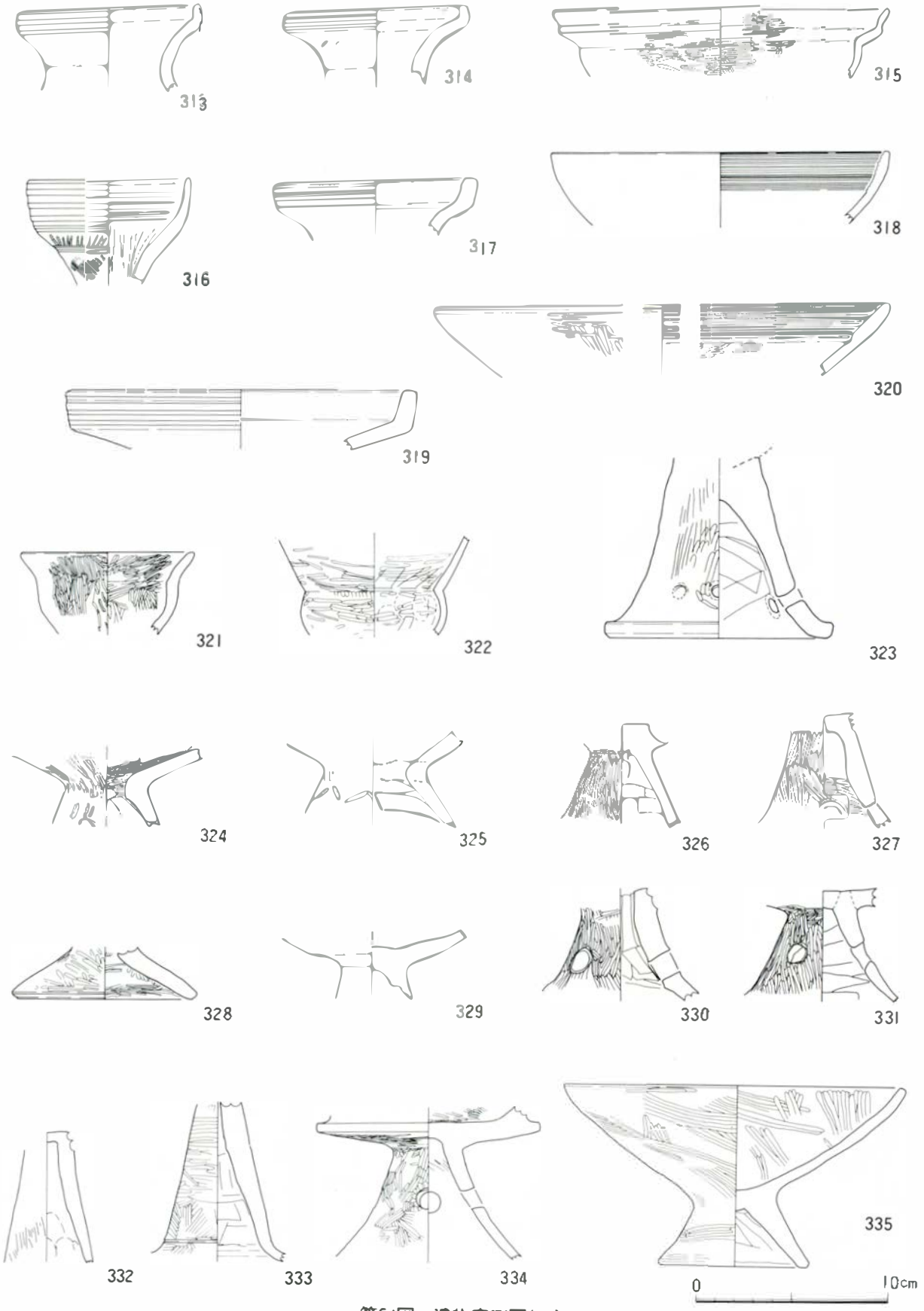
第61図　遺物実測図(20)



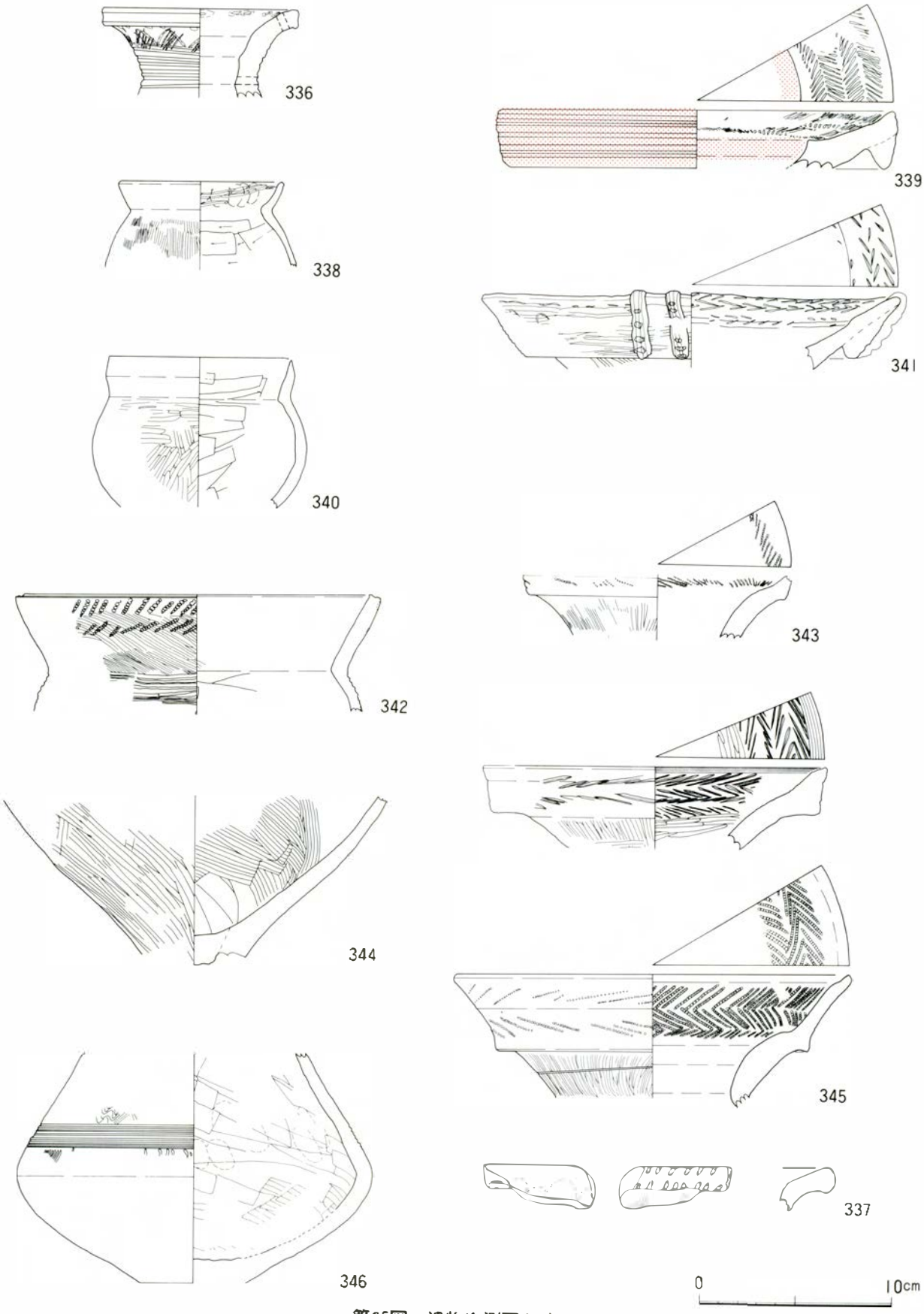
第62図　遺物実測図(21)



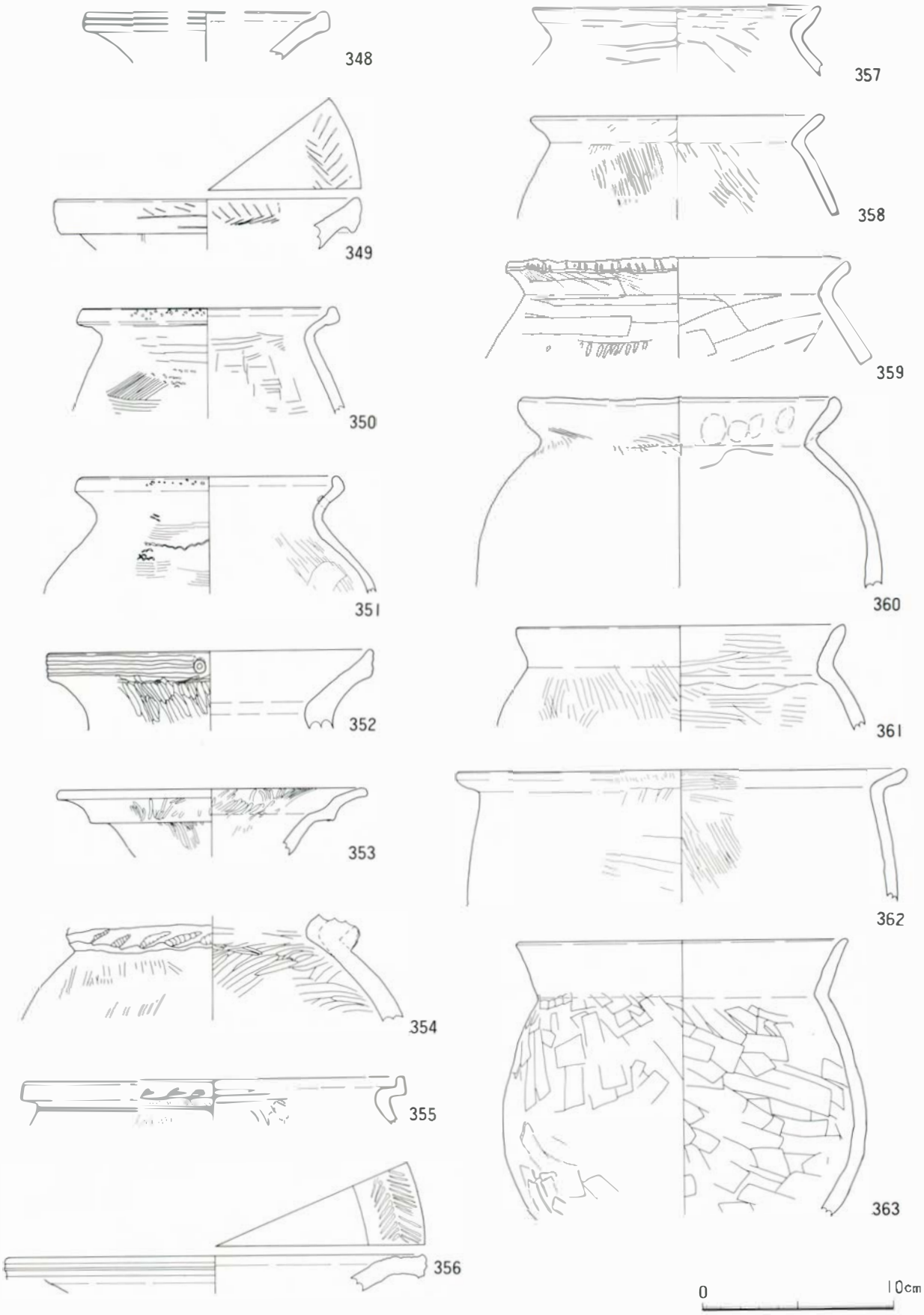
第63図　遺物実測図(22)



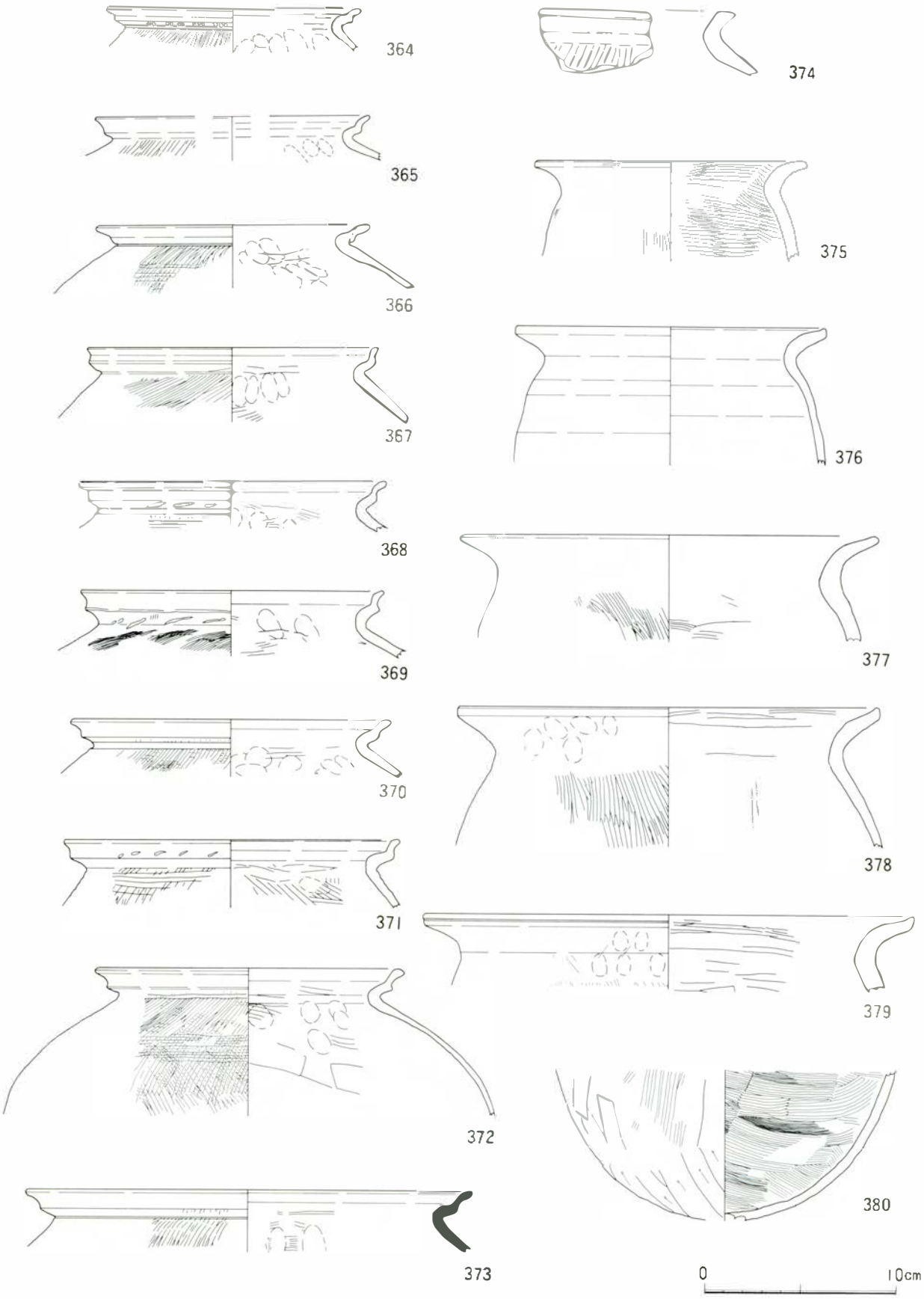
第64図　遺物実測図(23)



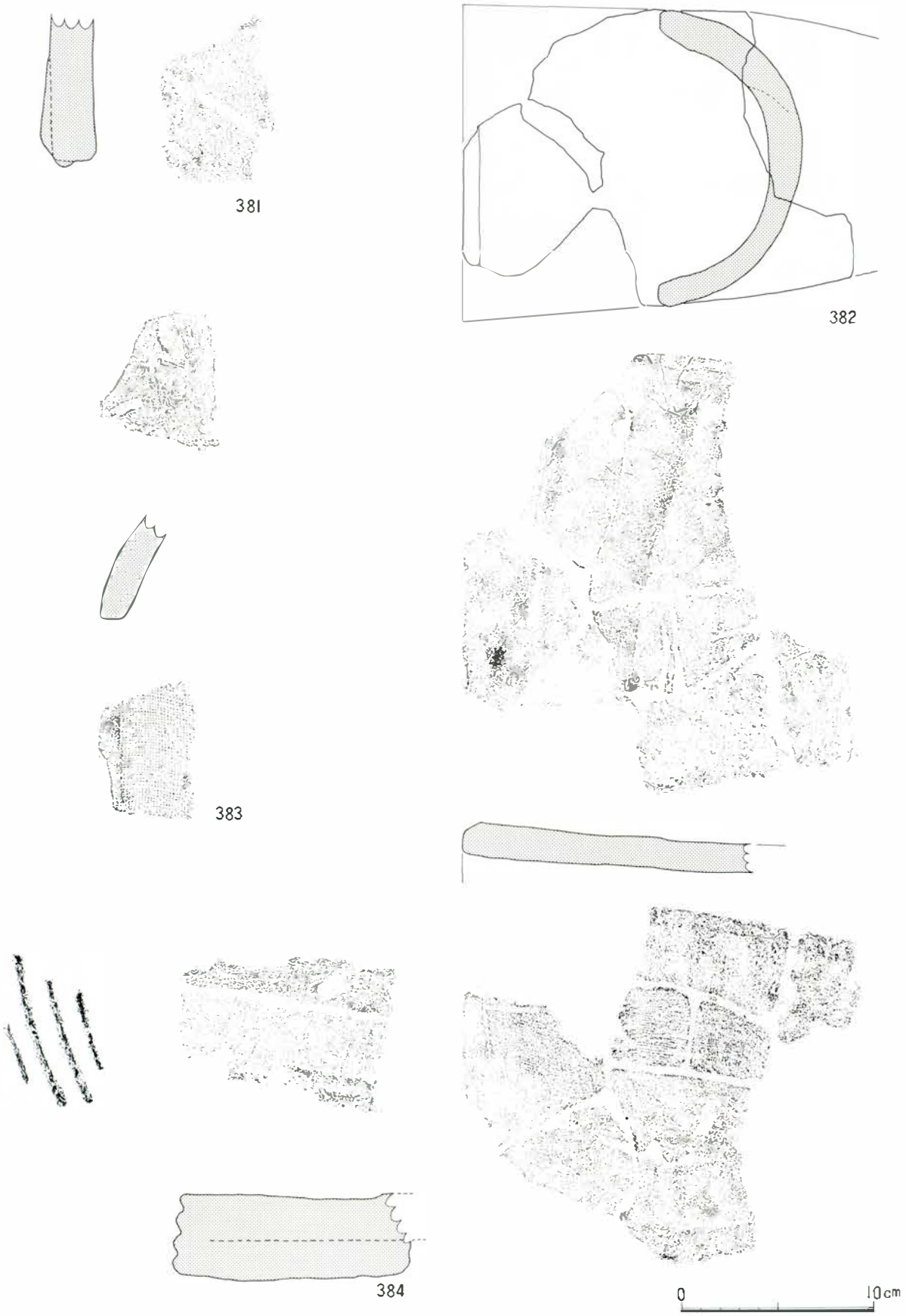
第65図　遺物実測図(24)



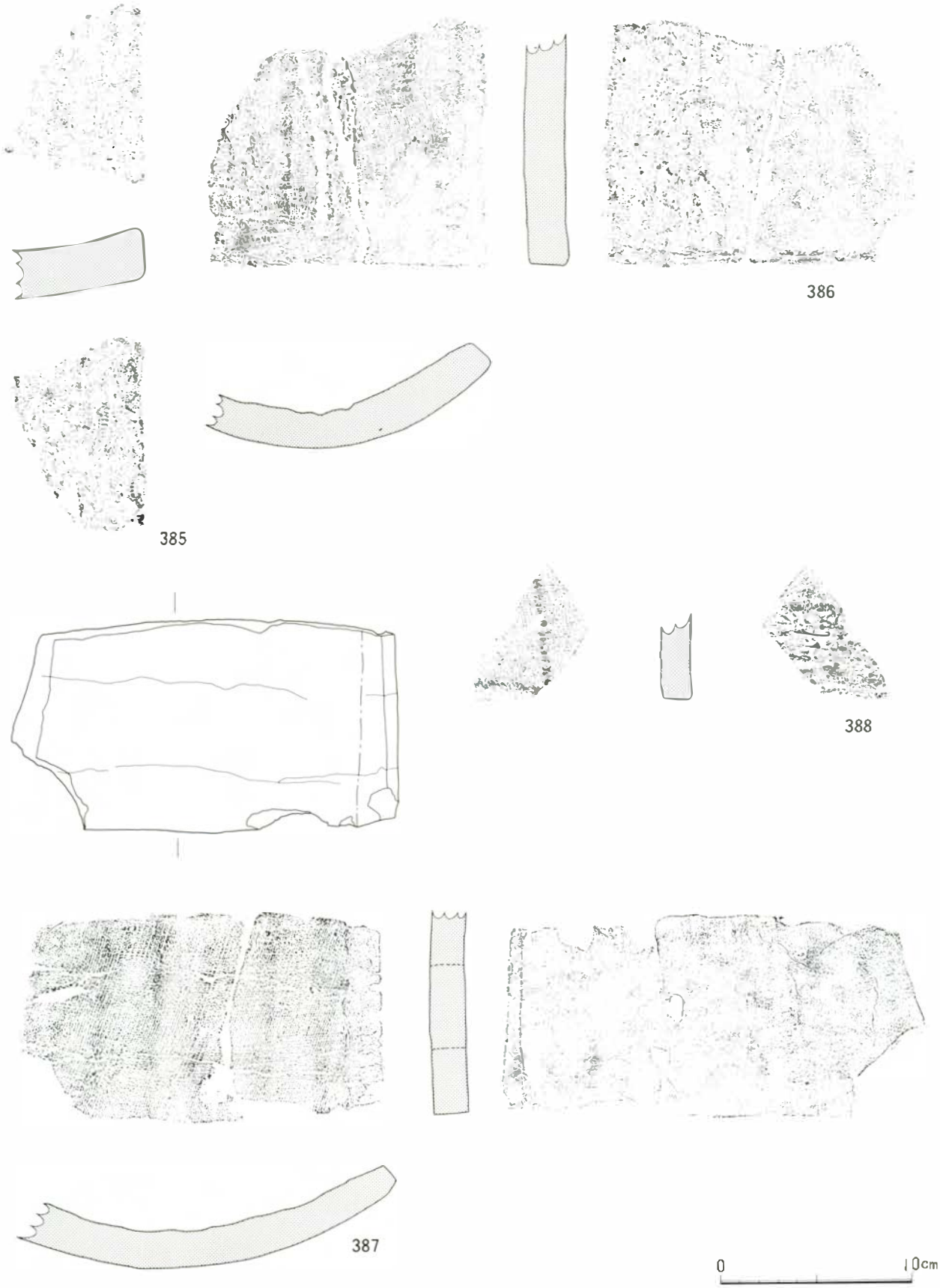
第66図　遺物実測図(25)



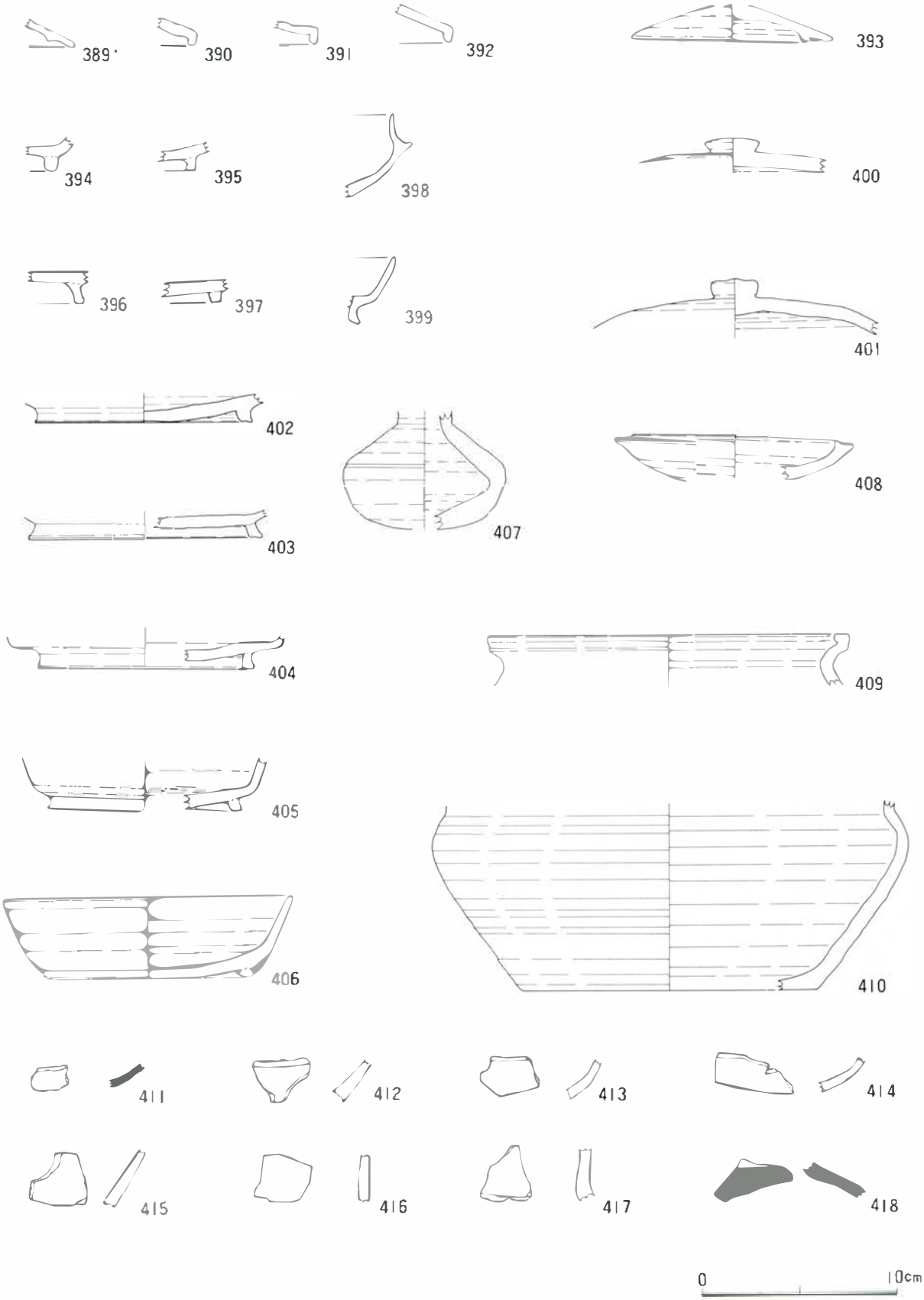
第67図　遺物実測図(26)



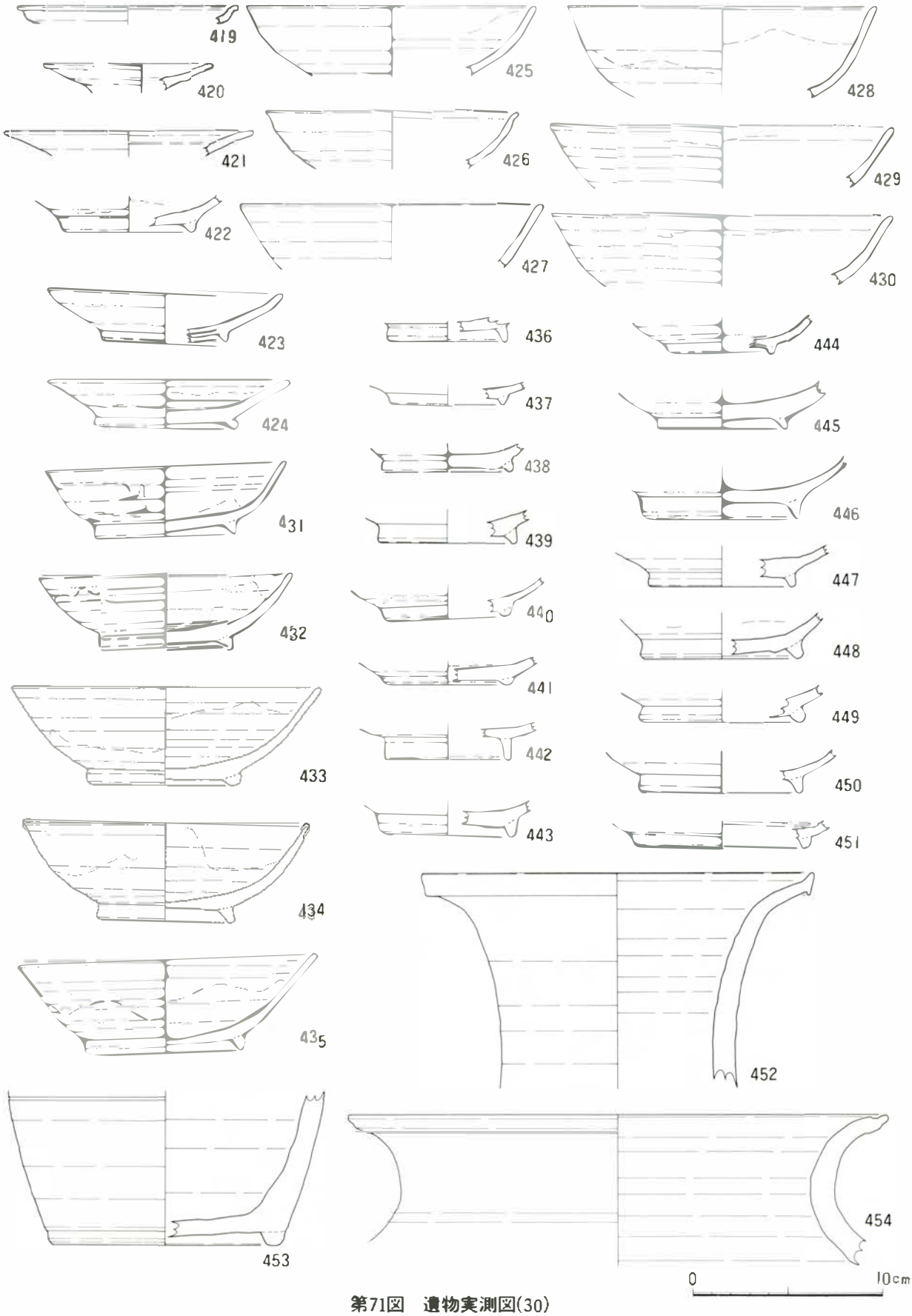
第68図　遺物実測図(27)



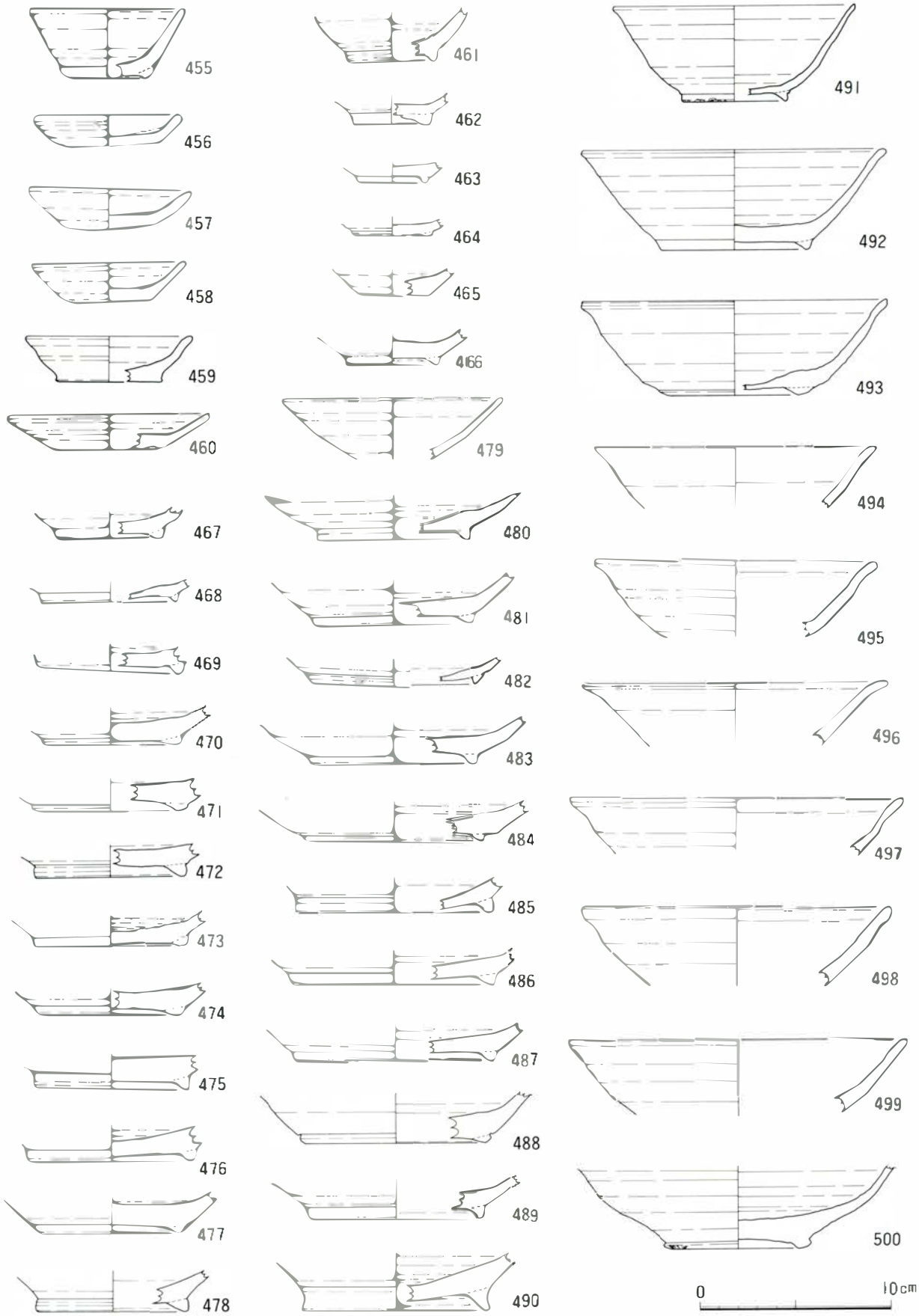
第69図　遺物実測図(28)



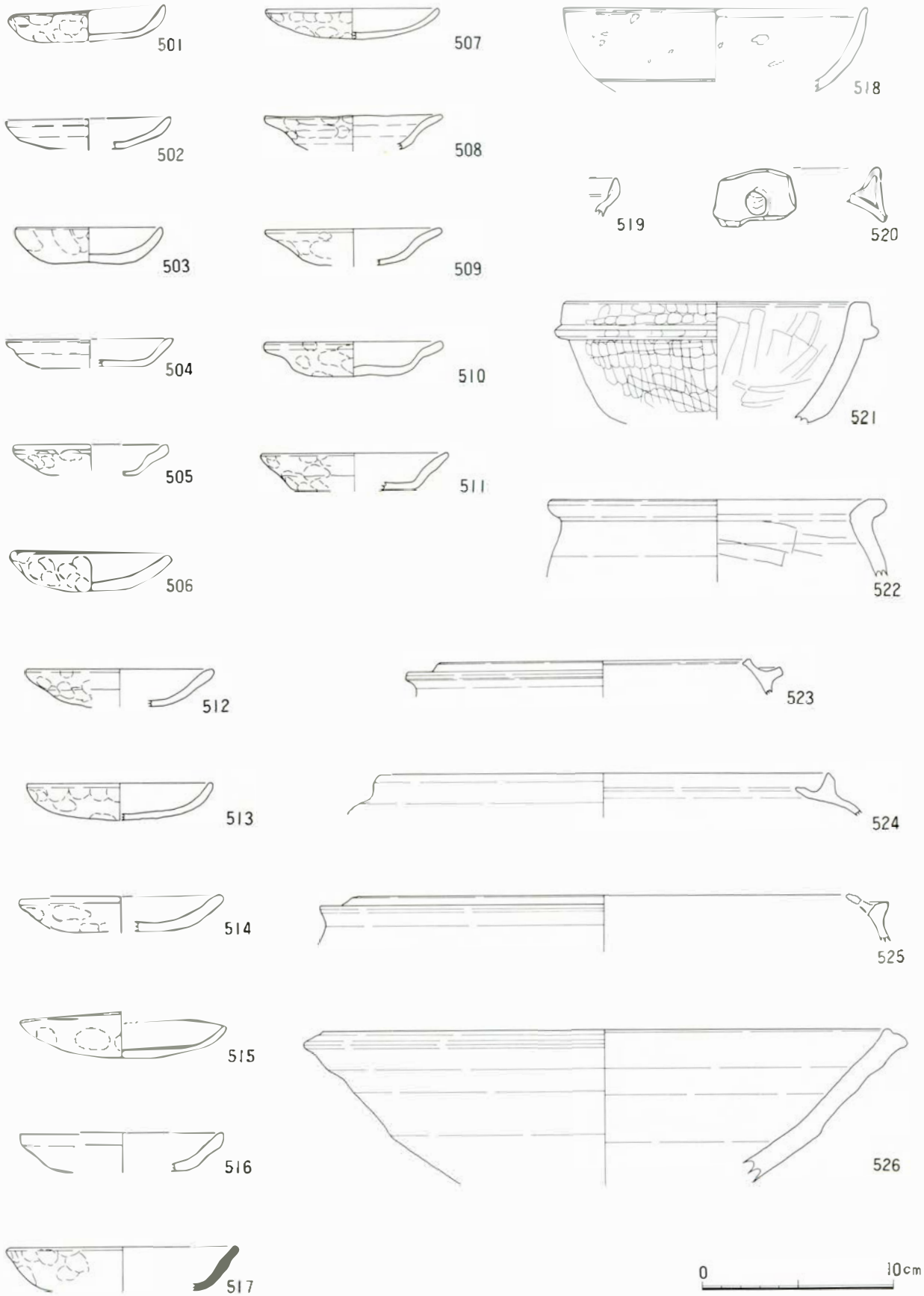
第70図　遺物実測図(29)



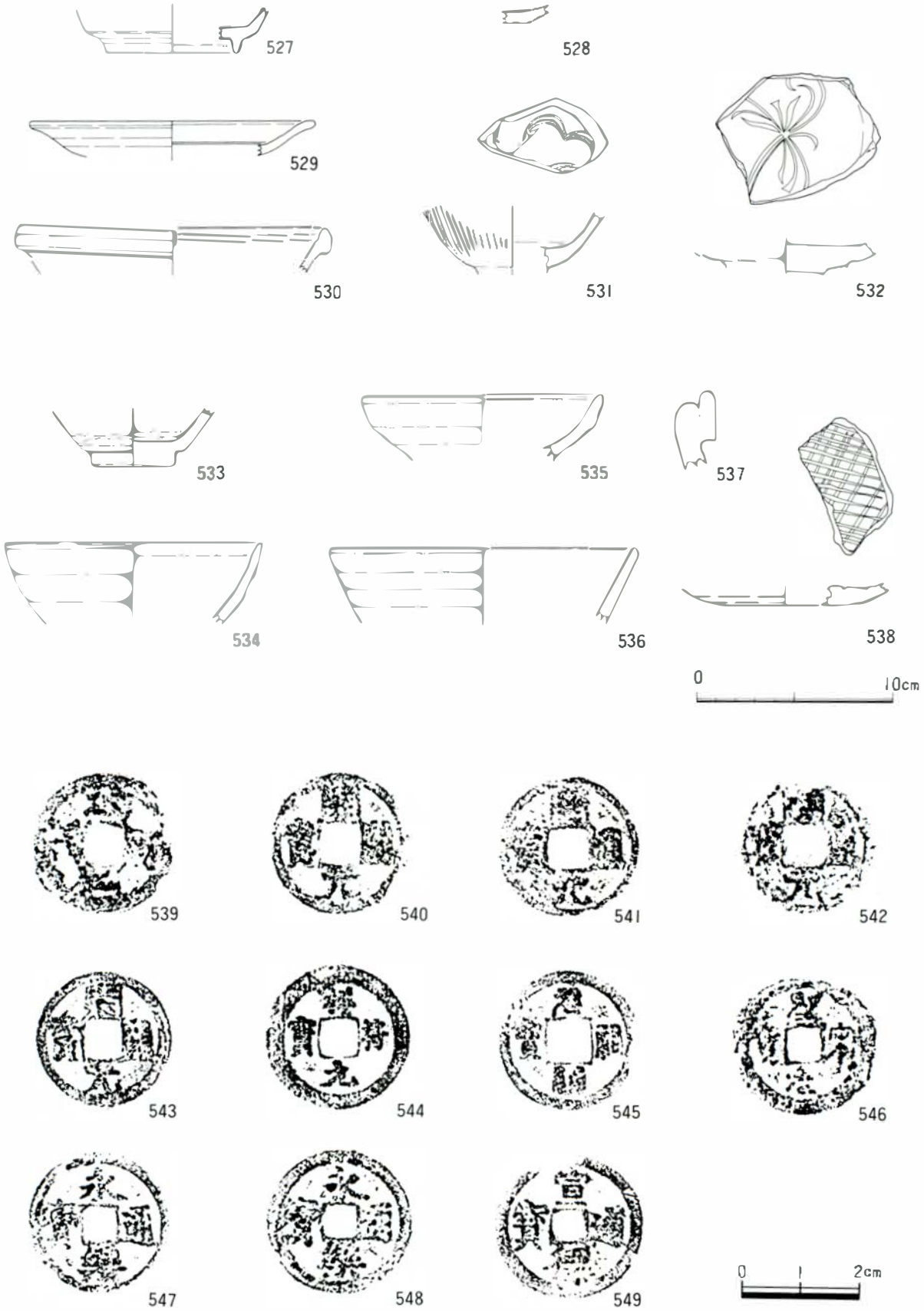
第71図　遺物実測図(30)



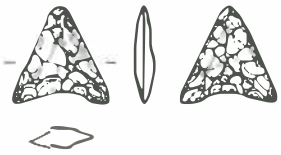
第72図　遺物実測図(31)

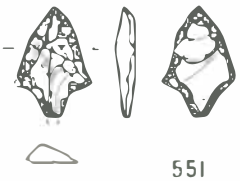


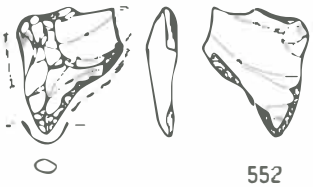
第73図　遺物実測図(32)



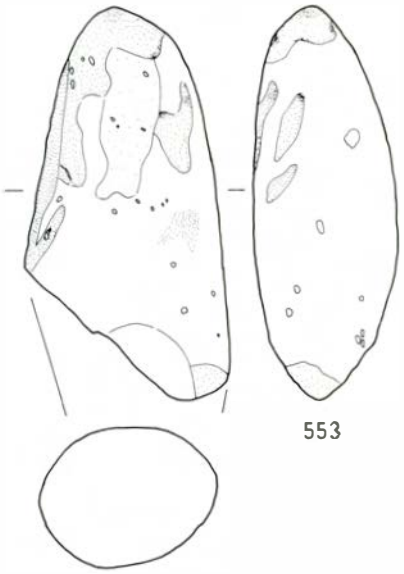
第74図　遺物実測図(33)

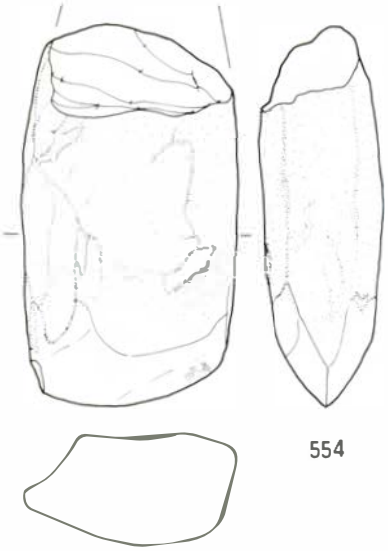

550


551

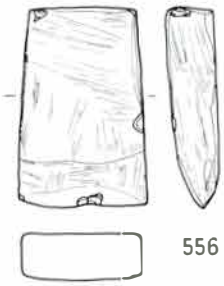

552

0　5cm


553

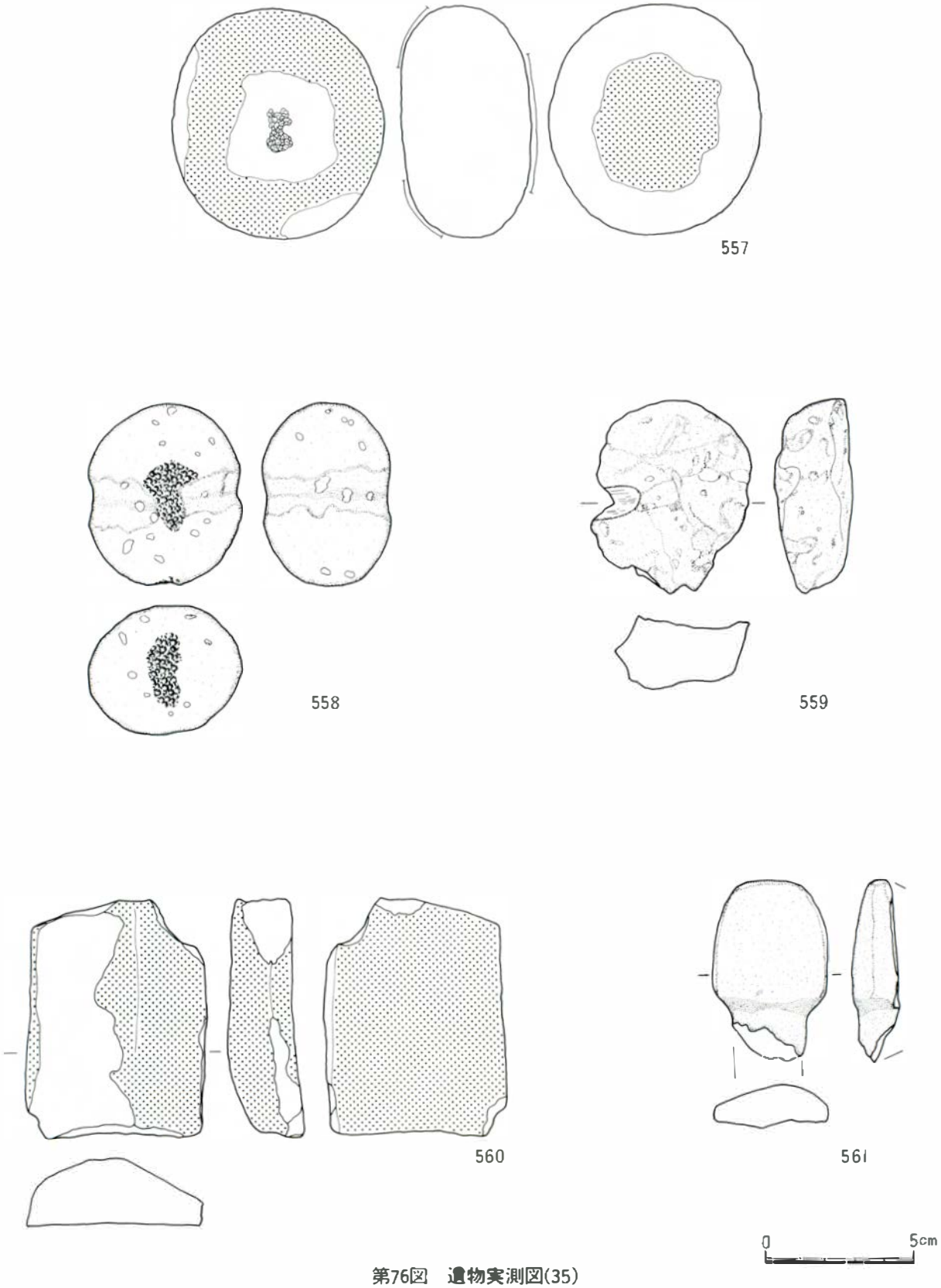

554

555


556

0　5cm

第75図　遺物実測図(34)



第76図　遺物実測図(35)

第20表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(1)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	成形・調整	その他(釉薬など)
193	I 10	Ⅶ	縄文土器　深鉢前期北白川				密、径0.5㎜以下の長石を含む	にぶい黄褐、褐	内面横ナデ	地文は縄文、頸部にやや太い粘土紐を1条貼付しその上に半截竹管状工具による刺突
194			縄文土器　深鉢後期				密、径1㎜以下の雲母・石英・砂粒を多く含む	灰黄褐		
195	I 11	Ⅵ	縄文土器　深鉢				密、径2㎜以下の石英・雲母・長石を含む	にぶい橙		口縁下に浮線文1条
196	H10	M 3	縄文土器 深鉢Ⅰ Aa				やや粗、径2㎜以下の雲母・石英を含む	にぶい黄橙	体部内外面横ナデ	口縁端部にヘラ押し引きによるD字状の刻目
197	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰ Aa				粗、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁端部にヘラ押し引きによるD字状の刻目
198	H10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Aa				やや粗、径2㎜以下の長石・石英・赤褐色粒を含む	暗褐	体部外面横ナデ	口縁端部面取り指オサエによる刻み
199	H11		縄文土器 深鉢Ⅰ Aa				粗、径6㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	灰黄褐	体部外面横ナデ・指ナデ	口縁端部にヘラ押し引きによるO字状の刻目
200	H11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Aa	31.2			密、径2㎜以下の砂粒を多く含む、長石・石英・雲母を含む	にぶい黄橙、黒	体部内外面横ナデ	口縁端部面取り、指頭による押し引き
201	—	—	縄文土器 深鉢Ⅰ Ab				やや粗、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい橙	体部外面粗い削り	
202		Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径3㎜以下の長石・雲母を多く含む	灰白	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
203	D 1	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				やや粗、径5㎜以下の長石・雲母を含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
204	H10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径2㎜以下の長石・石英・雲母を含む	にぶい黄橙		口縁端部面取り、口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
205	D 3	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				径1～5㎜の砂粒を多く含む	灰黄褐～褐灰	肩部外面横ナデ、胴部外面縦位斜位の条痕	口縁端部面取り、口縁下にヘラ押し引きによるO字状の刻目凸帯1条、肩部と胴部の境に段
206	SX 3	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰ Ba				やや粗、径4㎜以下の長石・石英・雲母・黒色色粒を多く含む	浅黄橙		口縁端部にヘラ押し引きによるD字状の刻目、口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
207	C 0	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径3㎜以下の長石・石英・黒色粒・赤褐色粒を含む	にぶい橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
208	I 11	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				やや粗、径3㎜以下の赤褐色粒を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
209	H11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径2㎜以下の長石・石英・雲母を多く含む	にぶい橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
210	H10	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径3㎜以下の雲母・長石・石英を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
211	H11		縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				やや粗、径3㎜以下の石英・雲母・長石を多く含む	にぶい橙	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
212	H10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bb				粗、径1㎜以下の雲母・石英・長石赤褐色粒を多く含む	明赤褐	体部外面横ナデ	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
213	H11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Ba	29.2	42.8	5.3	密、径5㎜以下の砂粒を多く含む、長石・石英・金雲母を含む	にぶい橙、橙、灰	頸部内外面横ナデ、胴部縦位斜位の条痕	口縁端部・口縁下ヘラによる押し引き刻み凸帯
214	H10	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径4㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
215	C 0	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径4㎜以下の長石・赤褐色粒を多く含む	にぶい黄橙		口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
216	H10	Ⅴ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径3㎜以下の石英・雲母・白色粒を含む	浅黄橙	体部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
217	H10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径5㎜以下の長石・赤褐色粒を多く含む	明赤褐	体部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるO字状の刻目凸帯1条
218	H 9	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径4㎜以下の長石・石英・赤褐色粒を多く含む	灰白	体部外面横ナデ、指オサエ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
219	H10	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径5㎜以下の石英・雲母を含む	にぶい黄橙	口縁部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
220	D 1	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径2㎜以下の長石・石英・雲母を含む	にぶい黄橙		口縁下に指押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
221	D 2	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径4㎜以下の石英・長石・雲母・赤褐色粒を多く含む	浅黄橙		口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
222			縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径2㎜以下の石英・雲母・長石を多く含む	浅黄橙	口縁部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
223	D 1	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				密、径1㎜以下の雲母、径3㎜以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条

第21表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(2)

掲載番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
224	H10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径3mm以下の長石・砂粒を多く含む	明赤褐	口縁部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
225	D 1	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径3mm以下の石英・雲母を多く含む	にぶい黄橙		口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
226	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径1mm以下の雲母・長石・石英・砂粒を多く含む	にぶい黄橙	胴部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
227	H11		縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径3mm以下の雲母・石英・長石を多く含む	にぶい橙	口縁部外面横ナデ	口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
228	H11	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径7mm以下の砂粒を含む	橙	胴部外面横位の条痕	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
229	I 10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径2mm以下の雲母・長石・石英を多く含む	橙	体部外面横ナデ	口縁下に貝殻押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
230	F 8	Ⅳ	縄文土器 底部片				やや粗、径3mm以下の長石・雲母・石英を多く含む	橙	体部外面貝殻条痕	口縁下に貝殻押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
231	D 3	Ⅲb	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径4mm以下の長石・雲母・石英を多く含む	橙	体部外面貝殻条痕	口縁下に貝殻押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
232	D 3	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bd				やや粗、径1～5mm以下の砂粒を含む	にぶい橙	胴部外面横ナデ	口縁下に1条の素文凸帯
233	H 10	Ⅷc	縄文土器 深鉢Ⅰ Bd				粗、径3mm以下の雲母・石英・長石・白色粒を多く含む	褐灰		口縁端部折り返し、口縁下に1条の素文凸帯
234	H 10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bd				やや粗、径3mm以下の雲母・長石・赤褐色粒を多く含む	にぶい橙	体部外面横位の貝殻条痕	口縁端部面取り、口縁下に半截竹管押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
235	H11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰ C				やや粗、径2mm以下の雲母・長石・石英・白色粒を多く含む	にぶい黄橙		口縁下・肩部にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯2条
236	C 6	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ab				粗、径4mm以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄褐	体部外面横位のミガキ	口縁端部外方に肥厚
237	H10	Ⅸ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ab				やや粗、径1mm以下の石英を多く含む	橙	体部外面横ナデ	口縁端部外方に肥厚
238	I 10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ab				やや粗、径4mm以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄褐	体部外面横位の粗い削り	
239	D 1	Ⅲa	縄文土器 深鉢Ⅱ Ab				やや粗、径2mm以下の石英・長石・雲母を多く含む	浅黄橙	体部外面横ナデ	
240	I 11	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
241	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
242	H10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	にぶい褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
243	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	橙	体部外面横位の条痕、内面ナデ	
244	H10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
245	I 12	Ⅸ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	にぶい黄褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
246	S 5		縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
247	H10		縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	にぶい黄橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
248	I 11	Ⅴ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部折り返して肥厚
249	H10	Ⅸ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
250	H 9	Ⅴ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
251	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
252	H 9	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	にぶい黄褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	
253	SD 2	Ⅲb	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				やや粗、径5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む	明褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部折り返して肥厚
254	H11	Ⅴ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	にぶい褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部折り返して肥厚
255	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac				密、径5mm以下の石英・長石・雲母を少し含む	灰褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	

第22表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(3)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(軸径など)
256	C 2	Ⅲb	縄文土器 深鉢Ⅱ Ac			3.8	粗、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	明赤褐、にぶい褐	体部・底部外面条痕	
257	H 11	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
258	H 10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい橙	体部外面横位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
259	I 11	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
260	—	—	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を含む	灰黄褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
261	H 10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り、口縁端部内方へ折り返し
262	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、雲少ない	褐褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
263	H 11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む	にぶい黄褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
264	H 10	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を含む	にぶい橙	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
265	H 10	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅱ Ad				密、径5㎜以下の石英・長石・雲母を少し含む	暗褐	体部外面斜位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
266	I 11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅱ B				粗、径3㎜以下の雲母・石英・長石を多く含む	浅黄橙		口縁下にヘラ押し引きによる扁平なD字状の刻目凸帯1条
267	C 1	Ⅳ	縄文土器 壺Ⅲ Ba				粗、径5㎜以下の石英・雲母・白色粒・黒色粒を多く含む	にぶい橙		口縁端部面取り、口縁下にヘラ押し引きによるO字状の刻目凸帯1条
268	H 10	Ⅶ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径1㎜以下の石英・雲母・長石を含む	オリーブ黒		口縁下にヘラ押し引きによるO字状刻目凸帯1条、口縁内面に段
269	H 10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや密、径6㎜以下の石英・雲母・長石・砂粒を含む	橙		口縁下に1条の素文凸帯
270	I 10	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				やや粗、径3㎜以下の石英・長石を多く含む	灰白		口縁下にヘラ押し引きによるO字状刻目凸帯1条、口縁内面に段
271	SD 2	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰ Bc				粗、径2㎜以下の石英・雲母・長石を多く含む	にぶい黄橙	口縁部外面横ナデ	口縁下にヘラ押し引きによるD字状の刻目凸帯1条
272	I 11	Ⅷ	縄文土器 深鉢Ⅰ Ab				粗、径2㎜以下の砂粒を多く含む	褐灰		口縁外面下に1条沈線、口縁内面に段
273	I 11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Ab				やや粗、径1㎜以下の雲母・砂粒を多く含む	暗褐	体部外面横位の条痕、内面ナデ	口縁端部面取り
274	I 11	Ⅻ	縄文土器 深鉢Ⅰ Ab				粗、径1㎜以下の石英・雲母・白色粒を多く含む	にぶい黄橙	体部外面横ナデ、内面指オサエ・横ナデ	
275	I 11	Ⅻ	縄文土器 浅鉢Ⅴ				粗、径2㎜以下の石英・雲母・長石を含む	にぶい黄橙	肩部外面板状工具の横ナデ	口縁端部凹み、肩部と胴部の境に段
276	H 10	Ⅳ	縄文土器 浅鉢Ⅴ				やや粗、径2㎜以下の砂粒を多く含む	黒	肩部外面ミガキ、胴部外面横位削り	口縁端部外方に肥厚、肩部と胴部の境に段
277	H 12		縄文土器 浅鉢Ⅴ				やや粗、径2㎜以下の石英・雲母・長石を含む	にぶい赤褐		口縁端部凹み
278	H 11	Ⅷ	縄文土器 底部片			7.5	密、径6㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	にぶい黄橙	体部外面・底部内面縦位削り・指圧痕、底部内面板ナデ	
279	H 10	Ⅳ	縄文土器 底部片			6.0	粗、径3㎜以下の石英・雲母・長石を多く含む	橙	体部・底部外面横ナデ	底部外面凹む、底部立ち上がりに稜
280	I 11	Ⅻ	縄文土器 底部片			3.8	粗、径4㎜以下の長石・石英・雲母を多く含む	浅黄橙	体部・底部外面指ナデ	
281	C 1	Ⅳ	縄文土器 底部片			7.4	粗、径5㎜以下の石英・雲母・黒色粒を多く含む	にぶい黄橙	体部・底部外面指ナデ	底部外面凹む
282	H 11	Ⅷ	縄文土器 底部片			10.4	粗、径1㎜以下の雲母・石英・白色粒を多く含む	浅黄橙	体部内外面横ナデ	
283			縄文土器 底部片			5.6	粗、径6㎜以下の長石・石英・雲母を多く含む	にぶい黄橙	体部・底部外面削り、底部内面指ナデ	底部高台状で中央凹み
284	G 9	Ⅸ	弥生土器　壺				やや密、径1㎜以下の石英・雲母を含む	明赤褐	体部内面ハケメ	体部外面2条沈線、刺突文、遠賀川系？
285	H 11	Ⅷ	弥生土器　甕				やや密、径3㎜以下の長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む	にぶい橙	体部内外面横ナデ	口縁端部外面刺突文、遠賀川系？
286	D 1	Ⅱ	弥生土器　壺				密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	にぶい橙	頸部外面ハケメ	弥生期？
287	D 1	Ⅳ	土師器　甑			4.0	密、径7㎜以下の長石・石英・雲母・チャート・赤褐色粒を含む	にぶい赤褐	底部外面ナデ、体部外面ヘラ削り、底部内面板ナデ	底部片、底部中央孔

第23表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(4)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
288	C 0	Ⅳ	土師器 小形鉢	4.9	3.1	3.15	密、径3mm以下の砂粒を含む	暗灰、赤褐	体部外面指オサエ・板ナデ、内面指ナデ	
289	SX 3	M 1	土師器 小形鉢			3.8	密、径5mm以下の砂粒を含む、長石を含む	黒褐、にぶい赤褐	体部外面指オサエ・板ナデ、底部外面板ナデ、体部内面指ナデ	
290	H10	Ⅵ	弥生土器　甕			4.05	密、径8mm以下の砂粒を含む	橙、黒褐	体部外面指オサエ・板ナデ、内面指ナデ	高蔵期?
291	C 0	Ⅳ	土師器 小型鉢	6.2	4.2	3.45	密、径1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙、黒褐	体部内外面・底部内面指オサエ、内面一部板ナデ	
292	D 0	Ⅳ	弥生土器　壺			4.6	密、径1mm以下の砂粒をやや多く含む、金雲母・石英を含む	浅黄橙、灰白	体部外面ハケメ、内面板ナデ	高蔵期?
293	H10	Ⅷc	弥生土器 台付甕			5.3	密、径1mm以下の砂粒を多く含む、金雲母・石英・茶色粒を含む	浅黄橙、灰白	台部外面ハケメ、内面・底部内面板ナデ	高蔵期?
294	H 9	Ⅸ	弥生土器　甕			5.4	密、径1mm以下の砂粒を含む、金雲母・石英・長石を含む	浅黄橙、にぶい橙	台部内面板ナデ・指オサエ、外面ハケメ、体部内面ハケメ、底部内面板ナデ	高蔵期?
295	H10	Ⅶ	土師器　壺			4.0	密、径6mm以下の砂粒を含む	橙	底部内外面板ナデ	
296	F 6	Ⅲa	弥生土器　甕			5.75	密、径1mm以下の砂粒を含む、金雲母を少量、長石を含む	灰白、にぶい橙	体部～底部外面ハケメ、内面板ナデ	高蔵期?
297	H 9	Ⅹ	弥生土器 台付甕			6.6	密、径1mm以下の砂粒を多く含む、金雲母・長石・茶色粒を含む	にぶい黄橙	台部外面ハケメ、内面板ナデ、底部内面板ナデ	高蔵期?
298	SX 3	M 1	弥生土器　甕			12.0	やや粗、径3mm以下の石英・長石・雲母を含む	灰褐黄	台部外面ハケメ、内面指オサエ、体部外面板ナデ、底部内面板ナデ	台部片、朝日期?
299	H10	Ⅵ	弥生土器　甕			5.0	密、径1mm以下の砂粒を含む、長石を含む	にぶい橙	体部～底部外面ハケメ、内面板ナデ	高蔵期?
300	D 3	Ⅴ	弥生土器　甕			5.5	密、径1mm以下の砂粒を含む、金雲母・長石・石英を含む	浅黄橙	体部～底部外面ハケメ、内面板ナデ	
301	SX 3	M 1	土師器 台付甕			6.6	密、径3mm以下の長石・石英・雲母・チャートを多く含む	橙	台部内外面指オサエ、体部内外面ハケメ	
302	C 0	Ⅳ	土師器 台付甕			8.3	密、径3mm以下の長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む	赤褐	底部内面板ナデ、底部外面・台部内外面ハケメ	底部～台部片
303	H 9	Ⅶ	弥生土器　甕			6.5	密、径1mm以下の砂粒を少量含む	赤、赤黒	底部外面板ナデ、体部外面ミガキ、底部内面ハケメ	
304	H11	Ⅴ	弥生土器　甕			6.9	密、径1mm以下の砂粒を多く含む、金雲母・石英・長石・茶色粒を含む	浅黄橙、黒	体部～底部外面ハケメ、内面板ナデ	高蔵期?
305	C 0	Ⅳ	弥生土器　甕			7.1	密、径4mm以下の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む	にぶい褐	台部外面ハケメ、台部内面・体部外面・底部内面板ナデ	台部片、朝日期?
306	I 11	Ⅵ	弥生土器 台付甕			5.9	密、径1mm以下の砂粒を含む、茶色粒・石英・長石を含む	にぶい黄橙	台部外面ハケメ、内面板ナデ、底部内面板ナデ	高蔵期?
307	H10	Ⅶ	弥生土器　甕			7.9	密、径2mm以下の砂粒を多く含む、長石を含む	にぶい橙、橙、オリーブ黒	体部～底部外面ハケメ、内面板ナデ、底部外面指オサエ	高蔵期?
308	H11		弥生土器　壺			3.1	密、径3mm以下の砂粒を含む、金雲母・茶色粒・黒雲母・長石・石英を含む	橙、褐灰	体部～底部外面ハケメ、体部～底部内面ハケメ、板ナデ	体部外面中位に沈線・波状文
309	H10	Ⅸ	弥生土器 台付甕			6.5	密、径3mm以下の砂粒を含む、長石を含む	橙	底部内面板ナデ、台部内外面板ナデ・指オサエ	高蔵期?
310	I 11	Ⅻ	弥生土器 台付甕			7.8	密、径3mm以下の砂粒を含む、金雲母・瓦路雲母・長石・茶色粒を含む	灰褐、浅黄橙	底部内面板ナデ、台部内外面ハケメ	高蔵期?
311	H10	Ⅴ	弥生土器　甕			5.9	密、径1mm以下の砂粒を多く含む、金雲母・石英を含む	浅黄橙、灰白	体部～底部外面ハケメ、内面ヘラ削り	高蔵期?
312	D 1	Ⅳ	弥生土器　甕			5.2	密、1.2mm以下の砂粒を含む	明赤褐、黒	体部内外面板ナデ	体部下位煤付着
313	H11		弥生土器　壺	9.6			やや粗、径3mm以下の長石・石英・雲母を含む	浅黄橙	口縁～頸部内外面横ナデ	口縁部外面2条沈線
314	D 2		弥生土器 細頸壺	9.5			やや粗、径2mm以下の石英・長石・赤褐色粒を多く含む	灰白	口縁～頸部内外面横ナデ	口縁部外面3条沈線、頸部波状文
315	C 1	Ⅳ	土師器　小型二重口縁鉢	17.4			密	明赤褐	口縁～体部内外面ミガキ	口縁～体部片
316	D 1	Ⅱ	弥生土器 細頸壺	8.4			やや粗、径3mm以下の長石・チャート・赤褐色粒を多く含む	にぶい橙	口縁部～頸部内外面横ナデ	口縁～頸部片、口縁外面5条沈線、内面4条沈線、頸部外面同描刺突文、頸部内面しぼり痕
317	I 10	Ⅻ	弥生土器　壺	9.7			密、径6mm以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	浅黄橙	口縁部内外面横ナデ	口縁部外面2条沈線
318			土師器　高坏	17.5			密、径5mm以下の砂粒を含む	橙		口縁部内面11条沈線

第24表 二ノ井遺跡出土土器類観察表(5)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
319	H10	X	弥生土器 壺	17.2			密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を少々含む	浅黄橙	口縁部内外面横ナデ	口縁部外面3条沈線
320	SK 3	M 1	土師器 高坏	23.4			密、径2㎜以下の砂粒を含む	明赤褐、にぶい橙、灰	口縁内外面ミガキ	口縁部内面14条沈線
321	H10	Ⅸ	土師器 小型丸底壺	8.9			密、径1㎜以下の砂粒を少量含む	明赤褐	頸部～体部内外面ミガキ	頸部～体部片
322	H10	Ⅸ	土師器 小型丸底壺				密、径2㎜以下の砂粒を含む	明赤褐、橙	頸部～体部内外面ミガキ、体部内面指オサエ、頸部内面板ナデ	頸部～体部片
323	F 7	Ⅳ	弥生土器 高坏			11.2	やや粗	浅黄橙、橙	脚部内面板ナデ、脚部外面ハケメ後ミガキ	脚部片 高蔵期 2個の透かし孔
324	SD 1	M 1	土師器 器台				密、径5㎜以下の砂粒・長石・石英を含む	橙	受部脚部内外面ハケメ後ミガキ	脚部透かし孔
325	G11		土師器 壺				密、径5㎜以下の砂粒を多く含む、金雲母・長石・茶色粒を含む	橙	頸部外面ハケメ、頸部～体部内面板ナデ	体部外面刺突文
326	F 7	Ⅲb	土師器 高坏				密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	明褐、褐	脚部外面・底部内面ミガキ、脚部内面板ナデ	
327	SD 1	M 1	土師器 高坏				密、径2㎜以下の長石・石英・茶色粒を僅かに含む	橙	脚部内面ハケメ、外面ミガキ	脚部片 脚部下位4ヶ所に透かし孔、脚部内面中央に棒状の刺突有り
328	I 11	Ⅵ	土師器 器台	9.0			密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石・金雲母を含む	赤褐	脚部内外面ミガキ	
329	D 1	Ⅲa	土師器 高坏				やや粗、径1㎜以下の砂粒を含む	灰白	坏部内面横ナデ	
330	C 0	Ⅳ	土師器 器台				密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	明赤褐	受部内面ミガキ、脚部内面板ナデ、外面ハケメ後ミガキ	脚部片 3ヶ所透かし孔
331	G11		土師器 高坏				密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	淡赤橙	脚部外面ミガキ、内面板ナデ	脚部片、脚部上位3ヶ所透かし孔
332	G10		土師器 高坏				密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	橙	脚部外面ハケメ、内面指オサエ	脚部片
333	I 10	X	土師器 高坏				やや密、径1.5㎜以下の砂粒を含む	橙	脚部外面ミガキ、内面板ナデ	脚部片、外面下位1条沈線、内面中央刺突
334	H10	Ⅷ	土師器 高坏				やや密、径3㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙	坏部内外面ミガキ、脚部外面ミガキ、内面板ナデ	坏部～脚部、4ヶ所透かし孔、坏部2段
335	SX 3	M 1	土師器 高坏	17.5	9.6	7.5	密、径5㎜以下の砂粒を含む、長石・茶色粒・石英を含む	にぶい橙、明赤褐、暗灰	坏部内外面ミガキ、脚部外面ミガキ、脚部内面板ナデ	口縁～脚部 脚部小型類例無し蓋?
336	H 9	Ⅷ	弥生土器 壺	10.4			密、径3㎜以下のチャート・長石・雲母・赤褐色粒を多く含む	浅黄橙	口縁部～頸部内外面横ナデ	口縁～頸部片、口縁部20個の透かし孔、頸部外面に櫛描の三角形文、沈線7条、搬入品?
337	C 1	Ⅲa	弥生土器 壺				やや粗、径3㎜以下の砂粒を多く含む、石英・長石を含む	にぶい橙	口縁部内面横ナデ	口縁部外面刺突文 朝日期?
338	H10	Ⅸ	土師器 小型壺	8.4			密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	橙	口縁部内面ミガキ・指オサエ、体部外面ハケメ、体部内面削り	
339	SD 1	M 1	土師器 パレス壺	20.6			密、径1㎜以下のチャート・雲母を僅かに含む	橙	口縁～頸部内外面横ナデ	口縁部外面・頸部内面赤彩、口縁内面羽状刺突文、口縁外面5条沈線
340	SD 1	M 1	土師器 小型壺	9.5			密、径4㎜以下の砂粒を含む	にぶい橙	口縁内外面横ナデ、体部外面ミガキ、内面板ナデ	
341	H10	Ⅷ	土師器 パレス壺	21.5			密、径5㎜以下の砂粒を含む、金雲母・茶色粒を含む	橙	頸部外面ハケメ	口縁～頸部片、口縁内面羽状刺突文、口縁外面刺突文
342	C 0	Ⅳ	土師器 壺	19.1			密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	明赤褐	口縁～体部外面ハケメ、体部内面板ナデ	口縁端部2条沈線、口縁外面羽状刺突文、体部外面上位7条沈線・羽状刺突文
343	G 8	Ⅳ	土師器 柳ヶ坪型壺	15.9			密、径4㎜以下の長石・石英・雲母・チャートを含む	明赤褐	口縁部内外面横ナデ	口縁部～頸部片、口縁端部欠損、柳ヶ坪型壺C類、口縁部内外面羽状刺突文、頸部外面縦位のハケメ
344	C 0	Ⅳ	土師器 台付甕				密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	橙、にぶい褐	体部外面ハケメ、内面板ナデ・ハケメ	体部外面煤付着
345	F 8	Ⅳ	土師器 柳ヶ坪型壺	20.7			やや粗、径3㎜以下の長石・石英・チャート・赤褐色粒・雲母を含む	にぶい橙	口縁部内外面横ナデ	口縁部～頸部片、柳ヶ坪型壺C類、口縁部内外面櫛状工具による羽状の刺突文、頸部外面顕著な縦位のハケメと沈線が1条巡る
346	H 9	Ⅶ	弥生土器 細頸壺			5.5	密、径6㎜以下の長石・石英・雲母・チャートを多く含む	灰白	体部下位外面ハケメ、体部上部内面ヘラ削り、体部中位内面指圧痕、体部下位～底部内面ハケメ	体部～底部片 体部上位～中位に櫛描刺突・波・直線・扇形文
347		Ⅴ	土師器 柳ヶ坪型壺	17.6			やや密、径2㎜以下の砂粒を含む、雲母を多量に含む	明赤褐	頸部外面ミガキ・ハケメ、頸部内面ミガキ	口縁部内外面羽状刺突文
348	SD 1	Ⅲ	土師器 壺	12.5			密、径2㎜以下の赤褐色粒を多く含む	灰白	口縁～頸部内外面横ナデ	口縁部外面2条沈線
349	C 1	Ⅴ	土師器 パレス壺	15.8			密、径1㎜以下の砂粒を含む、石英を含む	にぶい黄橙	頸部外面ハケメ	口縁部外面2条沈線、内面羽状刺突文
350	D 1	Ⅳ	弥生土器 壺	13.2			密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石・茶色粒を含む	橙	体部内外面ハケメ、内面一部板ナデ	口縁部外面刺突文、頸部透かし孔、体部外面波状文

第25表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(6)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	色調（外面・内面）	整形・調整	その他（釉薬など）
351	H 9	Ⅷ	弥生土器　壺	13.5			密、径2㎜以下の砂粒を含む・長石・茶色粒・石英を含む	にぶい橙	体部内外面ハケメ、内面一部板ナデ	口縁部外面刺突文、頸部透かし孔、体部外面波状文　92と同一個体
352	C 0	Ⅳ	土師器　壺	16.9			やや粗、径7㎜以下の石英・長石を含む	橙	頸部外面ミガキ	口縁部外面３条沈線、円形刺突文
353	I 10	Ⅶ	土師器 二重口縁壺	16.0			やや粗、径2㎜以下の砂粒を含む	明赤褐、にぶい黄橙	口縁～頸部内外面ミガキ	口縁～頸部片
354	H10	Ⅷ	土師器　壺				やや粗、径5㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	橙	体部外面ハケメ、内面ミガキ、頸部内面ハケメ	頸部～体部片、頸部に刺突文のある凸帯１条
355	F 7	Ⅲa	弥生土器　壺	19.05			密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石・金雲母・石英を含む	にぶい褐	口縁～頸部内外面ハケメ、頸部内面指オサエ	近江系搬入品？口縁部外面刺突文、外面煤付着
356	F 8	Ⅳ	土師器　壺	21.8			密、径2㎜以下の砂粒を含む、石英を含む	にぶい黄橙	口縁部内外面横ナデ	口縁部外面２条沈線、内面羽状刺突文
357	C 0	Ⅳ	土師器　壺	14.7			密、径3㎜以下の砂粒を含む、長石・金雲母を含む	にぶい赤褐	口縁～体部内外面板ナデ	
358	I 11	Ⅵ	土師器　壺	14.8			密、径2㎜以下の砂粒を含む、金雲母・黒雲母・石英を含む	浅黄橙	口縁～体部外面ハケメ、体部内面ハケメ	口縁～体部片、口縁部外面煤付着
359	SK10	M 1	土師器 く字壺	17.7			密、径1㎜以下の砂粒・長石を含む	橙	口縁外面ハケメ、体部内外面板ナデ	口縁外面・体部外面刺突文
360	C 0	Ⅳ	土師器 く字壺	15.2			密、径1㎜以下の砂粒を多く含む、長石を含む	赤褐	頸部外面ハケメ、口縁部内面指オサエ	
361	C 0	Ⅳ	土師器 く字壺	17.0			密、径3㎜以下の長石・砂粒を含む	にぶい赤褐、明赤褐	体部内外面・口縁部内面ハケメ、口縁部外面横ナデ	口縁～体部片
362	E 6	Ⅳ	弥生土器　壺	23.3			密、径3㎜以下の砂粒を多く含む、長石・石英・茶色粒を含む	浅黄橙	口縁～体部内外面ハケメ	朝日期？
363	C 0	Ⅳ	土師器 く字壺	17.2			密、径6㎜以下の砂粒を多く含む、長石・石英・金雲母を含む	黒褐、赤褐	口縁～体部外面板ナデ、体部内面板ナデ	口縁～体部片
364	H10	Ⅶ	土師器 S字壺	13.2			密、径1㎜以下の砂粒・金雲母を含む	浅黄橙	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、頸部外面刺突文、外面煤付着
365	H10	Ⅸ	土師器 S字壺	14.5			密、径2㎜以下の雲母・石英・長石を含む	灰白	体部内面指オサエ、外面ハケメ	
366	H10	Ⅹ	土師器 S字壺	14.1			密、径1㎜以下の砂粒を含む、黒雲母・金雲母・石英を含む	にぶい橙	体部内面指オサエ、外面ハケメ	
367	H10	Ⅶ	土師器 S字壺	15.2			密、径2㎜以下の砂粒を多く含む、石英・長石を含む	黄橙	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、外面煤付着
368			土師器 S字壺	16.0			密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石・石英・金雲母を含む	浅黄橙	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、頸部外面刺突文、外面煤付着
369	H10	Ⅷc	土師器 S字壺	15.8			密、径1㎜以下の砂粒・金雲母・黒雲母・石英を含む	にぶい黄橙	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、頸部外面刺突文、外面煤付着
370	SD 1	M 1	土師器 S字壺	16.4			密、砂粒をほとんど含まない	にぶい黄橙	頸部～体部内外面ハケメ、体部内面指オサエ	口縁～体部片、頸部１条沈線
371	H10	Ⅶ	土師器 S字壺	17.6			密、径2㎜以下の砂粒・金雲母・黒雲母・長石・石英を含む	にぶい橙、黒	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、頸部外面刺突文、外面煤付着
372	SD 1	M 1	土師器 S字壺	20.0			密、径2㎜以下の砂粒を含む、黒雲母・金雲母・長石を含む	にぶい黄橙	頸部内外面ハケメ、内面指オサエ、体部内面板ナデ	口縁～体部片、口縁～体部外面煤付着
373	H10	Ⅷ	土師器 S字壺	23.25			密、径5㎜以下の砂粒を多く含む、長石・石英・金雲母を多く含む	明褐灰	頸部～体部内外面ハケメ、頸部指オサエ	口縁～頸部片、外面煤付着
374	H10		土師器 S字壺				密、径2㎜以下の砂粒を含む	浅黄橙	体部外面ハケメ、口縁部～体部内面横ナデ	
375	D 2	Ⅳ	土師器　壺	14.1			密、径2㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	にぶい赤褐	口縁～体部内外面ハケメ	口縁～体部片、奈良期？
376	D 1	Ⅱ	土師器　壺	16.1			やや粗、径1㎜以下の砂粒を含む	にぶい橙、浅黄橙、橙、暗灰	口縁～体部内外面ハケメ	調整摩耗
377	SK 3	M 1	土師器　壺	11.5			密、径5㎜以下の砂粒を含む、長石を含む	浅黄橙	口縁～体部内外面ハケメ	口縁～体部片、奈良期？
378	SK 1	M 1	土師器　壺	11.7			密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	にぶい褐	口縁～体部内外面ハケメ、頸部指圧痕	口縁～頸部片、外面煤付着
379	SK12	M 1	土師器　壺	25.5			密、径1㎜以下の砂粒を含む、長石・石英を含む	にぶい橙	口縁～体部内外面ハケメ、頸部指圧痕	
380	H10		土師器　壺				密、径2㎜以下の砂粒を含む、黒雲母・金雲母・長石・石英を含む	にぶい橙、浅黄橙	底部外面ヘラ削り、体部内外面ハケメ、底部内面板ナデ	体部～底部片　底部丸底、体部に煤付着
389	SD 1	Ⅲa	須恵器　蓋B				密	灰		返り有り
390	F 8	Ⅳ	須恵器　蓋B				やや粗	灰白		口縁端部屈曲し直下に下る
391	G 8	Ⅲa	須恵器　蓋B				やや粗	灰白		口縁端部屈曲し直下に下る
392	F 7	Ⅲb	須恵器　蓋B				やや粗	明オリーブ灰	天井部外面回転ヘラ削り	口縁端部屈曲し直下に下る

第26表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(7)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
393	C 0	Ⅳ	須恵器 蓋B	7.4	(1.8)		密	灰	天井部外面回転ヘラ削り	返り端部接地、天井部降灰
394	F 7	Ⅲ	須恵器 坏身B				やや粗	灰白	底部外面回転ヘラ削り	
395	C 1	Ⅱ	須恵器 坏身B				やや粗	灰白	底部外面回転ヘラ削り	
396	F 7	Ⅲa	須恵器 坏身B				密	灰白	底部外面回転ヘラ削り	
397	D 2	Ⅲa	須恵器 坏身B				やや粗	明オリーブ、灰	底部外面回転ヘラ削り	
398	F 7	Ⅲb	須恵器 坏身A				緻密	灰、黒、灰オリーブ	底部外面回転ヘラ削り	底部降灰
399	G 8	Ⅳ	須恵器 坏身B				やや粗	灰白		
400	C 1	Ⅲa	須恵器 蓋B		(1.7)		やや粗	灰白	天井部外面回転ヘラ削り	つまみは扁平で中央ふくらむ、天井部降灰
401	F 7	Ⅲa	須恵器 蓋B		(3.0)		粗	灰白	天井部外面回転ヘラ削り、天井部内面中央指圧	つまみ中央部ややふくらむ
402	SD10	M 1	須恵器 坏身B			11.1	やや粗	灰白	底部内面中央指圧、底部外面ヘラ削り	底部内面平滑
403	SD 1	M 1	須恵器 坏身B			12.0	密	灰白	底部外面回転ヘラ削り	底部内面平滑
404	F 8	Ⅳ	須恵器 坏身B			11.1	やや粗	灰白	底部外面ヘラ削り	
405	F 8	Ⅲb	須恵器 坏身B			9.9	やや粗	灰白	底部外面ヘラ削り	
406			須恵器 坏身B	14.7	4.2	10.8	密	灰白	底部外面回転ヘラ削り	
407	E 6	24	須恵器 甕				密	灰オリーブ、灰	体部中位に沈線1条、底部外面回転ヘラ削り	
408	C 0	Ⅱc	須恵器 坏身A	9.9	(2.2)		密	灰	底部外面回転ヘラ削り	底部降灰、蓋の可能性有り
409	F 8	Ⅳ	須恵器 鉢	18.2	(3.0)		粗	灰白		
410	C 2	Ⅲa	須恵器 鉢			15.0	やや粗	灰白	体部内外面横ナデ、体部外面下位回転ヘラ削り	
411	SD 2	M 1	緑釉陶器片				密	灰オリーブ	内外面回転横ナデ	内外面緑釉
412	C 1	Ⅲa	緑釉陶器片				密	灰	内外面回転横ナデ	内外面緑釉
413	P 23	M 1	緑釉陶器片				密	灰白	内外面回転横ナデ	外面緑釉
414	C 2	Ⅲ	緑釉陶器片				密	灰	内外面回転横ナデ	内外面緑釉
415	SX 3	M 1	緑釉陶器片				密	灰	内外面回転横ナデ	内外面緑釉
416	D 1	Ⅲa	緑釉陶器片				密	灰オリーブ	内外面回転横ナデ	内外面緑釉
417	D 1	Ⅲa	緑釉陶器片				密	灰	内外面回転横ナデ	外面緑釉
418	SD 1	Ⅲa	緑釉陶器片				密	灰	内外面回転横ナデ	外面緑釉
419	C 2	Ⅲb	灰釉陶器 折縁皿	11.6			密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	口縁部折縁	
420	SK 2	M 1	灰釉陶器 段皿	9.0			密、径2mm以下の石英を僅かに含む	灰白	体部内面に不明瞭な段	口縁部付近漬け掛け
421	SD 2	M 1	灰釉陶器 段皿	13.1			密、径2mm以下の長石・石英を僅かに含む	灰白	体部内面に段	口縁部付近漬け掛け
422	SD 2	Ⅲb	灰釉陶器 皿			6.6	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面低い台形、底部外面回転糸切り	体部下方まで漬け掛け
423	G 9	Ⅳ	灰釉陶器 皿	12.4	2.7	6.4	密、径1mm以下の石英を僅かに含む	灰白	高台断面低い台形、底部外面回転糸切り	口縁部付近漬け掛け
424	D 1	Ⅳ	灰釉陶器 段皿	12.6	2.6	7.2	やや粗、径1～2mmの砂粒を少量含む	浅黄橙	体部内面に段、高台断面三角形	口縁部～体部に漬け掛け
425	SX 4	M 1	灰釉陶器 碗	15.2			密、径1mm以下の長石を僅かに含む	灰	口縁端部わずかに外反	口縁部内面施釉
426	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗	13.3			密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	口縁端部外反	口縁部付近漬け掛け
427	F 6	Ⅳ	灰釉陶器 碗	16.0			やや粗、径2mm以下の砂粒を含む	灰白		
428	C 1	Ⅲa	灰釉陶器 碗	16.3			密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	口縁端部やや外反	口縁部～体部上方漬け掛け
429	SD 2	M 1	灰釉陶器 碗	18.0			密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白		口縁部付近漬け掛け
430	C 1	Ⅲa	灰釉陶器 碗	17.9			密、径1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄	口縁端部やや外反	口縁部付近漬け掛け
431	F 6	Ⅳ	灰釉陶器 碗	12.7	3.7	7.3	やや粗、径1mm以下の砂粒を少量含む	灰白	高台断面台形、口縁端部わずかに外反、体部外面張り	漬け掛け
432	C 1	Ⅲa	灰釉陶器 碗	13.5	4.0	6.8	密	灰白	体部外面下方回転ヘラ削り、高台断面三角形、底部外面回転糸切り	漬け掛け
433	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗	16.3	5.2	7.5	密、径1mm以下の砂粒を極少量含む	灰白	高台断面台形、底部外面回転糸切り	口縁部付近漬け掛け
434	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗	15.0	5.2	7.2	密、径2mm以下の砂粒を少量含む	浅黄	体部外面下方回転ヘラ削り、高台断面台形、底部外面回転糸切り	口縁部～体部に漬け掛け
435	E 6	Ⅳ	灰釉陶器 碗	15.65	5.1	7.9	密、径1～4mmの砂粒を含む	灰白	高台断面三日月形、底部外面回転ヘラ削り	口縁部～体部に漬け掛け
436	I 12	Ⅱ	灰釉陶器 碗			6.0	密、径1mm以下の長石・石英を多く含む	灰白	高台断面三日月形、底部外面回転糸切りナデ消し	
437	D 0	Ⅳ	灰釉陶器 碗			6.0	密、径2mm以下の長石を僅かに含む	灰白	高台断面三角形	
438	P 23	M 1	灰釉陶器 碗			6.6	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面台形	
439	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗			6.8	密、径2mm以下の長石を僅かに含む	灰白	高台断面台形	
440	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗			6.0	密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形	
441	C 1	Ⅳ	灰釉陶器 碗			6.4	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面台形、底部外面回転糸切り	
442	C 1	Ⅱc	灰釉陶器 碗			6.6	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面幅の狭い縦長の三角形	
443	SD 2	Ⅲb	灰釉陶器 碗			6.7	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面台形、底部外面回転糸切り	

第27表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(8)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
444	C 1	Ⅱc	灰釉陶器　碗			5.2	密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形	
445	G10	Ⅳ	灰釉陶器　碗			6.6	密、径3mm以下の長石を僅かに含む	灰白	高台断面幅の狭い三角形、底部外面回転糸切り	
446	H11	Ⅱ	灰釉陶器　碗			8.2	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面縦長の三角形、底部外面回転糸切り	
447	G 9	Ⅶ	灰釉陶器　碗			7.2	やや粗、径1mm以下の砂粒を含む	にぶい黄橙	高台断面台形	
448	C 2	Ⅰ	灰釉陶器　碗			4.0	やや粗、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	にぶい黄橙	高台断面台形、底部外面回転糸切り	
449	SD 2	M 1	灰釉陶器　碗			8.2	密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形	
450	SX 4	M 1	灰釉陶器　碗			8.0	密、径2mm以下の石英を僅かに含む	灰白	高台断面三日月形	
451	SD 2	M 1	灰釉陶器　碗			8.6	密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形	
452	D 1	Ⅴ	灰釉陶器 広口瓶	20.6			密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	輪積み、ナデ調整	内外面ハケ塗り
453	SD 2	M 1	灰釉陶器 広口瓶			12.0	密、径3mm以下の長石を僅かに含む	灰白	輪積み、ナデ調整	底部内面降灰、体部下方ハケ塗り
454	S 3	Ⅰ	灰釉陶器　甕				やや粗、径3mm以下の長石・雲母・石英を含む	灰白	輪積み、ナデ調整	
455	D 0	Ⅳ	山茶碗　Ⅲ	7.9	3.65		やや粗、径1mm以下の砂粒を少量含む	灰白	高台断面台形、口縁端部やや外反、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
456	F 7	Ⅲ	山茶碗　Ⅲ	7.3	1.7		粗、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	回転糸切り底、口縁端部面取り	
457	D 1	Ⅳ	山茶碗　Ⅲ	8.45	2.1	4.1	やや粗、径1～4mmの砂粒を少量含む、灰黒色粒を多量に含む	灰白	回転糸切り底、体部中央に稜	
458	SD 1	Ⅲb	山茶碗　Ⅲ	7.9	2.0	4.3	やや粗、径1～5mm以下の砂粒を少量含む、黒色粒を含む	灰白	口縁端部丸い、体部に稜、糸切り底	北部系
459	D 0	Ⅳ	山茶碗　Ⅲ	8.6	2.35	5.5	やや粗、径2～3mmの砂粒を少量含む、灰黒色粒を含む	灰白	回転糸切り底、体部に稜、口縁端部肥厚	
460	F 7	Ⅲ	山茶碗　Ⅲ	10.45	1.83		やや粗、径1～2mm以下の砂粒を少量含む	灰白	回転糸切り底、体部不明瞭な稜	
461	G 8	Ⅲa	山茶碗　Ⅲ			4.5	密、径1mm以下の長石・砂粒を多く含む	褐灰	高台断面三角形	
462	D 1	Ⅲa	山茶碗　Ⅲ			4.0	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面台形、底部外面ナデ	
463	D 2	Ⅲb	山茶碗　Ⅲ			3.8	密、径2mm以下の砂粒を僅かに含む	灰黄	高台断面四角形	
464	C 2	Ⅲb	山茶碗　Ⅲ			3.8	密、径2mm以下の雲母・長石を含む	灰白	高台断面低い台形、底部外面回転糸切り	
465	D 1	Ⅲa	山茶碗　Ⅲ			3.6	密、径1mm以下の砂粒を多く含む	灰白	回転糸切り底	
466	H 9	Ⅳ	山茶碗　Ⅲ			4.8	密、径2mm以下の長石・石英を含む	灰白	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
467	C 1	Ⅱc	山茶碗　碗			4.9	密、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面三角形、底部外面回転糸切り	
468	E 6	Ⅵ	山茶碗　碗			7.15	粗	灰白	高台断面三角形、底部外面回転糸切り、高台端部籾殻痕	在地性？
469	D 2	Ⅲa	山茶碗　碗			7.2	やや粗	灰白、オリーブ、黒	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
470	D 2	Ⅳ	山茶碗　碗			7.1	粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
471	D 2	Ⅲ	山茶碗　碗			7.0	粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
472	C 2	Ⅳ	山茶碗　碗			7.9	粗	灰黄	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
473	H 9	Ⅳ	山茶碗　碗			7.9	粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
474	F 8	Ⅲa	山茶碗　碗			7.1	粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
475	G 9	Ⅳ	山茶碗　碗			7.9	粗	灰白、黄灰	高台断面台形、底部外面回転糸切り一部ナデ消し	
476	C 2	Ⅳ	山茶碗　碗			8.1	やや粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
477	SD 2	M 1	山茶碗　碗			7.3	やや粗	灰白	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
478	SD 2	Ⅲb	山茶碗　碗			7.9	密	灰白	高台断面三角形	
479	SD 1	M 1	山茶碗　碗	11.5			密、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	口縁端部面取り、器厚薄手	北部系

第28表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(9)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調(外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)
480	D 1	Ⅱ	山茶碗　碗			7.8	やや粗	灰白	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
481	D 1	Ⅲa	山茶碗　碗			7.95	粗	灰白	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
482	C 1	Ⅲa	山茶碗　碗			8.65	密	灰白	高台断面三角形、高台端部籾殻痕、底部外面木目痕	北部系
483	D 1	Ⅳ	山茶碗　碗			8.65	粗	灰白	高台断面四角形、底部外面回転糸切り	
484	SD 2	M 1	山茶碗　碗			9.4	やや粗	黄灰	高台断面小さな台形	
485	SK 2	Ⅲa	山茶碗　碗			13.0	やや粗	灰白	高台断面四角形、高台端部籾殻痕	
486	SZ 1		山茶碗　碗			10.75	やや粗	灰白	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
487	SD 2	M 1	山茶碗　碗			10.4	粗	灰白	高台断面低い四角形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
488	D 1	Ⅲa	山茶碗　碗			9.6	粗	灰白	高台断面低い台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
489	D 1	Ⅱ	山茶碗　碗			8.7	やや粗	灰オリーブ	高台断面台形、高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り	
490	SD 5	M 1	山茶碗　碗			9.6	やや粗	灰白	高台断面三角形、底部外面回転糸切り一部ナデ消し	
491	D 1	Ⅲa	山茶碗　碗	12.6	5.0	5.4	密	灰黄	器厚薄手、高台断面三角形、	小振りの小椀
492	G 9	Ⅳ	山茶碗　碗	15.8	5.25	7.8	やや粗	灰白	口縁端部わずかに外反、底部外面回転糸切り、高台断面三角形	
493	D 1	Ⅲa	山茶碗　碗	15.8	5.0	6.7	やや粗、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	口縁端部やや外反、高台粗雑	
494	I 11	Ⅳ	山茶碗　碗	14.6			やや粗、径1mm以下の砂粒を多く含む	灰白		
495	SK 2	Ⅲa	山茶碗　碗	14.6			やや粗、径4mm以下の石英・砂粒を含む	灰白	口縁部やや外反	
496	SX 3	M 1	山茶碗　碗	15.8			密、径3mm以下の長石を含む	褐灰	口縁部外反	
497	F 7	Ⅲa	山茶碗　碗	17.3			密、径1mm以下の雲母・砂粒を含む	灰白	口縁端部肥厚	
498	SK 2	Ⅲa	山茶碗　碗	8.0			密、径3mm以下の石英・雲母を含む	灰白	口縁端部面取り	
499	D 0	Ⅳ	山茶碗　碗	19.5			密、径2mm以下の長石を僅かに含む	褐灰	口縁端部わずかに外反	
500	G 9		山茶碗　碗			6.55	密、径1～2mm以下の砂粒を少量含む	灰白	体部下方張り、高台断面低い四角形、籾殻痕、底部外面回転糸切り	
501	SK 6	Ⅴ	土師器ⅢA類	8.2	1.8		密	にぶい橙	体部～底部外面指圧痕、口縁部～体部内面縦ナデ	
502	SD 2	M 1	土師器ⅢA類	8.6			密	にぶい橙	体部内外面横ナデ、底部外面指圧痕	
503	F 8	Ⅲa	土師器ⅢA類	7.6	1.85		密	にぶい黄橙、橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ	
504	SK 2	M 1	土師器ⅢA類	8.8			密	明褐灰、浅黄橙	底部外面指圧痕	
505	SK 3	M 1	土師器ⅢA類	8.1			密	にぶい橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ、体部に明瞭な段、口縁端部肥厚	口縁部内外面に煤付着
506	SK 1	M 2	土師器ⅢB類	8.35	3.05		密	灰黄褐	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ	
507	D 1	Ⅱ	土師器ⅢB類	9.05	1.6		密	にぶい橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ	
508	SK 2	M 1	土師器ⅢB類	9.3			密	橙	体部外面指圧痕、内面横ナデ	口縁部外面煤付着
509	SK 2	M 1	土師器ⅢB類	9.2			密	橙	体部外面指圧痕、口縁端部肥厚	口縁部外面煤付着
510	D 1	Ⅲb	土師器ⅢB類	9.2	1.8		密	にぶい黄橙、灰	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ、体部に明瞭な段	
511	D 1	Ⅲb	土師器ⅢB類	9.75			密	にぶい橙、褐灰	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ、体部に明瞭な段	
512	C 1	Ⅲa	土師器ⅢB類	9.85			密	にぶい黄橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ、体部に明瞭な段	
513	D 1	Ⅱ	土師器ⅢB類	9.85	2.00		密	にぶい橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ	
514	SK 1	M 1	土師器ⅢB類	10.6			密	にぶい黄橙	体部～底部外面指圧痕、境に1条の横ナデ、体部内面横ナデ	
515	D 1	Ⅱ	土師器ⅢB類	10.9	2.4		密	にぶい橙	体部～底部外面指圧痕、体部内面横ナデ	
516	SD 1	M 1	土師器ⅢB類	10.7			密	灰白	体部と底部外面の境に横ナデ1条、体部内面横ナデ爪痕、口縁端部肥厚	
517	C 1	Ⅲa	土師器ⅢC類	12.00			密	淡黄橙	体部～底部外面指圧痕	

第29表　二ノ井遺跡出土土器類観察表(10)

挿図番号	地区遺構	層位	器種・分類	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	色調（外面・内面）	整形・調整	その他（釉薬など）
518	D 3	Ⅲa	丹塗り碗	15.9			密	灰白、釉薬赤褐		口縁～体部内外面丹塗り
519	E 6	Ⅲ	伊勢型鍋				やや粗、径1mm以下の砂粒を多く含む	にぶい橙		口縁端部内側に折り返し
520	F 6	Ⅲ	羽釜Ⅱ2類				密、径1mm以下の石英・雲母を多く含む	浅黄橙		平面形が五角形の外耳、孔有り
521	SD2	Ⅲb	石鍋Ⅲb類	15.8	(6.4)		粗	灰黄	体部内外面縦ケズリ、鍔部削り出し	鍔部断面正台形、体部外面に煤付着
522	C 1	Ⅳ	清郷型鍋Ⅳ類	(17.3)			やや粗	暗褐、黒	体部内面横ナデ、外面ナデ	断面三角形の鍔状口縁。口縁くの字状に屈折し水平に引き出す
523	SD 2	Ⅲb	羽釜A 3類	17.0			密	浅黄橙	体部外面横ハケ、内面ナデ	口縁面取り、鍔部断面四角形
524	SK 4	Ⅲa	羽釜A 4類	20.2			密、径1mm以下の砂粒を多く含む	にぶい黄橙		口縁内面に煤付着
525	D 0	Ⅳ	羽釜A 3類	25.4			密、径1mm以下の石英、雲母を少し含む	浅黄橙		口縁部に穿孔、鍔部外面下に煤付着、鍔部断面三角形
526	SD 2	M 1	擂鉢	29.5			やや粗	灰	体部中位ヘラ削り	体部内面平滑
527	SD 1	M 1	青磁碗			6.8	緻密	緑灰		高台端部露胎
528	E 6	Ⅲa	青白磁合子				緻密	明緑灰	体部下方に稜	底部外面に巴付着
529	D 1	Ⅲa	白磁小皿	14.55			緻密	灰白、黒	体部と底部境に段	体部外面に墨付着
530	SD5	M 1	白磁碗	15.7			緻密	明オリーブ、灰	口縁部内面に波線1条、口縁肥厚	
531	F 7	Ⅲa	青磁碗				緻密	緑灰		体部内面劃花文、外面櫛描文
532	SD 2	M 1	青磁碗?				緻密	オリーブ灰		底部内面劃花文
534	SD 1	M 1	天目茶碗	13.15			密	にぶい赤褐、黒褐		鉄釉、体部下方露胎
533	SD2	M 1	天目茶碗			3.7	密	灰黄、黒褐、黒	体部下方回転ヘラ削り	鉄釉、削り出し高台、体部下方以下露胎、中国陶器
535	E 6	Ⅲa	天目茶碗	12.25			密	黒		鉄釉
536	D 1	Ⅲa	碗	15.55			密	オリーブ灰～灰白		灰釉
537	SD 3	M 1	甕				密	灰オリーブ、オリーブ黒		N字状口縁、常滑
538	C 2	Ⅲb	卸皿			5.8	やや粗	にぶい橙		灰釉

第30表　古銭計測表

（単位　cm）

銘	挿図番号	地区	外径	内径	厚さ	重量（g）	備考
開元通寶	539	SK 6	2.45	0.60	0.137	3.3	南唐、960年
開元通寶	540	SK 6	2.45	0.65	0.125	3.1	南唐、960年
開元通寶	541	SK 6	2.40	0.65	0.114	2.8	南唐、960年
開元通寶	542	SK 6	2.30	0.65	0.119	2.1	南唐、960年
開元通寶	543	SK 6	2.45	0.60	0.130	3.1	南唐、960年
祥符通寶	544	SK 6	2.50	0.65	0.116	2.9	北宋、1009年
元祐通寶	545	SK 6	2.40	0.75	0.120	2.7	北宋、1086年
聖宋元寶	546	SK 6	2.45	0.60	0.119	2.8	北宋、1101年
永楽通寶	547	SK 6	2.50	0.55	0.143	4.0	明、1408年
永楽通寶	548	SK 6	2.50	0.55	0.142	3.6	明、1408年
宣德通寶	549	SK 6	2.50	0.55	0.160	2.0	明、1433年

第31表　石器計測表

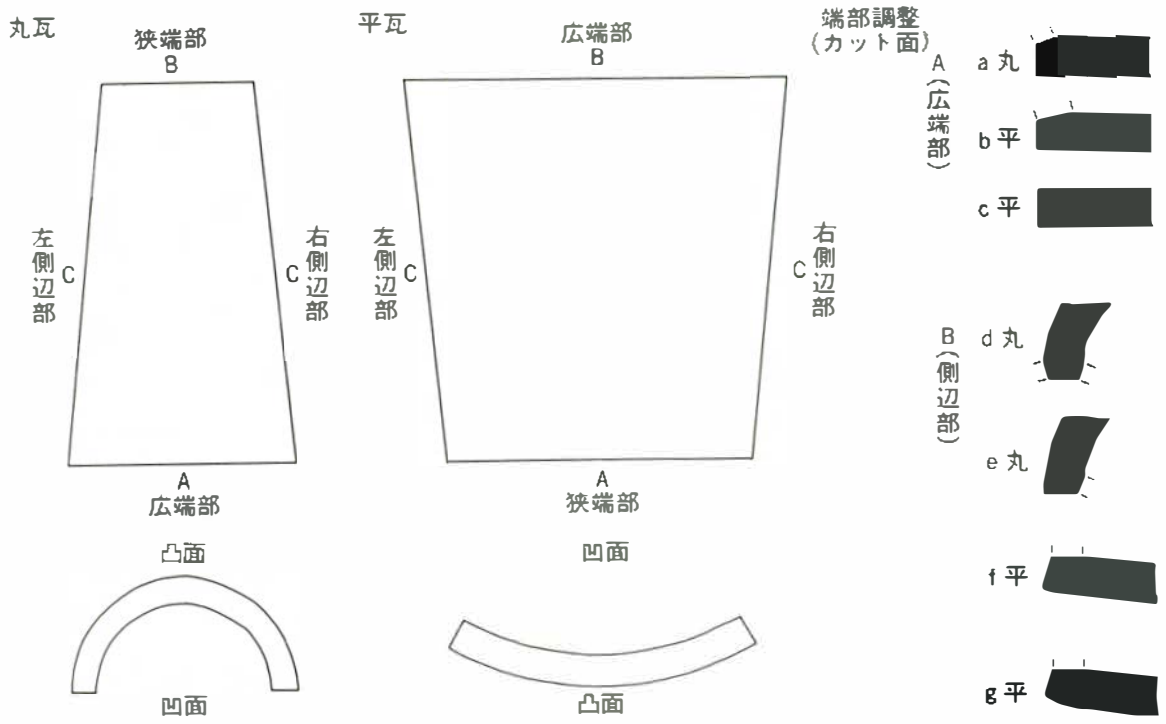
（単位　cm）

挿図番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	質量（g）	備考
550	石鏃	サヌカイト	19	19	4	0.8	
551	石鏃	チャート	22	14	4	0.9	
552	石錐	チャート	25	21	6	1.8	
553	磨製石斧	安山岩質凝灰岩	103	54	37	245.1	乳棒状
554	磨製石斧	安山岩	100	56	33	287.1	両刃
555	磨製石斧	安山岩	72	34	39	161.7	柱状片刃
556	磨製石斧	泥岩	53	34	13	47.6	扁平両刃
557	磨・敲石	安山岩	79	72	45	373.8	
558	石錐	花崗岩	62	53	44	185.8	敲石転用
559	浮子	デイサイト質軽石	66	54	27	16.7	
560	砥石	花崗斑岩	82	62	26	163.7	
561	石棒	結晶片岩	62	40	16	49.8	

第32表　瓦観察表

挿図番号	地区遺構	層位	種類	残存部	質量(g)	凸面調整	端部調整 A	端部調整 B	端部調整 C	胎土	色調	焼成	備考
381	SD2	M1	軒丸瓦	先端部(瓦当なし)	200	不明	—	—	—	密 2㎜以上の砂粒含む	凸淡黄 凹灰白	軟	行基式丸瓦に接続か
382	SD2	M1	丸瓦	広端部	680	撫で(縄叩き痕有り)	a	—	a	密 2㎜程の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	行基式
383	SD2	M2	丸瓦	側縁部	100	撫で(縄叩き痕有り)	—	—	b	密	凸灰白 凹灰	硬	
384	SD2	M1	軒平瓦	瓦当部	730	撫で	—	—	—	密 2㎜以上の砂粒多く含む	凸灰白 凹灰	軟	四重弧文
385	SD2	M1	平瓦	側縁部	280	不明	—	—	c	密 1～2㎜程の砂粒含む	凸淡黄 凹灰白	軟	一枚作りか
386	SD2	M1	平瓦	広端部左隅	600	撫で(縄叩き痕有り)	c	—	d	密 1～2㎜程の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	
387	H9	VI	平瓦	広端部左隅	700	丁寧な削り(縄叩き痕有り)	d	—	d	密 2㎜程の砂粒含む	凸灰黄 凹にぶい黄橙	硬	粘土紐痕
388	SD10	M2	平瓦	端部	80	格子目叩き	c	—	—	密 1㎜程の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	硬	
			丸瓦	9	1110	撫で5 不明2	b1	—	a2 b1			軟	
			平瓦	10	1540	撫で5 不明3	d2	—	c1 e1			軟	
			不明	6	90								

※　報告書掲載分以外について、質量以外の欄の数字は点数を表す。



第77図　瓦関係模式図

第33表　二ノ井遺跡遺構別遺物出土点数表

遺構名	縄文土器	弥生・土師	須恵器	瓦	灰釉陶器	山茶碗	中世土師器	磁器	陶器	貨幣	合計
P 6			1		1						2
P 7	2	1							1		4
P 9					1	1					2
P12			0		1						1
P16						1					1
P17						1					1
P23						2	11				13
P32		1	1								2
P33		2									2
P34		4									4
P38		11									11
P41		5									5
P42		1									1
P43						1					1
P45							2				2
P51		5		1	1	2	3				12
P52		2									2
P59		15									15
P64	2	8					1				11
P66		7									7
P67		3									3
SD 1	58	230	22	1	11	70	105	3	15		515
SD 2	76	396	60	38	59	322	350	4	19		1324
SD 3		9	1		2	10			3		25
SD 5	1	34	1		1	10	5	1	1		54
SD 6	13	47	3		1						64
SD 7	4	9									13
SD 9	1	3									4
SD10	1	17	8	2		5	1				34
SD11			3				1				4
SD13	3	6					2				11
SK 1		2				1	12				15
SK 2		7	3		11	44	85		1		151
SK 3		44	1	1	7	24	123		2		202
SK 4		3				4	4 3				10
SK 5	8	44				2	2 1				55
SK 6		2				5	5 9	1		11	28
SK 9		13									13
SK10		5									5
SK11		9					1				10
SK12	18	62			1						84
SK13	1	8									9
SK14		2									2
SX 1		13				1					14
SX 3	62	336	4		5	15	4	1			427
SX 4		11			2	10	2				25
SX 5	3	21				1					25
合計	253	1398	109	43	104	533	722	10	42	11	3225

第34表　二ノ井遺跡地区別遺物出土点数表

グリッド	縄文土器	弥生・土師	須恵器	瓦	灰釉陶器	山茶碗	中世土師器	瓦器	陶器	青磁	合計
B 2	4	42	1				1				48
C 0	60	628	20	1	13	71	143	3	17		956
C 1	68	603	78	9	138	447	589	4	37		1972
C 2	46	176	39	1	49	173	129		8		614
C 3	3	62			1	2	5				73
D 0	11	271	15		17	70	78	3	1		466
D 1	76	718	56	3	95	317	369	5	12		1651
D 2	29	353	47	2	44	156	105	2	5		743
D 3	38	404	6	2	1	11	7		1		490
D 4						1					1
E 2		15					3				18
E 4	1	1				1					3
E 5		4						1	1		6
E 6		113	5		7	58	10	5	7		205
E 7	1	13				5	2				21
F 6	2	79	11		4	71	10	6	5		188
F 7	15	553	51		5	110	28	6	5		773
F 8	3	287	22	1	2	31	8	3	1		358
G 8	4	187	8	3	1	24		1			228
G 9	19	214	1	1	6	25		1	1		268
G10	15	324	6	1		3					349
G11	11	51	4								66
H9	45	1858	8	1		8					1920
H10	624	12048	16	2	1	1					12692
H11	527	1834	47		1	4					2413
H12			2			6			1		9
I 10	79	1782	2								1863
I 11	238	1855	21	5	2	1					2122
I 12	56	62	20		2	4					144
合　計	1995	24537	486	32	389	1602	1478	40	102		30661

第35表　二ノ井遺跡遺構計測表

（単位　m）

遺構名	番　号	長　径	短　径	深　さ	遺構名	番　号	長　径	短　径	深　さ
ピット（P）	1	0.35	0.30	0.10		52	0.48	0.34	0.19
	2	0.60	0.41	0.14		53	0.43	0.41	0.18
	3	0.36	0.24	0.17		54	0.42	0.35	0.19
	4	0.29	0.26	0.13		55	0.44	0.37	0.08
	5	0.36	0.32	0.16		56	0.79	0.53	0.16
	6	(0.41)	0.46	0.38		57	0.42	0.27	0.14
	7	0.58	0.48	0.13		58	0.24	0.23	0.11
	8	0.25	0.24	0.17		59	0.47	0.40	0.11
	9	0.35	0.32	0.22		60	0.39	(0.23)	0.12
	10	0.23	0.22	0.10		61	0.44	0.42	0.13
	11	0.29	0.24	0.09		62	0.47	0.32	0.26
	12	0.37	0.30	0.13		63	0.47	0.35	0.11
	13	0.33	0.25	0.10		64	0.61	0.54	0.37
	14	0.26	0.25	0.11		65	0.32	0.28	0.13
	15	0.43	0.28	0.10		66	0.42	0.35	0.22
	16	0.32	0.21	0.07		67	0.54	0.50	0.28
	17	0.34	0.26	0.05		68	(0.50)	(0.38)	0.17
	18	0.26	0.24	0.23		69	0.27	0.27	0.19
	19	0.35	0.32	0.31		70	0.29	0.24	0.15
	20	0.41	0.34	0.16		71	0.57	0.36	0.13
	21	0.41	0.32	0.34		72	0.46	0.30	0.20
	22	0.56	0.40	0.23		73	(0.42)	0.42	0.44
	23	0.44	0.41	0.22	土坑（SK）	1	0.93	0.83	0.40
	24	0.41	0.36	0.15		2	0.64	0.63	0.27
	25	0.31	0.28	0.17		3	1.10	1.08	0.41
	26	0.33	0.27	0.14		5	1.44	0.89	0.28
	27	0.66	0.51	0.17		6	2.34	2.10	0.56
	28	0.34	0.25	0.43		7	(1.93)	(0.99)	1.10
	29	(0.51)	(0.28)	0.46		8	(2.78)	(0.43)	0.34
	30	0.51	0.48	0.16		9	2.27	2.16	0.31
	31	0.42	0.34	0.20		11	(0.82)	0.66	0.21
	32	0.76	0.64	0.26		12	3.54	(1.98)	0.68
	33	0.41	0.33	0.14		13	0.80	0.58	0.18
	34	0.37	0.32	0.11	溝（SD）	1	4.94	2.15	(3.10)
	35	0.38	0.27	0.16		2	(2.95)	3.10	0.78
	36	0.41	0.34	0.66		3	(1.96)	1.36	0.48
	37	0.41	0.27	0.26		5	(1.13)	1.29	0.61
	38	0.43	0.36	0.05		6	(1.55)	1.78	1.10
	39	(0.23)	0.31	0.26		7	(1.64)	1.68	0.79
	40	0.35	0.28	0.20		9	(1.72)	0.93	0.82
	41	0.76	0.61	0.34		10	(7.22)	1.54	0.78
	42	0.45	0.37	0.19		11	(4.93)	2.03	0.82
	43	0.80	0.68	0.24		13	(4.35)	1.16	0.18
	44	0.48	0.44	0.25		14	(8.88)	0.94	0.20
	45	0.50	0.40	0.16		15	(2.30)	0.54	0.15
	46	0.35	0.33	0.26		16	4.85	3.64	0.81
	47	0.41	0.32	0.13		17	5.68	1.20	0.22
	48	0.42	0.31	0.11	SX	1	2.22	1.71	0.07
	49	0.55	0.46	0.06		2	(3.28)	1.47	0.54
	50	0.49	0.34	0.10		3	4.82	2.78	0.20
	51	0.35	0.34	0.19		5	7.52	2.56	0.43

市　場　遺　跡

第6章　市場遺跡の調査

第1節　層　　序

調査区は、西より東に向かって緩やかに傾斜する扇状地の扇頂部に位置する。現在は茶畑に利用されているがそれ以前は水田であった。そのため、表土（Ⅰ層）は耕作土であり、その下に旧水田耕作土は入る。断面観察から、水田は3段になっていた。遺物包含層（Ⅵ・Ⅶ層）は、遺跡の西側には見られず、東に向かって徐々に厚く堆積している。本来遺跡全体に広がっていたと思われるが開田の際の地形改変によって削平されたと考えられる。Ⅷ層以下は崖錐性の堆積層である。

以下、各土層の性状を概述する。

第Ⅰ層：10YR3/2、しまりのゆるい黒褐色土。径2～5㎜の礫を少し含む。茶畑の耕作土で遺跡全体に広がる。

第Ⅱ層：10YR4/4、しまりのゆるい褐色土。径1～2㎜の砂粒を非常に多く含む。旧水田耕作土。

第Ⅲ層：5Y4/2、しまりのややある灰オリーブ土。礫をほとんど含まない。

第Ⅳ層：2.5Y5/2、しまりのない暗灰黄色土。径5～20㎜の亜円礫が大半を占める。

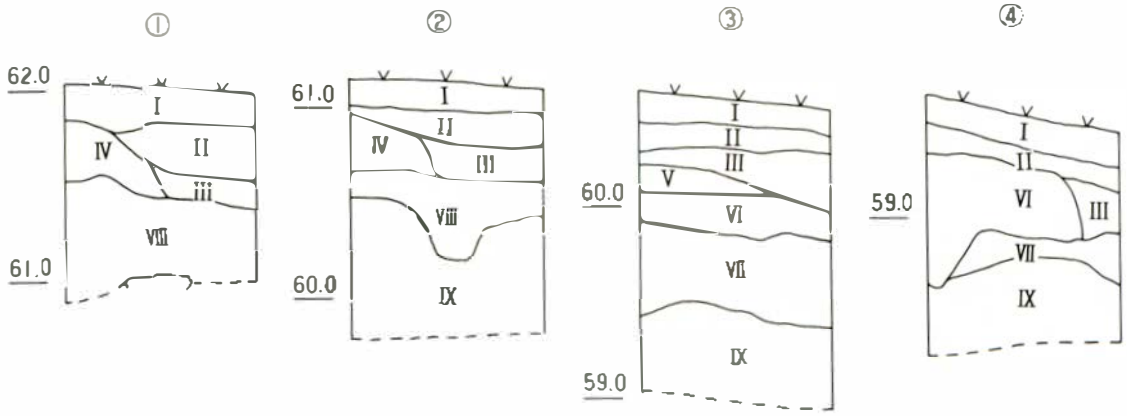
第Ⅴ層：7.5YR4/4、しまりのゆるい褐色土。礫をほとんど含まない。

第Ⅵ層：10YR3/2、しまりのややある黒褐色土。径5～20㎝の亜円礫がわずかに入る。

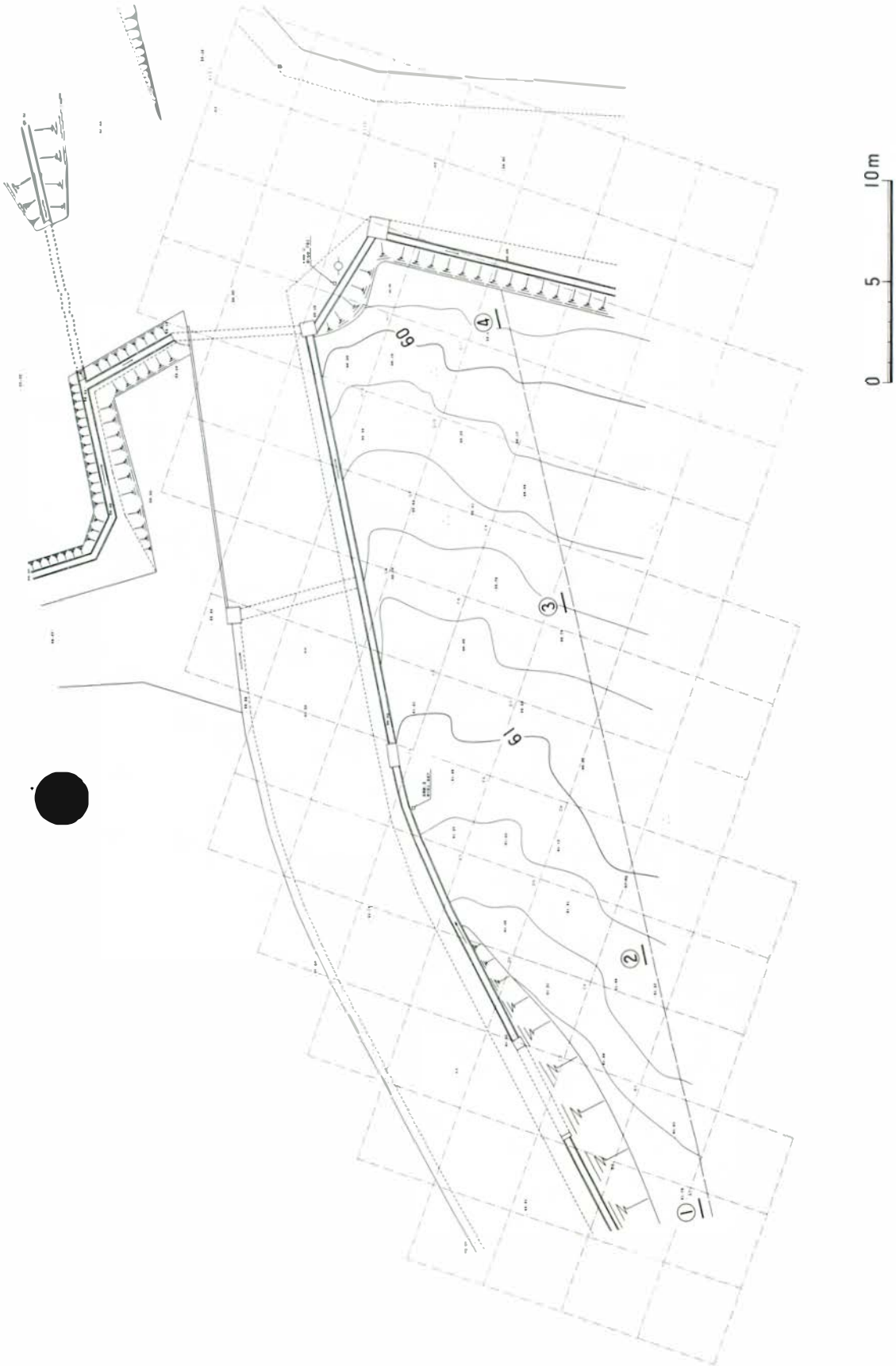
第Ⅶ層：10YR3/4、しまりのある暗褐色土。礫をほとんど含まない。下部（㎜b層）は、やや薄めの土色で粘性が高くなり、径10～20㎝の亜角礫が多く入る。

第Ⅷ層：5Y5/2、しまりのゆるい灰オリーブ土。下部ほど粒子の粗い砂質土となり、鉄分が付着した礫岩も多く入る。

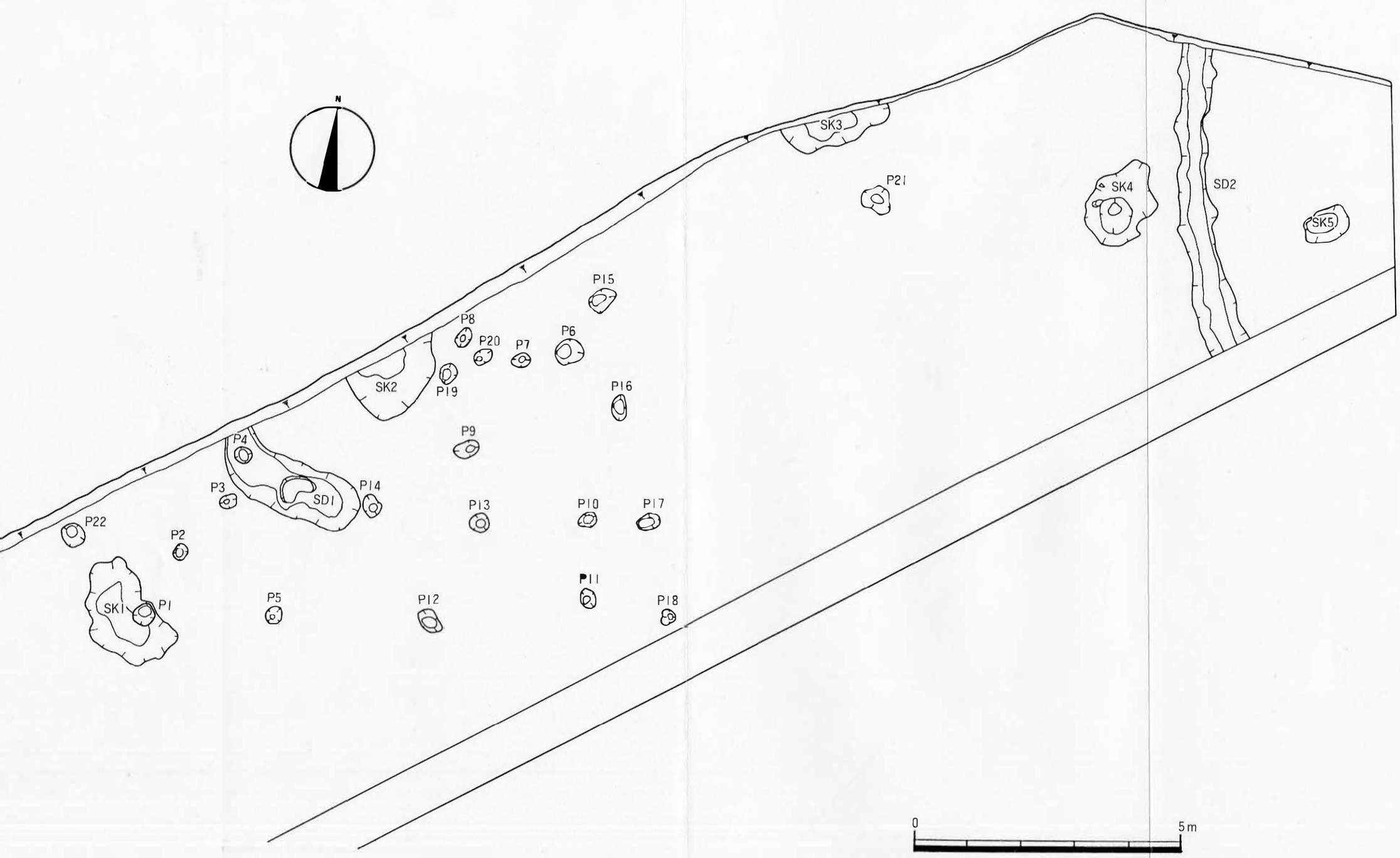
第Ⅸ層：5Y5/3、しまりのゆるい灰オリーブ土。土色・土質は第Ⅷ層と非常に似ており、同じ崖錐性の堆積状況を示す。



第78図　トレンチセクション図



第79図　市場遺跡地形測量図 グリット設定図　(1/300)



第80図　市場遺跡遺構配置図（1/80）

第2節　遺　　構

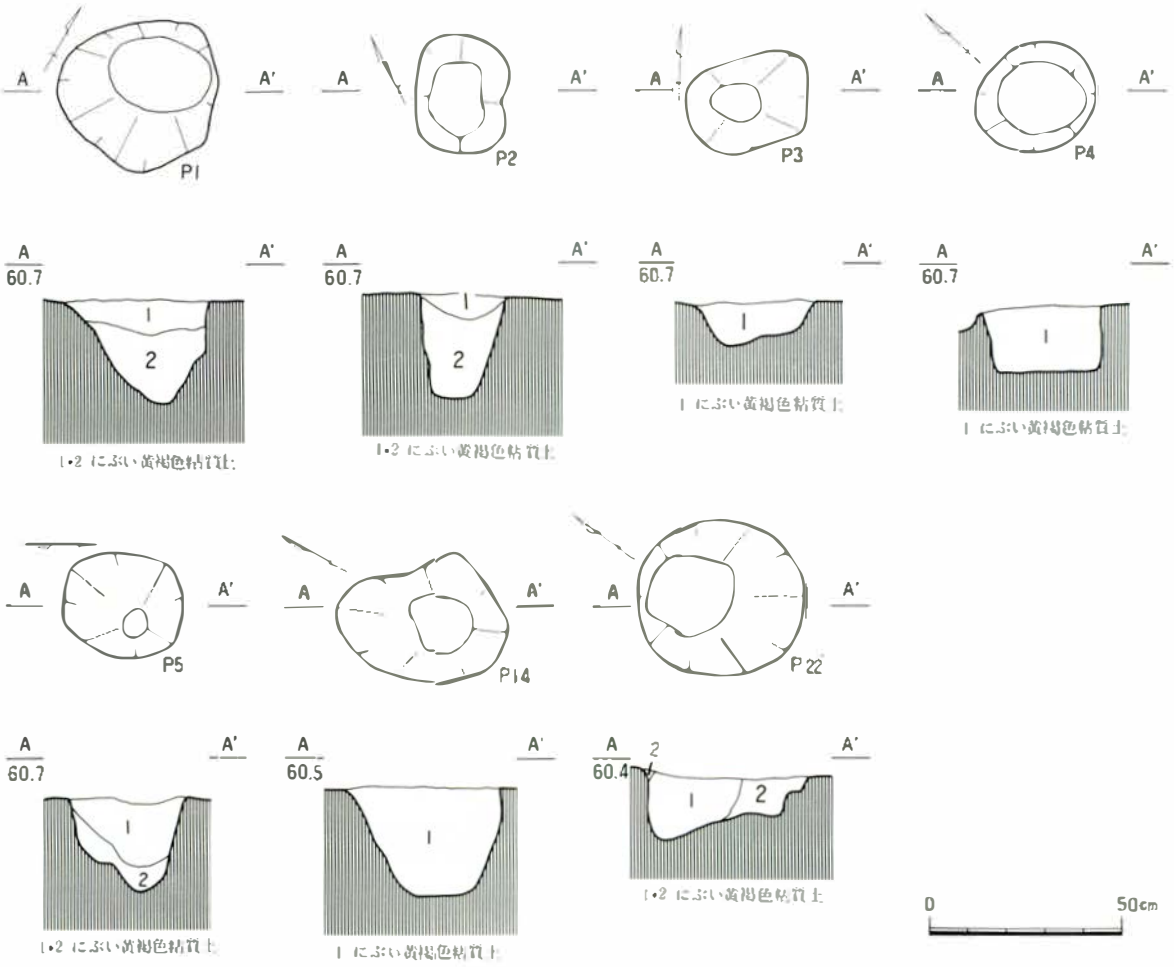
今回の調査で検出された遺構は、ピット群22基、土坑5基、溝2条である。

ピット群（第　図）

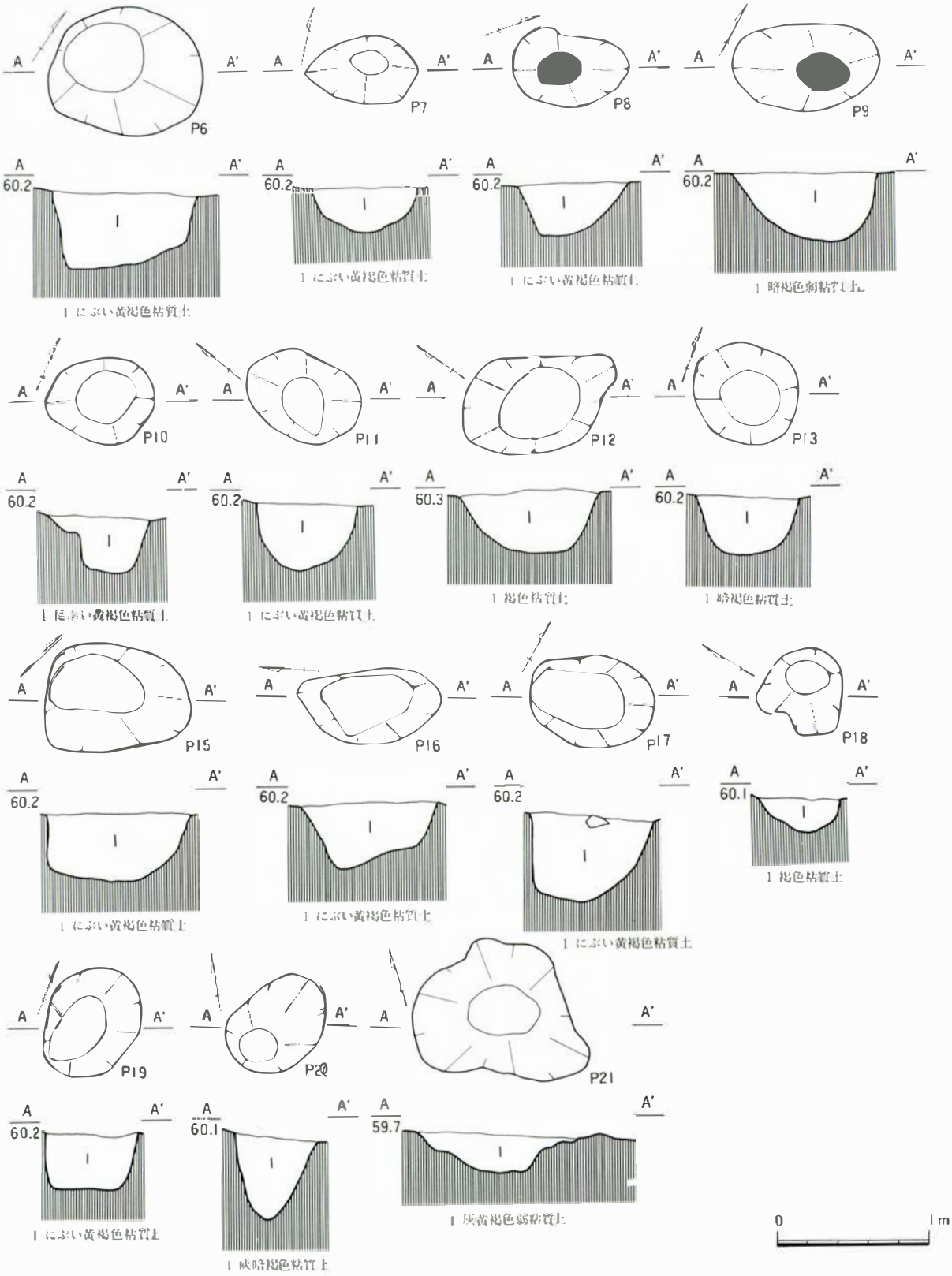
ピットは22基検出した。P11より縄文時代早期の土器片が1点出土しただけで、他のピット埋土から遺物は出土していない。そのため、ピット群の時期を特定することはできない。ピット群は、検出場所や検出されたレベルから3群に分けられる。

第1群は、P1～5・14・22で、F5区～G6区にかけて位置する。いずれも標高60.6m前後のレベルに揃い、VI層より掘り込まれており、にぶい黄褐色弱粘質土が入る。特に、P1・2・5・14・22は、径0.3mm～0.4m、深さ0.25m～0.3mを測り、他のピット比べて大きい。そのため、掘立柱建物に伴う柱穴と想定してみたが、明確な位置関係を示すことはできなかった。

第2群は、P6～13・15～20で、F7区～G8区にかけて位置する。標高60.1m前後のレベルに揃い、VI・VII層より掘り込まれている。にぶい黄褐色弱粘質土が入るピット群（P6～8・10～11・15～17・19）と褐色あるいは暗褐色弱粘質土が入るピット群（P9・12・13・18）、灰黄褐色弱粘質土



第81図　ピット1群実測図



第82図　ピット2・3群実測図

が入るピット群（P20）に分かれる。また、P6・9・12・15～17は、径0.4m～0.5m、深さ0.2m～0.3mを測り、他のピットに比べて大きい。そのため、掘立柱建物に伴う柱穴と想定してみたが、明確な位置関係を示すことはできなかった。

第3群は、P21で、H9区に位置する。標高は他のピット群に比べ59.65mと低く、Ⅶ層より掘り込まれており、灰黄褐色弱粘質土が入る。径0.52m、深さ0.14mを測り、浅いすり鉢状の形を呈す。

土坑（SK）（第　図）

土坑は、5基検出した。

SK1

SK1は、F6区に位置する。平面形は、楕円形を呈し、長軸2.15m、短軸1.12m、深さ0.28mを測る。Ⅷ層より掘り込まれており、埋土はⅥ・Ⅶa層が入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

SK2

SK2は、G7区に位置する。プランは調査区北に続いており、検出されたプランの平面形は、半円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.04m、深さ0.53mを測る。埋土はにぶい黄褐色弱粘質土や暗褐色粘質土が入り、礫をほとんど含まない。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

SK3

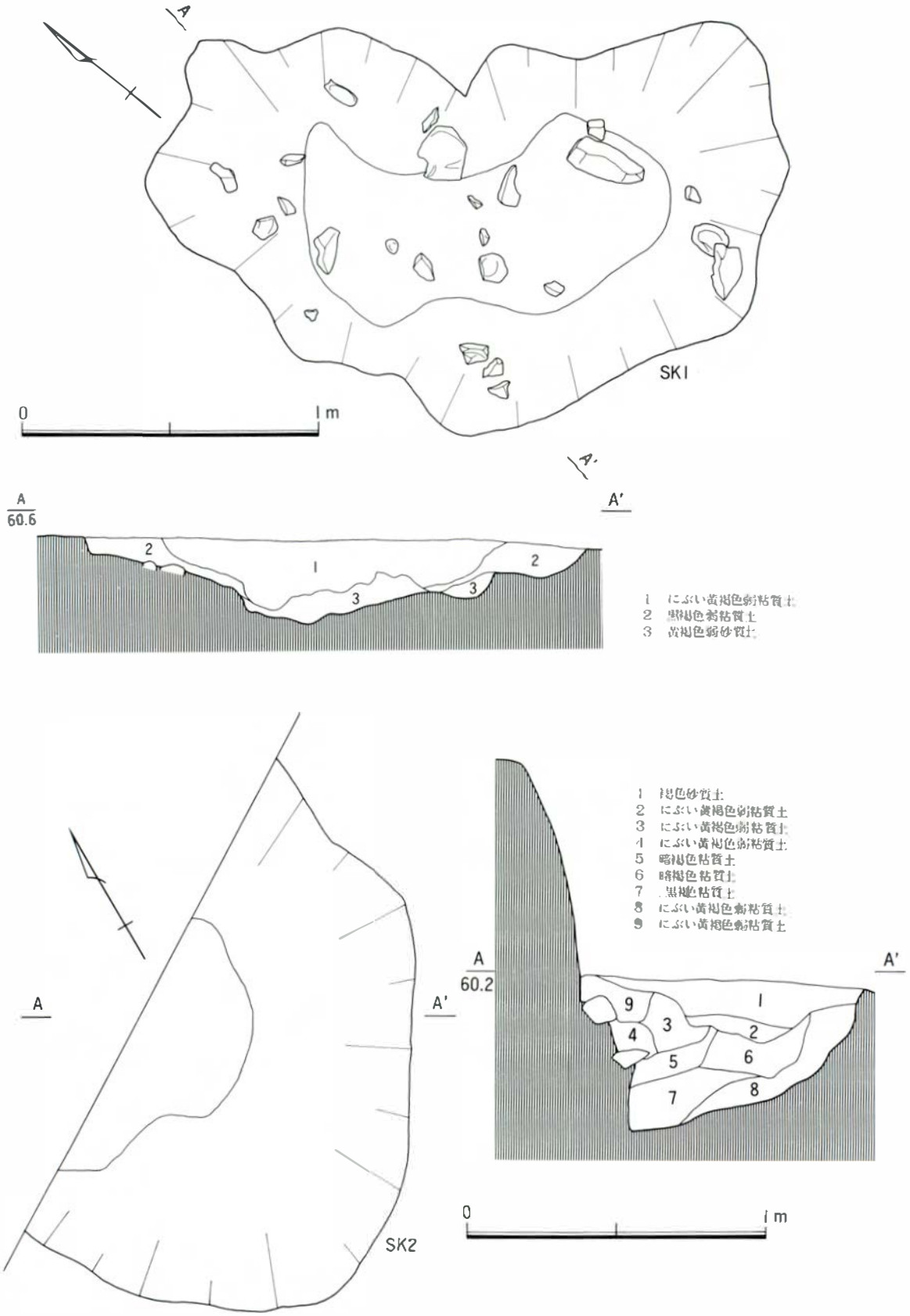
SK3は、H9区に位置する。プランは調査区北に続いており、検出されたプランの平面形は、半楕円形を呈し、長軸2.07m、短軸0.54m、深さ0.26mを測る。Ⅵ層より掘り込まれており、埋土は、粘性の高い黒褐色土が入り、径0.2m～0.3mの礫が流れ込んだように入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

SK4

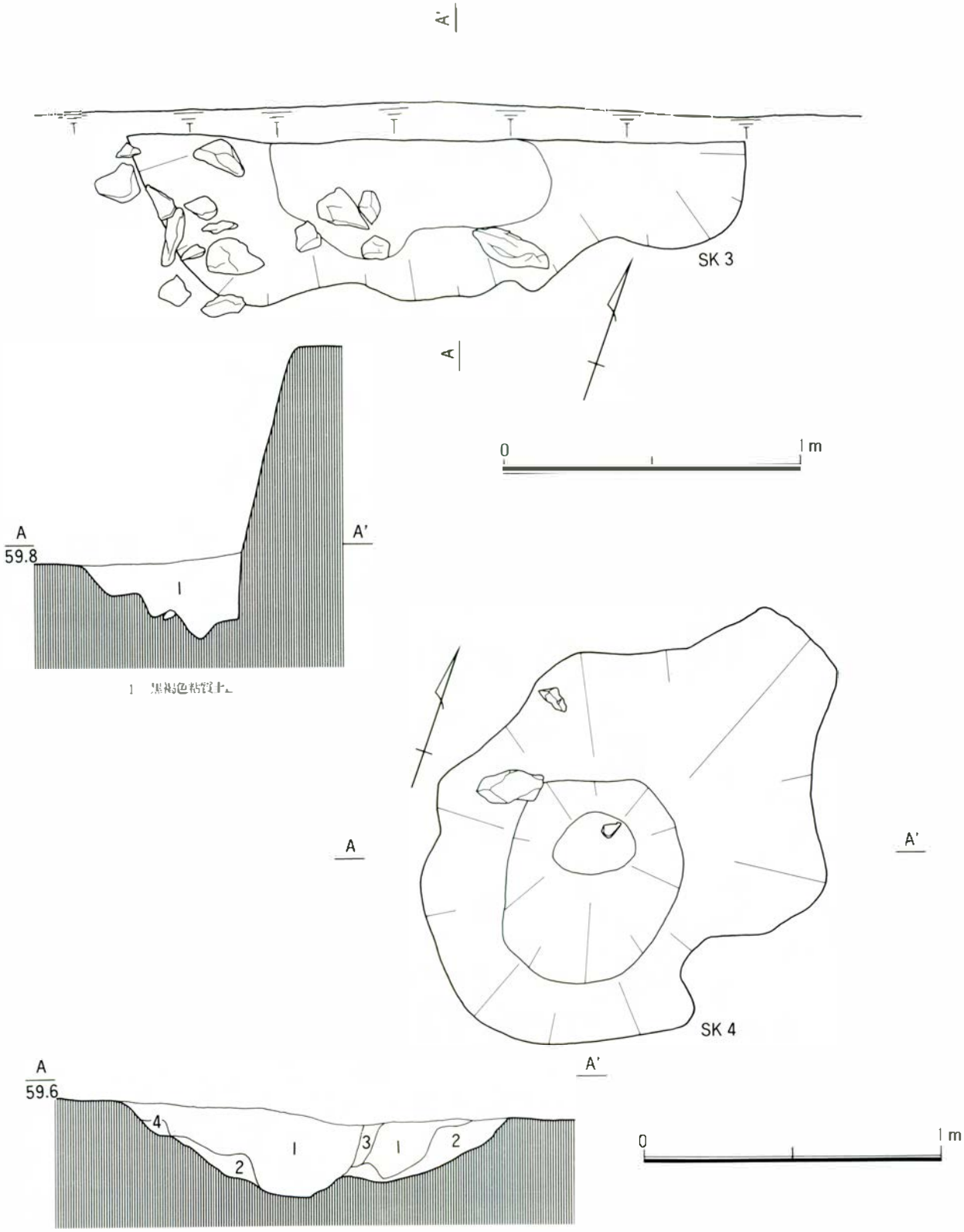
SK4は、H10区に位置する。平面形は、楕円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.17m、深さ0.3mを測る。Ⅵ層より掘り込まれており、埋土1からは縄文土器片が3点、フレイク2点、被熱し赤褐色に変色した礫1点が出土している。縄文土器片は、いずれも押型文が施された縄文時代早期の土器である。Ⅵ層からは、他の地点で中近世陶磁器も出土しており、SK4が縄文時代早期の遺構と断定することはできない。

SK5

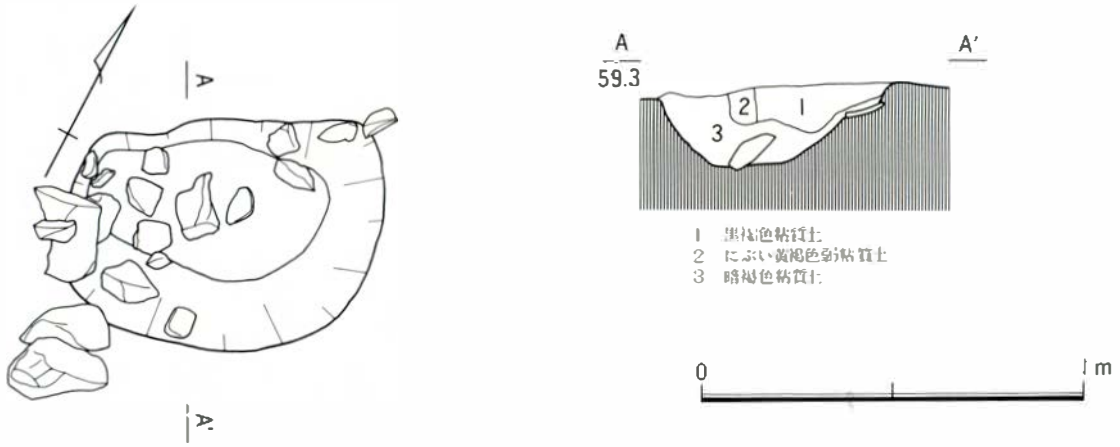
SK5は、H11区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.87m、短軸0.64m、深さ0.22mを測る。Ⅶa層より掘り込まれ、底部はⅧ層に達している。埋土にはⅥ層と円柱状ににぶい黄褐色弱粘質土が入る。底部にはⅥ層とⅦ層の混入土が入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。



第83図　ＳＫ１・２実測図（1/20）



第84図　ＳＫ３・４実測図（1/20）



第85図　ＳＫ５実測図（1/20）

溝（ＳＤ）

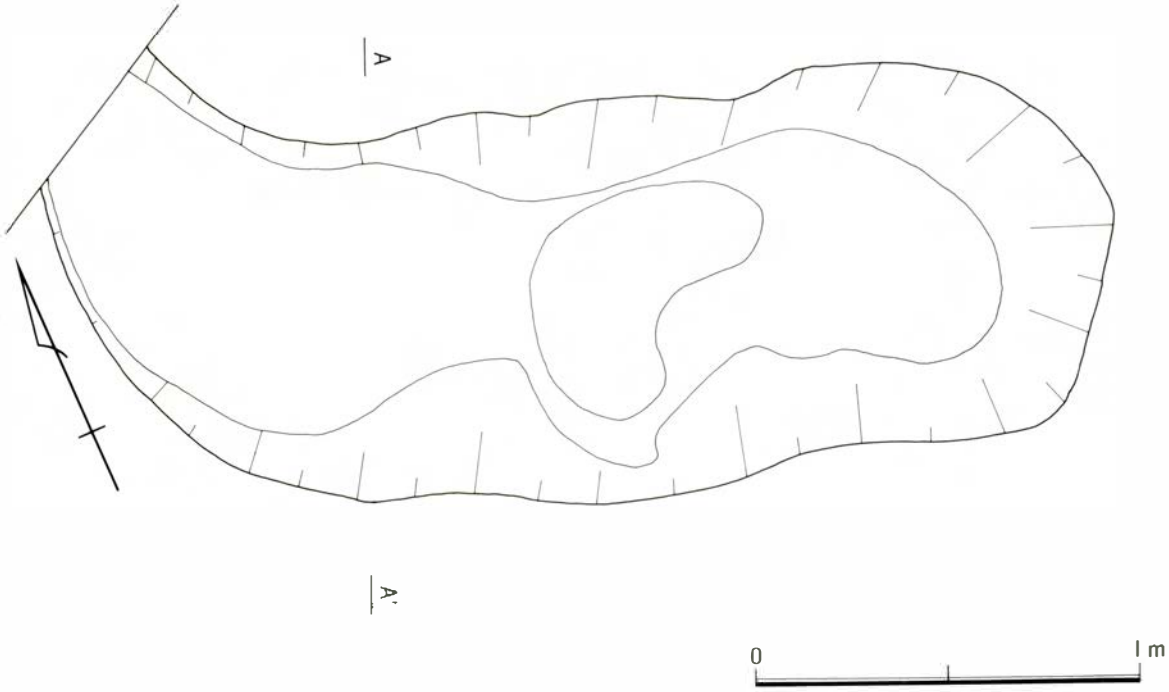
調査区からは２条の溝を検出した。

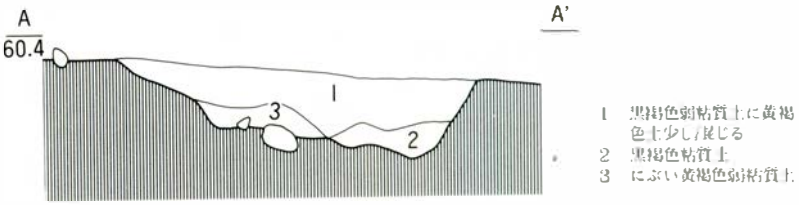
ＳＤ１

ＳＤ１は、Ｆ６・７区に位置する。溝は北西方向より南東方向に至り、その南端はＦ７グリッド杭付近で途切れているが、北端は調査区外へ続いており確認できない。検出した溝は、全長2.78m、幅1.06m、深さ0.46mを測り、Ⅶ層より検出された。埋土は３層に分層される。遺物は、無文の縄文土器片が１点、フレイクが２点出土している。遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

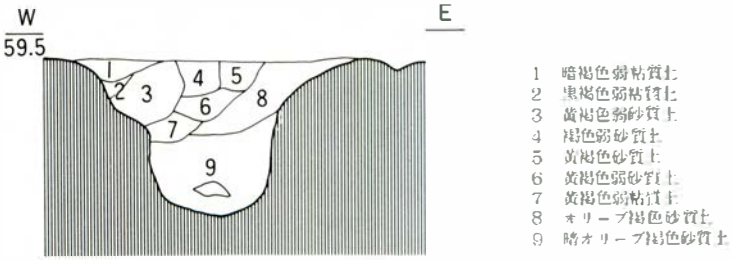
ＳＤ２

ＳＤ２は、Ｇ11区～Ｉ10区に位置し、Ⅲ層より検出された。溝はほぼ南北に走り、その両端は調査区外に続いており確認できない。検出した溝は、全長5.8m、幅0.78m、深さ0.58mを測る。溝の断面形は枡形を呈す、埋土は９層に分層される。底部には暗オリーブ褐色砂質土が堆積している。近世以降に開田された旧水田の用排水路と考えられるが、遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。





SD 2



※平面図は、第80図遺構配置図に

第86図　ＳＤ１・２実測図　(1/20)

第3節　遺　　物

調査区より出土した遺物は、土器124点（縄文土器61点、弥生土器9点、須恵器2点、山茶碗1点、中近世陶磁器51点）、石器75点（石錐1点、スクレイパー1点、コア6点、フレイク54点、U・F10点、くさび形石器1点、その他2点）である。そのうち、土器14点、石器3点を図示した。

縄文土器（第87図1～13）

縄文土器は、3群に分けられる。1群は、縄文時代早期の土器群（1～11）である。2群は、中期の土器（12）である。3群は、後期の土器（13）である。

1群の土器（1～11）

1～3は、外面に楕円形の押型文が施されている。器壁は厚く、繊維痕を含む。3は口縁部片である。4・5は、外面に山形の押型文が施されている。6～10は、外面に網目状撚糸圧痕文が施されている。器壁は厚く、繊維痕を含む。11は、外面に縦位・斜位の沈線が5条施されており、沈線文系の土器と思われる。

2群の土器（12）

12は、外面に半截竹管による横位の沈線が3条施され、その下に横位の連続刺突文が2条施されている。

3群の土器（13）

13は、口縁内面端部が肥厚し、口縁外面端部の下に横位の沈線が1条施されている。沈線は途中で途切れているが口縁形状に合わせて波状あるいは山状になると思われる。

須恵器（第87図14）

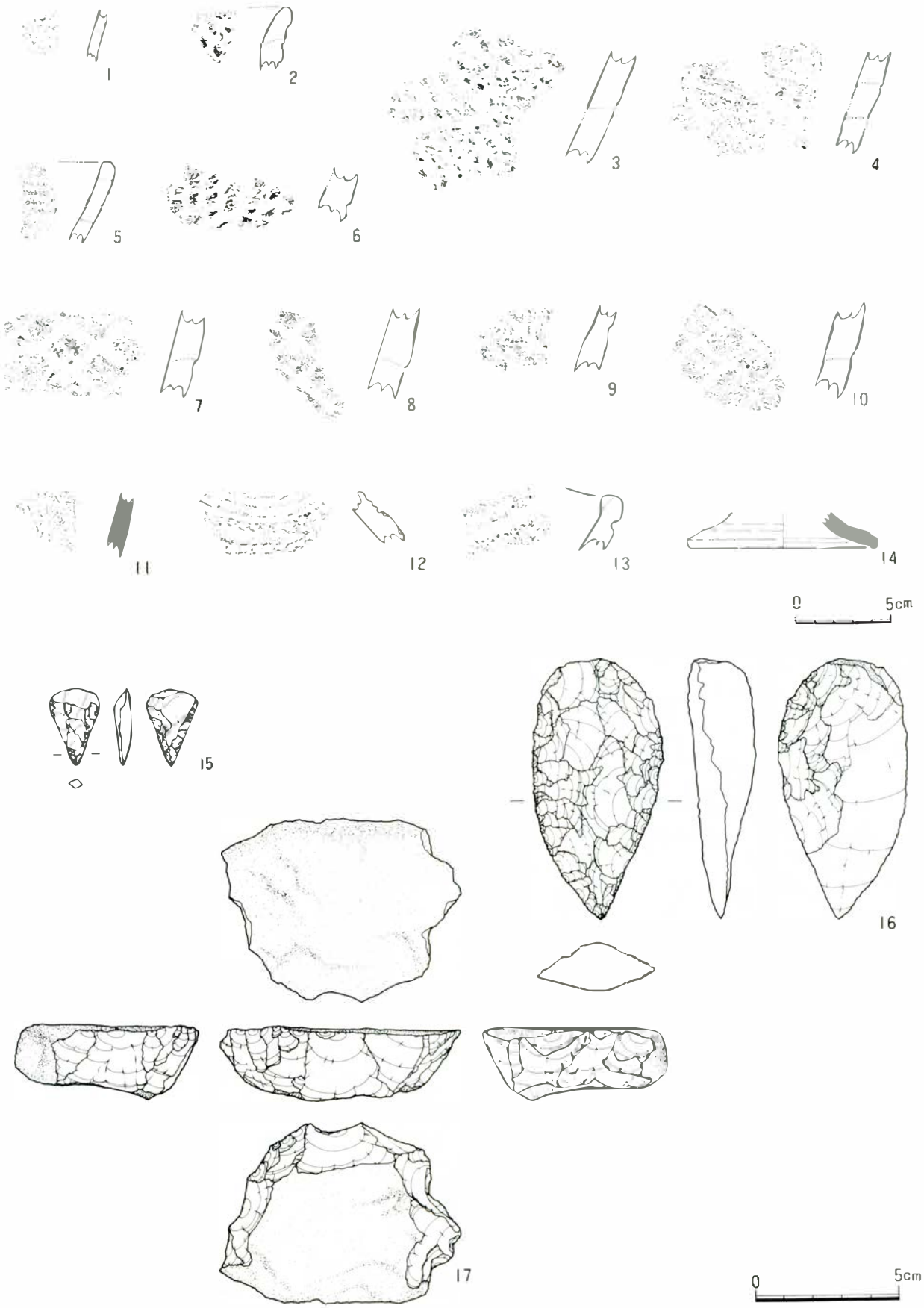
14は、B1区V層より出土した。高坏の脚部片で、ラッパ状に開く。脚部端部はやや丸い凸面を成して内側で接地する。

石　器（第87図15～17）

15は、石錐である。石材はサヌカイトで、背面・腹面に素材の面を残す。素材の二次調整は表面を粗く、裏面は細かくなされている。また、先頭部から基部に向かって調整されている。機能部断面形はひし形である。機能部はかなり摩耗している。

16は、スクレイパーである。石材は、緻密な黒色チャートで、素材はかなり厚めの大きな縦長剥片である。主要剥離面の打点近くに大きなバルバスカーがある。刃部は左右側縁に裏面から表面へと片面調整されており、刃部の角度は左右とも50°である。刃部には使用によると思われるつぶれ状の剥離がみられ、先端部には摩耗がみられる。

17は、コアである。石材は泥岩で、板状の礫を素材とする自然面が多く残っている。広く平坦な自然面を打点とし、その縁辺から剥片剥離作業を行っている。打点転移は行わず、作業面は裏面を除き3面に及ぶ。剥離された剥片は、下端部に自然面を有するものが多い。



第87図　遺物実測図(36)

第4節　まとめ

今回の調査によって明らかになった点は以下である。

市場遺跡からは、土坑・溝・ピット群を検出した。遺構の時期を明らかにすることはできなかったが、縄文時代早期から中近世陶磁器に至るまで幅広い時代の遺物が出土した。このことから、当該遺跡周辺には縄文時代早期から人々の営みが続いていたことを知ることができた。

また、わずか2点ではあったが、古墳時代後期に属する須恵器片が出土したことは、市場遺跡北西部に広がる金地谷古墳群の存在を側面的に裏付ける結果となった。

市場遺跡は、その名のいわれが「市」にあり、中世の物語にも片山の市場として登場する。今回の調査で「市」に関連する遺構の検出も期待された。出土した遺物には中近世陶磁器が含まれていたがいずれも細片であり、中世と断定できる遺構を残念ながら確認することはできなかった。近世以降の開田によって、地形が改変された可能性も指摘できる。

第7章　調査関連資料

第1節　南高野古墳石室内赤色顔料の蛍光X線分析

菱田　　量（パレオ・ラボ）

1．はじめに

高畑遺跡の調査では、6世紀中頃から後半に構築された、玄室およびこれに通ずる羨道からなる横穴式石室が見い出された。この玄室を構築する岩石表面には赤色顔料が付着していた。ここでは、これらの赤色顔料の元素組成を明らかにするため、蛍光X線分析によって定性的に調べた。

2．試　　料

顔料を採取した試料は、玄室を構築する岩石表面と床面の岩石表面から採取した（第36表）。試料は、赤色顔料が付着した部分あるいは赤味がかった部分などに、セロハン粘着テープを張り付けて採取した。これらは全体に赤色を呈しているもの、やや色調が淡いもの、あるいは灰白色を呈する試料である。なお、試料③は、床面の礫の上に重なる礫の裏側から採取した試料で、顔料付着細礫が4mm以下と小さいためマイラー容器に入れて測定した。

第36表　蛍光X線分析した玄室内赤色顔料等

試料No.	位　置	色　調	備　考
①	玄室右壁奥側	灰白色（粘土質）	
①	玄室奥壁	赤色	大型岩石
③	玄室床面石裏側	赤色	
●	玄室右壁手前側	灰白色（粘土質）	
⑤	玄室手前	赤色	大型岩石
●	玄室手前	灰白色（粘土質）	大型岩石
●	玄室床面石	灰白色（粘土質）	

3．分析方法

剥離試料は、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、含まれる元素を定性的に測定した。

分析装置は、卓上型蛍光X線分析計SEA-2001L（セイコー電子工業㈱製）である。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50KV、試料室内は真空雰囲気である。

4．結　果

第1図～第7図に，各試料の蛍光X線スペクトルを示した。これらの試料には、主な主成分元素として鉄（Fe）が顕著に検出され、その他にアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）のピークが見られる。また、硫黄（S）や亜鉛（Zn）の小さなピークが認められる。また、試料③では、ルビジウム（Rb）やジルコニウム（Zr）のピークも確認された。

なお、（Rh）のピークはX線管球ターゲットによるものなので、試料に由来するものではない。

5．考　察

(1)　分析試料の赤色顔料について

一般的に、赤色顔料の種類として、水銀朱（HgS）、ベンガラ（Fe_2O_3など）、鉛丹（Pb_3O_4）が知られている（たとえば市毛、1984）。

試料②や試料③あるいは試料⑤は赤色を呈し、赤色顔料であることが理解されるが、鉄（Fe）の大きいピークが認められことから、赤色顔料の1つであるベンガラである。

これ以外の試料は、肉眼的には赤色とは認められないものの、一般的な粘土に比べて鉄のピークが高いことから、周辺と同様ベンガラ成分が含まれているものと考えられる。ただし、顔料として塗布したものか、偶然周辺の顔料成分が付着したものかは明らかでない。

なお、鉄以外の元素ピークが検出されているが、採取時に顔料以外の付着粘土物も同時に付着したため、ケイ素やアルミニウムといった元素が検出されているものと考える。

(2)　ベンガラについて

ベンガラは、赤色の由来となる主成分元素が鉄(Fe)のものを総称していう（本田、1995など）。古代においては、鉄分に富んだ土壌（たとえば褐鉄鉱を含むものなど）を焼いてつくられたと考えられている（山崎、1987など）。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあると思われる。また、北野（1994）によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄（磁硫鉄鉱：FeS、黄鉄鉱：FeS_2）が風化して形成された緑礬（りょくばん、硫酸鉄($FeSO_4 \cdot 7H_2O$)）を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか（1995）は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄（$Fe_2O_3 \cdot nH_2O$）が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。また、最近の研究では、縄文時代や弥生時代の赤色漆に用いられた赤色顔料中に珪藻化石が見られることから、水成環境下で生成した酸化鉄であることも分かってきた（岡田、1997）。このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。なあ、ここで分析した試料は、鉄以外にイオウ（S）の小さなピークが認められるため、硫化鉄起源のベンガラであることも考えられる。

引用・参考文献

市毛　勲　1984　『増補　朱の考古学』、第2版、考古学選書12、雄山閣出版、p. 324

本田光子　1995　「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』、31・32、pp. 63-79

北野信彦　1994　「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点II―文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について―」『古文化財の科学』、39、pp. 93-102

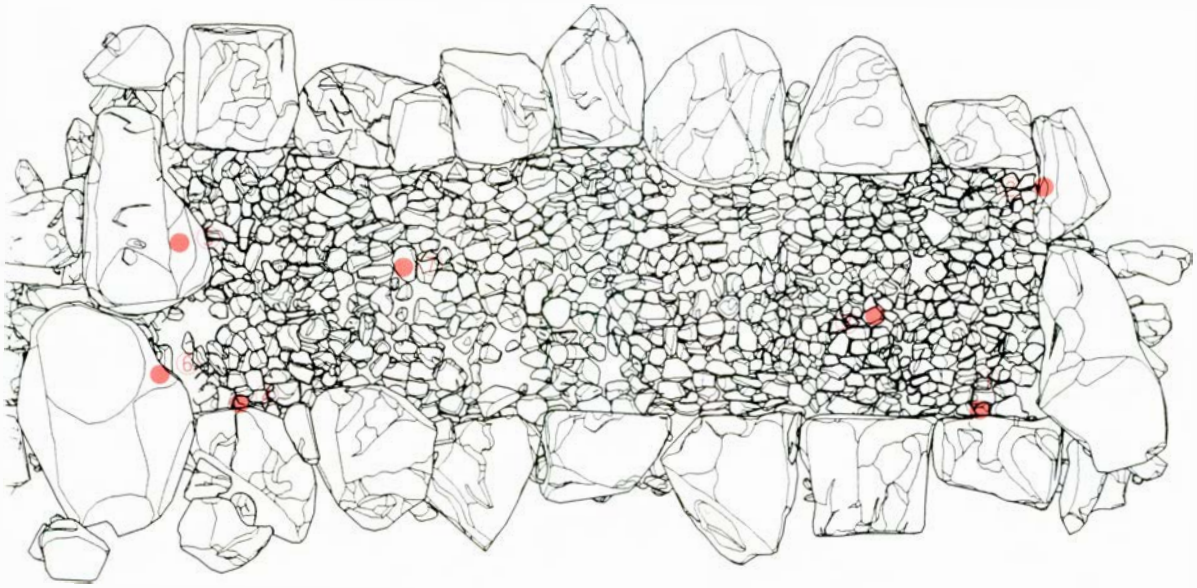
永嶋正春　1985　「縄文時代の漆工技術―東北地方出土鹿胎漆器を中心にして―」『国立歴史民俗博物館研究報告　第6集』、国立歴史民俗博物館、1-54

永嶋正春　1995　「古代漆の源流」『古代に挑戦する自然科学』、第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、クバプロ、pp. 82-93

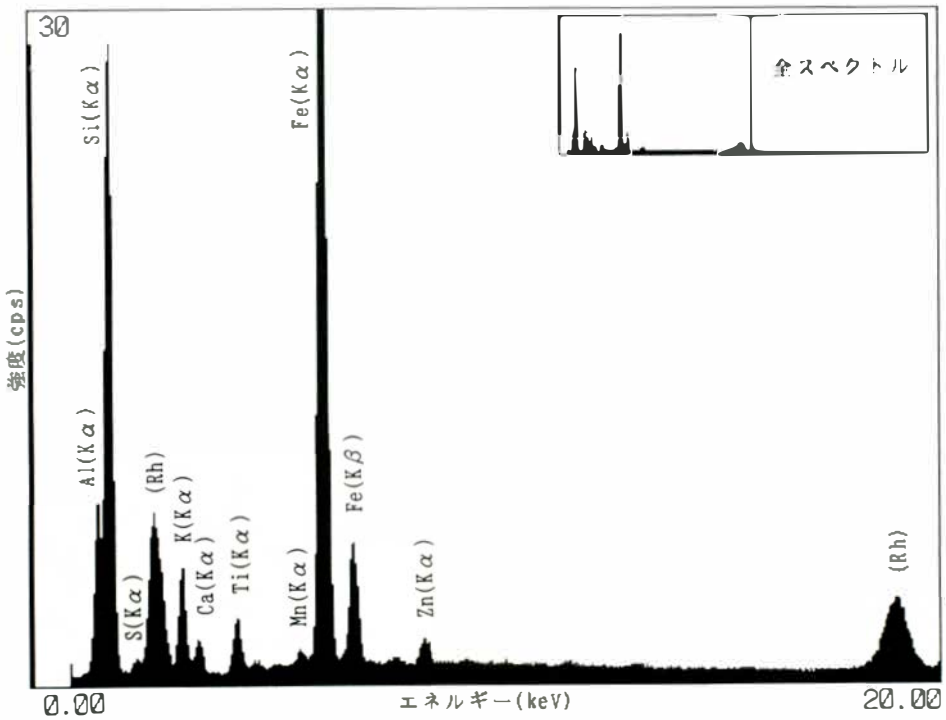
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元、第14回大会研究発表要旨集、pp. 38-39、日本文化財科学会

矢彦沢清允・両角秀俊・藤松　仁・村上　泰・森嶋　稔　1995　「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来―フォッサマグナ東端地域を中心として―」『考古学雑誌』、80、4、pp. 75-87

山崎一雄　1987　『古文化財の科学』、思文閣出版、p. 352

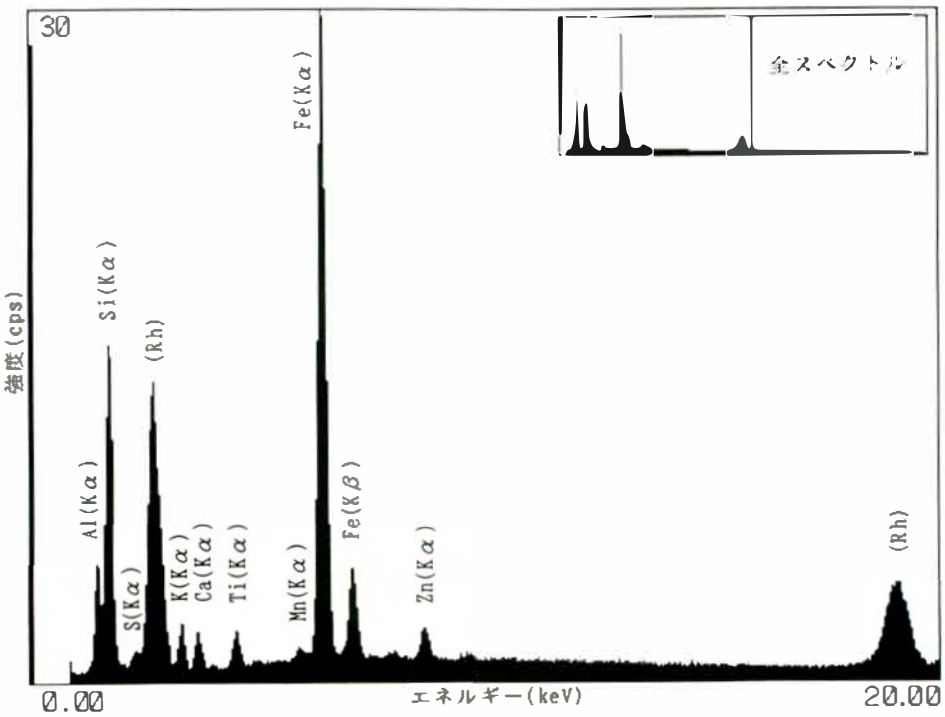


第88図　分析試料採集位置図



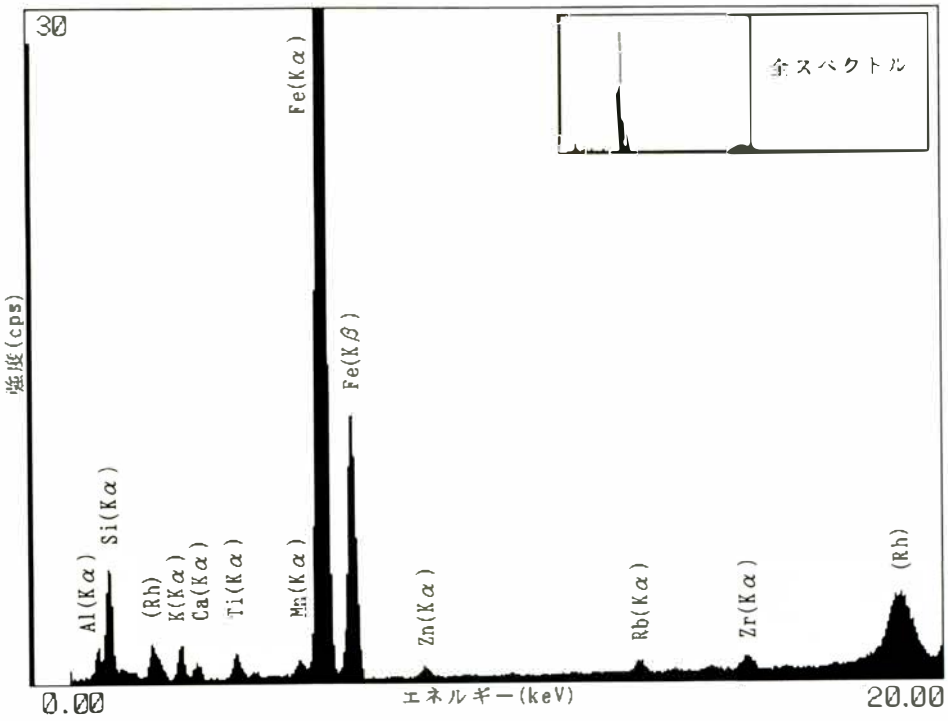
第89図　灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料①)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,S:硫黄,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



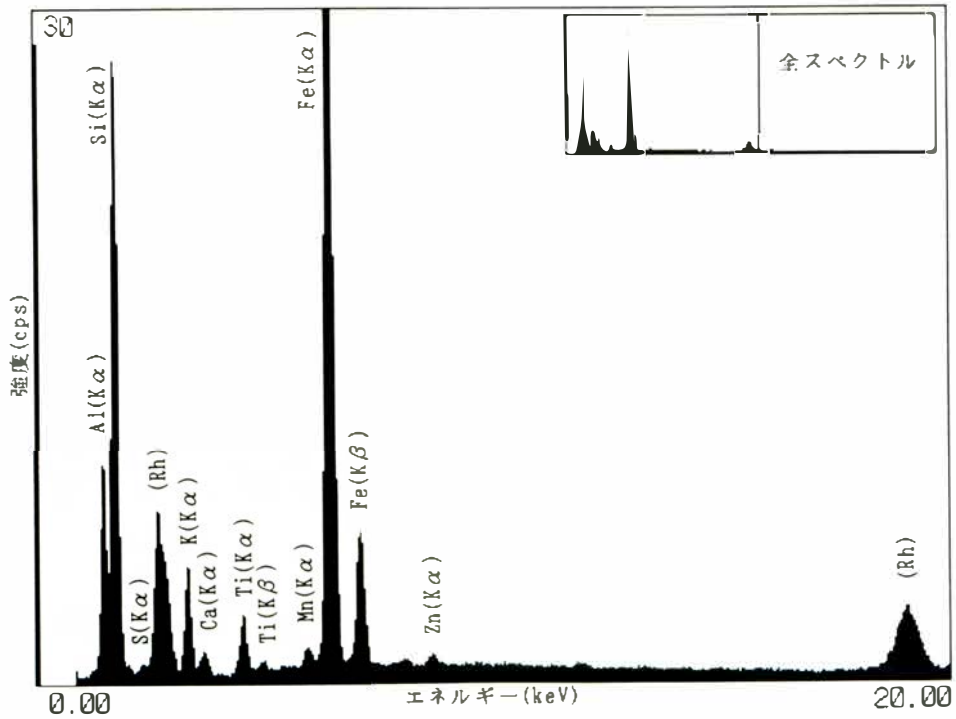
第90図　赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料●)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,S:硫黄,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



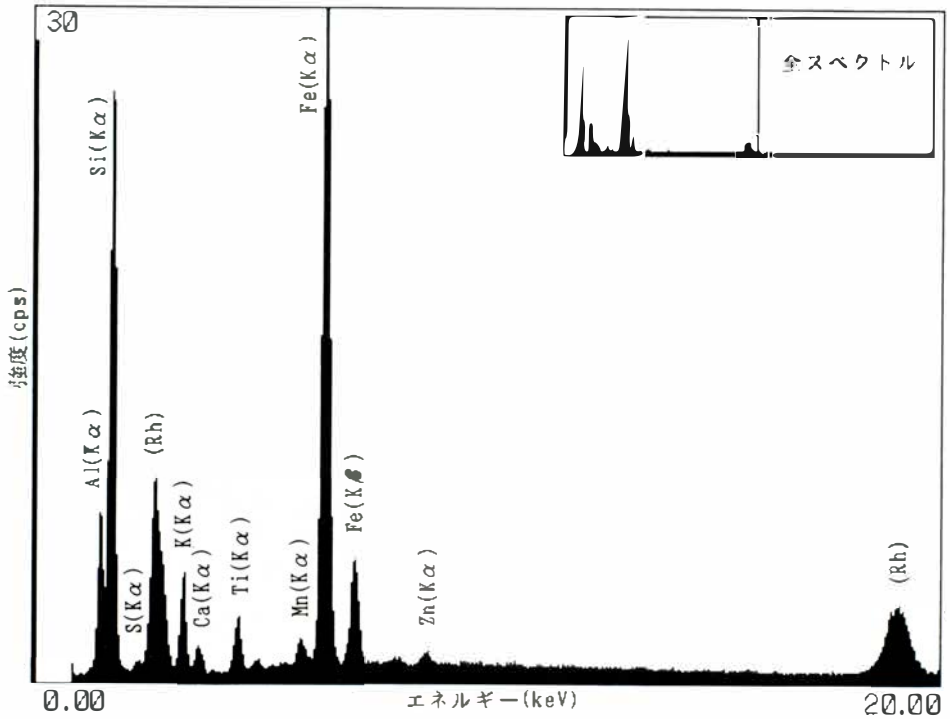
第91図　赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料●)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,Fe:鉄,
Zn:亜鉛,Rb:ﾙﾋﾞｼﾞｳﾑ,Zr:ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X 線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



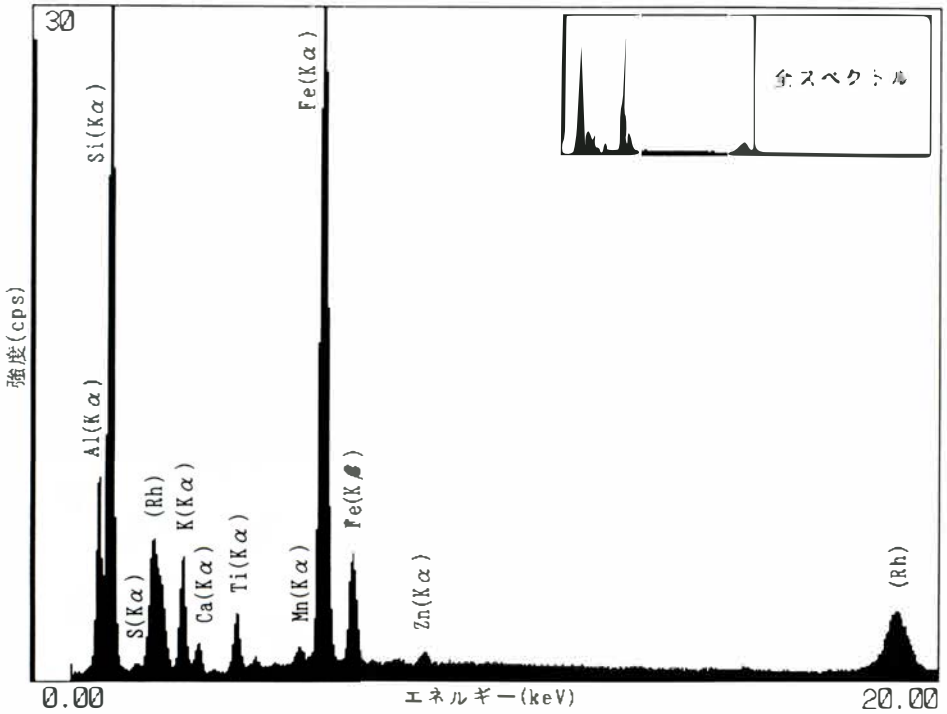
第92図　灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料④)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,S:硫黄,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X 線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



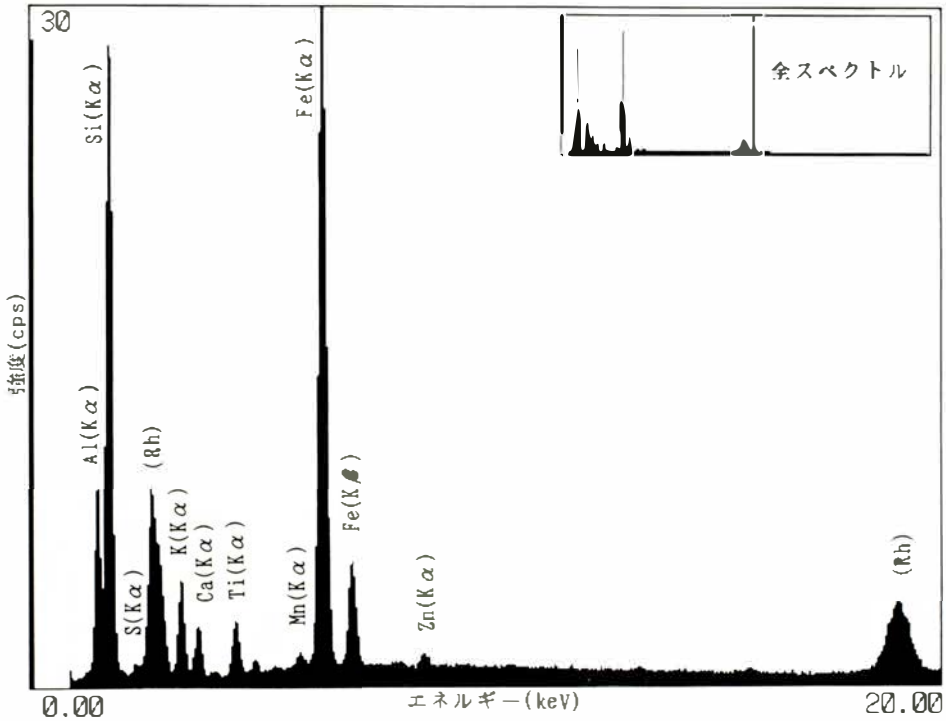
第93図　赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料⑤)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,S:硫黄,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



第94図　灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料●)

Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ,Si:ｹｲ素,S:硫黄,K:ｶﾘｳﾑ,Ca:ｶﾙｼｳﾑ,Ti:ﾁﾀﾝ,Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ﾛｼﾞｳﾑ(X線管球ﾀｰｹﾞｯﾄから)



第95図　灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料⑦)

Al:アルミニウム,Si:ケイ素,S:硫黄,K:カリウム,Ca:カルシウム,Ti:チタン,Mn:マンガン,
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)

第２節　南高野古墳の３次元測量と復元ＣＧの作成

木村　寛之（イビソク）

はじめに

南高野古墳周辺では高圧電線が低く空撮図化ができない状態であった。そこで、トータルステーションで地形測量を行い、図面作成には自動等高線算出ソフトと地図 CAD を利用して作成した。また、石室内部の崩壊の可能性が高いことから、石室の計測には３次元デジタイザーを利用した立体計測を行い、図面作成は計測データを３次元 CAD で解析・加工して展開図などを作成した。これらの計測データをもとに、墳丘の復元予想ＣＧを作成した。

１．３次元デジタイザーによる測量

(1)　機　　器

多関節アームとコンピュータ（計測 CAD）から構成される接触型３次元計測システム。

(2)　測量箇所

①天井石（平面・裏面・朱の痕）

②玄室（奥壁・左右側壁・敷石・朱の痕）

側壁の計測は崩壊が激しく、計測後に石を外し発掘。石が出土すれば計測の繰り返しで作業が進んだ。そのため地震で崩壊した様子が記録できた。

③羨道（左右側壁・敷石・閉塞石・出土立体状況）

発掘段階で羨道が狭いプランか地震の為か判断が付かず数回に分け左側壁を計測、前回の計測データを画面で確認しながら同一の石か確認しながら計測した。

④排水溝（蓋平面・蓋を取り除いた平面）

蓋の厚みは、蓋を外した土の跡を計測した。

(3)　作成図面と解析・加工

石室内部の図面作成には３次元 CAD を利用して作成した。視点変換・属性表示の変更・陰線処理などの機能を組み合わせて必要な図面を作成した。陰線処理にはデータを基に面を付加する作業が伴う。

作成図面

- 敷石及び基底石の平面図：属性表示のみ。
- 奥壁・左右側壁・排水溝の立面図：属性表示と視点変換を利用。
- 天井石・閉塞石・排水溝蓋の断面図：計測データより断面データを作成。その後で視点変換。
- 敷石の断面及び見通し図：石室センターより左側に断面処理を５本作成。その後に属性表示、非表示、視点変換、陰線処理を利用。
- 天井石平面図：属性表示のみ
- 羨道床石平面図：属性表示のみ
- 排水溝平面図：属性表示のみ
- 奥壁・前壁コーナー図：属性表示、非表示、視点変換、陰線処理を利用。

- 地形図：地形測量の成果と単点より自動算出された等高線を地図CADで編集。その後で2)で作成された平面図を地図CAD上で同一点を基に合成して作成。
- 仰向図（床から天井を見た図面、未使用）：断面処理、属性表示・視点変換・陰線処理

２．墳丘復元ＣＧの作成

１）墳丘規格の復元

地形図から読み取れるデータを基に復元規格を図面作成し、調査担当者による考古学視点より検証を繰り返す手法をとった。これにより２つの違う視点が入り復元データとしての価値が上がると思われる。但し、この現場では路線内の調査のために発掘できない場所があり、周溝など一部で実データを利用できなかった。

＜作業工程＞

- 地形図には半分程度の墳丘と思われる跡がある、なるべく離れた位置で同じ高さ（26.5m）を３点探し、CADを利用し３点の中心が石室奥壁付近へくる円を探した。同じ方法で周溝も復元、但し１点は周溝に固定。周溝は天端と同じ高さで墳丘と同じ方法で中心を復元。この時点では同心円でない墳丘を想定。
- 担当者により検証。
  復元のポイントを決定してもらう。
- ポイントに合う位置に来る様に円を変更。同心円の復元予想を想定。

２）墳丘復元予想ＣＧの作成

- ３次元で墳丘を復元する為に、断面を復元し自動等高線ソフトを利用しＣＧ基礎データを作成する手法を採用した。この手法は、短時間で作業ができるのと常に復元状況を等高線で確認できるのが特長である。

＜作業工程＞

- １）の墳丘規格の復元図から、古墳中心から放射状に断面データを取得。そのデータを自動等高線ソフトにより墳丘の復元モデルを作成。
- 次に周溝に水が流れるように勾配をつけた、但し周溝部分は発掘範囲外に当り実データは一部の利用したが無理であった。そこで、地形より周溝左から時計周りに水が流れ右側で流れ落ちるように想定した。
- 前庭付近では周溝とつじつまが合うように等高線をみながら水が石室方向へ流れない様に単点データの高さを処理。簡易的な３次元設計の利用を試みた。これも発掘データは無く実データを利用していない。
- 周溝より外側は復元するにはデータが少なく、現地形や発掘データより想定したイメージ図である。最終的には発掘時に撮影した池田山をフォトレタッチソフトを利用し現在の構造物（鉄塔・家）などを消した写真と合成した。古墳の位置と石室の向きは現地にほぼ合わせてある。

３）天井石実測ＣＧ

計測された天井石の３次元データを基に輪切りデータを作成しＣＧを作成。このＣＧと透かし処理した2)の墳丘復元ＣＧとを合成したＣＧに利用し構造を把握できるようにした。

４）玄室俯瞰図(未使用)

奥壁・敷石・右基底石を左30度、仰角－15度で俯瞰視。３次元CADでモデリングしながら最適な角度を探し視点を決定した。３次元計測データを利用した俯瞰図が利用された報告書としては「山城再興九谷窯跡」加賀市埋蔵文化財報告書第35集に古墳ではないが利用されている。

５）玄門立柱石及びまぐさ石の復元（未使用）

３次元CADを利用し、傾いている玄門立柱石をセンター方向上に見ながら傾きを補正その上にまぐさ石が積まれていたように位置を移動し復元した。石を取り除く過程で計測されていない石が存在し完璧な復元とはいえず報告書には利用されなかった。

最後に、南高野古墳は、地震などによる影響によって大半の石室石材が崩落していた。そうした悪条件の中では、通常の測量作業に様々な制約があると思われ、３次元計測システムが有効に利用された現場であったといえる。特に天井石を外し裏面計測・壊れた側壁を計測しておいてからの図面作成には有効であったと思う。

また、本墳のように道路改良工事に伴って消滅してしまう石室のデータが、発掘前の立体的な状態で記録されている事は大変有意義なことだと思う。

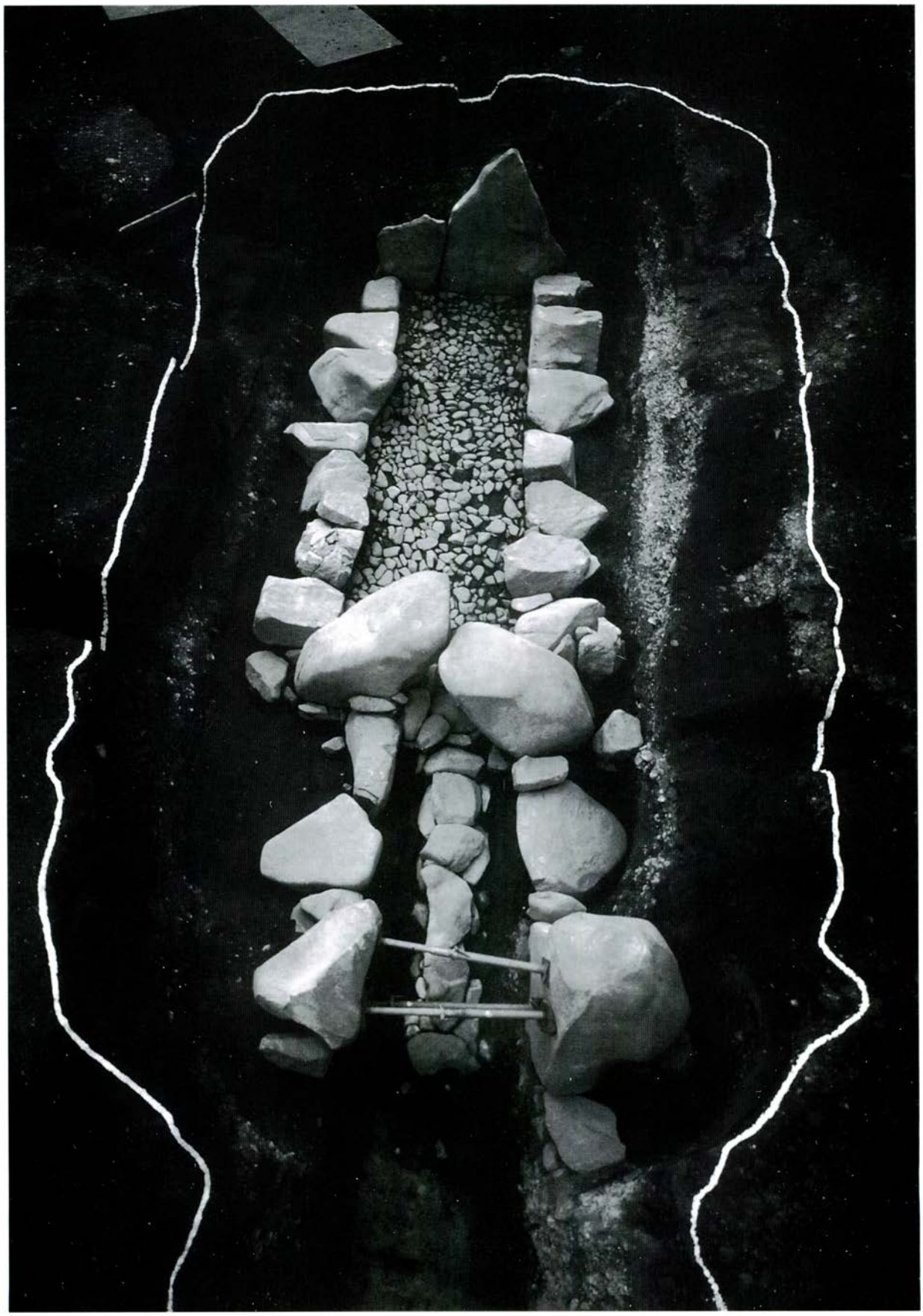
写真　３次元測量の様子

参考文献

- 野村忠夫　1980　『古代の美濃』
- 井上喜久男　1992　『尾張陶磁』
- 中世土器研究会編　1995　『概説中世の土器・陶磁器』
- 山田邦和　1998　『須恵器生産の研究』
- 美濃古墳文化研究会編　1992　『美濃の後期古墳』
- 中村　浩　1993　『考古学ライブラリー5　須恵器』
- 白石太一郎　1985　『考古学シリーズ19　古墳の知識　墳丘と内部構造』
- 玉口時雄・小金井　靖　1984　『考古学シリーズ17　土師器・須恵器の知識』
- 潮見　浩　1988　『図解　技術の考古学』
- 森　郁夫　1983　『瓦と古代寺院』
- 中村　浩　1981　『須恵器大成』
- 岐阜県　1995『岐阜県の活断層』
- 『古代の土器5－1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』1997　古代の土器研究会
- 中村　浩 編　1998　『古墳出土須恵器集成　第1巻近畿編1』
- 中村　浩 編　1998　『古墳出土須恵器集成　第2巻近畿編2』
- 中村　浩 編　1998　『古墳出土須恵器集成　第3巻東海編1』
- 『宇田遺跡発掘調査報告書』1975　岐阜市教育委員会
- 『廻間遺跡』1990　財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
- 『山中遺跡』 1992　財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
- 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』1993　豊川市教育委員会
- 『松河戸遺跡』1994　財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
- 『朝日遺跡Ⅴ』1994　財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
- 『陽徳寺裏山古墳群』1976　岐阜県中小企業福祉センター・関市教育委員会
- 『岐阜市北山3号墳』1998　（財）岐阜市教育文化振興事業団
- 『六之井深池遺跡発掘調査報告書』1997　池田町教育委員会
- 『舟子古窯跡―灰原の調査―』1994　池田町教育委員会
- 『池ノ表古墳』1995　豊田市教育委員会
- 『緑山古墳群』1987　総社市文化振興財団
- 『塚穴古墳群発掘調査報告書』1993　岐阜県美濃市教育委員会
- 『井田川茶臼古墳』1988　三重県教育委員会
- 『物集女車塚』1988　向日市教育委員会
- 『国立歴史民俗博物館研究報告第65集　千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告書』1996　国立歴史民俗博物館
- 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996　『第4回東海考古学フォーラム　鍋と甕のデザイン』
- 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　1998　『第6回東海考古学フォーラム　土器・墓が語

る』
- 図録『黄金に魅せられた倭人たち』1996　島根県八雲立つ風土記の丘資料館
- 『シンポジウム美濃の後期古墳』1991　岐阜市歴史博物館
- 図録『古代の造形美　装飾須恵器展』1995　愛知県陶磁資料館
- 成瀬正勝　1998　「美濃における後期群集墳形成の一契機―片袖式石室を中心に―」『岐阜史学』第93号
- 関　義則　1986　「古墳時代の後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号
- 杉山秀宏　「古墳時代の鉄鏃」『橿原考古学研究所論集8』
- 八賀　晋　1998　「須恵器制作の一視点―ロクロ成形と道き台―」『楢崎彰一先生古希記念論文集』
- 岡安光彦　1984　「いわゆる素環の轡について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号
- 臼杵　勲　1984　「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号
- 宮代栄一　1996　「古墳時代の金属装鞍の研究―鉄地金銅装鞍を中心に―」『日本考古学』第3号
- 宮内明子　1998　「近江における古墳出土の鉄鏃について」『滋賀考古』第20号
- 石黒立人　1988　「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点―弥生後期の土器様相を中心として―」『古代』第86号
- 横幕大祐　1997　「いわゆる外護列石について」『美濃の考古学』第2号
- 渡辺博人　1996　「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋坏の型式設定とその編年試案―」『美濃の考古学』創刊号
- 渡辺博人　1997　「美濃における後期古墳時代の地域相(1)」『美濃の考古学』第2号
- 小野木　学　1996　「角之御前遺跡出土の中世遺物について」『美濃の考古学』創刊号
- 小野木　学　1997　「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号
- 井川祥子　1997　「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿―中濃地方を中心として―」『美濃の考古学』第2号
- 森岡秀人　1983　「追葬と棺体配置―後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察―」『考古学論攷』
- 沢村治郎　1999　「須恵器大型器台考」『滋賀史学会誌』第11号
- 澤村雄一郎　1996　『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』南山大学大学院考古学研究室
- 村上　隆　「古代金工における金属接合技術―銀鑞による「鑞接」技法を中心に―」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　文化財論叢Ⅱ』
- 水野敏典　1993　「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬―長頸鏃の形態変遷と計量の相関に見る武器供給から―」『古代』第96号

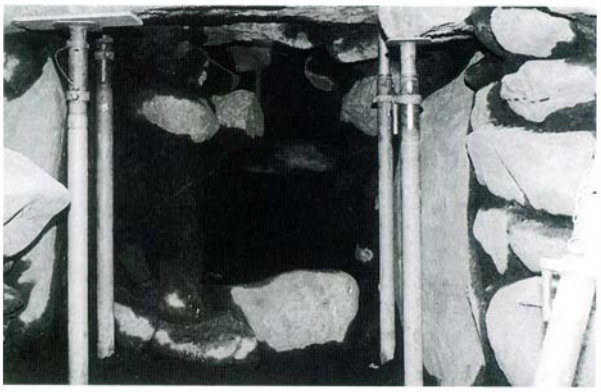
図　　版



南高野古墳石室全景

図版 2

内側に押し出された両側壁石材（奥壁側より）

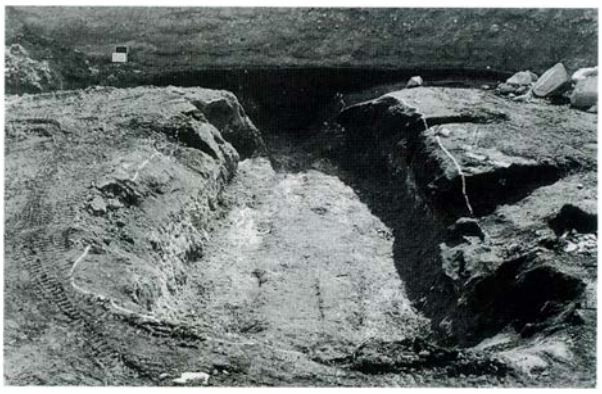


崩落した羨道の石材（前庭より）

奥壁右側の掘り方と盛土状況

奥壁左側の掘り方と盛土状況

墳丘（東より）



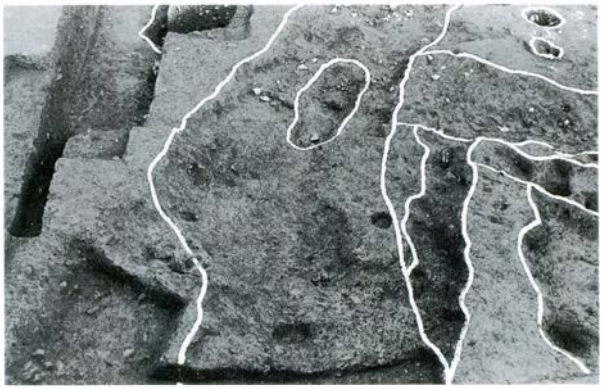
墓坑完掘状況（西より）

遺物出土状況（玄門右立柱石前）

遺物出土状況（奥壁前）

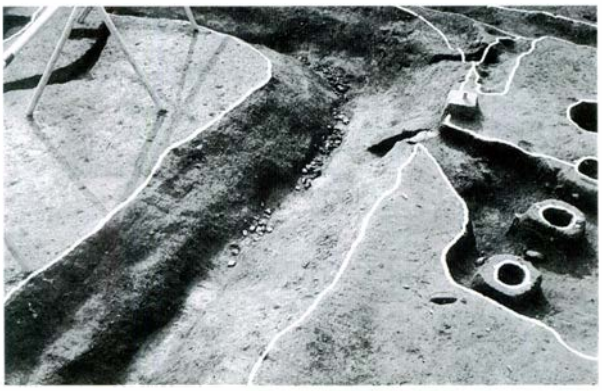
南高野古墳遺構・遺物

ＳＤ１　礫検出状況（南より）



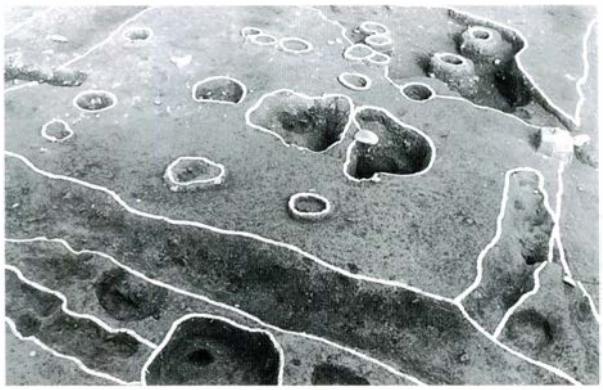
ＳＤ１　完掘状況（南より）

ＳＤ２　礫検出状況（西より）

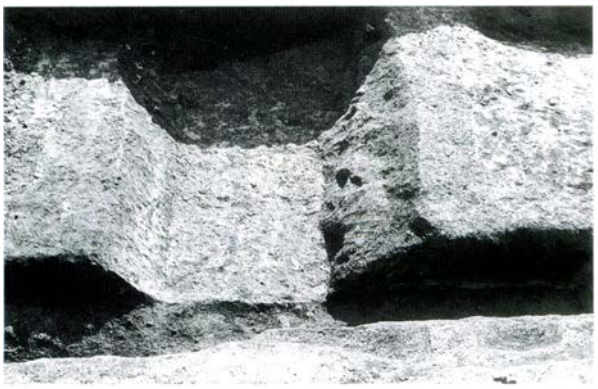


ＳＤ２　完掘状況（北より）

ＳＤ２　遺物出土状況



ＳＫ２・３・５　完掘状況（南より）

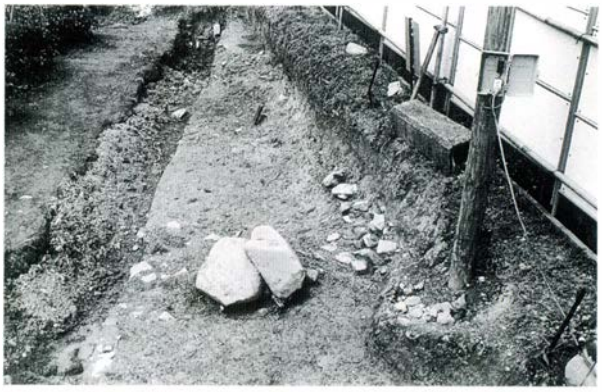


ＳＤ16　完掘状況（北より）

ＳＤ16　断面（南より）

二ノ井遺跡遺構・遺物

市場遺跡調査前風景（西より）



Ａ区　完掘状況（東より）

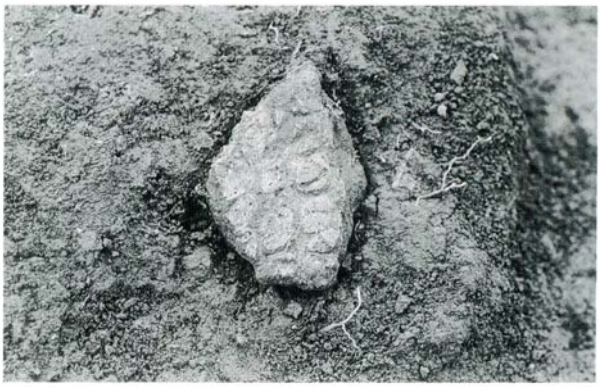
ＳＤ１　検出状況（南より）

ピット群　完掘状況（南西より）

ＳＫ２　完掘状況（南より）

ＳＫ４　完掘状況（南より）

ＳＫ５　完掘状況（南より）



遺物出土状況

市場遺跡遺構・遺物

南高野古墳遺物(1)

6

5

4

7

南高野古墳遺物(2)

11

9

13

8

14

10

南高野古墳遺物（3）

12

18

17

15

16

20

南高野古墳遺物（4）

22

23

19

24

21

26

南高野古墳遺物（5）

25

31

30

27

南高野古墳遺物（6）

29

29

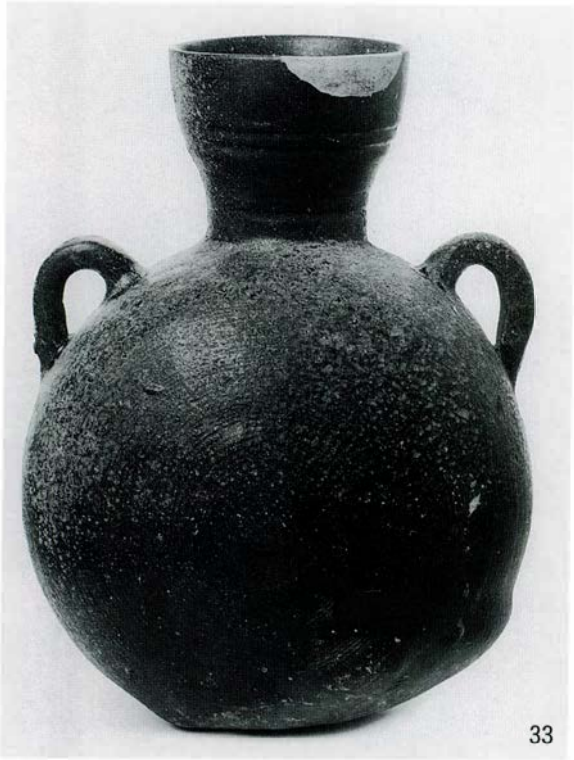
28

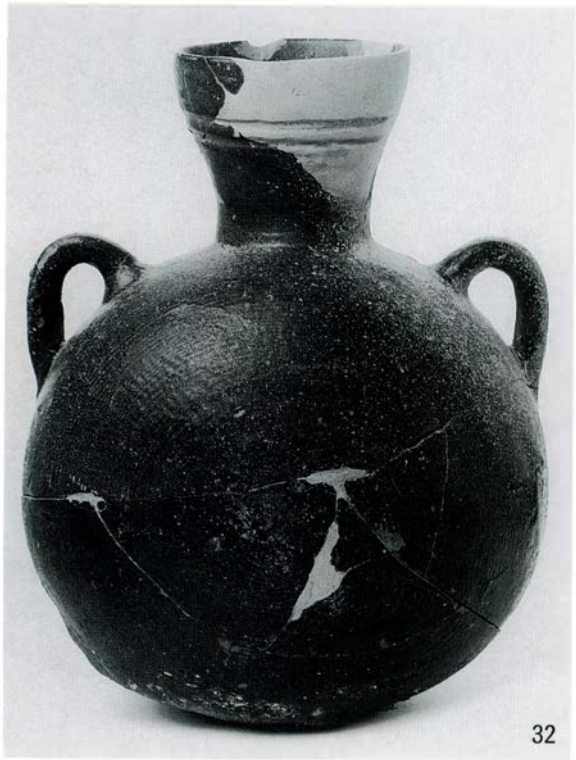
28

55

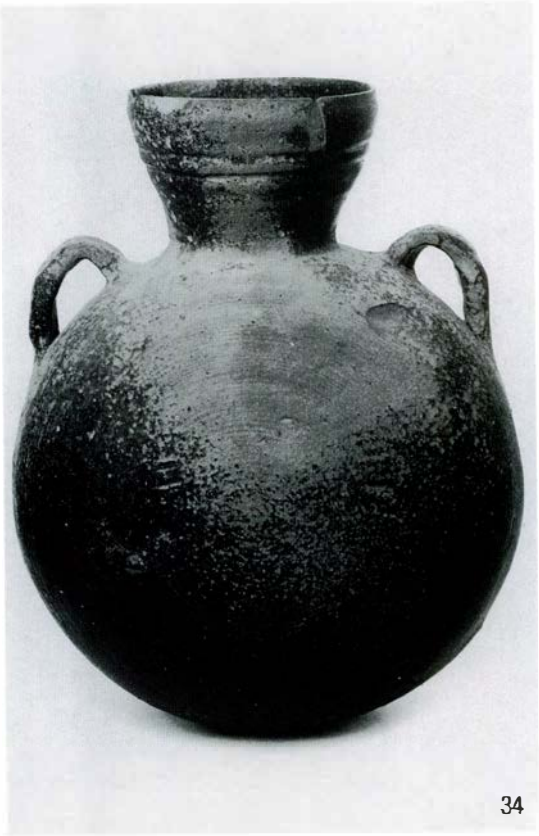
55

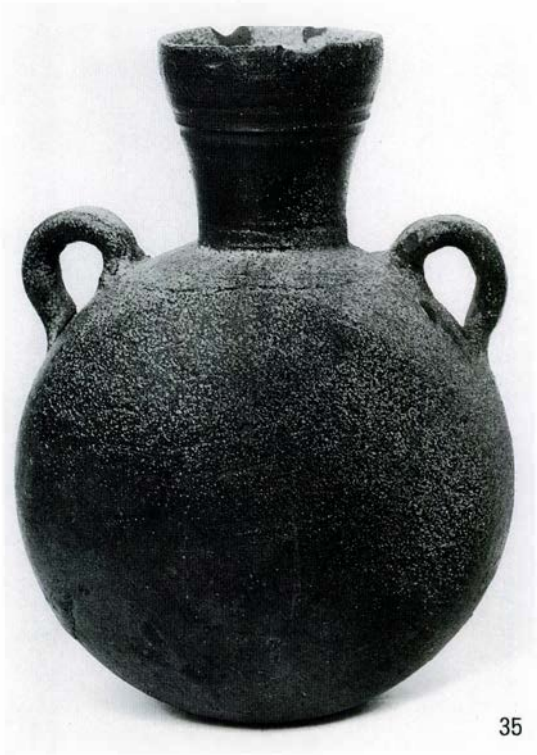
南高野古墳遺物(7)



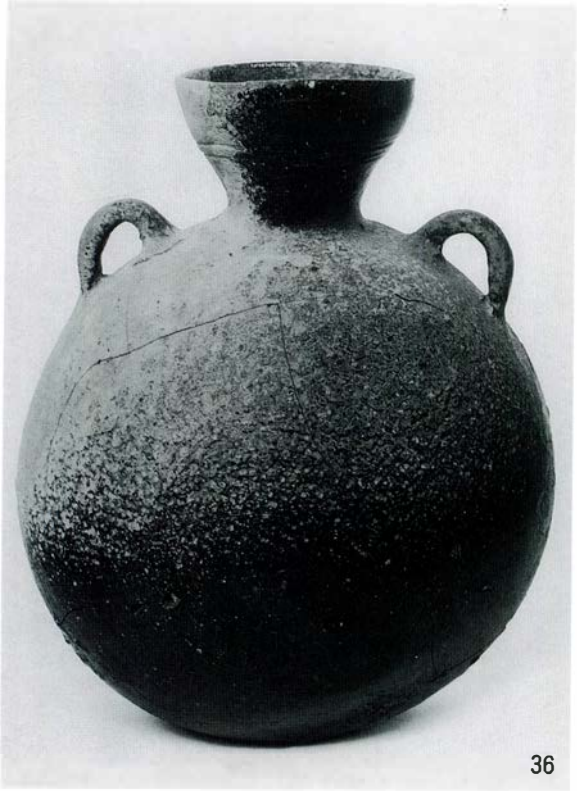


南高野古墳遺物（8）





南高野古墳遺物（９）



南高野古墳遺物(10)

38

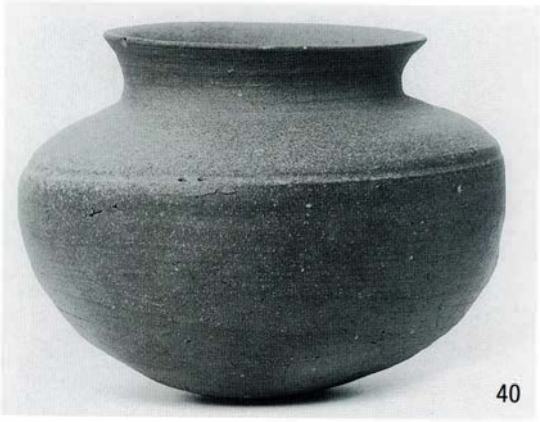
38

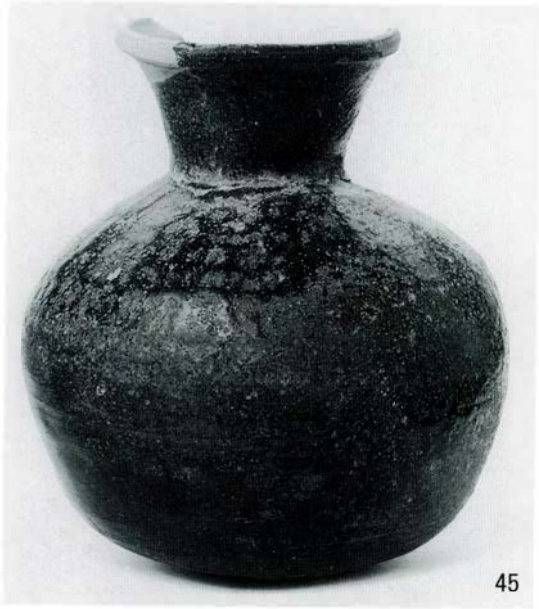
44

43

南高野古墳遺物(11)

39


40


45

41

47

48

南高野古墳遺物(12)

46

49

51

50

52

53

南高野古墳遺物(13)

57

56

54

42

61

64

58

59

南高野古墳遺物(14)

63

62

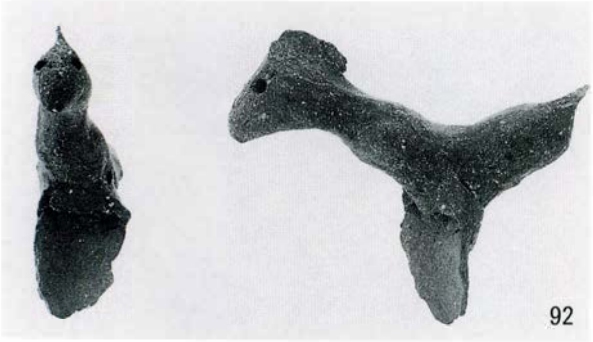
60

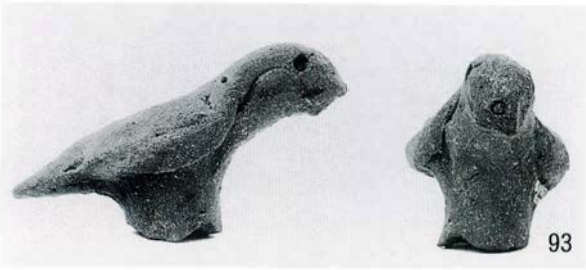
67

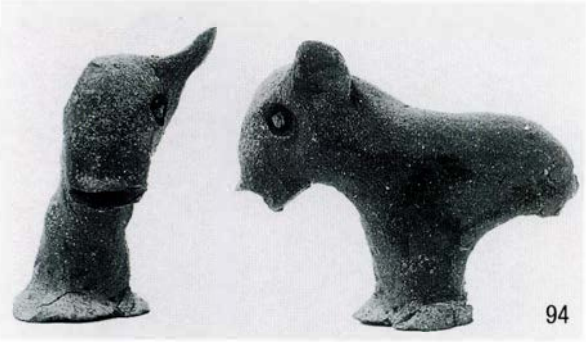
66

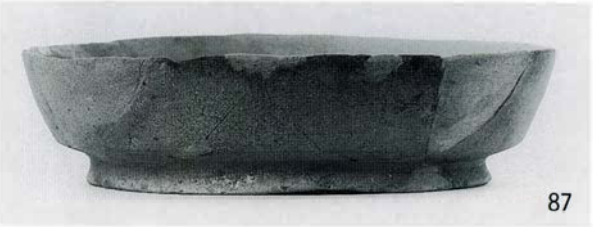
65

南高野古墳遺物(15)





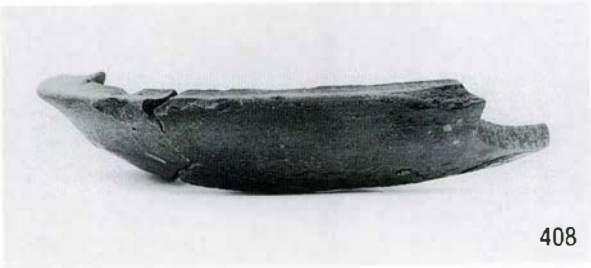




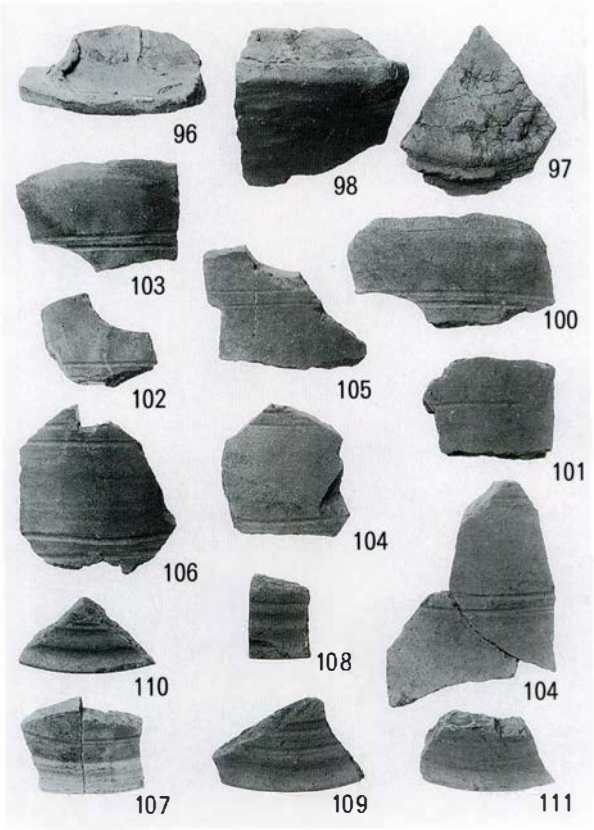
南高野古墳遺物(16)

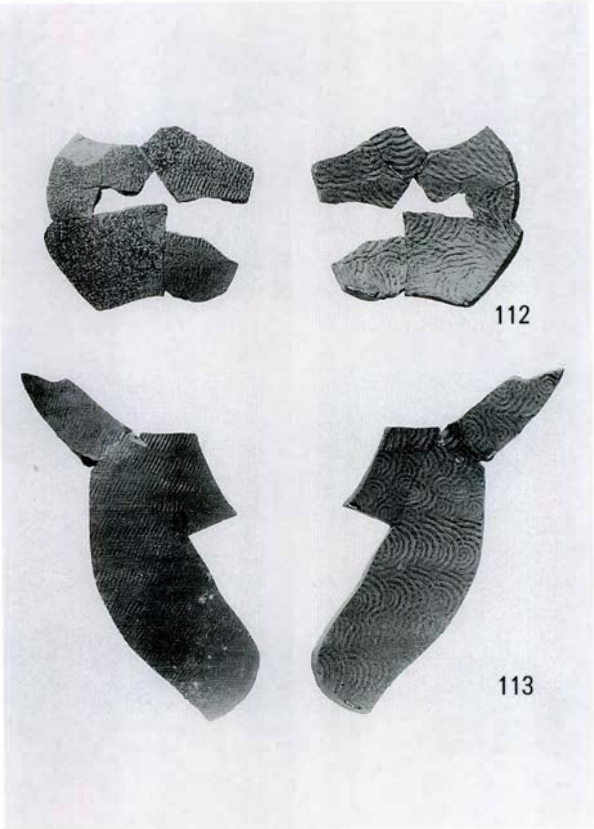
99

99

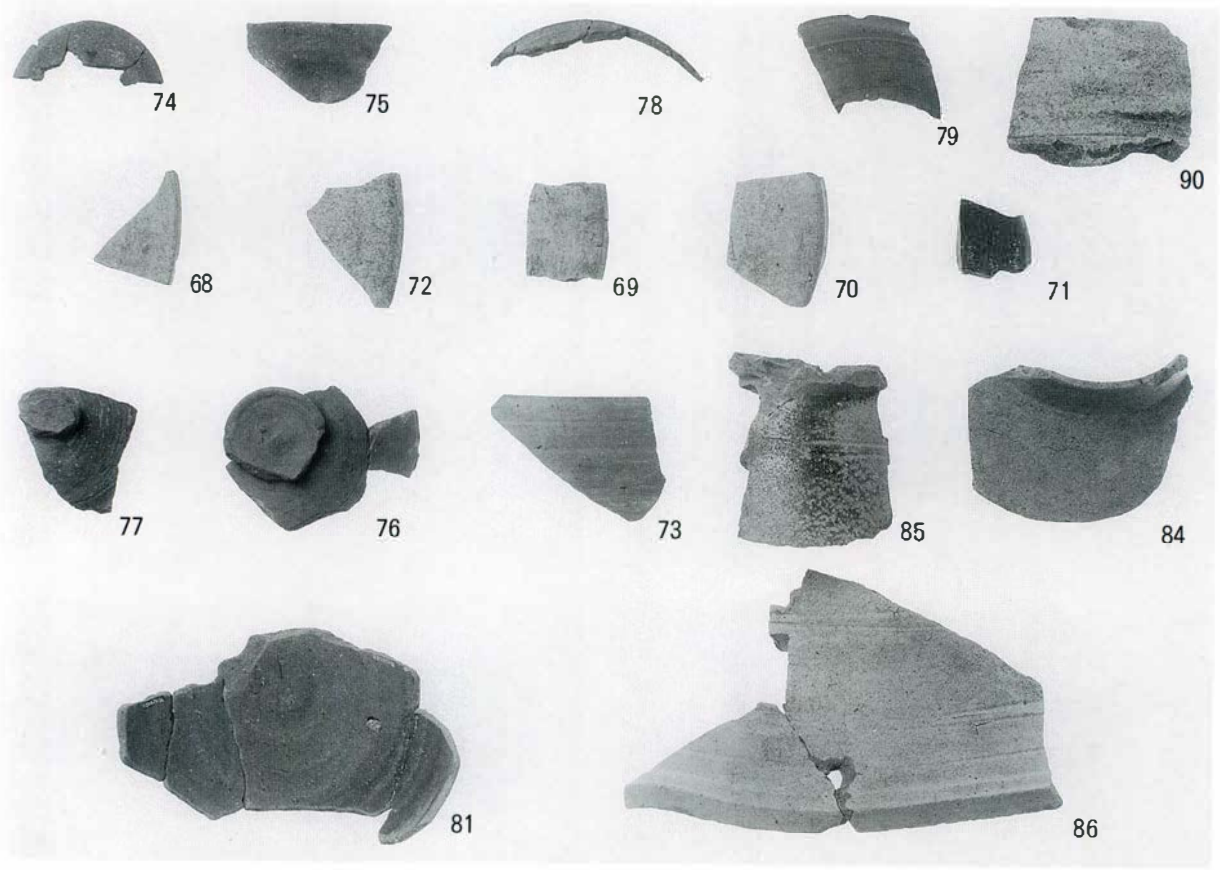

408

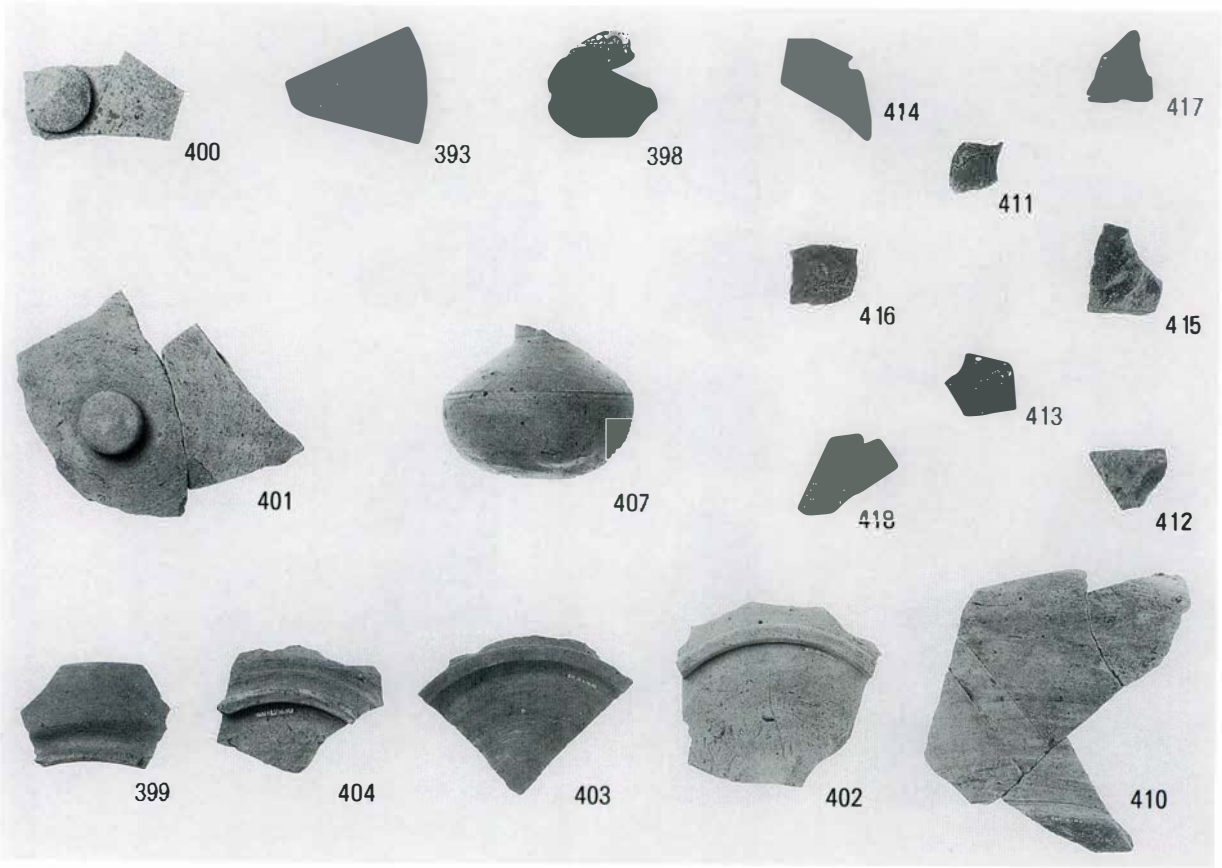
406


96
98
97
103
100
102
105
101
106
104
110
108
104
107
109
111

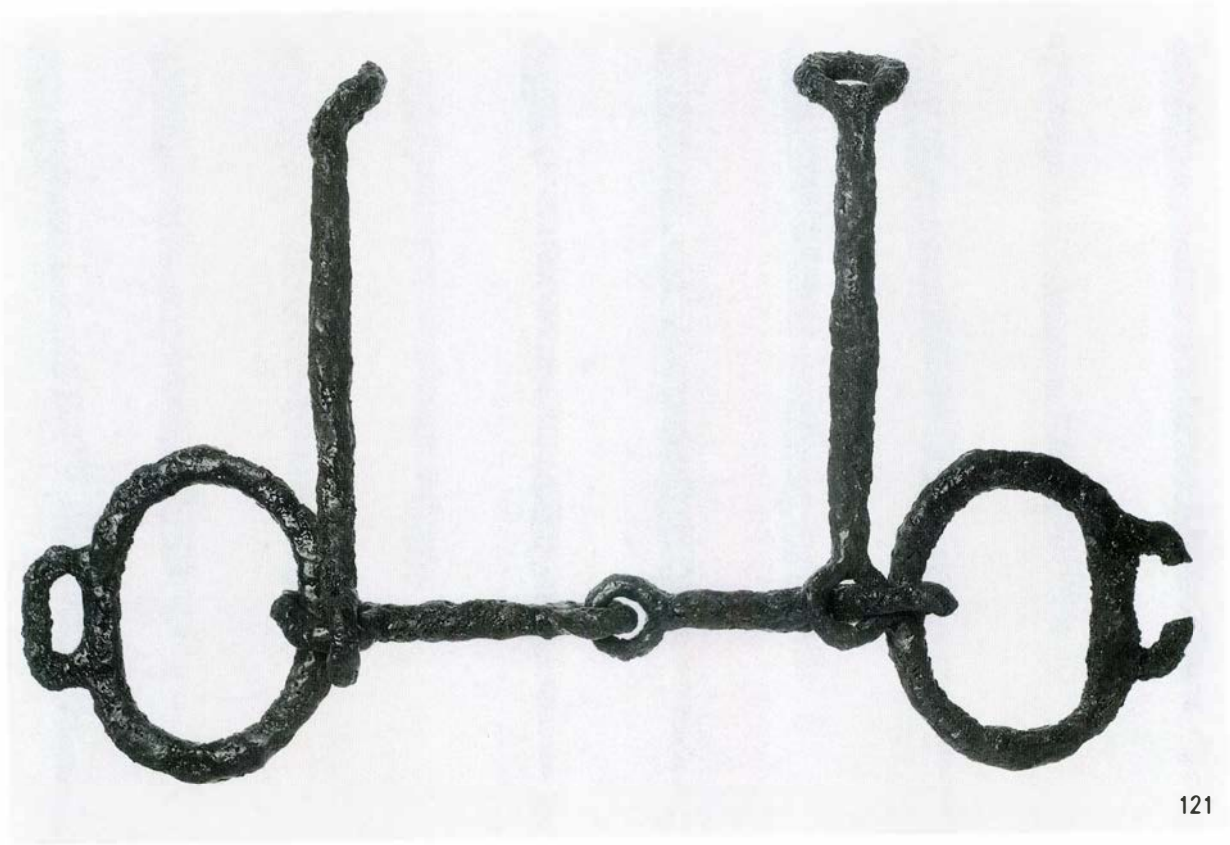

112
113

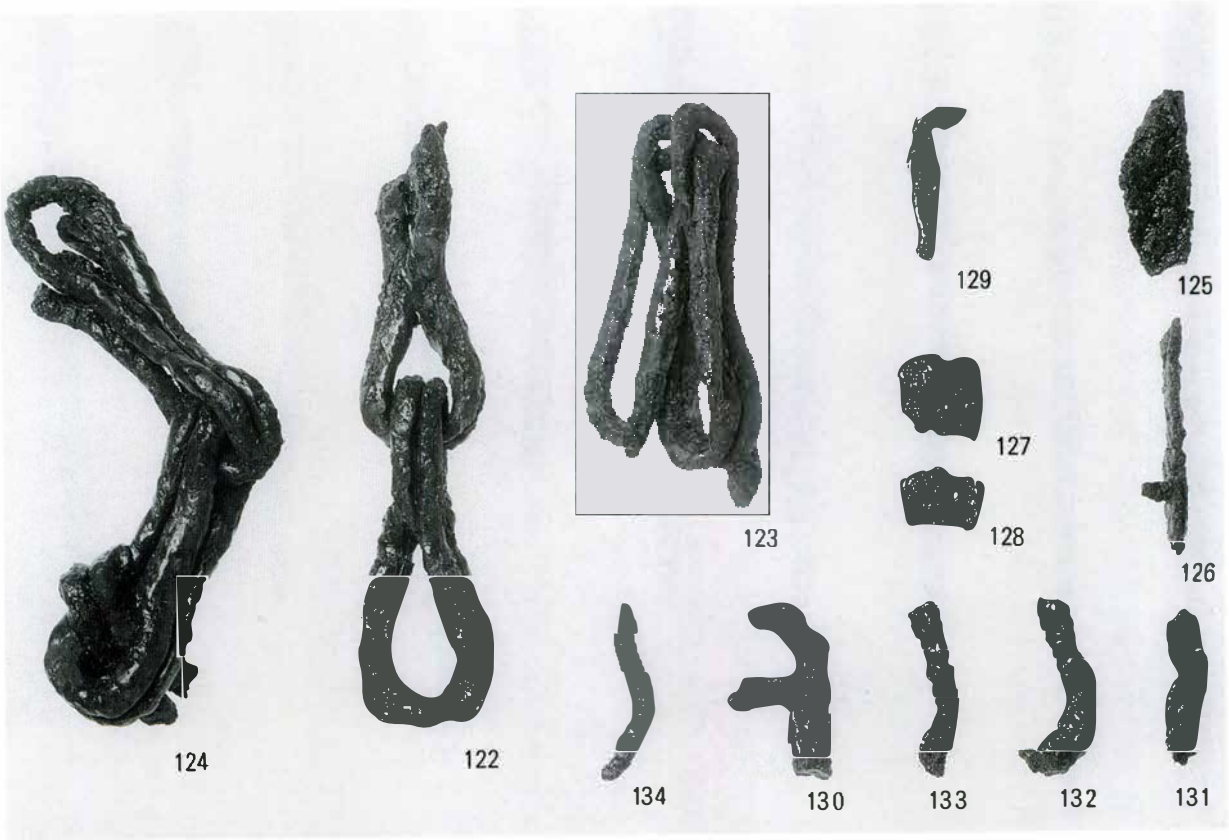
南高野古墳遺物(17)


74
75
78
79
90
68
72
69
70
71
77
76
73
85
84
81
86

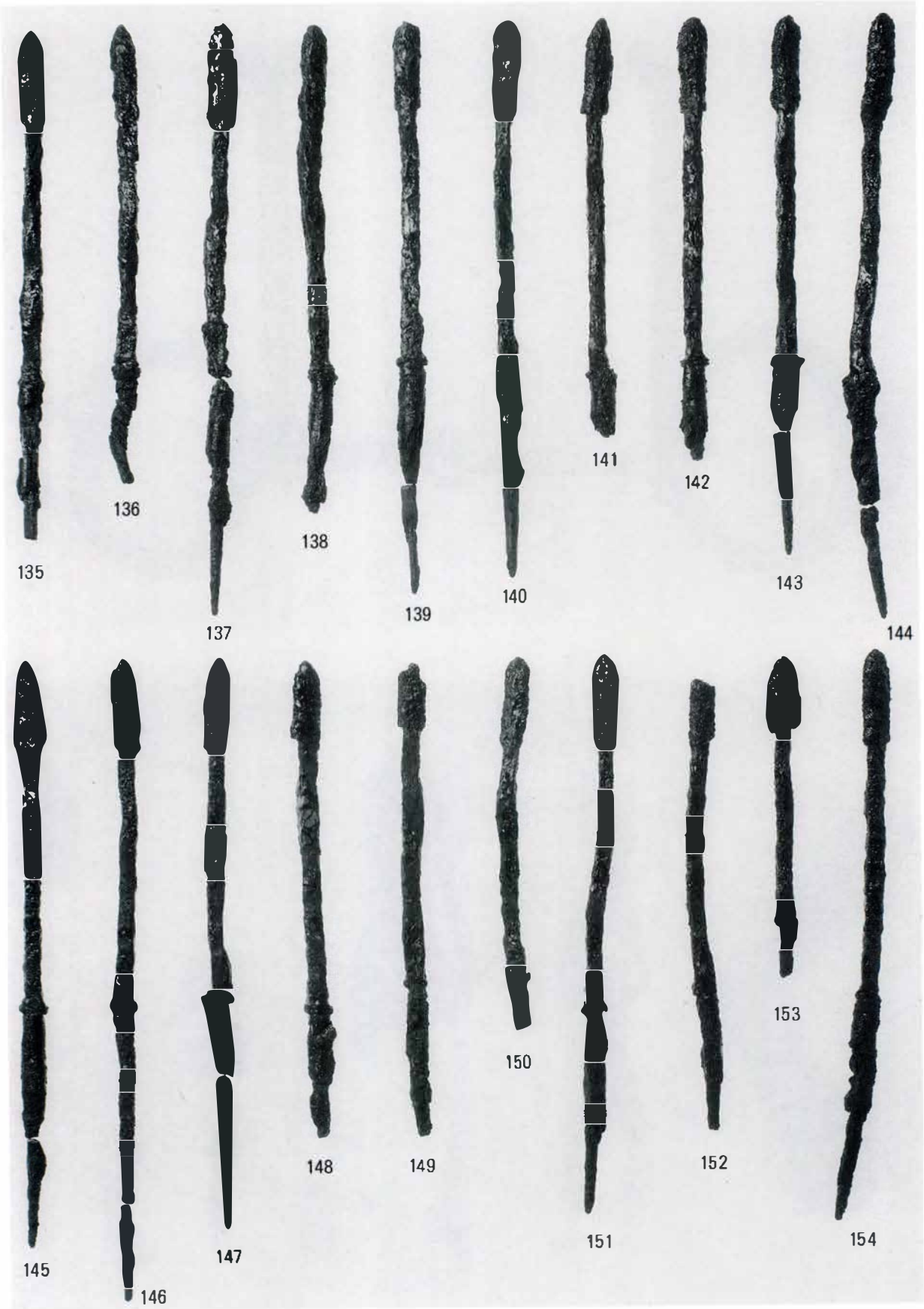

400
393
398
414
417
411
416
415
401
407
413
418
412
399
404
403
402
410

南高野古墳遺物(18)

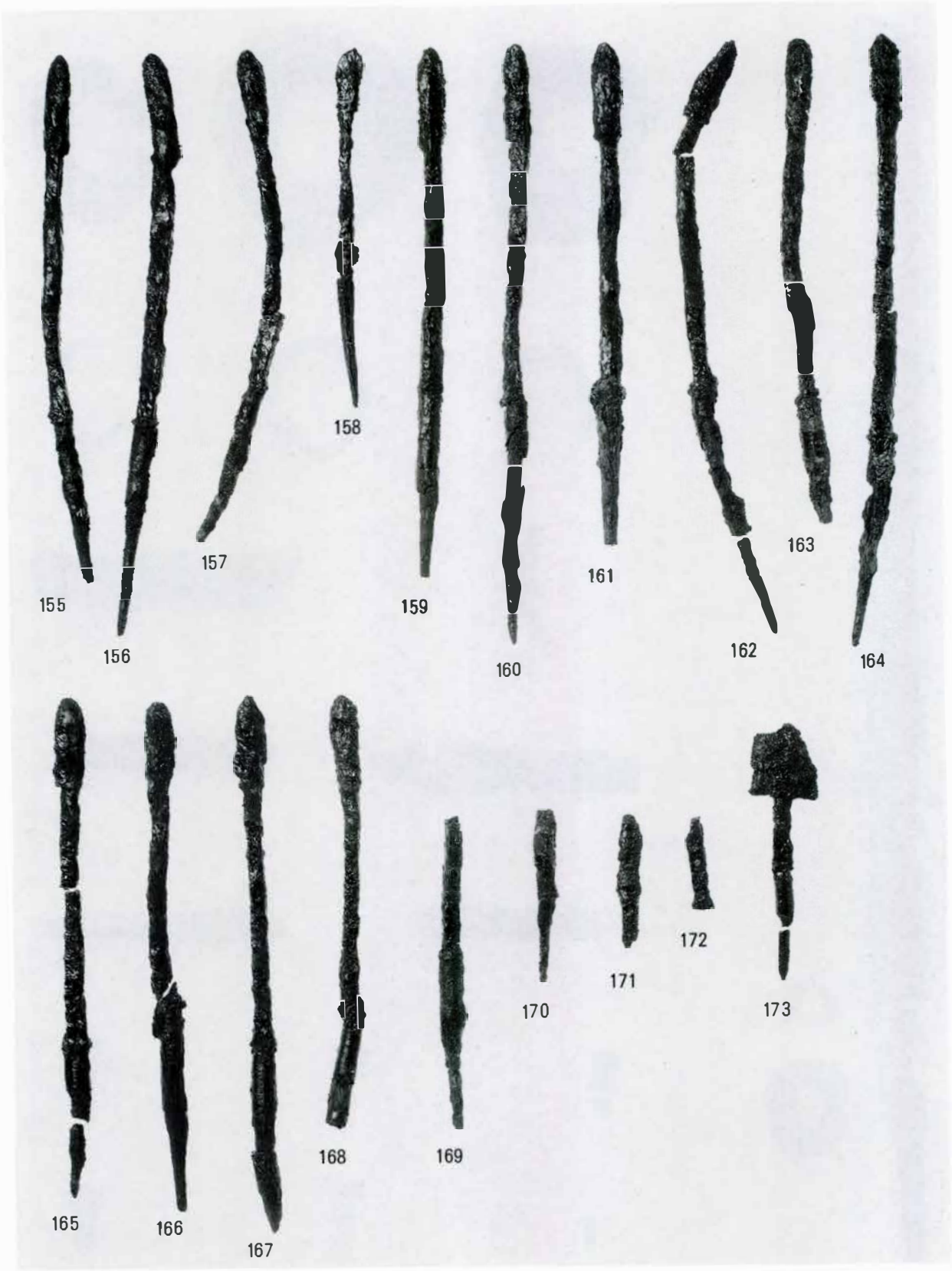




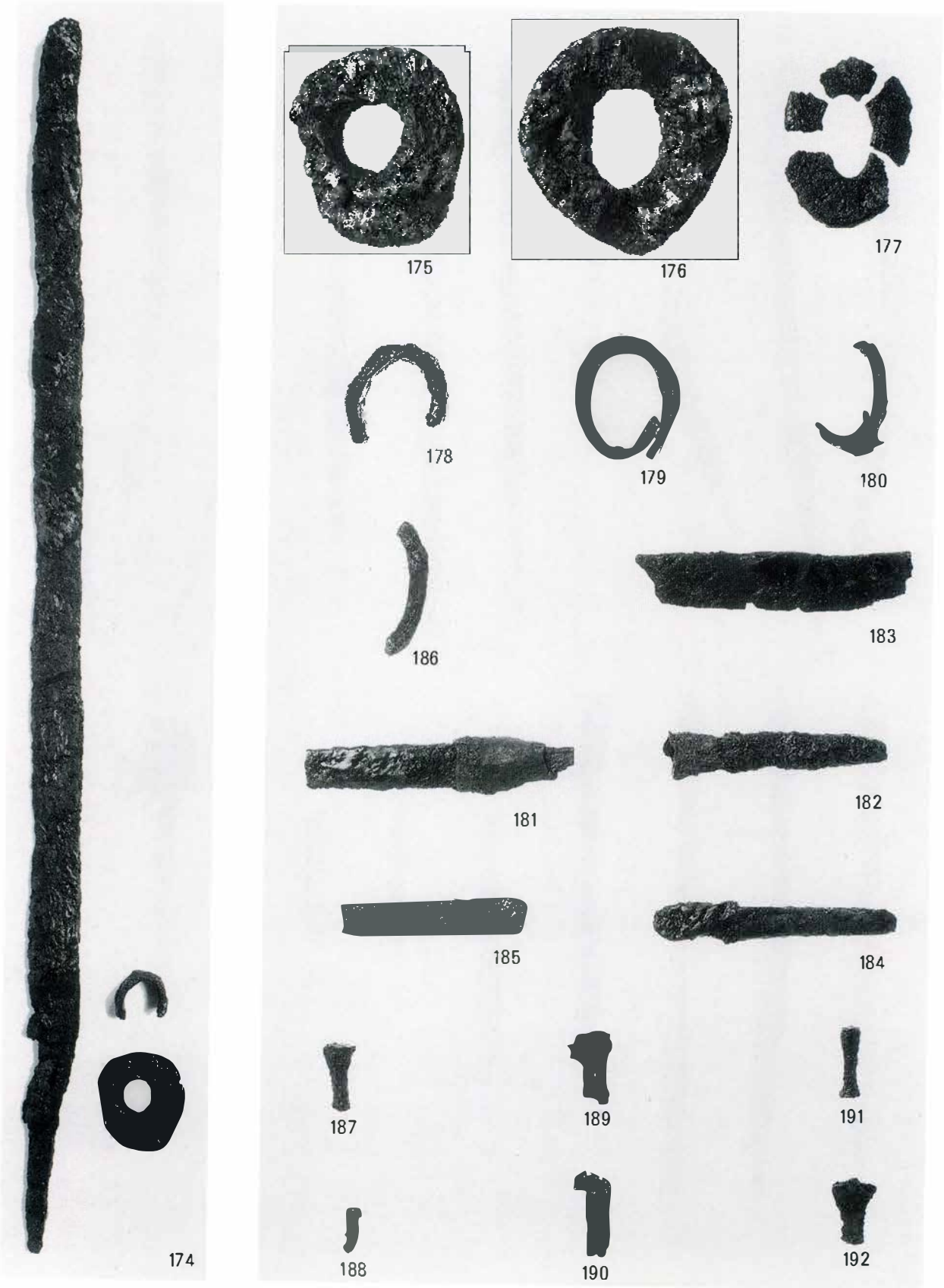
南高野古墳遺物(19)


135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154

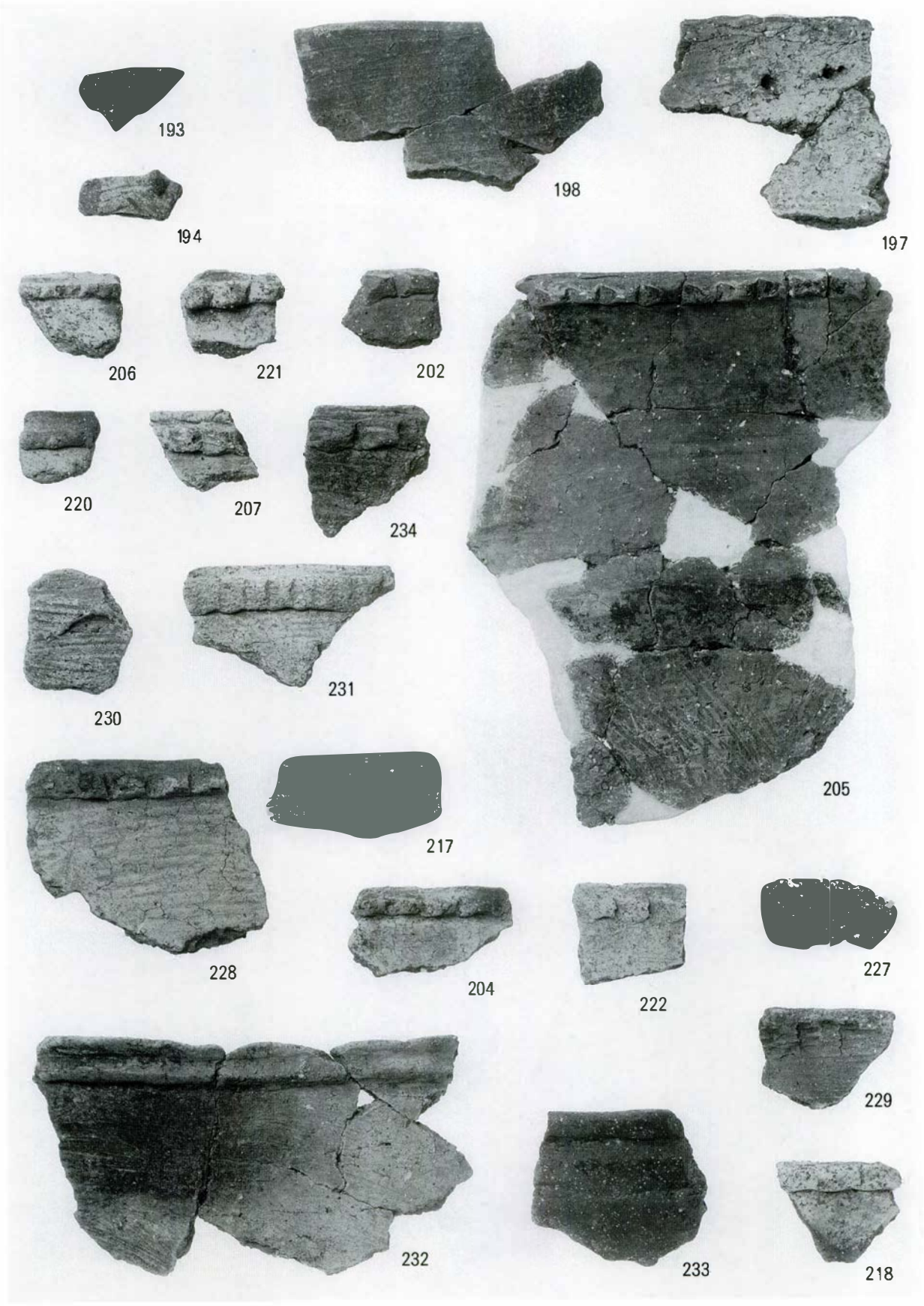
南高野古墳遺物(20)


155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173

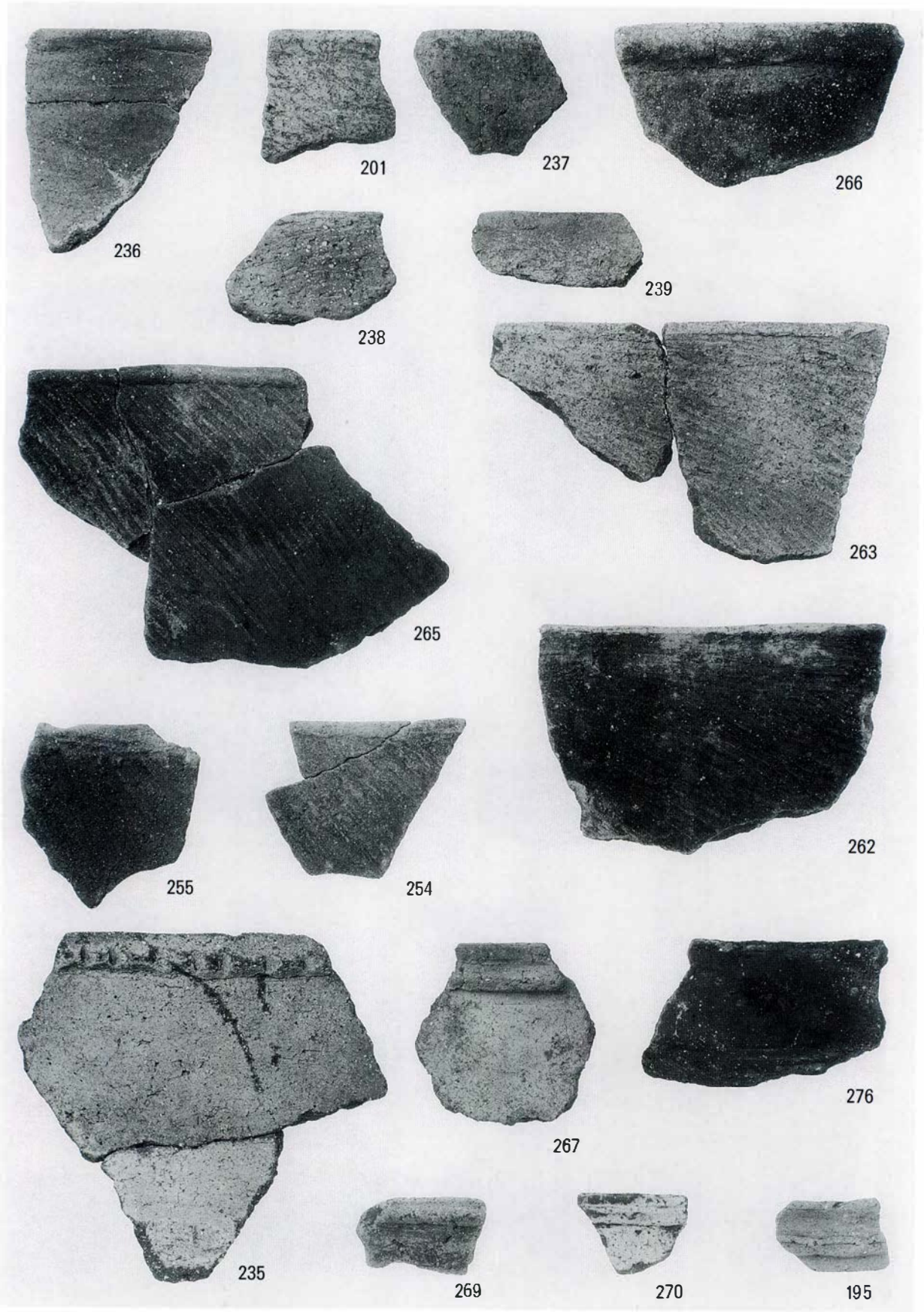
南高野古墳遺物(21)


174
175
176
177
178
179
180
186
183
181
182
185
184
187
189
191
188
190
192

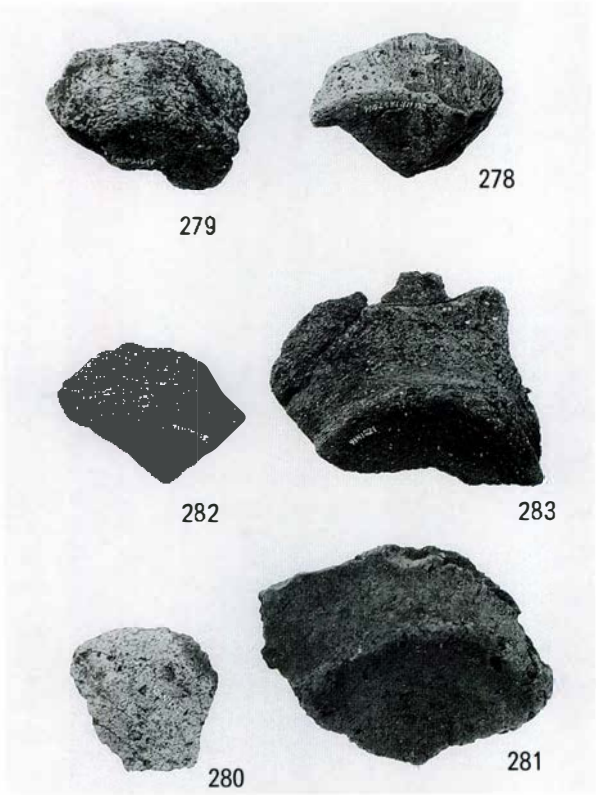
南高野古墳遺物(22)


193
194
198
197
206
221
202
220
207
234
205
230
231
217
228
204
222
227
229
232
233
218

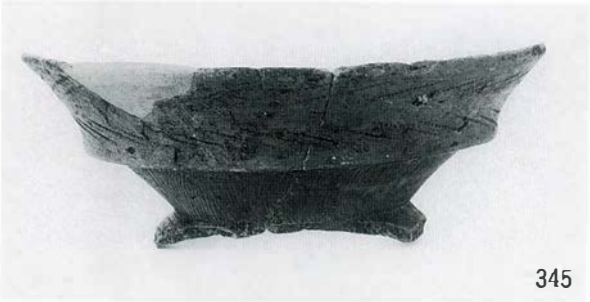
二ノ井遺跡遺物（1）


236
201
237
266
238
239
263
265
262
255
254
276
267
235
269
270
195

二ノ井遺跡遺物（2）

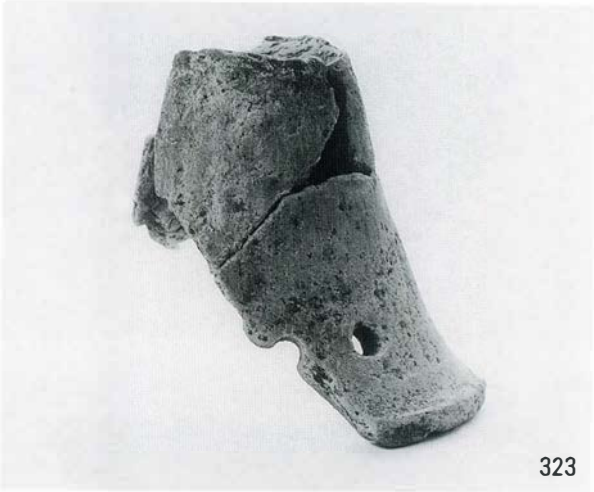


二ノ井遺跡遺物（3）


345

335

334


323

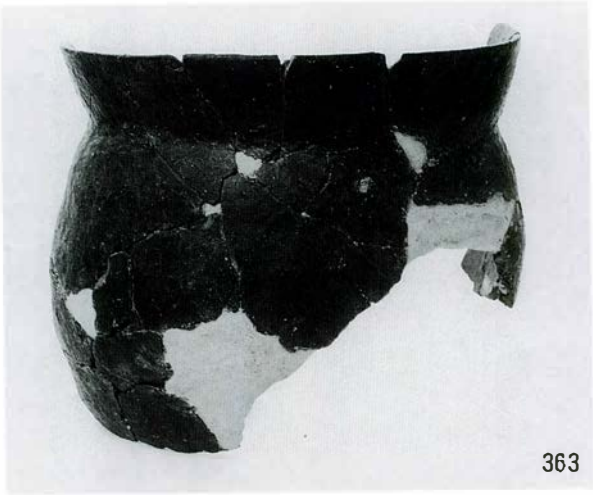
331

330

333

327

二ノ井遺跡遺物（4）

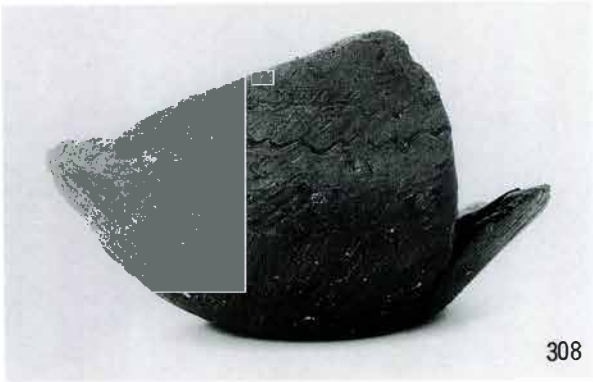

363

312

309

310

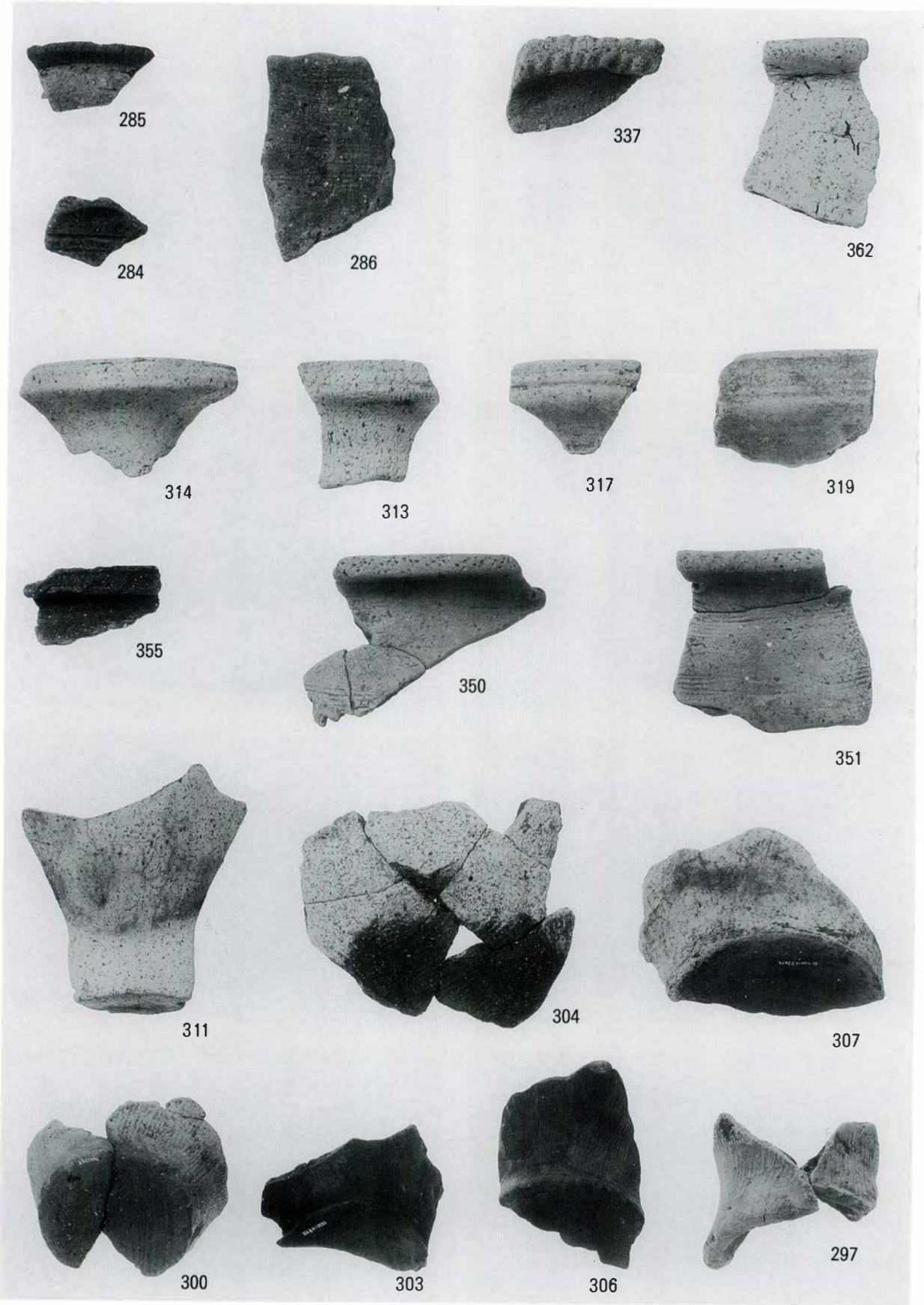
304


308

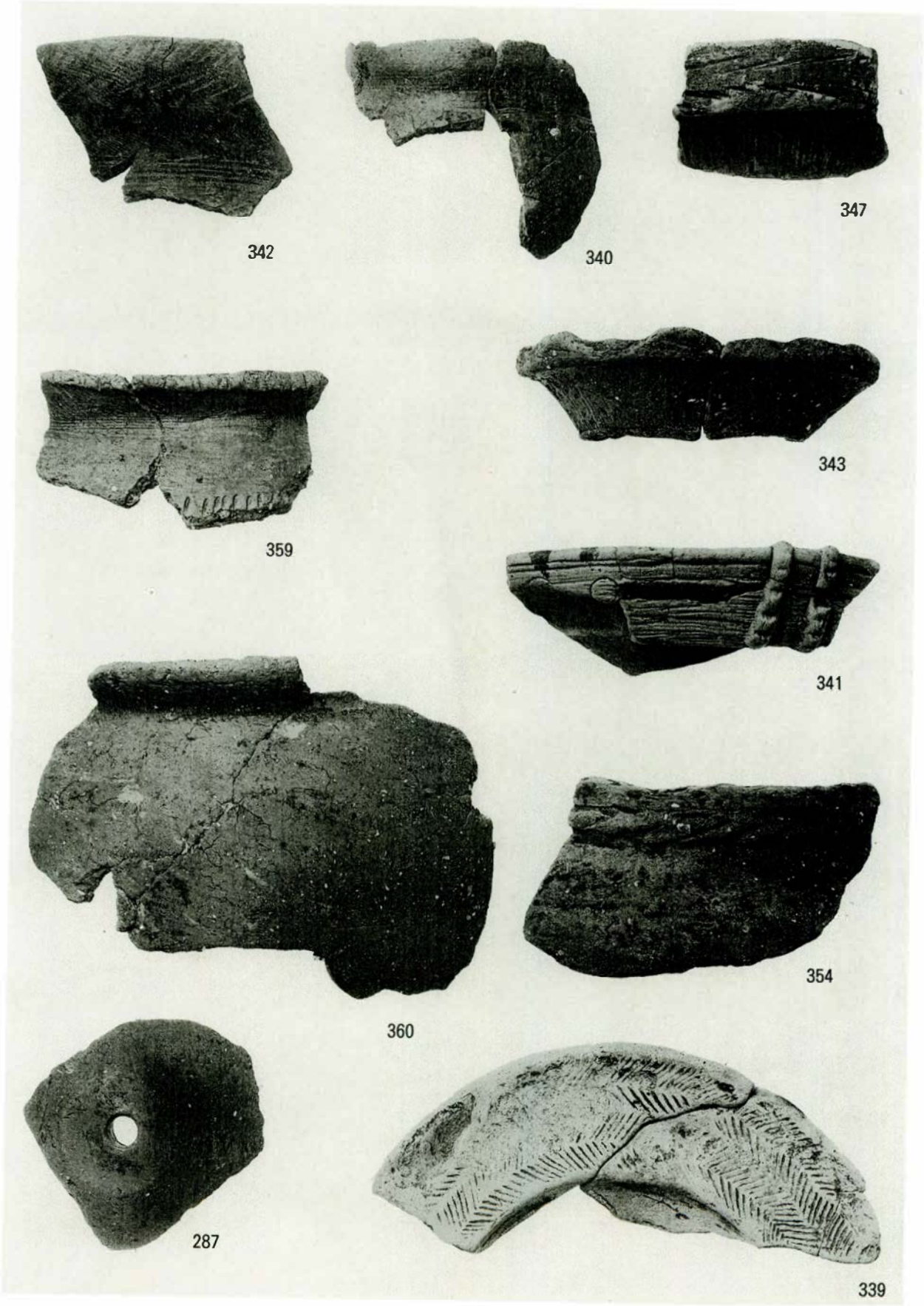
336

380

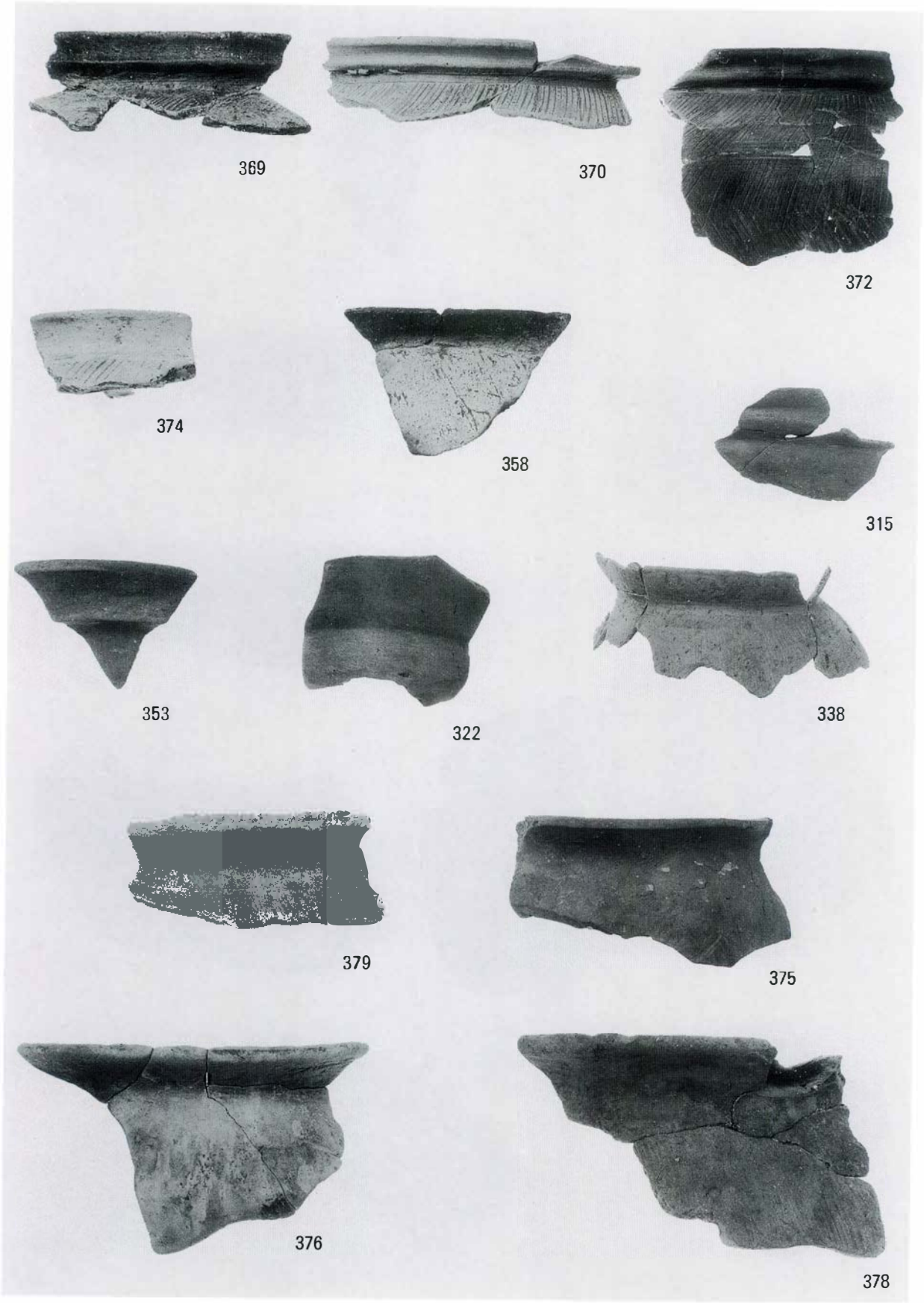
二ノ井遺跡遺物（5）


285
284
286
337
362
314
313
317
319
355
350
351
311
304
307
300
303
306
297

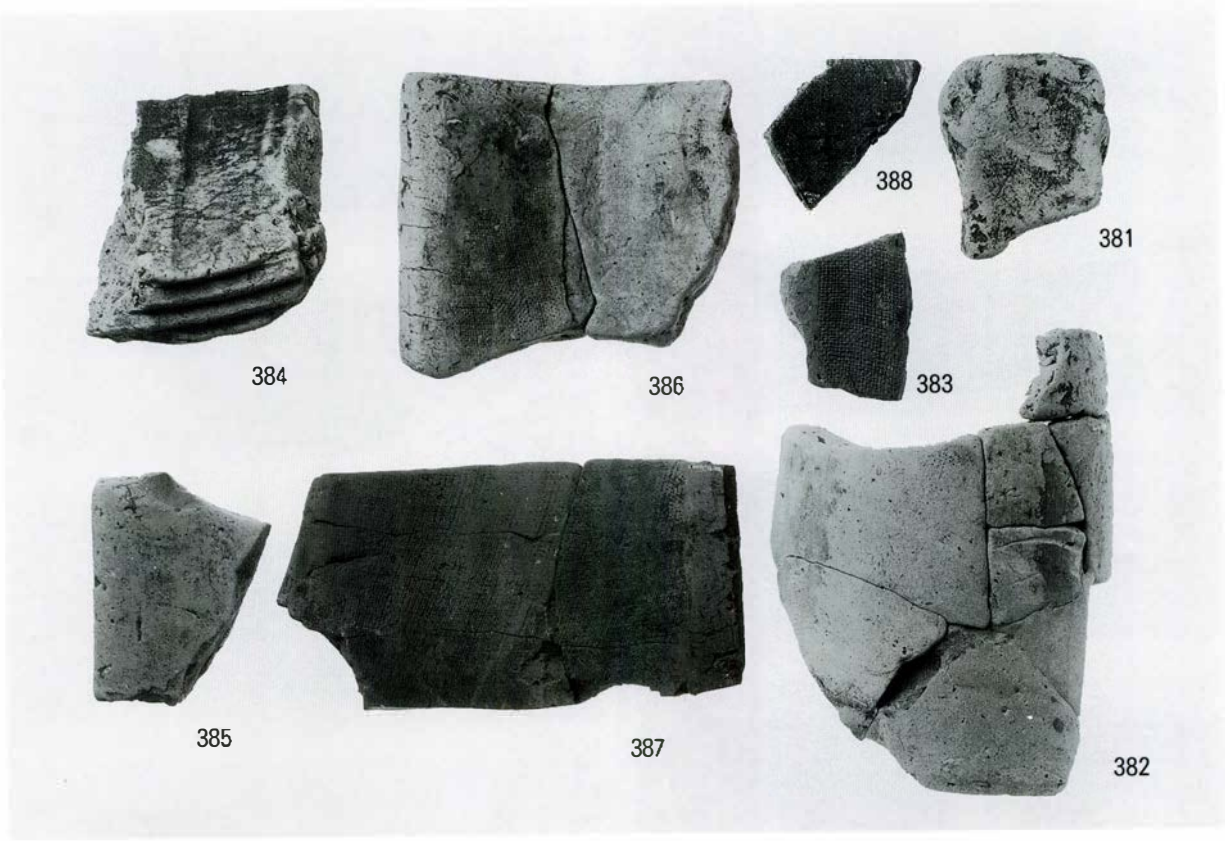
二ノ井遺跡遺物（6）

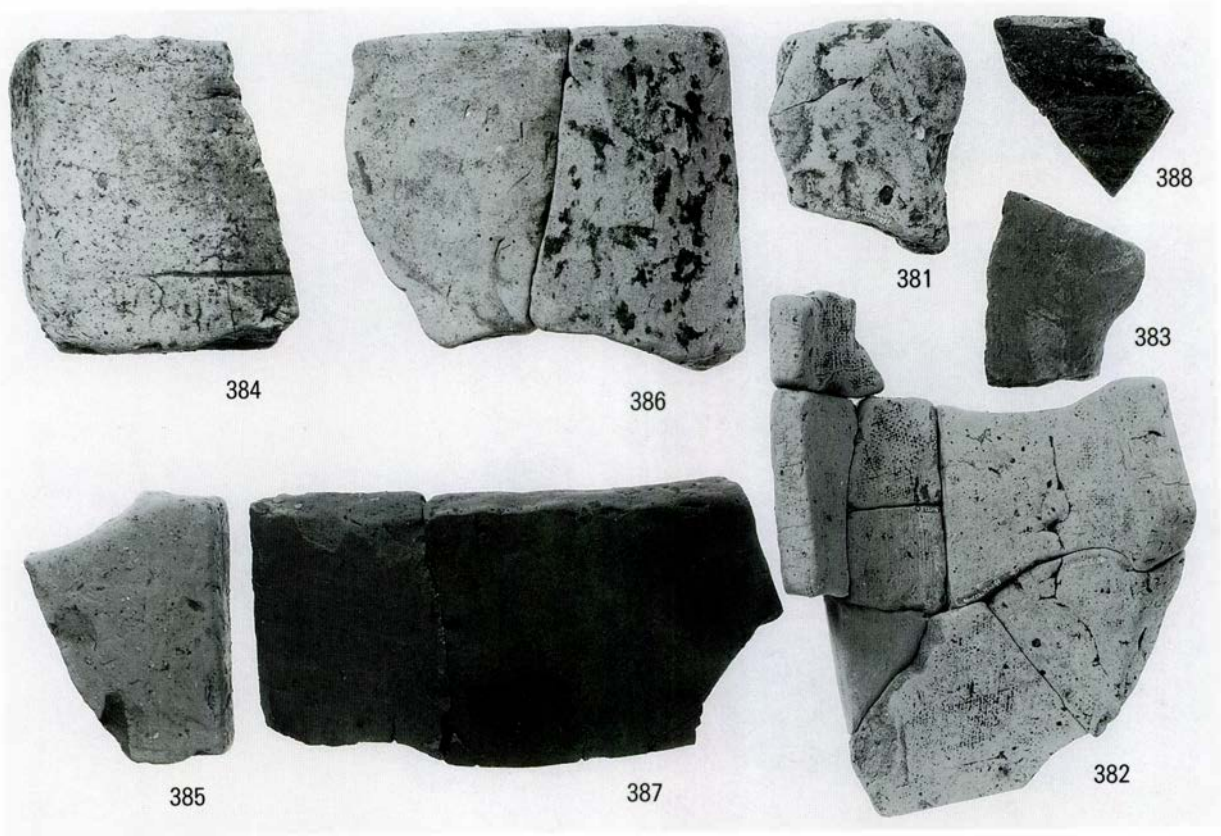


二ノ井遺跡遺物（7）



二ノ井遺跡遺物（8）





二ノ井遺跡遺物（９）

424

433

435

434

431

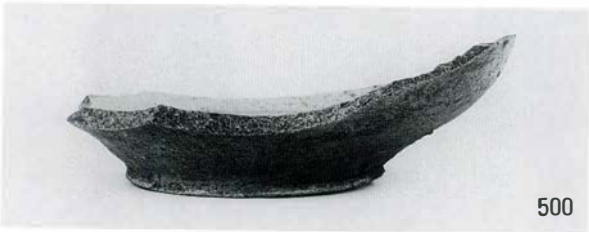
432

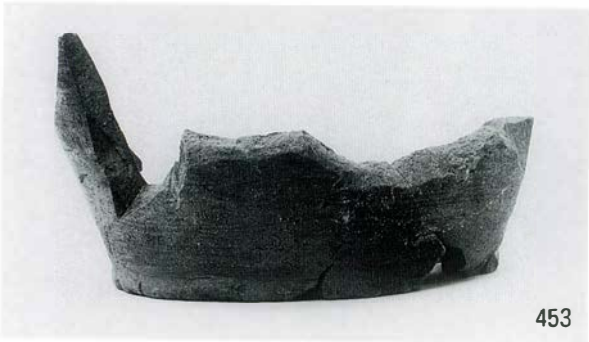
457

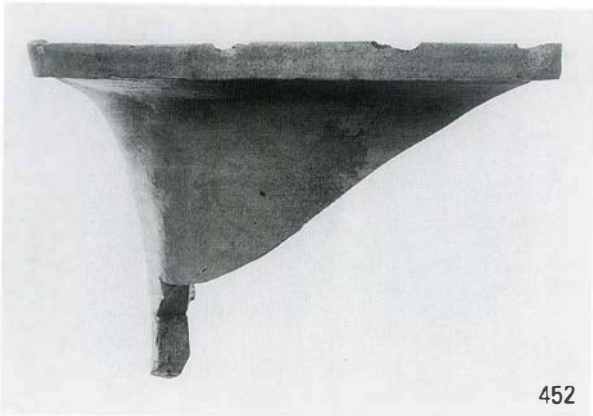
493

458

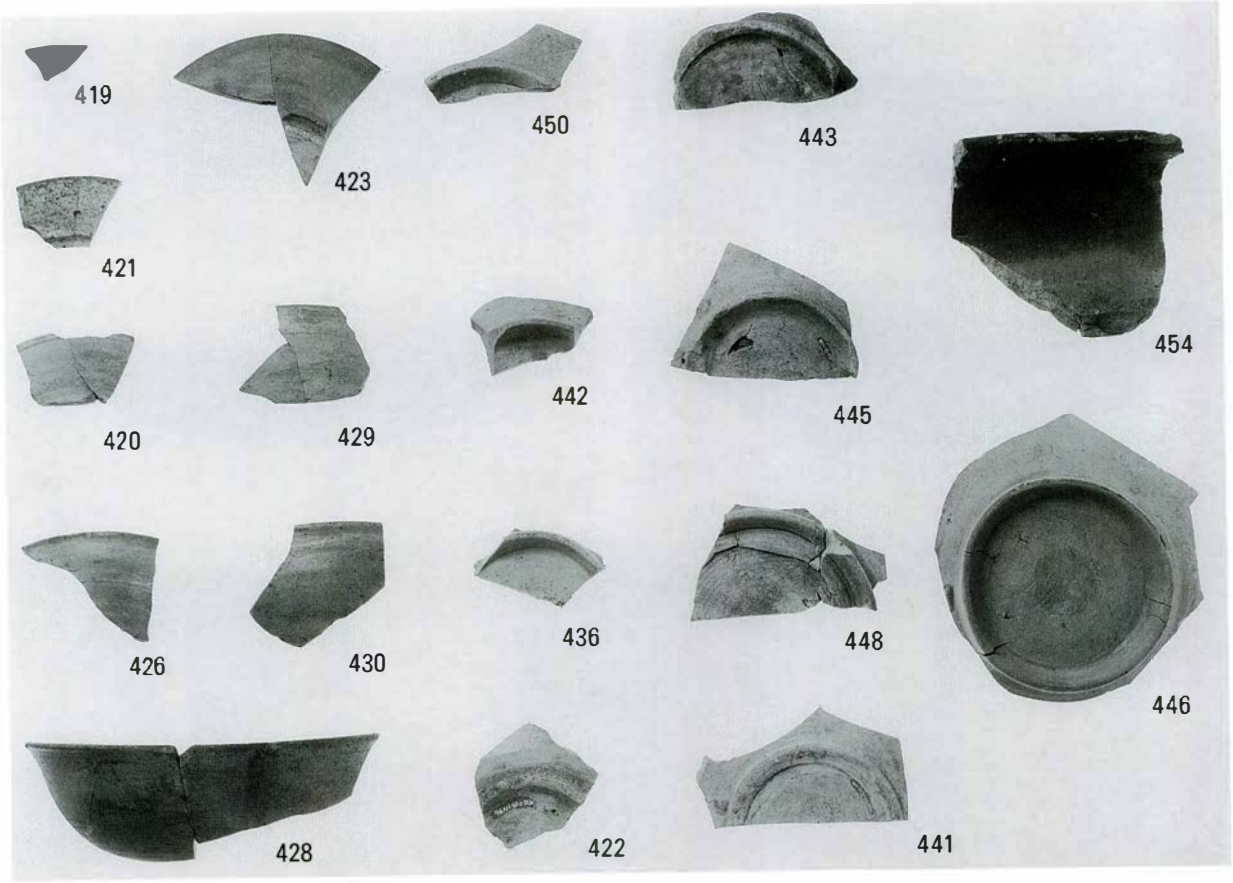
492

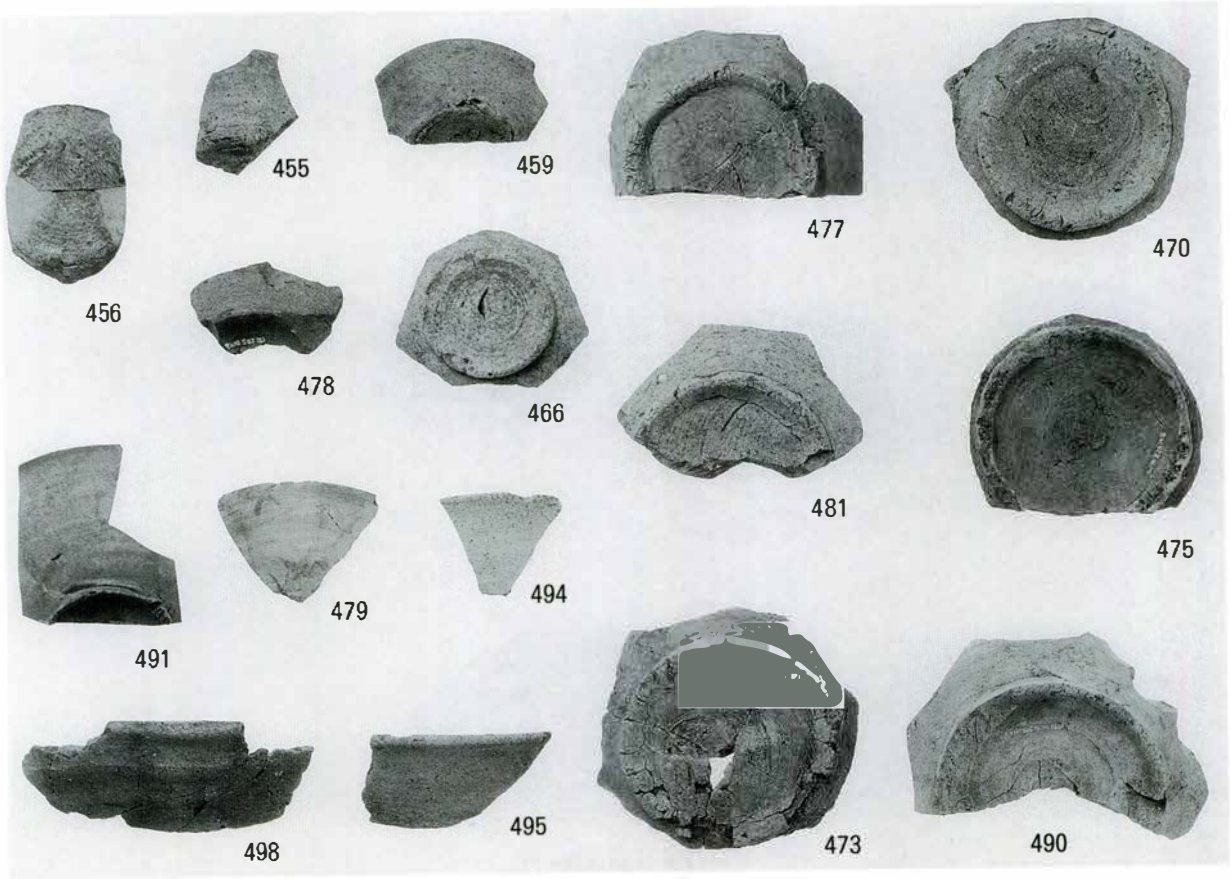

500


453


452

二ノ井遺跡遺物(10)


419
423
450
443
421
454
420
429
442
445
426
430
436
448
446
428
422
441

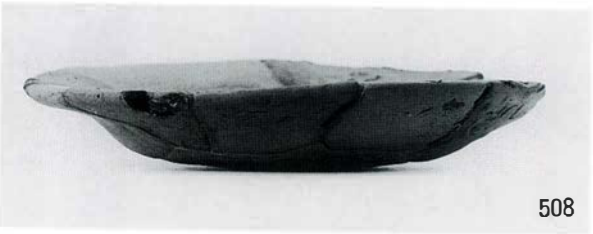

455
459
477
470
456
478
466
481
475
491
479
494
498
495
473
490

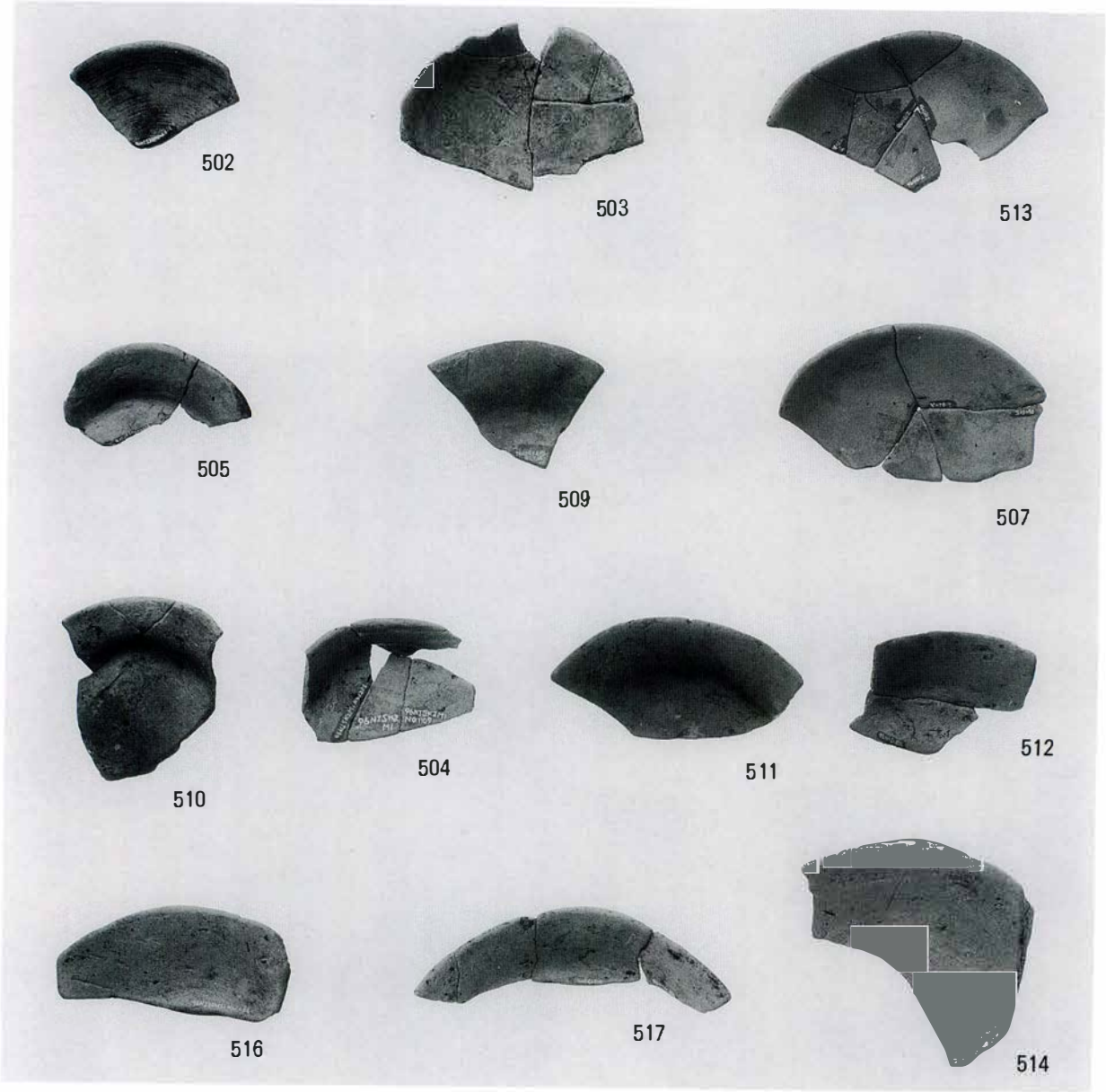
二ノ井遺跡遺物(11)

501

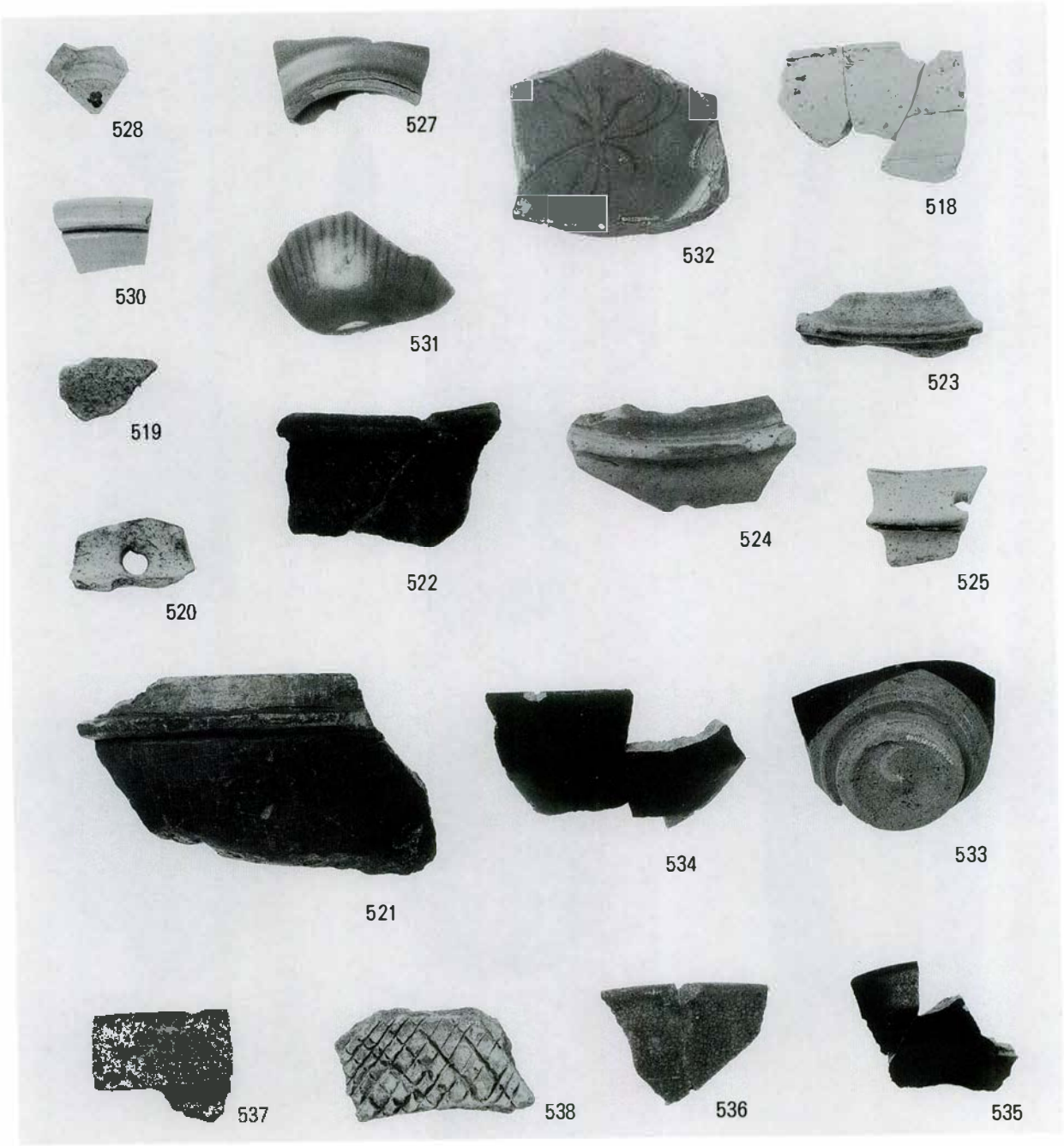
515

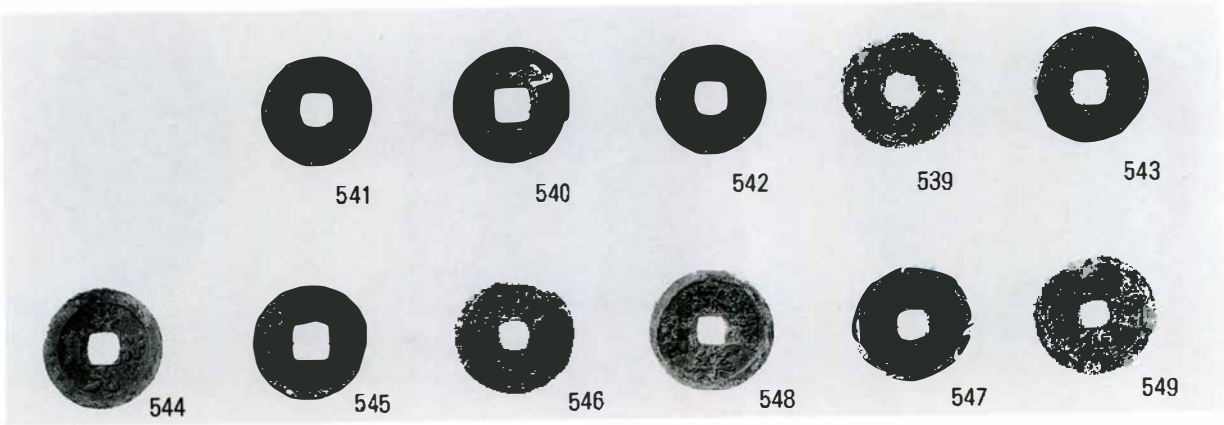
506


508

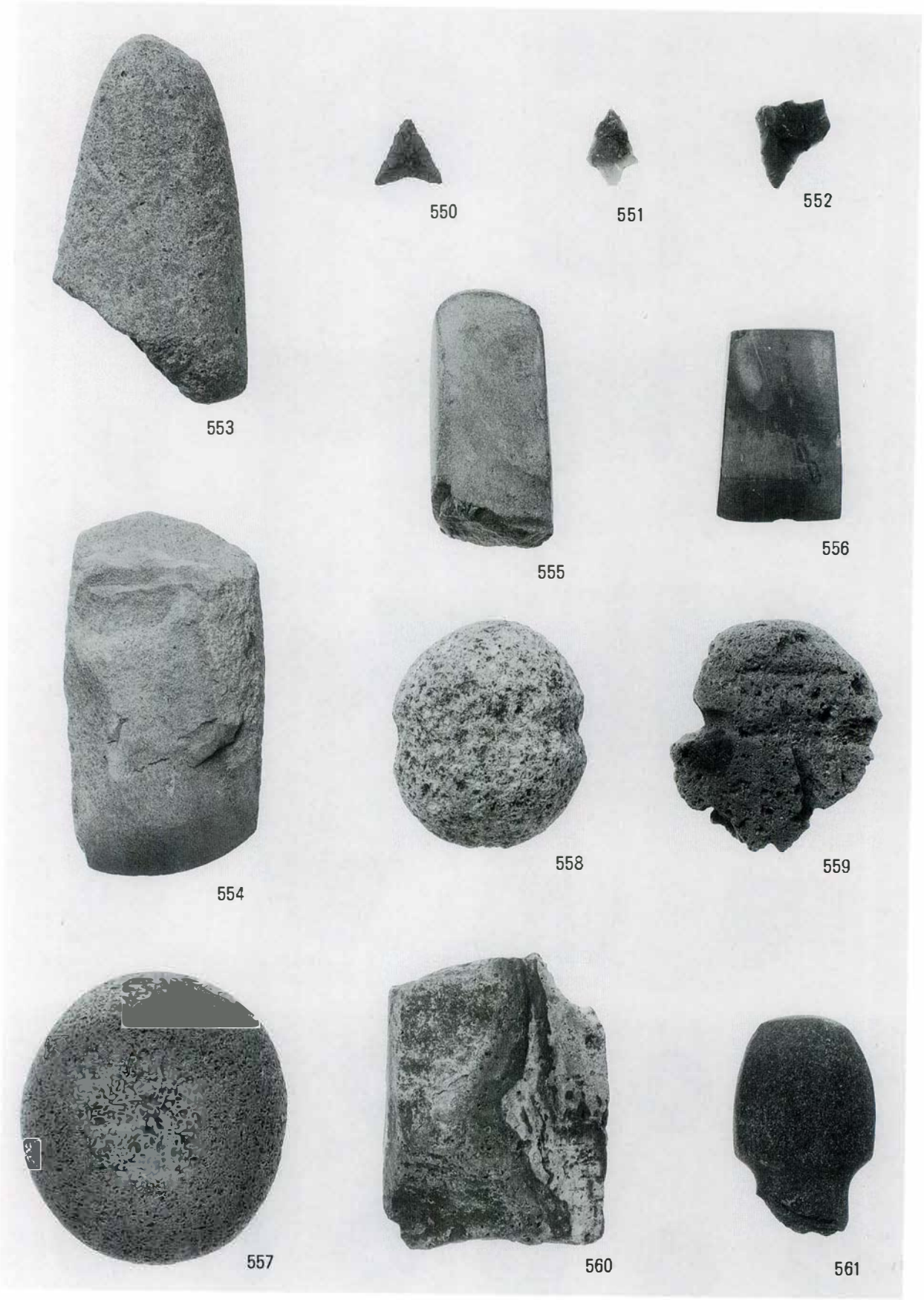

502
503
513
505
509
507
510
504
511
512
516
517
514

二ノ井遺跡遺物(12)

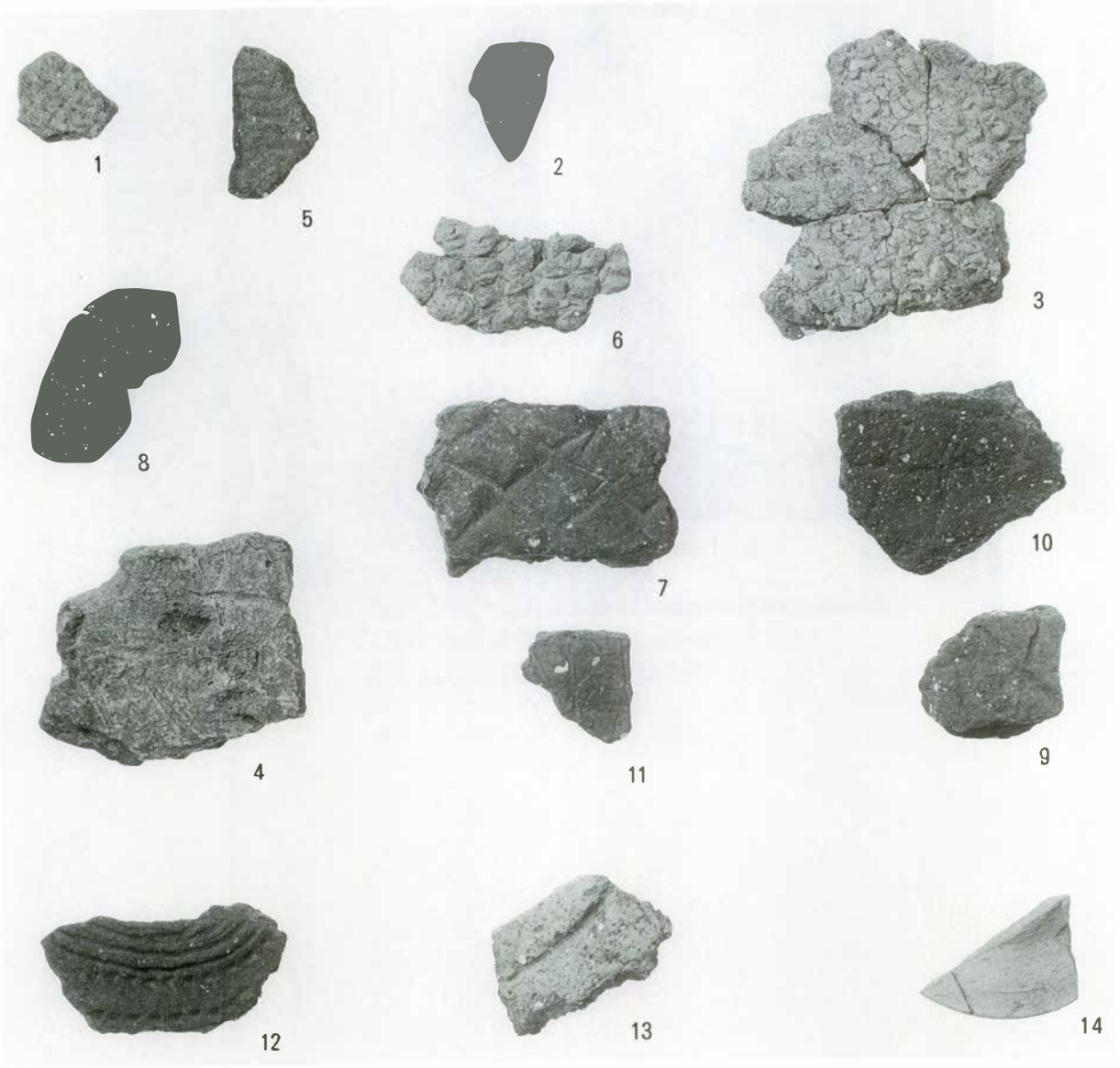

528
527
532
518
530
531
523
519
524
522
525
520
521
534
533
537
538
536
535

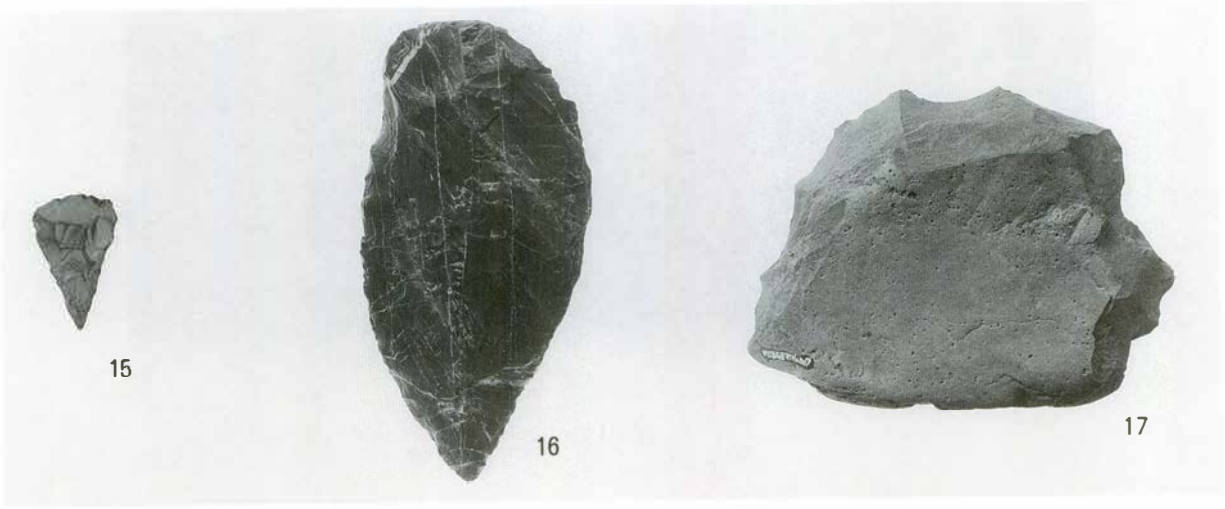

541
540
542
539
543
544
545
546
548
547
549

二ノ井遺跡遺物(13)

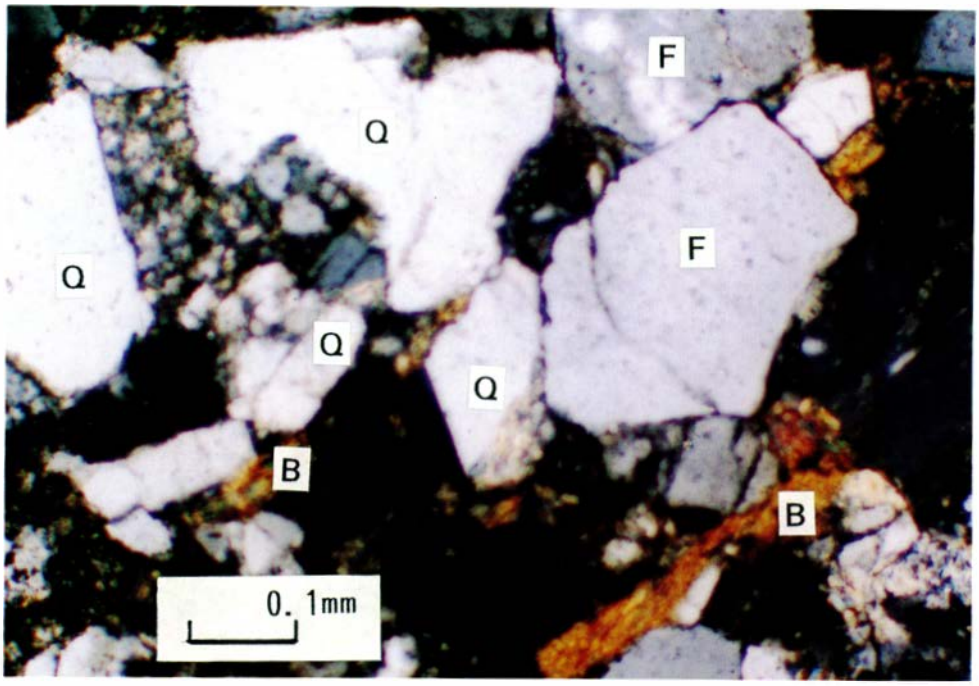


二ノ井遺跡遺物(14)



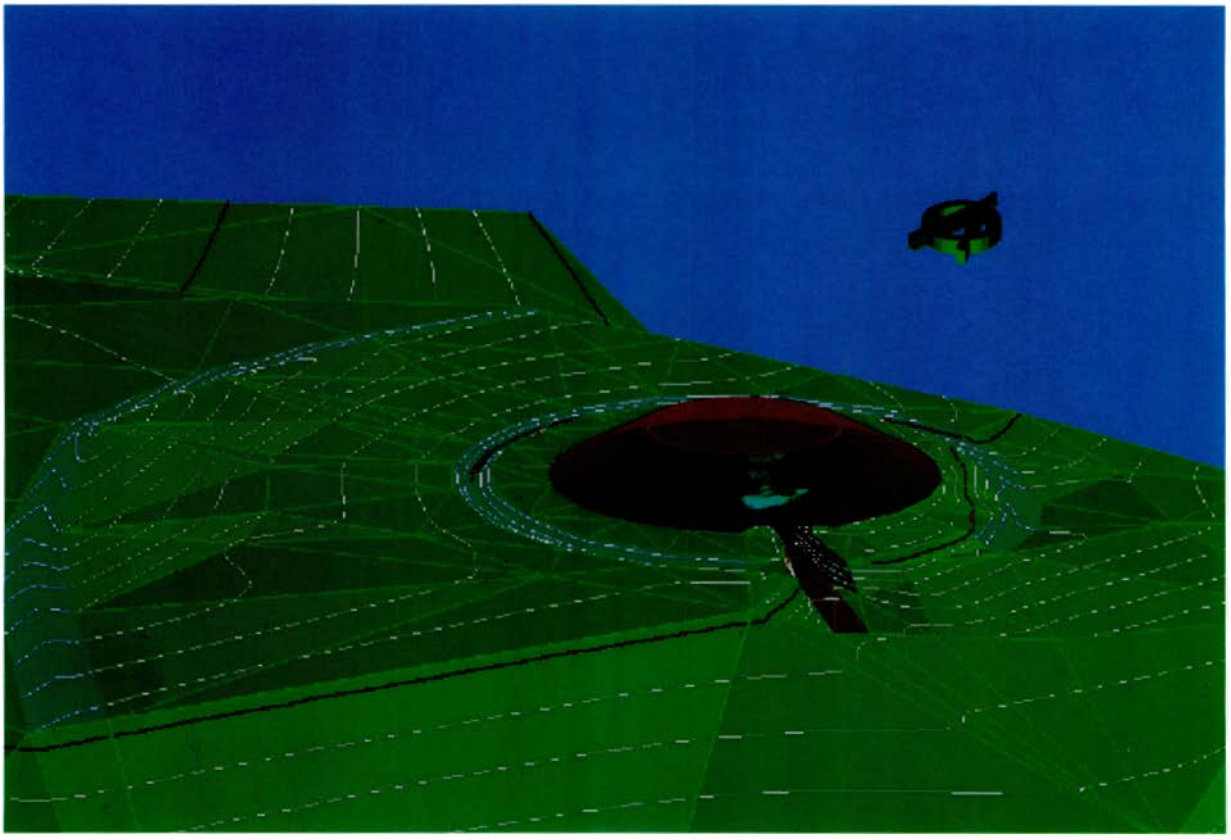


市場遺跡遺物（1）



玄室天井壁の砂岩の偏光顕微鏡写真（1997.2.14）
B：黒雲母　F：長石　Q：石英

石室石材顕微鏡写真・鉄鏃茎部拡大写真



南高野古墳復元CG

報告書抄録

ふりがな	みなみたかのこふん・にのいいせき・いちばいせき
書名	南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第51集
編著者名	青木健太郎　近藤大典　菱田　量　木村寛之　飯沼暢康
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1－26－1　Tel 058（237）8550
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
南高野古墳	岐阜県揖斐郡	21404	08769	35°25′8″	136°34′12″	951116～960322	510㎡	主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事に伴う
二ノ井遺跡	池田町片山字南高野		01919			960415～970314	2,490㎡	
市場遺跡	同町片山字市場	21404	08768	35°24′58″	136°33′42″	980506～980808	500㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南高野古墳	古墳	古墳時代	古墳	須恵器・馬具・鉄製品	玄室内が赤彩された古墳
二ノ井遺跡	散布地	室町時代	中世墓 溝	山茶碗・土師器皿 古銭・中世陶磁器	
市場遺跡	散布地	縄文時代	土坑・溝	縄文土器	

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第51集

南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡

2000年3月31日

編集・発行　財団法人　岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1―26―1
印　　刷　舟橋印刷株式会社